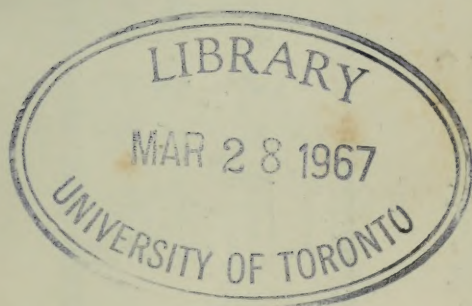
# 片言 付補遺 物類稱呼
# 浪花聞書 丹波通辭


顧問 井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂



合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

# 片言解題

本書は內題を缺いてをるが、題簽の具備した本には、萬葉及變體假名を以て「かたこと」の書名が明記してある。而も五册とも每册の題簽が光悅風の美はしき文字で一々別な字體で印刻してあるのが、雷紋蓮華模樣の紺標紙の橫綴本に貼布してある所は、愛書家の珍重にも價する。寬文元祿あたりの書籍目錄にも貞室の撰として著錄せられ、寬文板の誹諧作者名寄にも亦さう見えてゐるのみならず、序文及び內容の上からも符節を合はす樣になつてゐるから、本書のいづこにも著者の名を錄してないにも拘はらず、貞室の著たることは一點の疑はない。

俚言集覽に「カナナホシ」と題する書名を以てあちこちに引用してあるのは、本書に違ひない。例へばネマルの語の條下に引證してある所の如き然り。但し災前の東京帝國大學圖書館の所藏に村田了阿の一枝堂抄錄第二十八には、加多古登抄錄一卷一本が存したが、私はそれを檢するの機がなかつた。了阿の編纂と傳ふる俚言集覽に、「カナナホシ」として引いてあるのと齟齬してゐる。その他、「片言なほし」といふ書名を以て、近年の刊行にかゝる新撰俳諧年表などに見えてゐるが、これも亦後人の假稱たるに過ぎない。要するに本書が訛言の矯正を取扱つてゐるが爲め、さういふ異稱を與へたのではあるまいか。但しさういふ別名を以て後年再刻されたり改題新刷されたりしたのではない樣である。尤も發行者の變更はあつたらしいことは後

述の如くである。

著者安原貞室は、松永貞德の正統を繼いで花の下第二世を稱した貞門俳諧師の巨頭である。京都の市人で俗稱鎰屋彥左衞門、三條通梅忠町に住し、承應元年（四十二歲）薙髮して貞室を稱するまでは正章の名を以て聞こえ、一嚢子また一嚢軒と號した。「これは〳〵とばかり花の吉野山」、「いざ上れ嵯峨の鮎くひに都鳥」の二名吟は人口に膾炙する。師の遺業を承けて貞門の俳諧を結集した明曆二年の玉海集七卷と寬文七年の玉海集追加七卷とは著名である。自身の「千句獨吟之俳諧」すなはち正章千句には、エロチックな句も多いが、エキゾチックな佳句も見えて、後者は私が既に再三引用した所である。貞德歿後翌々年に刊行された師弟八人の連句集なる紅梅千句の淸書は、同門の親友季吟の跋文によれば、貞室の筆に成つた。其他の俳書はこゝに列擧せぬが、彼の著述中最も異彩を放つのは、此の「片言」であつて、赤堀氏の國語學書目解題（明治三十五年刊）にも、「按ずるに言語の轉訛を述べたるものにては此書尤も古かるべく、且當時の俗語を知る爲には益多かるべし」と道破してあるが如く、德川時代の國語學史上の一異色をなすものである。古き國語學史にそれを稱揚してないのは寧ろ不思議なくらゐである。貞室の歿したのは、延寶元年二月七日で享年六十四歲とあるから、生誕は慶長十五年と逆算される。師の貞德第二の恩師たる細川幽齋、第三の恩師也足軒中院通勝が歿した年である。卽ち師匠が四十歲の壯齡のときに當る。後には師に背き同門と離れた雛屋立圃が十六歲、おなじく松江重賴（維舟）が五歲、貞門正統の双璧として貞室と親しかつた山本西武が五歲、といふ按配で

ある。季吟は遙に年下の生れであつた。少壯時より貞德に就いて俳諧を學んだのであるが、多分寛永年代の初期まで遡るであらう。貞德が良く師恩を思つたと同じく貞室も亦師恩を感謝し、師匠の風格にも陶冶されて溫厚謙遜の氣風をそなへて居たらしいことは、「片言」の序文にも十分あらはれてをり、本文處々に散見してゐる。

本書は、貞室の闕恩記でもあり又その庭訓抄でもあることは、序文中に明白である。

これは身づから少年のむかしより、今かゝる老の末まで口に馴れて云ひはべるを聞こしめしゝ折々叱り給へりし老師の厚恩を思出づるまゝ書きつけぬ、

と見えてをるから、師說に據る所多きは固よりであるが、卷二の首めの方にも、あからさまに老師を引用し、卷五の終りの方にも、花開（はなさき）の先生（せんしやう）を引合ひに出してゐるのでも師傳のことがよくわかる。親しき後輩季吟の名も卷五の末の方に出てくるが、季吟の名著たる「山之井」が出た慶安元年の翌々三年の十月に至つて貞室は「片言」に奧書をしたのである。

貞室にはたつた獨り子として元次といつた男兒があつて、玉海集には俳句が八句、付句が二句あり、その中の俳句の一つは季吟の「山之井」春之部の若菜の條に引かれてもゐる。玉海集には十歲より十四歲までの句が載つてゐるが、卷四の秋の部に、「九月十一日夜元次うせ侍し云々」といふ貞室の薨の句がある。十三歲の作に、「たなばたや渡るたまくの玉の橋」などといふチピカルな句が殘つてゐる。俳家大系圖に、幼より叡智

にして感吟の名高く承應中十五歳に滿たずして逝き衆人痛惜したことが見えてゐるが、假に承應三年十四歳にして沒すと見て逆算してゆくと、寛永十八年の生誕と假定される。父貞室が三十二歳のときに當る。「片言」の序文に、「さたすぎ侍るころ獨の子もたり」といふ書起しにも叶ふわけである。「片言」に奥書した慶安三年には、父が四十一歳、愛兒が十歳。友達と共に拙劣なる片言ばかり口にするのを、父親は一々矯正するが面倒だからと云つて此の「一帖」に記るして其兒に與へたのが、後に分册五巻となつて刊行された本書である。かくの如き夜鶴庭訓の抄なればこそ、本書の體裁が初より内題も目次も分册の境目も具はらぬのもよく理解されるのである。從つて巻二の第三十段「物のせまり」の條下の重要なる一節をはじめ、巻四にも「愚子が爲に書つく」といふ斷わり書きが二ヶ所、巻五中部以下の一節にも、「愚子に知らせんとの心の闇ぞかし」といふ愛情こもる文句がみえてゐるのは、注意すべきである。

本書は、儼乎たる標準語の確立を意識した貞德及び貞室の國語意識が溢るゝばかりに現はれてをるのみか、愛兒に對して誠實に國語教育の範を垂れたものとして、國語學史上恐くは空前絶後ともいふべき傑出した著述であると申して差支ない。方言訛音を彙集したものとしては、その節圍の廣汎なことは、百二十年後にあらはれた物類稱呼に及ばさる遠い。然し「片言」には溫情と愛情が豐かにあらはれ、一貫した國語愛の精神が到所にあふれ、言語規範學的態度が明らかに窺はれ、著者の鋭敏なる語感が周到富贍なる語例に及び、なほ往々歴史的見方を失はざる用意を示してをる等の點に於ては、方言訛音の方面に關するかぎり古今獨歩の概

がある。單純なる記載的方法にのみよらず標準語と方言訛語との取捨選擇に關する斷乎たる親切なる指導と時に優柔なる態度とが各所に散見するのを認める。殊に卷一の第十三段の訛言矯正論の如きは最も注目すべきものがある。鶯の鳴音を比喩に使つた所は、吾等をして夫木抄に見ゆる待宵の小侍從の「かたことの初音」の歌を連想せしめるが、末文に、「人として片言を糺改めずば鳥にだも劣りたる」とまで極言したのは痛快である。第二卷の第二十九段の「物のせまり」と書起した條下には、徒然草中の有名な第二十二段、京都語の變遷、殊に宮庭語までの變化を論じた一段を引用して、二百年未滿以前の應仁の亂以來の風俗上の變遷を論じ、南蠻言葉や唐人口や蝦夷が千島の言葉などのことを引いて、訛音の矯正に觸れてをるが、我子に對する心の闇から之を切言するのだと痛嘆してゐる。オレ（已）といふ語が尊氏時代に流行し始めた語だといふことを指摘して京都語に及ぼした東方諸方言の影響を考察してゐる所は、師貞德の「慰草」卷一（承應元年）徒然草本文第二十二段の評語と合せ見るべきであらう。貞德云く、

丸むかし九條禪定殿下の御許にて源氏物語を讀みならひ侍りしに、すなほに讀むと存ずれとも、あなたの御耳には皆なまるやうに聞こしめすとて、御笑ありしが、亦仰出さるゝやうは、

　なれが獨りのとがにはあらず、尾張より信長公の上洛以後高きも賤しきも都のうちの物言ひ皆かはりたる事多し

との給へり、

九條禪定は玖山公といはれた植通（たねみち）のことで源氏物語の孟津抄の著者である。文祿三年正月九十歳を以て薨去したこと、信長と秀吉とに反抗した剛直のこと、「詞の吟味」のやかましかつたこと等々、貞德の戴恩記に詳かである。貞室の片言は師說に負ふこと多きことは自序とその文意とによつて明かに窺ひ知られるのであるが、その淵源は、玖山公まで遡らねばならぬ。慰草の前條のすぐ後に、「誰」をダレと濁り。「唯」をタツタと促めて發音することは、片言の中にも見えるが、やはり貞德に基いたのである。

片言の奧書を書いた時、貞室の四十一歳に對して　貞德は八十歳であつた。貞德が玖山公に學んだのは、戴恩記によるに、公の八十歳に長けた頃だといふから、自分が十二三歳の時の天正十二三年あたりのことで、信長の死後程なくの話である。それから約十ケ年間ほど學んだのである。信長が京都の上京を燒拂つたのは、貞德が三歳のときの天正元年四月の事件で、彼は晩年にその追憶を戴恩記にしるしてゐるが、信長のヴアンタリズムは深く貞德の肝に銘してゐた所であらう。されば玖山公から聞いた所を以て、數十年後の六十二三歳の老年に至つて、其子にして碩儒たる松永尺五の門人だつた京の木下順庵がまだ十二三歳の少時なるに對しても之を說聞かせたやうな逸話が存する。その順庵の高足たる新井白石の名著東雅の總論を見るに、師の言を引いて次の如く書いてある。

我（順庵）年十二三の時に（寬永九年十年ころ）貞德（六十二三歳）のいひし事あるなり。

其幼き比ほひ（天正年代）までは京の人の物言ひ今の如くにはあらず。今（寬永初年代）の人のいふ所は、

多くは尾張の國の方言相雜れるなり。これは信長秀吉の二代うちつゞきて天下の事しり給ひしによれるなり。又近き程(慶長以降)は三河國の方言の移り來れるなり。

と云ひし。(括弧は新村の今按である)

白石は之に贅語を加へて、「貞德の幼き比ほひの京の人の言葉といふも亦古き昔の京の人いひし所のみにあらじ。足利殿の代の程、東國の方言相雜はらぬ事をも得べからず」と云つた。白石の附註は要するに「古今の言に相通じなむ、先づ其世を論ずべき事なり」とある東雅總論の要論を敷演したものに外ならぬ。

貞德は正章千句の判者としても貞室の訛語を非難してをる。この千句獨吟之俳諧は正保四年十一月、作者三十八歳、判者七十七歳のときに出來たのであるが、その第三の二ウに於ける句の「とらまへたし」といふ語に對して、貞德は「世のカタコトをカタコトと知て態とは用ゆる例あれどもカタコトとしらで用ゆるカタコトは誹偕に用ゐざる法なり、コラユルはよし、トラマユルは京童部のあさましきカタ言なり」と叱つた。かういふ時折の教訓が身に浸みて貞室の此の書が成つたわけである。

カタコトは中古には專ら幼兒の不完全な物言ひをさした樣であつて、蜻蛉日記上卷や源氏物語薄雲卷の用例、いづれも幼兒の言語についてである。宇津保物語樓上の上卷の例は、酒に醉うた人の舌が回らぬ物言を、片言のやうなりと形容した使ひざまである。散木集に見える俊頼の寄小兒戀の歌もむろん幼時の語であり、鎌倉期に入つても、小侍從の歌は藪鶯の未熟なさへづり方を形容したもの、乳母の草子には、「をさなき人など

のカタコトしたるぞあひらしく美しき」と常例のまゝに見えてゐるが、その條の末には、「短册などにカタコト書きたるは尙みにくし」とあるから、鎌倉中期以後には既に、この稱呼が兒童語といふ義より進んで常人の訛言を意味するやうに轉ぜんとした傾向が存したことが窺はれる。伊呂波字類抄以下、足利期の節用集類をはじめ、德川初期のそれに至るまで、カタコトといふ稱呼を載錄せず、慶長九年の長崎吉利支丹版の日葡辭典に至つて、始めて辭書上に登錄を見、それには「訛つて正しからぬ發音をした言葉」と解してある。元祿の書言字考卷八言辭門に至つては、カタコトに漢字を充てそれに附註して、「文字を曉らざること」、「錯繆」、「小兒の語未だ正しからぬ」、これらの三義を有する漢字の字訓とした。明和の雜字類編卷二人事部には訛語、文化の閑例節用集には訛言といふ漢字を充當した。それらによつて「片言の意義變遷の迹を知ることが出來る。

本書もと一帖、分册して五卷、卷一卷二の兩卷には篇目を別けてない。第三卷の中部以下より、篇目を設けてある。

卷三（中程以下）。時節之部。人倫并人名之部。衣服之部。

卷四。器財部。支體部。病名部。木部。草部。虫部。魚部。鳥部。獸部。飲食部。國名所并寺號部。

卷五。居所部。雜詞部。湯桶言葉。

言はずしても事缺き侍るまじき言葉（俚諺若干）（逸話一章）

以上諸篇のうちに、京言葉、吾妻言葉また坂東言葉、近江言葉、北國言葉 その他には、都の言葉、田舎の言葉などを分ち、方言としては特に近江のほかには近國の丹波と遠國の豐後との二三を擧げてある外、方言の扱ひは狹い。主として標準語の訛言訛音を論じて京言葉の頽落を矯正せんとするのが本書の主意である。湯桶言葉のほか重言（重ね言葉）略語、公家の名目や俗語、南蠻言葉や唐人口、その他言語の階級意識と兩性差別。時として怪しげな語源考もあるが、語の本源を「本說」と名づけて附合に健全な意見を表はしてゐるのは多とすべきである。

ともかくも慶長前後に至つて、戰國時代の言語混交錯亂及び外國語輸入の結果として、國語の規範意識が京都の公家や一部の智識階級の間に涌き起り、それが貞德を中心として强烈に進み來つて、遂に貞室が本書の著作となつたのである。貞門の徒の言語遊戲が同時に言語選擇を促がしたものと考へてよからう。貞德や重賴や貞室の作句中に異國趣味のものが少からぬに由つても推知されるが、南蠻人と貞德との直接又は間接の交涉は、殊に慶長時代に於て盛であつたと考へ得られる。慶長十一年に貞德（三十六歲）が年若き羅山兄弟を京の新南蠻寺に案內して行つた事實は羅山文集卷五十六に載つてゐる如くである。その事は拙著南蠻廣記に於て詳にしておいた通りである。さういふ相關交涉が開けてゐたのであるから、慶長九年乃至十三年の間に於て長崎吉利支丹學林で出版されたロドリゲースの日本大文典のうちに、京言葉の標準を說き、方言を記載し、日本流にテニハを說明したりした條々を見ると、例へば貞德の如き南蠻趣味が豐かであつた新時代人が間接たりと

もロドリゲースに國語智識の資料を供給した結果、あゝいふ周到な日本文典が編まれたものと推想してよからうと思ふ。即ち「片言」にあらはれた思想や資料は、南蠻人の國語學に相當の影響を與へてゐると見て差支ないと思ふ。

私は明治三十五六年頃であつたか、東京大學國語研究室に在つて、「片言」の分類索引を作り、同室にも寫しを備へてあつたのであるが、その寫本は燒亡し、私の原稿本も見えなくなつてしまつたので、本書に之を附錄し得ぬのを遺憾とする。「片言」の本書は、今や流布稀であつて各地圖書館の所藏にも極めて寥々である。方言研究の盛運に方つて之を新刷するに至つたのは、適當な企てであつて、私の如きも種々な點よりして格段の悦を感ずる。是れ特に贅言を加へて解說を施した所以である。

本書は、私の見た本及び家藏本は、京の中野道伴刊行となつてゐるが、赤堀氏の書目解題には、京の荒木利兵衞發行となつてゐる。或は慶安三年初刊以後、荒木の求版新摺した本かも知れない。兩者とも井上氏の書目集覽には出てをり、殊に中野市右衛門道伴（慶安の頃は二代目）は有名であつた。

さて「片言」刊行後凡そ數十年も經つてから出版された所の「片言增補」ともいふべき、やはり橫綴の小さな版本が存してゐる。本年五月創立された近畿國語方言學會の發會講演の際に、吉澤義則氏が之を紹介された。名古屋で知名な藏書家石田元季氏の所藏稀覯本である。未だ他に類本を見ざる孤本であるが、題して「浮世鏡第三」とあるだけの零本一冊たるは惜しむべきである。幸に序言によつて編輯の主旨はわかり、全く貞

室の片言の補遺として出來たことが明かである。序言中、京都に片言多き理由を辨じてゐる條は讀むに足る。著者の名も年代もわからぬが、編輯及出版は京都であらう。吾妻と西國との言語にも說及ぼしてはゐるが、地方では中國筋の方言が最も多く錄されてをる。攝津や近江のもあるが、中國の山陰山陽にわたつて備後以東の言語の擧例に富む。篇目の別は、順序も「片言」と違ひ、稍詳密である。記載的な部分が多くして標準論的な部分は稀である。挿繪三頁を入れてあるのを異色とする。

（昭和六年八月三十一日新村出しるす）

## 片言解說增補

十日餘り前に、片言とその補遺とに對して解說を稿して送つた後、京都大學の潁原退藏氏の厚意により、同附屬圖書館寄托久原文庫に藏せられる元祿版の世話重寶記に、その片言が每章に引抄せられてゐることを知つたので、爰に重要なる增補を施こすの必要を見るに至つた。

世話重寶記は俚諺成句及び訛言訛音をイロハ順に分けて編輯した半紙版の五册本で、每册片面又は兩面摺の挿畫が三片乃至四五片ある稀籍であるが、著者の姓名を錄してなく、又推考する資料も見當らない。元祿八年九月出版の奧附がありそれには江戶大坂京都の書林連名で出てゐる。この久原文庫本は、關根只誠翁の舊藏

にかゝる。

序文は、貞室が片言の原書に題したそれと、意氣と文致が似通つてゐる。「をさなき時、乳母がいふ片言を聞きならひ、大人になりても改めず其儘にていふ」により、この書によりそれを矯正しようといふ主旨である。原書の著はされた慶安三年より正に四十五年後にあたる。

本文には、イロハ順に俚諺と成句を揭げて、各その意義と出典とを示し、殆ど每章の末に、「世話の片言」と題して、訛言と訛音を指摘して正邪を教へ、まゝ語誌にも及んでゐる。いはゆる片言は主として貞室の原書に據り、かなり取捨修正を施こしてある。成句成語また俚諺、その解釋等、やはり貞室の書から出たものも散見してゐる。個々の片言の抄出については、時代を隔てゝ言語上の習慣の變遷もあるが、古めかしいものや廢たれたものや無用のものや、極端なものやを削除修正した所が多いことは注意すべきである。

有名な貝原好古の諺草七卷は、本書出版後五年有餘になる元祿十四年正月の刊行で、著者が同十三年五月三十七歲を以て歿する前年の秋に脫稿したものであるが、その自序と凡例とに出るに、近き頃に世諺和語を解釋せる書物が漸く刊行された趣が見えてをり、それらに基いて諺草の或部分は出來たことが明記してある。近きころといふからは、この世話重寶記も利用されたにちがひない。俚諺については、毛吹草(正保明曆寬文の諸版本)や世話盡(寬文版)などをも利用したと思ふが、貞室の片言も當然利用された。「さきに都の人、片言とかやいふ書を作り、それより後もなほ辨正を加たる書も出來ぬ」と凡例中に見えてゐる。この辨正の書とは

世話重寶記を暗示するやうな氣もする。この凡例第五節は、貞室の既に述べた所を簡約したやうなもので一讀に價する。

諺草も亦イロハ順に次第して、毎字先づ「諺」を擧げてその解釋や出典等を錄し、次に「俗語」若干を擧げ、最後に、「正誤」と題してこゝに片言を掲げてゐる。それには貞室の原書より得たとおぼしきものが多々見える。世話重寶記の體裁と同工である。

諺草の著者の養父にして叔父たる貝原益軒は、諺草出版後五年の寶永三年に、和漢古諺二卷を刊行したが、上卷の「和諺」の部には、片言を錄してなく單に俚諺をのみ擧げた。前記の諸本に負うてゐることは歷々としてゐる。

片言を「片言なほし」としたのは、明治二十六年出版の俳諧文庫第二編附錄の大野洒竹の俳諧年表が或は最初かも知れぬ。頴原氏の談に、角田竹冷の藏本(合綴本)の墨書題簽にさうなつてゐたといふことであるから、洒竹の年表は、或はその題簽によつたものかも知れない。

前稿の後、自分の舊稿本「かた言訛音分類」を見出した。むろん音韻以外のもの、即ち語法語義等に關するものを附記した索引及統計であるが、今度はそれを印刷に附することを見合はせた。紙面と印刷の都合もあり、原稿の不完備のためでもある。(九月十二日識)

# 片言刊行に就て

貞室の著「片言」を刊行するに就いては本會顧問新村博士に一方ならぬ御世話に成つた。先づ本書を本全集に加ふべき事を勸め給ひしも先生である。本原本を貸與せられたのも先生である。解題を書き給うたのも亦先生である。一言に云へば先生が有つて本書を本會から發刊し得たと云つてよい。先生の本は濱和助氏の藏印ある本であつた。濱氏は大阪の人珍書の蒐集家であつた。さて新村博士の本は惜しい事には卷一が缺けてゐた。そこで山田博士から此書の影寫本を借用して原稿をとゝのへた。其後橋本教授と京都にて會し愛宕山上のホテルに一夜を談り明した時、談たま〳〵此の書の事に及んだ時、此書を藏せらるゝ由を談られた。そこで校正の折には其を拜借した。橋本教授の本は荒木利兵衞の刊記のある分であつた。奥附の年月は變らぬが此方が後刷と思はれる。斯くて三先生の厚意によりて本書を出版し得た事を記して深謝の意を表する。又片言補遺とも云ふべき浮世鏡も新村・吉澤の兩博士の盡力により石田先生の本を借用して原本とした。三先生に深謝する。

昭和六年九月二十九日更夜

正宗敦夫

追記。假名遣、淸濁はもとより原本通りであるが割註は組版の都合上例によりて一行に延して上下に（　）を加へた

# 物類稱呼解題

「物類稱呼」五卷は題簽に諸國方言と頭書せる如く天地、人倫、動物、生植、器用、衣食、言語に分つて諸國の方言を類聚した一種の辭書である。國語學書目解題に「方言の事につきて書をあらはしたるはこれやはじめなるべき」と記したのは必ずしも當らないが（稿本にも、刊本にも既に之に先だつものはある）日本全國の方言を類聚したのは、まことにこの書を以て嚆矢とする。方言研究の盛なる今日に於ても、全國の方言を掲記したものは僅かに昭和二年、靜岡縣警察部の編纂にかゝる「全國方言集」一部あるばかりでしかもその「全國方言集」の雜駁さは、門を分け類をあげて各語の下に諸國の方言を列擧比較し時に出典を示し進んで語源の考證にまで及んでゐる本書の整然たる用意には、遙かに及ばない。今後も完全なる方言辭書の編纂さるる日までは、江戸時代にも然りし如く、今日の方言研究者にとつても「物類稱呼」はなほ、唯一の方言辭書として利用され信頼されるであらう。

「物類稱呼」の著者は俳人越谷吾山であるが、彼はもと談林末流の宗匠で當時に於ても聲名なく、從つてその詳傳も句集も世に傳はらない、偶〻曲亭馬琴が其兄、東岡舍羅文とともに吾山の教をうけた爲に「曲亭遺稿」載するところの「吾佛の記」、「罔兩談」等によつて「俳諧人物便覽」、「俳林小傳」以外に稍、その消息を詳かにする事ができる、特に「罔兩談」は亡師の三年忌の魂祭に、當時廿三才の馬琴が舊師を追懷して記した作

話で、卷頭の羅文の序と併せて參考となる事が多い。

「罔兩談」の記すところによれば、吾山の歿年は雪中菴蓼太と同じ天明七年で、七十一才の壽を保つたと云ふから、その出生は享保二年であらう。（他の資料はみな、たゞ七十餘と記すばかりであるから、これはなほ、考證を要するかも知れない）

その一生を馬琴は要約して

師竹菴吾山者、武州越谷人也、受ニ業柳居門下一、而既進ニ法橋一、嘗著ニ俳書一多矣（俳諧古文庫）

と云つた。生地は今日の東武鐵道沿線で梅林を以て名高い埼玉縣の越谷（コシガヤ）である、氏を會田氏と傳へるものもあるが之は確かでない、土地の豪農であつた事は、「朱紫（アケムラサキ）」にのせた藤知足の序に

もとより家とめりければ、からやまとの文の卷々多に貯へざるはなし、

とあるによりても、馬琴が

先師吾山は武州越谷の產にして農家に生る、且家富て多く書を見ることをなせり

と記してあるによりても察する事が出來る。

吾山の讀書と文學を好む心とは彼に詩歌を作らしめ、つひに彼が江戸に出でゝ俳諧の道を一生のよすがとする因を作つた。江戸に於ける彼の俳諧の師は二人ある、初め吾山が門をたゝいたのは後の佐久間柳居である、柳居が吾山を教導した態度は「罔兩談」に之を傳へてゐる、柳居が江戸座に飽き足らずして「五色墨」の新

運動を起しつひに伊勢派に趨いた後は　吾山は二世内田沾山の門に遊んだ。柳居は水間沾徳の門人であり、沾山は沾徳の孫弟子である、從つて吾山も談林の末流を汲んで宗匠となつた。安永三年板の「かゞ見種」には沾徳座に屬する一人として

| 日本橋品川町河岸<br>廻船問屋錢屋の隣 | 古橋菴<br>越谷吾山 |
|---|---|

を擧げてある、翌安永四年の「物類稱呼」の序には「江都日本橋室坊越谷吾山」としるし、印面に「師竹」の二字が讀まれ、卷の一の初めには「越谷吾山秀眞編輯」とある。彼が法橋となつたのは何時か詳かでないが、安永八年刊の「翌檜(アスナラウ)」には既に「法橋吾山越谷秀眞著」の署名がある。

馬琴の兄、羅文が駿河町の吾山のもとに入門したのは既に吾山が六十五の高齢に達した天明元年の事で當時、羅文は二十三才、馬琴は十五才の幼年であつた。その頃の吾山は「朱紫」にも見える通り、ある諸侯に伺候などもし門人にもかなり武士が多かつた。羅文も當時は戸田大學の家臣であり、近習番田左内は蘇山と号して既に吾山の門人であつた。されぼとて吾山があまり評判のあつた宗匠でなかつた事は吾山を芭蕉に比べる事を敢てした馬琴さへも

　しかれども名利を求めず、故に東武に先師ありと雖も多く知らざるものあり

と記してゐるので當時の俳壇における彼の位置をほゞ想像する事ができる。

天明二三年の頃、吾山は江戸を出て上方へ志し、三月吉野山の花を賞しての歸るさ、京洛祇園社のほとりにしばし足をとゞめた。その時、大津の台斗に對して蕉翁の句解を語つた、その聞書が天明四年刊の「朱紫」である。

江戸に歸つたのはその年の秋であつたが七十に近い老人にこの長旅はかなり無理であつたと見え、師走の頃から病らひついたやうである。

天明六年の秋には

　秋風のよけて通すや角力取

の句を作り之を扇に記さむとして老病俄に募り、その後は眼も耳もうとく諸事うるさしと句作をも廢した、その翌年、天明七年十二月十七日につひに世を去つたが歿するまで「八集問答」の未だ成らざるを常に歎いたと云ふ、遺骸は深川の靈巖寺に葬つた。羅文は弟子の禮をとつて其柩に從つた。辭世は

　花と見し雪はきのふぞもとの水

法號は往譽吾山師竹居士。

本葬は其後鄕里越谷の天嶽寺に於て行はれた。

著書としては、「物類稱呼」「翌檜」「朱紫」の外に「月と汐」「俳諧本草」の名を傳へてゐるが、その所在も刊行の有無も不明である。

筆者は嘗て越谷の人、故大熊與吉法學士に託して遺族、遺著、墓碑の有無等を調査してもらつたが遺墨二三點が越谷に傳へられてゐるばかりで外に何等の手がかりをも得なかつたのは殘念至極である。

吾山のあとは高弟、澤生松菴が襲つて二世師竹菴吾山となつた。門人中に堀菜陽の名が見えるが或は狂言作者堀越菜陽かと思はれる。

吾山がいかなる因緣で方言を蒐集したか、その動機は全く不明である、物類稱呼の序には

今ここにあらはす趣は……たゞ他鄕を知らざるの兒童に戶を出ずして略萬物に異名ある事をさとさしめて遠方より來れる友の詞を笑はしむるの罪をまぬかれしめんが爲に編て物類稱呼となつくる事になんなりぬ

とある。但し、當時は「奈留別志」の「いにしへの詞は多く田舍に殘れり」の說が廣く行はれ國學者の間に方言硏究の運がめぐんで居つた時代であり、吾山もその影響をうけて居た事は物類稱呼の序文にも又、その五卷十三丁表にも見えてゐる。また前の貞室に「かた言」、後の一茶に「方言雜集」などの著述のある事から見ると俳諧師は他の文人などよりは自然、俳言と云ふ立場で俗語方言に多くの關心をもつてゐたかも知れない。

編纂の動機以上に、吾山が方言を蒐集した方法を知る事は一層困難である。

試に、物類稱呼に現はれる方言を國別にして見ると、先づその蒐集の範圍が廣く日本全國にわたり琉球にまで及んでゐるのに驚かされるが、それでも次の如き結果が見える。

一、地方としては東國即ち關東地方が多く、之に對照的に關西地方が擧げられてゐる事、

一、江戸の言葉が大多數で、その對照として京、大坂の言葉が擧げられてゐる事、

一、國名のあげてある中で方言數の多いのは、多く關東地方である事。即ち

上総、下総、武藏、常陸、安房、上野、下野

の順で多い。

一、他の地方で、かなり多數の方言のあげてあるのは僅に次の諸國である

東山。奥州、出羽、信濃

東海。遠江、尾張、伊勢

北陸。越後、加賀、越前

四國。土佐

九州。薩摩、肥前

畿内、中國では極めて少い。

以上の結果から考へて見ると、吾山は江戸にゐて、そこに集まる諸國の人達から話を聞いて書留めたのではないかと思はれる。この中で土佐の國の方言の多いのは一寸不思議であるが之は特に土佐の知人があつたのではないかと思ふ、卷四の七丁の裏の湯鑵の條には「土州の客予に語て曰く」と見えてゐる。

吾山は晩年の上方行の外は旅行をした形迹がない。凡例の「もとより街談巷說を聞るにしたがひてしるし侍

れし管見不堪の誤多からむのみ」と云ふのが實情であらう。
たゞ、ここに疑をはさめば、或は他の文献から抜書したものの混在があるのでは無からうかと云ふ問題が考へれば考へられる、之がために物類稱呼中の方言を部門別にして數へると本草に關するものが極めて多い事を發見する。

即ち、標目數は天地　三十一、人倫　三十、動物　百三十八、生植　百五十七、器用　七十、衣食　二十二で、言語は百二項である。動物を更に細かく分けると獸　十、鳥　二十三、魚　七十四、虫　三十一である。動植物の多いのはこの種の辭書の傾向でもあるが魚類の方言の特に多いのは確かに本書の一特色である。しかし、先行の本草書や魚鑑の類にかく多數の方言を掲げたものをまだ發見しないので文献の利用の有無については何とも云へない。尤も、吾山はうるさい程、引用書をあげる癖があるから、若し他書を參考したなら、その書名を恐くは擧げたであらうと思はれる。

物類稱呼の價値は既に本解題の初めに述べた通りであるがなほ方言區劃については序文に

大凡我朝六十餘州のうちにても山城と近江又美濃と尾張これらの國を境ひて西のかたつくしの果まで人みな直音にして平聲多し、北は越後信濃東にいたりては常陸をよび奥羽の國々すべて拗音にして上聲多きは是風土水氣のしからしむるなれは、あながちに褒貶すべきにも非ず

の論があり、巻四、十一丁表の梯の條の註に

今按に東海道五十三次の内に桑名の渉より言語音聲格別に改りかはるよし也

の說がある。各語の下に揭げてある方言も既に現代には見出し難いものも多數に上つて居る（中には吾山の誤記もかなり有ると思はれるが）。其上に各條の記載に變化があつて、讀者をあかしめないだけの用意はある。

本書は安永四年の版であるが、同じ「安永四乙未正月」の奧書をもちながら、版元を「江都書林大坂屋平三郞、伊南甚助」としたものと、「江都書林　須原屋市兵衞、同善五郞」としたものとの二種がある。前者は序の初めに「物類稱呼序」とあり、後者は「物類稱呼諸國方言序」とある外は全く同版である。後者は前者の版をそのまま利用したものと思はれる。

各卷枚數は卷の一は天地人倫で本文十四枚、外に序と凡例とで三枚あり、卷二は動物は禽獸魚蟲で三十一枚、卷三は草木で廿二枚（丁付は廿一丁）、卷四は十九枚（丁付は廿丁）、卷五は廿枚である、かく枚數と丁付とが齟齬してゐるが之は兩版とも同樣である。半紙版で一丁、十二行である。以上の二版の外に寬政十二年版の「和歌連俳諸國方言」五册は本書の改題であると云ふが筆者はまだ之を見ない。

なほ本書の奧付に「二篇三篇近刻」の六字が見えてゐるが之は豫告だけに止まつたものと思ふ。

昭和六年九月　　　　東條操識す

# 浪花方言題解

原本は帝國圖書館所藏本では表紙とも墨付三十枚の半紙本である、一丁に十行づつ認めてあるが、註は本文の一行を二行に割書してあるから、註で數へれば一丁、二十行である。著作年代を示す奥書やうのものは全くないが、「て」の部の「てうさやようさや」の條に「今年文政二年の春」と云ふ言葉が見えるから、その頃起稿したものと思ふ、外には丙寅（文化三）と丙子（文化十三）兩年の記事が散見してゐる。
著者は全く不明であるが恐くは江戸者らしく少くも大坂の人ではない、之は内題の「浪花聞書」と云ふ書名からも推察されるし、所々に「尙可尋」と記してゐる記述振でも分る。材料としては「物類稱呼」の引用も見えるが、全篇を通じて鳶哥話（略して哥話又は歌話とも）と云ふ書が多くとつてある、この鳶哥話は私の未見の書であるが江戸と上方との言葉を比べた方言集の類らしく思はれる、之は今後是非、發見したい本である。
本書の内容は天保十五年版の「新撰大坂詞大全」と同じく伊呂波分の方言集であるが、記述の体裁は全く違ふ。「大全」は大坂者の作であらう、各語の註は極めて簡單で、かつ之は卑語、隱語を主としてゐるらしい。然るに「浪花方言」は大坂詞を借りて大坂を江戸人に語ると云ふ態度で風俗習慣などの細かな記述がある、甚しきは「し」の部、「新町」の條などは細註三十四行に及んでゐる、方言の記載にしても一々、江戸言葉の

對譯を示し注意はかなり細かなところまで行き屆いてゐる。音の長短、清濁の相違、同形異義語などについても澤山の面白い例が書中に見えてゐる。助動詞のやうなものの相違もよく氣をつけてその相違を示してある。

本書によれば當時の大阪の言葉を知ると同時に、之に對應する江戸の言葉を知り得ると云ふ益がある（時には京言葉の對照もある）。その上に大阪の風俗と江戸の風俗の相違などを、かなりハツキリと知る事が出來る、風俗史料としてもかなりの價値をもつものである。

單に言語の資料と云ふ側だけから眺めても色々な貴重な材料が含まれてゐる。「奧樣」「お家さん」「お內儀」「かみさん」「おかみさん」など云ふ言葉の使ひ方の相違も面白いし、「なます」が新町言葉と云ふ事は當然としても「おます」が遊里の言葉から出たと云ふ註は注意に値する。

「ききな」「見な」の江戸、大坂の意味の相違などは文法的の興味がある。

方言としては極めて出色なもので、寫本である爲に今まで廣く世に知られて居なかつたのは惜しいものである。

（東條操）

# 丹波通辭解題

岩瀨文庫所藏本は半紙本で表紙共墨付二十一枚の寫本、表紙及序文には丹波通辭とあるが內題には丹波鄕談と記してある。著作年代も著者も不明である。

序の次の五枚に所謂方言を記し、第六枚目よりは訛言を種々分類して列擧してある、之が約十三枚半に及んでゐる。（一丁は九行で、多くは上下二段に分けてある）

訛言の分類は中々手際よく出來てゐて、著者の頭腦の綿密なことをよく現はしてゐる。方言書の組識としてまことに珍しいものである。貞室の「かた言」は江戸初期の京都の方言を、ことに訛音の方面から觀察したものであるが、本書と對照して見て興味が深い。

本書の著作年代については序文中にも記載が見えず、奥書もないので內容などについて之を推定するより外、手段はない。單語などには元祿文學に現はれる語彙と類似のものがかなり多い、又用字も今日とは相違してゐる土圭（時計）骨柳（行李）綿織（銘仙）得利（德利）の類が見えるが、時代推定の資料としては、延齡丹、撰絲、綿織などの單語を拾ふ事が出來る。この中で綿織の文字の見える事は本書が江戸後期の著編なる事を物語るものである。「守貞漫稿」十五編、十六編の記事によれば江戸に於ける銘織（メイセン）の流行は天保以來の事で嘉永がその全盛期であつた、尤も京阪では之より早く行はれて天保の頃にはあまり用ゐられて居なかつた

やうであるが、それでもあまり古くからあつた織物ではないらしい。

秦秀雄氏によると、この語の最初に見えてゐるのは天明九年京都で刊行された「和漢絹布重寶記」で、その中には「日專」とか「日千」とか云ふ文字で現はされてゐる、秦氏は其から考へて「千本位筬目を通した經糸の紬織」の義であらうと云はれてゐる。「守貞漫稿」では綿織の文字から「眞綿より織く、いとをひき、よりをかけて經緯ともこれを織る」義と解してゐるやうであるが、日千から綿織、綿織から今日の銘仙と文字が時代につれて變つた事と思はれる。

次に「丹波通辭」と云ふ書名を考へて見ると、之と類似した名をもつた方言書に「御國通辭」と「鄙通辭」とある、「御國通辭」は寛政二年の著で「鄙通辭」は文化七年の作である。なほ「通辭」と云ふ名をもつ本を廣く探るならば、本書が江戸後期の作物たる事の傍証となるかと思ふ。

著者については全く手掛りはないが、丹波の人なる事は序文に見えてゐる。三河、岩瀨文庫の原本には本文の最後の紙に小さく綾部澤野氏と記してあり、序文の下方に澤野氏藏書の印が押してある、著者の稿本かとも思はれるが勿論わからない。

前にも記した通り「かた言」は江戸前期の、本書は江戸後期の京都や丹波の訛言を記錄したものとして兩々相待つて誠に貴重な資料である。

なほ本書については「國語と國文學」第六卷第一號によせた小文を參照せられたい。（東條操）

# 物類稱呼・浪花方言・丹波通辭刊行に就て

物類稱呼・浪花方言・丹波通辭の解題は東條操先生が御書き下さつたから別に云ふ事はないが、刊行するに當りて物類稱呼は形の上に少し變更した處が有るから一言を添へる。假名遣及び文字は原本通りにしたが割注は例によつて一行に延して上下に（　）を加へて置いた。是れは既刊の本全集の例である。又活版に組むと案外よみづらい處が有るので讀み切りの點を加へた。處が原本にも讀み切りの點も有れば符號も有る、其等は今加へたのとの差別を明らかにして置きたいと考へて、原本に有つた讀切點は原本に、〳の形を用ゐてあつたから、其形のまゝとし、今加へたのは普通の形。と、の形とにした。又中央に。が有るのは原本に有つたので今加へたのは・の印である。又「　」の形を加へたのは今加へたのであつて『の形のは原本に有つた分であるが原本は┓で有るが今加へるのと混同するから『に改めた、之れは數は少なく、かつ上のみ有つて下のは無い。又書名と或る詞とには［　］がして有つたが、これは組版の都合上書名は『　』とし詞の方は「　」の印に改めた。横の線は原本通りである。凡て書物は一方からは讀みよくしたし、又一方からは原形が殘したいので苦心をするのである。片言も本書も索引やうのものが無ければならぬので有つて東條先生からも其御注文も有つたが、今は取り敢へず一册として本文を出版した、若し册數が都合つけば終りまでには編纂したいと考へてゐる

＊

浪花方言と丹波通辭はともに東條先生の御藏本を拜借して底本とした。兩書とも不明の點が有つて東條先生に教示を仰いだが、やはり不明の点が有つて其のまゝにして置く外のない点がかなり有る。浪花方言は帝國圖書舘に本が有るから念の爲めに長島君を勞して調査もしてもらつた。斯くて方言の本がまとまつて一册となつて諸君の机邊に置かるゝやうになつたのである。方言は今や大に研究せられんとしてゐる。其時に當りて此書を編み得たのは獨編者のよろこびのみでない。東條先生に深謝の意を表する

正　宗　敦　夫

一

さたすき侍るころ獨の子もたり、もとより家まつしけれは、おほしたてぬるさまもはつかしのもり、めのとさへおさ〳〵侍らて、みつよついつゝむつれあふ友達かたらひにも、いとつたなきかたことをのみ云侍る佗しけれと、ひとつ〳〵いひしらせんもかきりしなけれは、そゝろに這一帖に記してかれにとらす、これはみつから少年のむかしより、いまかゝる老のすゑまて、くちに馴ていひ侍を、きこしめしゝおり〳〵、しかり給へりし老師の厚恩をおもひいつるまゝ書つけぬ、此つるてにかたはらいたき今案をも、みなたゝ言葉もて記し侍るは、愚子か見ときやすからんためなり、君子名レ之必可レ言也言レ之必可レ行也君子於二其言一無レ所レ苟而已とか侍る哉らむ、されとおろものゝ心にまかせて侍れは、よしと云る言葉にあしきもましり、あしとていとひ捨し中に、よきこともあるべし、是に留り、かれに決すへきにしあらす、よく人にたつねあきらむへきための下書なれは、謬れることかす〳〵有へし、とおほき中なれは、そもなとかは然りとて、此一帖さみし捨ることなかれ、春の霞立はしめし朝より、秋の風のふきいつるゆふへに行つき侍る道のちまたの蹟のあに千里の歩みをむなしうせんや、ふかきはやしのかたえ枯たりとてなそよろつ木すゑを淺しと見む、このことはりにもとつき侍らは、誤を捨て要をとれ、穴賢人に對して評ふことなかれ、ふかく函底にひめてをのれか言葉をつゝしむへし、他人のために記すにあらすゆめ

一今めかしきこと成べけれど。冥加といふこと葉のつかひやう有べしと云り。此字訓に付て。説々侍るべけれど。先一儀を申さば。神明佛陀の御恵にて衆生の冥きを加護したまふといふこととぞ。冥慮と申も心はかよひ侍るべし。然るを。此ころかたつ田舎人の云るを聞侍れば。假令尊貴の人の踈屋へ御入あるやうのおりふし。あるじがたの人の言葉に。扨も〳〵けふの御成は。冥加なひ御ことにてさふらふなどいふこと侍り。是以外の僻言成べしと云り。冥加に叶ひて侍るなどゝはいふべきこと也。但冥加無の無は无の字の心にはあらで。なといへる付言葉にや。縦へば物のたらはぬことをはしたとも申し。はしたなきともいふ。又ははらぐろなる事をもきたなきなどゝいふやうなき歟。しからば。冥加なひは。只冥加なといふ言葉なりとの遁れも侍るべし。されども冥加も御座候はぬなどいふは陳ずるかたなし。冥加の至りにてさふらふなどゝは幾度もいふべきことなりと云り

一如在といふ言葉のつかひやうのことも誤り來れりとかや。假令人にたのまれたることなど侍る時。その事必ずなげやりに仕るまじきぞなどいふやうのことを。如在仕るまじきぞ。向後如在なう致し侍らんぞなどいへるは。本説に違ひて。はなはだ僻言なるべし但如在なといふことを。如在なきといふ。やうの。なきは前に云る付字にて。只なといふことなり無ノ字の義にあらず

一斟酌といふこと葉は。物をくみはかるところにて侍るを今は辞退することにのみ云るは誤とぞ

一満足といふことも。みちたれりといふやうの時につかふこと葉ならば。まんすうといふべし。足れるともちひ

侍る時は。そくといふ際は侍らずとかや。然りといへども。右の三ケ条は。はやうより誤來りて人おほく云めれば。今更改めがたし。誤をもて。誤をつぐといふ類ひにして諍ふべからずと云り。されども。はれなる消息の文章などには。心すべき事成とかや

一人のこゝろいれのあしきをいさむるヿを。異見と申歟。それをかたつ田舍人は。御異見申さうといへり。御の字を我がかたにつくべきにあらず。その外御無沙汰ぞ。御無音ぞ。又いやそれは我らの御めいわくにて侍るぞなどいふヿ葉は。みな誤りなりとかや。但御見舞申さんぞ。御茶を申さんぞなどゝ云るは。さきの人を崇て。さきの人に付たる御の字なれば然るべきヿ葉なり。こゝろもとなきを御心もとなき。うれしきを御嬉しきぞなど云るも誤りなれと既はや云なれ。又はかんな文にも書來り侍れば。今更改めがたしと云り。お目出度は。大かたさきへつくおの字なるべし

一斜といふヿ葉は。七八分なといふ心にて侍るとかや。然れば大かたならずといへる心にて侍る。なゝめといふも同しヿ葉なり。なゝつめといふこゝろなりとぞ

一等閑といふ言葉のつかひやう假令始て知人に成ての挨拶に。此後互にとうかん致さんなどゝいふは誤なり。とうかんなふ致さんとは云べし等閑なふとはなをさりなふといふヿ

一正躰なきといふべき時に。勿躰なしといふは誤たるヿ葉なりと云り。勿躰の二字を躰なしとよめば。勿躰なしとはいらぬ重言かと云り

一 流石といふこと葉のつかひやう有べし。縱ばよき花をみてもよき若衆をみても。さすがな花にて侍るぞ。流石に若衆にておはすぞなどゝ響侍るは僻言なりとかや。假令。うつろひたる花の枝などを見て。此花は。から散透たれど。流石梅なるによて匂ひ殘れりとほめ。又はおろそかなる裝束めしたる兒若衆をみて。あの少人今はかうおとろへ給ひたれども。先祖は上臈にておはしましかば。その名殘にて。立居ふるまひ。つまはづれ。物いひなどまで。さすが花車に侍るよなどいふやうの時につかふこと葉なりとかや。さればそのいふこと葉はかたことならねども。つかひやうをわきまへ侍られば。かたことよりも淺ましう成侍るとなり。頃不堪の連哥俳諧におり／＼侍るとなり。さいつごろ。さすがみごとな花のいけやうといふ句を。上手の俳諧とて人のめであへりしと有つるはいかゞあらん

一 中々といふべきを　なつかなかぞ。なかなつかぞなどゝ詰ていふと如何侍らん。されどもかうやうのこと葉は。時により。ことにしたがひて。いはずして叶はぬおりも侍るべし。苦しかるまじきかと尋ね侍りしかば。いはぬにはしかじと答へられき。扨この中々の言葉を。人の物いふに應諾するところに云るは子細の侍るべきことにや。哥などに。中々とよみしは。ふてたる心にかよへり。源氏物語　桐壺の卷にこそ。中／＼のこと葉は。いくつも出て侍れ。さればよくかゞなへたまふべきにや

一 誰も／＼いとひたまふことなれども。あらためていはざれば氣のつかぬとも侍る物なれば是にしるし侍るかし。一切の器物調度以下。何にても代物の程をさすことと。同じくその價を問侍ること。人中にては必ず心

していふべからずと云り。増て兒若衆女房などはいとふべき事なり。縱ひ人ありてたづね侍るとも。大かたはしらずと答へ侍るべしといへり。然れとも。心やすきどちの參會にて。皆人いふめるを。獨いはずして上﨟めかんもおこがましからん歟。又はその器物を強て求めんとおもひて。そのあたひをたづね度はいかゞはせん。それもちご喝食などは。いかに心やすき中なりとも。直にはたづぬべからず後日に人してとふべきと云り。公家上﨟などは。料理といふ言葉をだに宜ひ兼るとかや。まして艶なる事なりかし

一人と雜談し侍る時假初ごとにも。佛祖天道神八幡氏神照覽愛宕白山ゐずくみ。みしやり。此火に荼毘せられうぞなどと。おそろしき誓言するを。甚よからぬ事と云り。是は常に心やすき友達の中にして。云馴侍るによて。さる口くせの晴の時も必ずさし出る物なり。然れは常によく嗜みつゝしみていふべからずといへり。誓言などは一世に一度の大事のおりならではたてざる物なり。無左とたつる誓ひは。人いつものとに聞馴て。うけひくとなし。をんなは淺ましき傾城白びやうし。おとこはさながら商人めきて。其人の心ざまも見落さるゝよと云り

一いはずしてもと闕侍るまじとおもふ言葉こそ。よにおほき物なれ。犬の蚤で嚙當た　煎茶のえりくひ　阿弥陀は錢ほど光るなどやうのいやしく拙き言葉は。夢にもいふまじきにや。聞もいとうるさしと云り。まことにかゝる言葉を好みていふ人にあてなるはなきものなり。よきゝぬを着。上座に蹴き居て。衆人從者に崇へられ。人おほくめし具しても。かゝるいやしき言葉ひとつを云出すとはや。淺ましういやしかりし

むかしの代さへ顯れ。子孫までかはゆくみえて。その人には唯獸によき絹をきせて上座にすへ置たるおもひせられ侍ると云り。あるひは若きおのこの。見ざまもよく。よそひもきら〳〵しう。しかも物よく云とをれるが。晴なるかたへ使者などにさしつかはされて。主人の宣ひつけしヿを。口上よくさら〳〵と述たるはその主人の御爲。めいぼくあるやうにおもはれて。聞居侍るに。淺ましきかたヿを云出たるこそあいなふ心づきなけれ。此おのこをよしとおもほしてこそ。かゝるはれの使者には出し立られけめと。主君のつたなさまで。をしはかられ侍ると云り。されば蛇は一寸よりそのかたちをしり。人は一言にてその心ざしのはからるゝとやらん云傳へしは。古賢の金言ならずや。猶此おくに至りて。いやしとおもふヿ葉をしるし侍るべし

爰にかたつ田舍人ありていふを聞侍れば。我人終日終夜云馴侍ること葉の內。十に八九は。かたヿ成べし。かくばかりおほきかたことを。一つやふたつおほえ改めなをしてもよしあらじ。とても改めつくさるべきにもあらぬ物ゆへ。あたら心に勞を費してもいらぬヿ。只口にまかせてよなどゝ云り。是等は愚人の中の愚人。鷄鳴狗吠の付あひ成べし。抑かたヿなればとて。口のうごく度每に必す云つらぬる物にもあらず。かたヿいひと名にたちたる人とても。十たびうごく口に。二たび三たびに過べからず。七たび八度はよろしきヿ葉にて侍る物なり。然らば一言づゝにても直し改むべきと。心にかけて愼み侍らましかば。いかに物おほえのうとくとも。稍なふ改め直すべし。物おぼえのさときかたは。只一二度きゝてもおぼえ侍るべし。

縦へば鶯の子を巣よりおろしてそだて侍るに。よき鳥の雛にならべて飼そだて侍れば。穏なく其聲をさえづると云り。又あしき聲の鳥につけ侍ればいとやすうあしくなくとかや。うそ鳥のさへづるは琴の音に似たればとて琴ひくといひ。梟のから聲をば。のりすれとなくといひならはせり。やさしきと。さもしきと。各別なれど。むまれ付たる聲なれば。すべなし。日月ほしとなくと。ごきふせうとなくは。同じうぐひすなれば。ならはしからにてよくもあしくもなるヿ也。人としてかたヿを悔改めずは鳥にだもおとりたるヿと云り

一懸祿といふべきを。かけづくぞ。かけどくぞなどいふは誤成べしと云り。扨何ごとにも懸ろくはすまじきヿにやとも云り。ことに飲くふ物に付ては。猶しもよからぬヿにや。少人老人などはとりわきすまじきヿ成べし。されども物の諍ひ募りて。まけがたより供御をまうけたるなどゝいふヿ。むかしもよき人の興ぜしヿなれば。ひたすら厭ふべきにもあらず。何ごとも其おりふしによるべきヿにや。爰に云るは強てこのめるをしりそけよと成べし。懸祿は祿の賭のヿ

一吹擧と云べきを。すいきやうと云人あり。酔狂とは酒に酔て狂ひ侍るヿ勿論なり。然るをかたつ田舎人の誹諧に

　酔狂人と名にし立ぬる

といふ前句に

度〱に家の賣買肝煎て
と付て京へ點をとりにのぼせしに。此付句に長点をかけて。剰へ褒美のことばをさへ書加へられし懷紙を見侍しとあり。いと淺ましき判者にて侍らずや

一精進物の調菜を譽侍る挨拶に。料理が出來て侍るぞなどゝはいふまじき事とぞ。調菜の出來て侍るとはいふべしと云り。料理とは魚鳥の上にてのみ云言葉なり。此二字を。しつらひとよむ時は聊心替ると言り

一さかなと云とも精進物の上にては申まじきことかや。ことに人の忌中などへ精進物を餽り侍るせうそこに。肴と書こと然るべからざることゝ云り。さかなといふこゝろは。酒の魚といふ義歟。さかは酒。な。はまなといへる上略の詞歟。いをゝ。まなといふなればなり。但又酒の半に出る物なれば。酒の半といふ下略のことば歟。又酒の慰みといふ下略歟。然らば。精進物の上にても苦しかるまじけれども本説は酒の魚といふ心成べし。もとよりさうじざかなといふことばは侍るべし

一精進といふべきを。しやうじといふはくるしからずと云り。然れども生死の際に紛るゝゆへにしやうじんといひ來れる歟。されども下略なれば。はねずとも苦しかるまじ。その所によるべきこと歟。源氏夕がほの巻には。みたけさうじと書り

一御盃をいたゞき侍らんといふべきを。頂戴仕りまらせうなどゝいふは。そのむかふ人によるべし。あなたが貴人高家ならずは似つかはしからぬことばにや。又ぎよはいと申も。平人の上には然るべからず。

あなたが貴人ならずはいふべからずとかや。かやうのこと葉に氣をつけずして。只ぎよはいぞ。頂戴ぞとさへいへば。よきことぞと計心得て。ちと時めく平人にむかひても。頂戴ぞぎよはいぞといふ人は。をのれはからざん輕薄者に成侍るとなり。いともはつかしきこと。又その身に應ぜずして。こぼしがほもにくしやと云り

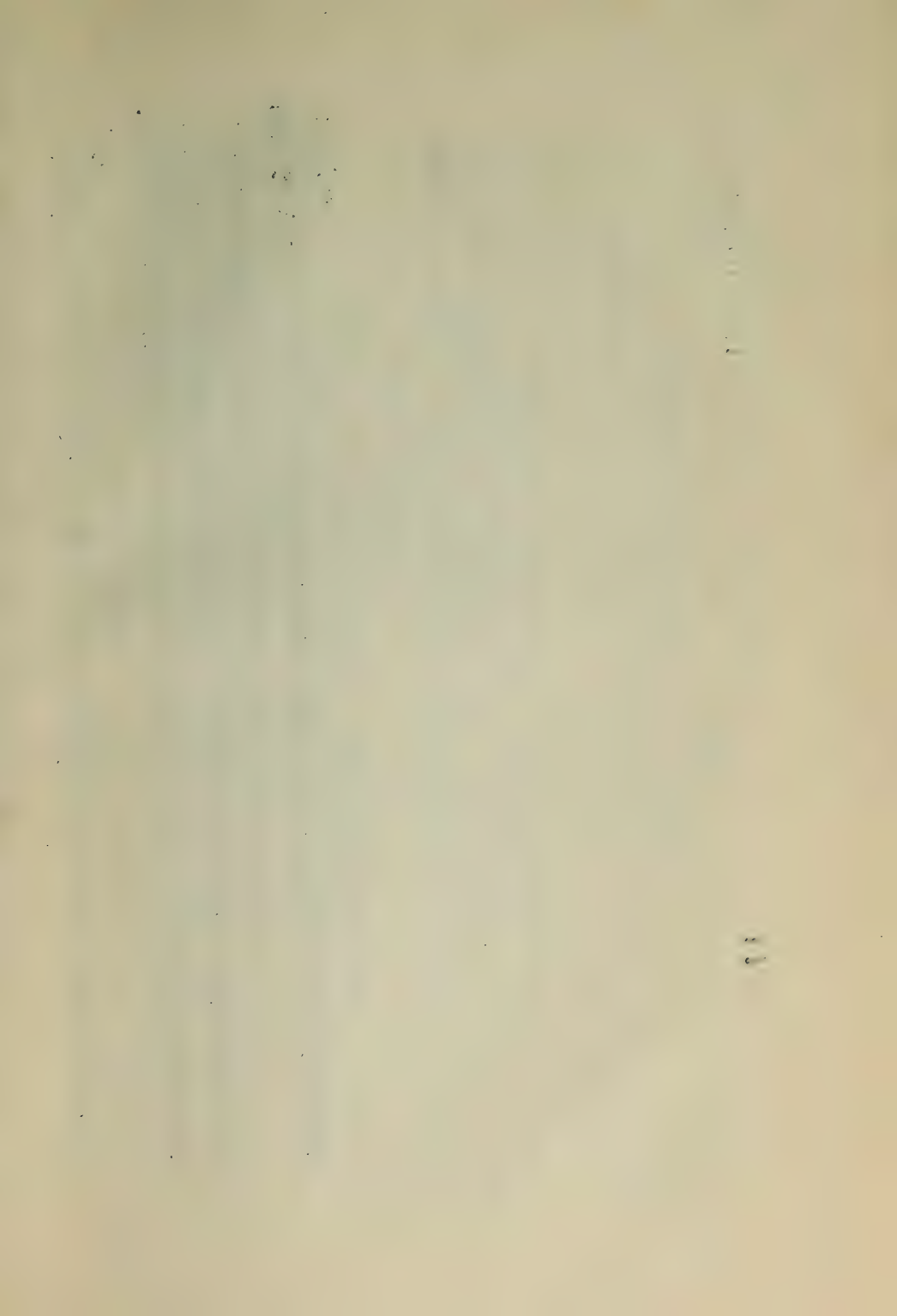
一聖道にては兒といひ。禪律の兩宗にては喝食といふべしとなり。むかし僧にもあらず俗にもあらぬ人が。寺院へ立入て。佛道を修行し侍るが。齋非時などのおりふし。食物を呼つぎ侍るよりおこれりと云り。喝食の二字は。食をよばゝる心なりとかや。然るをいつの程にや僧のなぐさみ物に成侍りしと。ある禪僧のかたられしまゝ。しらぬことながら書つく

一そのゝちは久しう御めにかゝりまいらせぬといふべきを。其以後は御意を得ず。中絶いたし。疎遠の至り無音千万本意を背き所存の外にて侍るなどゝいふ挨拶は。悉皆文章を開侍るやうにて。いと冷じう。若き人などにはとりわきよろしからず。乍去かうやうのこと葉はその云人からによるべし。世に物しりといはるゝ人か。さらずは出家かくすしなどこそ似つかはしかるべけれと云り

兒若衆女房などの言葉は。あるがなかにもやはらかに聲ひきく。又あへかにあらまほしき事と云り。かど〳〵しう冷じきこと葉は似合しからずや。文字ある聲をやはらげ。よみにていふべしとなり。しかはあれど。源氏物語に云しやうに。文をかけどおほとかにことえりし繝かなる聲きくばかりいひよれど。息の下に引い

れ。ことずくなゝるがとやうに。しみたれ過し。あまりなさけに弱こめられたるも。又うるさかるべしとかや

一きのふおとゝひといふべきを　○さくじつ。一さくじつといひ。あす。あさてを。みやうにち。みやうごにちぞなどいふやうのとは。兒喝食若き女房には似つかはしからずや。よろづ是に准へて知べしと云り。されど時にしたかひ品によりて。いはずして叶はぬとも侍るべし

一誰といふべきを　○だれと。たもじを濁りていふこと如何。又誰しもと。し文字をいれたるは。やさしきと葉成べし

傳太之　二

一唯といふべきを　○たつた○たんだ
一さきにといふべきを　○さつきに
一いちといふべきを　○いつち
一ひとつといふべきを　○ひつとつ
一前にも云る。中〳〵を　○なつかなか○なかなつか
右いつゝのこと葉を。かやうにつめていふと如何といふ人も侍り但うへより云つゞけ。又いきほひかゝりていふ時は。くるしからじといへども。いはぬにはしかじ。殊に物に書つくべきことにあらず。頃。ある人の。べによりあかきたんだ今。雲や霞のたつた今などゝいふ狂句したるをきゝ侍り。いかゞ侍らん。又仁王經を。にんなうぎやうとよみ本院をほんにん。文屋康秀をふんにやなどゝいふは。連聲とてよきことばなり。又坂東こと葉にや。ひたすら無理につめ。又詰られぬ所にては。この字などをそへていふやうなるはいかゞ侍らん。ある人の奴婢をしかるとて。がつきめといへりしを。餓鬼とこそいふべけれと。老師は宣へり
一人の手ずさみに扇などをならし侍るやうのことを　○腕てんがうかくといへるはいかなることにや。いと冷じうさもしきこと葉か。手そぼりといふはくるしからぬか癲癇といふ病ひはおこり侍る時に。手かき。あがき侍る物なり。あづま人は。その癲癇を。てんがうと云るとかや。然れはてんがうかくぞ。うでこんがうぞなどいふことはもし吾妻こと葉にてや侍らん。かの病ひする人の。手かくより云出たるとなるべし。いはずとも

とかくまじきことにや。又あがくといふは。馬のはねいたくるより云たること葉成べき歟。足かくといふべき。
し文字を略してあがくと申成べし。蹀の字を。あがくとよめり。南良に侍る蹀礚といふ時も。此手蹀の文字
の心にて手蹀とも云と云り。手にてのうへにもいふべし。又手かくといふこと葉は源氏にもみゆ

一利口に口きゝ侍るを　○こうへい。こへいなどいふは如何。坂東こと葉に。こつぺいといふこと侍るが。此こうへいのことなるか。こつへいとは。滑稽のこと成べし。滑稽は酒器にて侍るとかや。そのはら。おほゐにて。口ほそうあきたる物なるが。終日酒のしたゞりやまずして。口のうるほひて侍るを。物よくいひとをれる人にたとへて滑稽と申すことぞ。委　史記に見えはへるとかや

一江帥なにといふことを　○かうしよつといふは如何。かうそつ然るべしと云り。江匡房のことよりおこれりとぞ

一印地といふべきを　○ゐんぢんといふは如何。飛礫をうち侍る場の。陣場に似たるとの僻心得にて。ゐん陣と誤りけるにや。印地とは。うてる飛礫の跡の地に付て。印をしたるやうのこゝろ成べしと云り。又つぶてといふべきを。つぶせと申はかたこと

一就中　別而などいふ詞は強強きなり。兒少人などはいふべからず。別而といふを。とりわきと。やはらげていふが聞よう侍ると云り。そのとりわきを。とりわけといふは如何。又野分のかぜを。のわけといふもあしかるべし

一さりながらといふこと葉と。しかしながらといふこと葉とを。同じさまに心得ていふは如何侍らん。ふるきせ

うそこなどの文章には聊。かはりめ侍るかとおぼゆかし。但乍去は。さうありながら。しかしながらは。しかあつしながらといふ成べければ。同じかよひも侍るべき歟。併のこと葉は。書札などならずしては。さのみいふまじき事にや侍らん

一抑といふことは　○決前説後のこと葉とて。前に云たることをおさへて置て。後いふべきことをいはんとて。そも〳〵と置文字なりとかや。それも〳〵といふ。れを。略したることぞ傳へ侍りし。然るを發端にそも〳〵といふこと誤り成べし。謡舞などに侍るも僻言なりとぞ。然れ共點能に開口とやらんをうたひ。又は次第をうたひて次に抑といふはよし。書物なども前にこと葉にて云て。次に書物よむとき。その書物のさし口に。そも〳〵と書出すはくるしからずとかや

一物の。けざやかなることを　○けんざりといふこと如何。但。けんは露顯の顯か。然らば。ざりは付字成べし。物のあざやかなるを。あんざりなどゝいふ。ざりにや。但如何

一无性なるといふべきことを　○むしやうこくたいなといへるは若出所の侍る歟。又しやだらもなひぞ。しやしもなひぞ。などゝいふこと葉も如何。さしもなきは然るべし。左もなきといふに。し文字を。休めに立入たる物歟

一差別のわかれざることを　差異もなきといふはよろしけれど。しやつしもなひといふは僻言

一無明たるといふべきを　○無明やたひもなひぞなどいふこと葉は如何。案るに雲霧などのおりかさなりて。人

の際涯もみえわかぬといふこゝろにて。やたいもたきといへるにや。又釋讒説に。弥陀は無陀のとなりと。ある僧の語られ侍しなり

無明無陀全依法性。法性無陀全依無明云々

一齒をたてずして。にことゑめるをはがむといふとは如何。笑ひ度をこらへ居て歯を噛合せたるゆへにはがむといふ歟。又齒をたてずに心にはげむ故に。齒の文字にや。又釋尊一枝の花を拈したまひて。大衆に見せさせたまひしに。迦葉ひとり破顔微笑せりといふを歟。然らばはがむは。はゑみ成べき歟。又。にくそ笑ひといふとは。北叟笑なりとかや。塞翁がことよりおこれりと云り。塞翁か北の翁と寄によめり

一越訴といふべきを　。をつすといふはあしかるべし。越訴不断といふと也。又をつそがこに物ぞなどいふと葉は同じかるべき歟。但　超　佛越祖とて。佛をこへ。師をこへ侍ると歟。たまたまの道人の。をつそは。しれぬとぞといはんやうのとに申歟。人に尋ぬべし

一僞り出すといふとを　。すびくといふは如何　。をびくは。僞りてそゝのかし出すこゝろ歟

一靉くとは　。雲　霞　霧　靄などの上にいふとなり。それをもすびくといふはよろしからぬ歟。をびくも

一路の高びくなることを　。だくりぼくり　。だくぼくなどいふは如何。啄木の文字にや。然らは。たもしを清べきこたり濁るはあしかるべし。扨啄木とは。てらつゝきといふ鳥の名なり。即啄木鳥と書り。然るを組の緒又鼓の調緒などに。たくぼくと申は。そのいろ斑にして。高びくにうね侍りて此とりの木をついばみた

る跡に似たるによて啄木と申とかや又流泉啄木といふ時は琴の曲の名なりとぞ

一餘慶といふべきを　○よけといふは苦しからざる歟。此詞は。積善家在二餘慶一といふヿより出たる成べし。然るを。今俗語に。物のおほきヿにのみ云るは如何

一でくるぼうといふべきを　○でこのぼうといふは如何。詩に傀儡と作りしは此事成べし。歌の題に。傀儡といふヿ。遊女といふヿは其品かはれるにや。されど同じやうによみたるも侍る歟

一正直の人を　○またうどゝいへるは出所や侍らん。またき人ぞなど云は。全きといふ略成べし。それを誤りてばし云そめたるヿ葉歟但直人と書てたたうととよめり其類成へき歟然は眞人と書て。またうどゝよむべし

一雨後に道のあしくて泥などあるをぬかりといふは。吾妻ヿ葉なれどよきヿ葉と云り。忽消と書るとかや

つばくらめみすなけがしそ玉鉾の道のぬかりを巣にはこぶとて

あづま路の道のぬかりの馬ざくりうたての月の宿りどころや

などよめりしも。むかしの哥とかや

一何のへんもなひといふを。へんてつもなきといふはくるしからぬヿ葉にや。若偏徹など書るにや。出所しらまほし。大徳寺の僧一休和尚の假名法語に。水鏡といふ物侍り。それに。唯へんてつもなき物としるべしといふヿを書れたり

一中興を　ちうこは如何。又上古中古の時は勿論ちうこといふ。中興開山などの時は。ちうこといふがわろし。かゝる紛れヿ葉をよくわきまへしるべき事なりかし

一ひた物といふべきを　。ひつた物といふは如何。但苦しからぬにや。ひたといふは。直冑又跑おどろかしの引板より出たるヿ葉にや。又ひつたりといふは。引板ひく音成べし。又括し鹿子の染物などの時のひたは。直冑の直の字歟。又意趣もなくて籠居し侍るを。直隱といふヿ。源氏に侍るが此ひたにてや侍らん。然らはひた物は直物にて侍べしひつたといふはよろしかるまじき歟

一急がばまはれといふヿ葉を急げはまはるといふはあしきこと葉かと云り。近き代の哥にや

　武士の矢橋の舟ははやくともいそがばまはれ勢多の長橋

勢多からげと云ヿ葉も此所をまはる時より云そめたるにや

一物のせまりをぜつぴといふヿ葉は　。是非といふ心歟。とにかくにぜつぴは淺ましき俗語成べし。その外。びやぢ　。かこいなどいふやうのヿ葉のおこりは。大かた唐國人のこと葉成べし。かるたといふ物より出たるヿ葉にやといふ人も侍る。摠じて南蠻言葉唐人口などは。いさゝかもいふべからざる歟。あしきヿは何のうへにてもおぼえやすくして忘れがたし。よき事はおぼえがたくて忘れやすしと云り。されば舌どき人のまねをしならへば。しとやかなる物いひもたちまち舌どになりて訥り侍れど。舌どなる人が。しとやかなる口まねはいと習ひがたし。されども嗜にて年久しう學べば舌どなるも終になをり侍るとかや。爽が千

嶋の言葉などの。だみたるは。いかに世にはやるともかりにも學ぶべからずと云り。總じて。都のこと葉も。昔はよかりしかど。いつの程よりや田舎言葉のまじりて。あしくなりけるとぞ。吉田の兼好法しは後宇多院の時の人なり。そのころさへ早いやしきこと葉のはやり侍るとて。車もたげよ。火かゝげよといふべきを。もちあげよかきたてよなどいへりしを歎きて。つれ〳〵草に書れたるにや。今はその。もちあげよ。かきたてよが。よきこと葉の品になり侍るにや。かゝげよ。もたげよなどいひ侍らば。人笑ひになり侍るべし。まことに歎かしきことならずや。應仁の乱れより都の風俗おほくあらたまりてあしう成行侍しとかやいひ傳へし。應仁はさのみ遠しともいふべからずかし。しかはあれど。かう治まりたる御代なれば。をのづから代の聲もやはらかなれど。是は我子のつたなくて。いやしき女のわらはなど。さしつどへて。むかし〳〵かたるを聞なれ云なれ侍るにしらしめんとて。長〳〵しう記し侍るは。心の闇のはるけがたくてたん

一物のいかめしくおほきなることを。でこ。でつかい。にくじなどゝいふこと。いとさもしう聞ゆ。いはずとも有べきことにや

一同じく。いかいことゝいふはよろしきにや。若位階といふことより出たる歟。それをいつかいとはあしかるべし。但いかいどはいかめしひとの中略歟

一ぎやう〳〵しきとは　○業々敷とかくなれば。ぎやうさんとは業山とや書侍るべき歟　それをぎやうなといふは如何。但ぎやうなとは。眞行草の行の字か。眞にあらずといふこゝろにいふか。又ぎやう〳〵しきとは差

過たるとに云習はせり

一じやうにといへるは。物のおほきかた地歟。上文字成べしといふ人も侍り。但重畳の心にて。畳の文字にや

一今卒度といふべきを　○まつとゝ云と如何。但略語なれば。くるしかるまじき歟。そつとゝいふべきを。もつとゝ云はくるしからぬ歟

一袖袂などの雨露にしとゝにぬれたるを。しほ〳〵といふはよろしけれど。じぼ〳〵ぞ。じつぼりぞなど云は如何。しよぼ〳〵。しつぼりなどはよろしかるべし。又しよぼくさなどは如何。但草といふはこと葉の緣にて侍れば苦しかるまじきにや

一こなたへ來ませ　○こちおはせよ　○こちへこよなどいふやうの時に。こちへきやれ。又きられよなどゝいへるは。甚つたなきこと葉かといへり又これへ渡られよといふを。近江こと葉には。こちわたいといふ。是は渡らひといふ。ら文字を中畧したること葉成べければ。よろしかるべけれど。いかにぞやいやしう聞え侍る歟。わたせよといふはおはせよといふ上畧なれば苦しかるまじき歟ゞおじやれもよしと云り

一こちはしらぬといふべきを　○こちーやしらぬといふは畧したること葉成べけれども。あしかるべしと云り

一ひなたぼかうとは　○日南北向と書侍ると云り。然るをひなたぶくり。ひなたぼくりなどゝいふはよろしからじと云り

一大雨大風の日を　○しだらでんといふは震動雷電と書侍るよし云り可尋

一車軸の雨とは　○大粒に降侍るかたまりたる水の上に落て。車の軸のごとくにとびあがり。頓てそのまはりに輪のかたちをなすをと也。それを降しづくといふはいかゞ侍らん。但降しづくのしづくは。雫にはあらで。水中に木の葉などの落入て。うきもせず沈みもはてずして。水の半にあるをいふと云り。しづみうくといふ中畧成べし

一朋友などの中を。あしさまにいひてさき侍るを。讒言と申す歟。又は親子主君從者のあはひにもいふべし。それを讒奏といふは誤りなるべしといふ人侍れどくるしかるまじき心歟。但讒奏は主從の間にいふべし。朋友の間のは讒言といふべし。奏の一字あてなるゆへか。但公家武家ともに。主君へ物申侍るを奏者といふ。又奏者の間といふも侍り。奏聞といふとは。天子へ物申あぐることに限るべし。惣じて禁裏仙洞の御ことは庶人の口にていふべきことにあらざれば。公家名日官爵の讀がたなどは皆もらしつ。明應の比。姉小路殿の述作に公家名目抄とて壹册侍り。是はわづかの小帖にて侍れば。とつき侍るべしともおぼえず。たとひかうやうの書物にしるせりとても。口づから傳受せざる人のは用侍るにたらず。すこしの清濁にて雲泥の違ひ侍ると也。假へば攝政といふべきを殺生といふ聲にいへば。物の命をたつことになる也。されば執心の人は。其家家へたづね歎きて直傳をうけたまふべし。清濁墨譜を付たる本をみたりとても。猥に知がほにしていふをたかれとこそ。又一切の書籍など所望もなきに人前にてはよむべからず。哥書などはたとひ所望あり

ても人前にてよむまじきことゝ云り

一物の色あひを譽るに故實侍ると云り

青色は　見事

黄色は　結講

赤色は　嚴シ

白色は　花車

黒色は　くすみたり

此外紫は五色の外にて朱をうばふといへば。うつくしきとも申べきにや。惣じて紫は女服にて侍るを官僧の着侍るは。もろこしにてやらん后の服をたまはりし例とかや。その外の色〳〵も此五色を根本にて心得へしと云り

一けんによもなひとゝいふ詞は如何。都而おもひがけもなきことに云習はせり。若衆慮の文字か。又は權輿が本説なるよし云り。權輿とは物のはじまりの義也。權は秤のおもり。輿はこしなり。輿を作るは。先屋体よりはじめ。秤を作るはおもりよりはじむると云り。然ればおもひがけもなき所より仕はじむる故に云そめたると葉也とかや。それをけんにようといへるはかたこと成べしけんよなれとも連聲にてけんにょとよむがよし

一蔗事つきて我身の得分になるやうにとのみあながちにする人を。ひすらこいぞ　○ひすいぞといふ言葉は何たる事にや。出所しらまほし。案ずるに物のいやしく下女しう侍ることを。ひすましといふこと葉侍るなり。爰のひすいぞひすきぞといふも。ひすましきの心成べき歟。万事を我身の爲とのみ欲〱しきはいやしきものゝくせなれば。ひすましきにかよひ侍る歟。但　又。かまびすしきといふ上下畧のこと葉歟。らこいは。付こと成べし

一それに座し給へといふことを。そこにねまれといふは北國こと葉なり。踞の字をねまるとよみ侍れは苦しかるまじけれど。などやらんふつゝかなること葉のやうにおぼゆかし

一安坐し給へといふことを。じやうろくかきたまへといふこと葉は。佛の丈六の像の膝をくみおはする様より出たる歟。かくはくみたるかたちなるべし。伏猪の。かるもかくなどいふも。柴をくみたるやうにし侍ることなり。若然らば。丈六のこと葉は。祝言の座　又は尊貴にむかふてはいふまじきこと歟猶可尋

一人のいたみを弔ふを　○とぶらふといふはよろしからじと云へり。とむらふといふやうにいふべし。假名にはとふらふとかくなり。又常に人のがり行侍るをとふらふとも云り。その時は訪の文字也。されどいたみに紛るゝを忌て。今はいはずとかや

一假名といふことを。書にむかひてはかんなとよむべしと云り。但所によるべし。てにはといふも書にむかひては。手尓於葉といふべしとかや

一和尚を　○くはしやうとは聖道の言葉にて。おしやうとは禪家にのみいふと聞しかども。ある僧の云るは。淨家にもおしやうといふ名目の侍ると云り。和尚といふは梵語なり。此には力生といふ。有漏の善力の無漏を生ずることなりといへり。又此ころ茶湯。かたに功者にて。世に此人ならで又上手はあらじといふやうの人を。和尚とをし出して誰も〳〵宣ふはいかなることにや

一云甲斐なきといふべきを。ふがいなしといへるは。いもしを上畧したるにや。よろしからぬ言葉歟

一金言耳に逆ふぞ　忠言耳にさかふぞ良藥口ににがしぞなどいふことを。かた田舍人がいへるをきゝ侍れば。金銀耳に逆ふぞとうやく口ににがしぞなどいふいと拙くこそ

一うゐ〳〵しきことを。今が始めにて侍るといふべきに今ともに始めにて侍るといへりし人あり如何とぞおぼゆ

一若干とは　○おほき心なり然るをそくりばくりなどいふは僻言成べし

一物の不淨なるを洗ひきよむるをゆすぐといふは如何。すゝぐと云べしと云り。恥をすゝぐなども同じき歟。但又ゆすぐは浴の文字歟

一捨るといふべきを　○ふつるといふは如何。又ふてゝなどいへるは心かはれり。敵と書る歟覿面のこゝろ歟。但すつる。ふつるも心はかよひ侍る歟

一族とゝいふべきを　○とつくとはいかゝ

一そのことを　さうしたさかいにと云べきを。さかいでといふは如何

一大魁と云こと葉は。物の相應したることにいふとかや魁は首といふ字註侍り。然るを今俗には。過差なることを大魁なるといふは聊心違ひ侍る。されど普く誤り來りて云馴侍れば今更改がたきこと歟。又云てんぽうぞ。てんぽぞといふはいかなること葉ぞや。出所しらまほし。天道と云ことを。てんと次第とといふも。天たうしだいといふもよろしからぬこと葉なるべし

一過差なることを。せんしやうといひ習はせり。是は近き代に千石少貳とかや云し人ありつるが。過差をこのまれしより千少といひそめたること葉とぞ。又云　賤服ニ貴服ニ謂ニ於之僭上ニ僭上無禮國凶賊也といへるは。聊似かよひたれど。又別のことと云りかや

一非愛といふは。物のあやうき事に云り。聊心得の侍るべきことにや武烈天皇の悪政道より出たること葉なりと

一危きことを　。あぶなしはよしと云り。浮雲とも書とかや。定家卿天福の伊勢物語にも。あぶな〳〵と云躍をさゝれたり。然るを非愛と云は。聊心持かはり侍るへしと云り

一聖命貴命といふべきを。せいめきめといふは畧し過たり。あしかるべし

一行住坐臥といふべきを。ある人のこと葉に。じやうぢうざぐわと云れたり。尤常住坐臥とも書べけれど。かく書つゞけたる物をもみず。又きかずといへりし人おほし。私ごとなるべし。按此行住坐臥起居動靜造次

顚沛などいふこと葉は。大かたつかふべからず。物しりがましく耳にたつものなり。さいつごろ。ある人と伴ひて。寺參りし侍しに。その獨のこと葉に。いざこの次に御墓へ社參せうと云れしこそいとおかしかりき。いまめかしけれど。神の社にまふづることをこそ社參とは申なれ又まうでぞ。物詣ぞとは。佛神ともに申べき歟

一堂塔伽藍神社佛閣などの零落したるを。大破にをよびたるなどいふべきに。ある人のこと葉に。大ふうに及びたると云り。又おかしかりき

一常住といふべきを　○さんぜじやうじゆ

一不斷といふべきを　○ふんだんなどいふこと如何

一物を都而いふやうの時に。一支具といふべきを。一しきと云るは如何。但ひとつ色なるといふ心にて云るにや。尋ぬべし。一支具とは鎧などの取そろへたるを申なり。或は一縮とも云歟

一ひしとゝいふべきを　○ひつしとゝ詰て云ること如何。縦へば人に物を賴むをひしと賴むぞなどいふは當らぬとかと云り。千字文に罔レ侍二己長一と讀て。をのれがまさることをたのむことなかれとよめりと。然らばひしと賴みがたきことなどゝ云時は可然こと葉かとゝ言り

一あいしらふぞ。あいしらいぞなどいふことを。あしらい。あしらふと云るは。いもじを畧したること葉成べければ。苦しからずと云り。售答とも會些とも書り

一佛神へ初てまいらする物を。はつおといふは。獺の魚をとり初て。先天にまつれるとよりおこれりとかや。それをはつおうといふはかたこと成べし

一臈次といふべきを　○らつしよ。又はらつしよもなひなどいふは誤成べし。臈次を糺すなどいふこと葉はありとかや

一巍々堂々といふべきを　○ぎんぎだうだんといふは如何

一慇懃なといふべきを。ぎんぎだうたんぞゐんぎだうだんぞなどいふは僻言なる歟。但行住坐臥を。四威儀と申せば。威儀道断とは別のこと歟。たうだん。は言語道断のだうだん成べし。然らば。苦しかるまじきなれど。巍々堂々を誤りて威儀道断といふならば僻言成べしと云り。又慇懃とはねんごろたるかたに云るを。今は崇めうやまふ事にのみ云り如何。乍レ去心は通ふべけれど。心すべきと歟。又丁寧といふもねんごろなるかた成べし

一徳政といふべきを　○とくせんぞ又らんとくせんぞなどいふは誤成べし

一あちこちといふべきを　○あつちこちなどつめていふはあしかるべし。哥には。あちの山とよめり。こちは近の字歟。又あちらこちらの。らは付字なればくるしかるまじき歟

一いづこ。いづく。いづちなどいふべきを。どことといふはくるしからず。それを。どつこと。つめたるは如何

一ふし〴〵なる中を　○ぶし〳〵とはいかゝ

一物のちいさきかたちを　○ちうさいといふは如何

一懲を　○なましになどいふは如何又生智恵とは。別のことなり

一物を○をしはかるを　○さげすみといふべきを。さけしみといふは如何。さけすみは下墨といふと成べし。番匠の糸墨を高き所よりさげて。物のゆがみすぐなるをはかるとより出たると葉なりと云り

一上つかたより拝領したる物を。をのがと葉に。御拝領したるといふはわろし。人の拝領したる物には。御の字をも付べし

一階を　○きざはしといふはくるしかるまじき歟。如何。日本紀云。伊弉諾尊抜レ剣斬ニ軻遇突智一為ニ三段一云々段は。きざむ心成べし然らば。階もきざみたるかたちなれば苦しかるまじき歟

一泣といふを　○塩たるゝとは神事の忌と葉也。それを俗に。みそゝるといふはさもし。むつかるとはあるべし。又はらたつることをも。むつかるといへり。ゆゝしきとは常には由々敷事にのみいへど。哥書にはいまはしき事にも云り。又恥かしきといふ事を。やさしきとよめり。揔而哥には常にかはりたること葉のみおほしとみえたり。しるすにいとまあらず

一沐浴の二字を。かみあらひ。ゆあみすとよめり。かく連りていふを。死人の上とのみ心得侍るは誤りなりとかや。死人の上にては行水と申と也。常に湯をひくぞ。ゆあみぞなどいふへき時に。行水といふはいまくしき事とかや

一忽緒といふべきを　○ゆるかせは如何。但ゆるかせは緩の字歟。いと。ゆは。五音通ずれば。くるしからずや。緒のかせのゆるむとよりいひ初けるにや

一施行を　○せんぎやう

一合掌を　○くはつしやう

一度毎を　○たんびこづと

一同じとを　○おんなじを

一をのづからと云べき時にをのづとと云人あり如何。但自のからを下略して云たること葉歟。とかくよきと葉とはきこえ侍らず。又自然といふべきを　しんぜんといふもわろし又じねんぞ。しねんぞなどとはいふべし

似条言　三

一是斗といふべきを　○是ばつかし　○是ばつちや　○是ばつかりなどはわるがるべし

一扨々を　○はて〱　はつてさて　○はてさつて　○はつてはて

一餘りを　○あんまりと。はぬるもいらざると成べし

一終にを　○つゐど　○つゐしか

一結句を　○けくに○けくでか○但けくには○つ文字を。中略したる歟

一本よりを　○もとの義といへる人あり。出所しらまほし

一尋ねよを　○たんねよ

一無器用なを　○ぶつきやうな

一出來次第を　○でけしんだい

一皆樣を　○みんなさま

一けがあやまちを　○けがあいまち

一周章を　○どしやくしや

一大略を　○たいらく

一いつもを　○いつつも

一遊べを　○あすべ○あそはせといふべきを○あすばせ

一敎るを　○をしへる○をすへん
一大事なひを　○だんなひ○だいもなひ
一不慮を　○ふりやうふてん
一やくたいもなきを　○やくちやいもなき
一集るを　○まつぶる○ まつばるはくるしからずといふ人もあれどきゝあしくや
一蘇生を　　ゆみづがへりは如何○ よみぢがへりといふべし
一依怙贔屓を　○えこうひいき
一贔屓偏頗を　○へんばん
一偏執を　○へんにし○へんねし
一養育を　○やうやく○やうよく
一首尾を　○しび
一錬磨を　○れいまん○れんまん
一鍛錬を　○たんでん但通鑑與
一抜群を　○はつく
一懇望を　○こんぼん

一變改を　○へんがへ

一連署を　○れんぢやう

一連判を　○れいばん

一超過したることを　○ちやうくはん

一かたかうなしとは　○片鬢無と云ところ歟。片首なし歟又はかたくなしきと云るを誤りたる歟。猶又かたつくはといふは。あしきこと葉成べし

一自由を　○じうよう。じよう。不自由を。ふぢうなど、わろしともいへり

一種々　○しゞう

一種々無盡を　○しゆ〳〵さつたなどいふさつたは何ことにや。若薩埵歟。出所しらまほし。かうしらぬことをも。先書付て置てこそ人にもたつね明らむべしと恥がはしからで記すもの也。砂多をさつたとばし詰たること葉歟。いさごのごとくおほきこと成べき歟

一助言を　○じやうご。又助成。助音などいふは別のこと歟

一おもふ樣を　○おもふしなとは如何。但おもふ品といふこと葉歟

一分別を　○ふんべち

一失念を　○しちねん

右二つは苦しからぬ與。二四はち詰といふと侍る。それもとによりて。聞あしきは嫌ふべしと云り

一燒亡を　○じよもん。じよも

一死人を　○じぶとゝいふはわろし。しびとはよし。死は。よみもこゑも同じければ湯桶言葉にても是等は苦しからざるなり。德而よみと聲と同じ字おほし

公　文　菊　蘭　丹　蟬　錢　死是等はよみも聲も同じ也

一死骸を　○もくろはわろし。むくろとはいふべし

一髑髏を　○しやりかうべとはいかゝ。どくろとはいふべし

一無躰を　○むたいこくたい

一幽玄を　○ゆうげん

一乱曲を　○らんぎよくなど濁るはいかゞ。但申楽がたには清也

一潔白を　○きつぱり。但別の事與

一辛勞を　○しんだうといふと如何とゝ　とがめられて。いや。からくらうするといふ心の外に。又別の文字侍る。こたたに。しんごうと申せしは。心動の文字なりと陳ぜし人侍りとかや。何ごともいへばいはるゝ物なれば。人の上をばとがめあらそふとなかれとぞ

一立花一瓶二瓶を　○一ぺん。二へん

一滿遍を　○まんべといふは如何。まんべんは平均の義なりと云り
一散錢を　○さいせん
一聖靈を　○しやうらい。但不苦歟
一流灌頂を　○ながれかんぢよ
一愚癡蒙昧を　○ぐちばうまひ
一着到を　○ちやくちやう
一卽時を　○ちやくじ又ちやくとちやつくりなどもよろしからざる歟。但ちやくとゝ云は着到といふ詞のう文字を畧したる歟。着到は急ぎて付る物なればいふにや
一相撲を　○すまうはよろしからざると云り。但くるしからぬにやすまうのせちといふ点も侍り名目には只すまひなり
一擧狀を　○けじやう。又御下文といふは別の事也。又許狀と云るも侍る歟。心はかはるべし
一家督を　○くはとく
一官途を　○くはんどう
一誕生日を　○たいじやうにち
一看經諷經を　○かんき。ふぎ　さて此かんきんふぎんは。禪家の名目なりとかや尋侍るべし。聖道にては勤め

勤行。又は讀經など〻申とかや

一存外なるとを　○そんざいといふはもし出所の侍る歟

一無骨を　○むこつ

一左禮を　○じやれはわろしと云り

一さらしたる物を　○しやれたると云るは舍利より出たると葉歟。しやれかうべも雨露にさらされたるゆへの名なるべし。○ふるき板戸なども。しやれ板といふ歟。但　源氏夕がほの卷には。○されたるやり戸ぐちと侍るかとおぼゆ。その時は左禮なりまほならぬかた成べし。さと。しやは。かよへども。ことによるべし

一氣味といふべきを　○きび但不苦歟

一憲法を　○けんぼ又けんぼくぼのくぼは。公法といふと歟

一天竺を　○てんじゆく

一飇は室へまふてあがるなり。土風は土をふくなり。此さかい紛る〻によてしるす

一落着を　○おちつくとよむ。それをうちつくといふはわろし

一油斷を　○よだん。學問の時は油の字をかく。武藝の不嗜なるには弓斷と書と云り

一餓死を　○がしん

一奔走を　○ほんそ

一活計を　○くはつけ
一奇恠を　○きつくわい
一卑下を　○ひげい
一理不盡を　○りふじ
一價を　○あたへ
一臨終を　○りんじゆ
一不圖を　○ふつと不斗とも與風とも書歟
一龍宮を　○りうごん
一出來たるを　○でけたる
一推量を　○をしずいとはいらぬかさねこと葉かと云り。惣而重言葉によきとあしきと品〳〵有べし
一枉惑を　○わうちやくとはいかゞ
一定而を　○さだめしといふは如何。但定めつることを。さだめしと云はよし。爰に云るは定而さぞあらんといふやうの時に。さだめしさぞあらんといふはわろしとの事也
一左樣でを　○さうてと淸は如何。さうして歟
一誑を　○たぼらかす

一慳貪を　○けんどう

一沽却を　○こうきやく

一耕を　○たがやすは如何

一筆耕を　○ひつこ

一岸破と崩るゝを　○がはと

一重きを　○おもたき　おぼたい

一際限を　○さんげもなひなど

一淵底を　○えんてん

一傍示を　○ほうず

一所務を　○しやうぶ

一所分を　○しやうぶわけ

一證據を　○しやうこと濤は如何但不レ苦かとも

一純熟を　○じゆんづく

一未明を　○みめい

一誓文を　○せんもん

一翫を　○もちあそび

一術なきを　○づゝなき

一是等を　○こをら

一虚空を　○こつくうなひなど

一極りを　○きやまり○きゆめてなど

一神通方便を　○しんづほうべん

一邪見放逸を　じやけんはういち○但二四はちづめなればばういちもくるしかるまじけれど聞あしき歟

一眞行草といふべきを○しんぎやうぎやうは如何○東坡文集曰。眞ハ生レ行ヲ々ハ生レ草ヲ眞ハ如レ立ルカ行ハ如レ行クカ草ハ如シレ走ルカ未ダレ有ラ下未ダ二能ク一立チ能ク行カ二而能ク走ルモノハ上也云々

一懺悔を　○さいげん○さいげ

一御同車を　○ごどうしやはわろしと云り

一御同心を　○こどうしんもわろしと名目抄に書れとも是等は改めがたし

一途に迷ふを　○どうにまよふは如何

一四國遍路を　○しこくへんどう

一まんざらといふこと葉は○出所しらず

一めつた　○右同

一三界萬靈などの廻向の文を。ばんれいとはよまず。ばんれんが名目なると云り。佛家の名目などは猶むつかしきものと云り。台家淨家眞言家。その家々によてかはり侍るよし云り。能たづね侍らまほし。眞言禪家などの名目は今もむかしの音讀をうしなはぬよし云傳へたり。殊勝なる事也

一頓而を　○やんがてやかてと淸と

一稀なるを　○まれか但かは付字歟

一ふすぶるを　○くすぼるは如何。又すゝけたるぞ。すゝびたるぞとは煤の字なればよしと云り

一名譽を　○めいしやう。めんよ

一名所を　○めんしよ

一そなた次第といふべきをそなたほうだいと云る。若用所や侍らん。傍題の文字歟いかさまにもよろしからぬこと葉成べし

一所望を　○しよもう

一無左とゝいふべきを　○むつさ。むつた。むたくた。むたかは。こつちやくこちやくちや

一むかしのせうそこには　○彼一義を御同心におゐては。本望なり。又はそのと御合点候はゝ　忝　候なといふ文章おほし。今ならば。本望たるべく候　忝　かるべしなどゝ書べきとなり。然れどもむかしのもよく侍る

子細あり。是はせうそこの文章の上のこと。不斷物いふ上にも。てにをは違ひの侍ることなり。よく〳〵心得べし一言にて百年の身をあやまつこともなきにしもあらず

一謎を　○なんど

一なぜにを　○なじよに

一幸ひある人を。果報者といひ。わざはひあるを因果ものとのみいふこと其義にあたらざる歟善惡に付て通用すべきこと葉なるべし。文字につきていはゞ。果によること書り。むかしの生にてなしつる善事が此生にこたへて。幸ひあるとも。又むかしの生の惡事か。此生にこたへてわざはひある事をも。ともに因果の道理なり。果報の二字もはたしむくふとよめれば。兩方へ通ずべし富貴有德にて子孫榮へ侍るやうの人をのみ。くはほう者といふにあらず。但如何侍らん。人にたづぬべし

一いみじきぞなどいふこと葉は物の至極したるやうのことにいふなれば。よしあしきことに付て。兩方へかよふこと葉也

一人をしかるを　○ひかる叱と書歟

一濕氣を　○しゆつけ

一利運を　○りをん

一塩滿干を　○にちひ

一曾而を　○かつつて

一飢渇を　○けかちは苦しかるまじき歟

一忌を　○ゆみ

一みつ鐵輪といふべきを　○みつかなを同じくみつ口を　みちくち

一曆々を　れつき〳〵

一非業といふ心を非報といふ人侍り定而出所あること葉成べし。非報の死ぞなどいふとも侍るが。非業のこと成べし。ある人のいへるは凡夫の死するは皆非業なり。定業の死は聖賢の上にのみありと

一構而を　○かんまいて○かんまへて

一音もせひであれなどいふべきを。をつとせで○をつとしかひで。をつともせひでなどゝいふはいかゞ

一御寢あれを　ぎようしなれ。ぎよしなれなどゝいふはいかゞ

およれぞ○おひなれぞといふは○をんなこと葉に○やさしと云り○おひなれはお寢なれといふ心歟○それをおひんなれとはいかゞ

一仇といふべきを　あたん

一飽迄といふべきを　あくふく

## 時節之部

一元日を　○くはんじつ
一元三を　○ぐはんさんと濟と
一曲水宴を　○きよくすいのえん
一御佛名を　○おんぶつみやう
一歳暮を歳末といふを　○さいまちはあしかるべし。二四ははちづめといへどもかやうに聞あしきはよろしからずと云り
一彼岸を　○ひんぐはん
一半夏生日　○はげしよ
一十四日廿四日を　○じうよつか。廿よつかといふはわろしと云り。朔より十日迄は讀也。十一日よりは際なり。されど是等はあまねくいひ付たるがよかるべし。又四文字をいみて。いひたることも有べし
一先度を　○せんどう
一先ほどを　○さつきに
一以前を　○いんぜん。いんぜ
一一日を　○日つとひ

一夜一よといふべきを　○よつびとい

一きのふを　○きんのう○きによう

一おとゝひを　○おとつひ

一朝毎晩毎などを　○朝ごつとい○ばんごつとい○ごんめ

一二月を　○にんぐはち○四月をしんぐはち○三日をみつか○四日をよつかといふがよしと云り。みか○よか○もよし

一朔は○月日たつといふこゝろ成べし○い○ひは同じければ也○き文字は畧歟○月日一度につれてたつ義歟

一晦といふべきを　○つもごりといふはわろし○つごもりとは月こもるといふ中略なるべし。むかし〳〵ある人○伊勢の津に大小の橋といふが侍る。その故は津に籠りたるといふ心にて名付たりと語られしかば○一座興を催せしに○それを聞てある人又余所にて語るとて○大小の橋と申は○つもごりといふ心にて侍るといへども○皆人心得ざれば○いと興ぜずして○其子細を尋ね侍るに○津にもごるゆへにと打腹立て答へられしに○人皆興覺侍けるとぞ

一夕月夜を　宵月夜はいかゞ○ゆふづくよとはいふ

## 人倫并人名之部

一師匠を　○しゆしやう

一をの　○をのれなどいふこと葉は。みづからのことにも。又むかふ人の上にも申歟。両方へ通ずること葉なり。人といふも両通なり　いきてよもふすまで人はつらからじとよめりしは。みづからの上のことなり。又むかふものをば。をのぞ。をのれぞといふも。月花などの上にはよまずと見ゆ。此等のこと葉を。うぬ。うぬめ。をどれ。しどれなどいふことはあしかるべし

一我といふも両通の詞歟。あれとも云

一みづからのことを　○をれといふはよしと云り。をのれといふ中略のこと葉成べし。日本紀にも侍る。又愚者と書てをろものとよみ。愚痴者と書て万葉にしれものとよめり。此をれも。をろもの。しれものゝかよひ成べし。又人ありて。唯今顯るべき僞をいふに。其恥をもかへりみずして云募れるを。しれ〳〵敷などゝいふも此愚痴の文字成べき歟。僞といふものも。此愚痴心よりおこることとみえたり。然れども良將のてだて。聖賢のはかりこと。佛菩薩の方便。なきことにしもあらず是僞に似たれども。凡俗の僞にくらべては雲泥の違ひ成べし。同日の論にあらず。扨此をれと云ふこと葉は。尊氏公の世中を心のまゝにしたまひつる比より別てはやり出侍りて。侍分の者ならでは。えいはざりしとかたれりし人侍りき

○をゝらとは。をのれらといふ略歟。うら。のゝ。たゝ。ちや〳〵。うと。うもなどのこと葉大かたみづからの上にいふこと也。是等は人數ならざる農夫などの。その身を卑下して云ること葉とぞ。豐後國には。とゝ。かゝといふ

べきを。うも。うどなど、云り。近江丹波などにては。みづからのことを。うらぞ。うら、ぞなど云り。是は近國なれば聞しりて侍る。此外も遠國のこと葉に。さぞめづらしきことおほからん。その所々のこと葉なれば。いづれをよしあしともさだめがたし皆由緒あることにてもや侍らん

一まづしき人を　。びんぼうにんといふべきを誤りて。びんぼにんといへるさへいやしきに。びんぼすつぼなど云るは猶浅ましきこと葉歟

一うつけたる者を　。鼻毛　。たいげん　。あやめ　。ふんちう　。はなだら　。あほう　。ほれものなど、假初にも云べからず。先第一。さもしう。よろしからざること葉なり。心やすき友達の中にても云べからず。喧嘩のもとひなり悪口の科は。刃傷にもさのみおとらずと云り。假ひ奴婢雑人たりといふとも。無左といふことなかれ。いかなる魂の侍りて。その主人に恨をむすぶこともやあるらん心得べきことと云り

一親を　。おやじやもの　。父親をて、じやもの　。母親を　。は、じやものなどいふは如何。親じや人。て、じや人。は、じや人　。兄じや人　。姉じや人　。叔父じや人　。伯母じや人など、は云べき歟それもこのましき言葉にもあらず。又二親といふべきを二しんのふたおやといふ人も侍り。いらざる重言なり。揔じてよしなき重言世におほき物なれども。ことあまたなればしるすに及ばず。縦へは。万ぞ万事ぞといふてよきを。万事のこ、いふやうなるはつたなし。二日の日三日の日などはくるしかるまじと云り。又わざと云へる重こと葉もあるものなり。入部いり御還御はつたなし

一人の親を　○おやじ　○おやぢいなどいふはいかなること葉にや侍らん。傾城屋の亭主を。○おやじといふよしきゝ侍るが。もしそれよりおこれるヿ歟。何さまよろしさうなるヿゝは聞えず

一我をんなを　○めじやものといふヿ如何。但めじや人とは云にくき故歟。をんなどもとは大かたなるヿ葉歟。扨わが婦妻妾のヿをば。善悪に付て。人中にてはいはぬものなりとかや。若き人にはいとしも似合ず。但いはずして叶はざるおりふしも侍るべし。左様の時には如何はせん

　我佛　隣の寶　聟舅　天下のうはさ人のよしあし

此哥はふるき茶湯の書物に侍き然れども茶湯座敷にもかぎり侍るべからず。かゝるヿはいふまじきヿかと云り。摠而すきやは無言道場とかや

一比丘尼を　○びくにん

一古入道を　○ふるぬだう。又平人のかしらおろしたるを。入道といふヿ如何。剰へ書札の上書などにも誰入道誰と。みづから書付侍るヿはあしゝと云り

一座頭を　○ざつとう

一遊女を　○ひしやく

一傾城を　○けいせん

一老を　○としより　○とつしより

一おぬしを　○おのし○わぬし　わごせはよし

一貴所を　○きしやう

一夷を　○えべす

一病者なる人を　○びやうじやもの○びやうじやにんなどはいらぬ重言歟

一御料人を　○おごりよん○おごう

一御乳の人といふべきを　○ちい○おちいなどいふこと如何。されどもみどり子のいひよきまゝに云なれ来りたると成べければ改むるに及ばざる歟。むかし敦忠中納言おさなかりつる時。わか乳母を。かたことにおほつぶねと云りしが。やがてまことの名に成侍りて。後撰集にも。おほつふねと侍る。行成大納言の筆の後撰にも。さかゝれしとかや此おつぼねは少將といへる女房のことゝぞ。又和名に。豆布禰とあるは別のこと也。下人のこと也。奴僕と云り

一盗人を　○すつぱ○すつぱのかわなどゝいふは如何。又すりといふことは。人の手にもたる物をも。すり違ひさまにとるといふやうのことより付そめたる名なる歟

一下手といふべきを　○下手のかはなどゝいふも。出所侍る歟。しらまほし

一痩たる人を　○やせがますといふことは鰹といへる魚のかたちのほそく長きに似たるより云出たるにや。よろしからぬ言葉成べし

一解死人を　○げしゆにん

一後見人を　○おしろみ

一後室を　○こしつ

一後家を　○ごけい

一玄孫　○やしゆはご

一鰥寡を　○やまめ但不苦とも言り

一姉を　○あねい○又兄をあにきといふは兄君といふ略成べければ苦しかるまじ

一穢多を　○えつた○但つめて云馴たればかやうのことは苦しかるまじき歟

一癩病人を　○かたいぞかつたいぞはよし但かたいは乞児と書れは。乞食の惣名歟。かつちやいといふはあしかるべし

一唱門師を　○しよもじ○但しやうもじとは可然歟

一蘇民将来を　○すみしやうらいとは苦しかるまじき歟

一蒙古を　○むくりこくりといふはわろしと云り

一知人を　○しると

一孫嫡子を　○まごじやくし

一賢人を　○けいじん

一武者千騎万騎　○千ぎん万ぎん

一迷ひ子を　○まへ子

一我をおらぬ者を　○がにはる物はいかゞ

一鉢ひらきを　○はつらひらき

一陪堂を　○ほいと

一阿闍梨を　○あざりは如何。あざりと。かんなに書ても　○あじやりとよむがよしと云り　○柘榴　○短册のよみのごとし。民部を。にんぶは如何。彈正をだんじやうと。　文字のごとくいふはかへつてわろし。だいじやうがよしと云り

一長老を　○ちやうろ。むかし／＼古き尼公の寺參して。方丈へ立よりけるに。長老出合たまひて。奇特の參詣かな。御茶參りてよなど。新發意に仰付られておくに入たまひぬ。尼公嬉しくて。茶のみ腰うちやすめて居けるほどに。又ある檀那墓參りの次に。方丈へ案内しけり。是は身躰ひゞしき旦那なりければ。和尚衣うち着。袈裟しどけなくふためき出たまひて先ゝ是へとさうし入たまひ盃出しつゝ。新發意に宜ふやうはよべ客の御馳にひかせし濃茶の侍るべし。それ／＼湯よくたぎらせてなど仰付らるゝ。かの尼公うらやましく聞居て侍れどのめともいはで。かの旦那とふたりのみけり。扨そのだんなはかへりにけり尼公獨

跡に殘り留りて和尚に申けるは。先ほどうばに給りける御茶と。唯今の御檀那に參らせられし御茶とは。輕重侍ると見えたり。扨は往生し侍るべき極樂にも。よしあしの替りめ侍る哉らんと疑の心おこりさふらふといふ。和尚答てのたまふは。尤よき御不審にて侍る物哉。その御ふしんならばはらし參らすべし。但うばこぜは。伊呂波やしりたまふととはる。うば。伊呂波はさかさまにもよみ侍るといふ。和尚又のたまふは。うばよく聞たまへ。我等は御ぞんじのごとく。長老にて侍るなり。長老とはいろは字にて。ちやうらうと書侍るぞ疑ひたまふとなかれといはれしとかや

一伶人の舞を　○れんじの舞といふは如何。但兒のいくたりもつらなりてかなづる舞を連兒の舞といふ人も侍り可レ尋

一福祿壽を　○ほくろくじ

一布袋和尚を　○ほて

一牧溪和尚を　○もつけおうしよう

一鳩摩羅三藏をは　○くもらとよむべし

一鑑眞を　○がんじんとよむべし

一俊明極を　○しゆんみんきとよむ

右かやうのよみがたはおほきとなりその家々の名目有べし

一芝靈石を　○しれいせき

一印月江を　○ゐんげかう

一茂古林を　○もこりんなどの類成べし

一淨藏貴所を　○じやうざうきしやうはわろし

一春屋國師を　○しゆんのくといふべきを。しゆんろくといふはわろし

一大燈國師　○だいと。又道号を宗峰と書て。しうほうと讀と也。そうほうとはよまざるとぞ。いづれも爰にさのみいらぬことなれど。愚子が爲にしるす。都而此つらのことは際限有べからず

一人二人三人四人といふべきをさんにんよつたりといふことは少しもくるしからず。よたりと哥にはよみたれともつねにいふには耳にたちてわろし。むかしの狂哥に

　老ぬれば人八人に成にけりとしはよつたりしわゝよつたり

とよめり

一新發意を　○しんぼちいわろし。しぼちと源氏にはあり

一鷹師を　○たかんじやう

一同朋を　○堂坊とはいはず

一宿老を　○しくらう。しくろいかゝ

一檀那を　○だんなといふ言如何。檀越檀主などゝは申歟。此言葉は佛書に出たりと聞ゆ。佛子に俗方より物を。施す人をさしていふ言葉也。施主も同じ心に通ひ侍る歟。檀は檀波羅蜜の初めの字。又那は。羯磨陀那の總の字此二つを取合せて檀那と申とかや。檀波羅蜜といふは。何にてもおしまず人に物を施す行也。菩薩などの六度の行の一つなり。羯磨陀那とは。僧の施物を配分して。それ〳〵に授與する者也。是は梵語也此には授事と申とかや。檀越とは。檀波羅蜜を行じて。生死海を越るといふ。上下の二字を取て。中略して檀越といふ言なりとぞ。然れば此等の言葉は出家沙門より。俗方に對して。檀方ぞ旦那ぞといふべき言なるを。當代かたゐなか人の云るを聞侍れば。主君を從者の方より旦那といひ。又は親かたがましき人などをも旦那といふは有まじき言にや

## 衣服之部

一直衣を　○書にむかひてはなをしとよまざるよし云りたゝ言葉には苦しからざる歟又直衣姿と書ておほ君すがたともよめり裝束をよそひとも申とかや

一直垂を　○したゝれとはいはず。又よろひびたゝれの時はひもじ濁歟

一外家の衣類を　○きものといふべきを。きりものといふ言然るべからず。きる物とはいふべき歟

一小袖をば　○をぞ。○おんぞ　○みぞといふがよし。但平人のをばみぞとはいはず。おんぞとは申歟。又女の

装束に。五つぎぬ。七つぎぬといふはあれども十二一重といふはなきことゝ云り如何

一綴衣を　○つゞれ

一布を　○のゝ

一木綿を　○もんめん

一北絹を　○ほつけ

一羽重を　○はぶたい

一褊裰を　○へんてつ。但五音通れば苦しからぬ歟。水鏡といふかんな法語に此と侍る歟

一直裰を　○ちきてつ

一頭巾を　○ずつきん

一頭巾を　○とうきん

一燕尾を　○えんびん

一胴服を　○どんぶく

一襟をくびの　○をくひを。うくびといふは如何。をくびは大頸歟。但催馬楽にこくびとうたふ。小はをなればをくび然るべき歟。又大頸に對してこくびといふ歟

一頸にまく絹の名に洞州といふが侍り。それをすしうともいふ也唐音なり。縦へば帽子を。もうすといふごと

し。泗州といふ國の者が頭に纏ふと云り

一金襴を　。きんだん

一手拭を　。てぬごひはわろし手布とも書也たなごひとはいふ

## 器財部

一琵琶の傳手を　○てんじんと云こと如何。三味線小弓にすけるほどの者は。十人のうち七八人までは。てんじんといひ。比巴に携はるほどの人は。皆傳手と云る也。是にて知べし。三味線小弓はいやしく。琵琶はけたかき物といふことを。されば假初にいへること葉にも。その物にふれて。やさしくもいやしくも習ひ侍ることなり。いと恥かしきことなり。さぞ物しりや貴人の御耳よりは。下劣のこと葉のおかしうおはすらんかし琵琶ハ表ニ枇杷木ニ云と云り

一篳篥を　○しちりき

一鐃鈸を　○みやうはちといふこと如何。又鐃と鈸とは貳つなり。一つの上にいふは誤　とぞ

一建盞を　○けいざん

一建水を　○げつすい但下水歟

一藥研を　○やんげん

一火燧袋を　○ひつちぶくろ

一瓢簞とは　○瓢と簞との二つ也。然れども。今は一つの上の名に成侍ぬ。かやうのことはむかしより人の云來りたるごとくいふべし。改むることなかれ。簞といふは。竹もて組たるかごやうのものなりとかや

一摺木を　○すりこぎ

一擂鉢を　○すりこばちなど〻云ると。かたとにはあらねとも。この字一つをゝくとをかぬとにて。いやしくもやさしくも聞え侍る物なり。されどもとにより。この文字を入ずして叶はぬとも有べし。左様の時は苦しからずと云り。又擂鉢を雷盆ともいふ也。又擂胡木といふと葉を女のわらはのにくみて。れんぎなどいふもおかし。但れん木とはらい木といふと成べし。雷木と書歟

一龍骨車を　○りうこしといふは如何りうこうしやとはいふべき歟

一馬の鞭を　○ぶちはわろしと云り鷹　猿の時には。ぶちといふとぞ

一太鼓の撥を　○ぶち

一筆の柄を軸といふを　○じゆくは如何

一位牌を　ゆはいわろし

消息などに。祕ひといふとを。かんなにてゆわゐと書も。此位牌に紛るゝを忌て。ゆわゐと書と云り

一罐子を　○くわんそ

一唐紙を　○たうしゆ

一杉原の紙を　○すいばら

一短冊を　○たんざく。但かんなにてたんざくと書て。口に唱ふる時にはたんじやくよしと云り。祐閣阿闍梨のよみやうのごとし

一文匣を　○ぶんことといふは如何。文庫とは物本入置所とぞ。箱のことにあらず別のと也

一團扇を　○うつわ

一團扇の丸を　○だいせんのまる

一短檠長檠を　○たんけ。ちやうけ

一燈心を　○とうしんとうずみなどはわろし。又うむの下は濁るといふ事あり。されどとによるべし前にも云る。御同車。御同心などのごとし。是は常に人のしらぬ名目なり

一蠟燭を　○らうそくと書て。口に唱ふるはらつそくよしと云り又ともしさしたるを。ざんしよくといふ也

一油火を　○あむら火

一灯火を　○とぼし火

一行燈を　あんどう。二字ともに唐韵なるがゆへに。あんどんよしと云り

一骨柳を　○こうり

一水弓を　○みづひきと。ひもしを濡はわろしと云り。是又名目也

一襆褡を　○ふりづばいは如何

一竹篦を　○しつぺ

一美男石を　○びんなんせきといふは如何但びんは鬢皷美可然と云り

一髻を　○もつとい髮曾とも書

一烏帽子を　よぼしはわろしゑぼしはよし又小結の烏帽子を。こひのゑぼしとは如何

一綏を　○鍋取といふを如何

一草鞋鼻高のを　○さうかいとは木にて作りて。うへを金襴などにて張たるやうの物なり。寺院の內陣。又は緣などはき侍るもの歟。鼻高は桐の木にて作りうへを黑漆に塗たる物歟。但又靸沓のごとくにて紐のなきやうの物歟。革にても作ると云り。鼻高は公家がた。又出家にも用ひ侍る。草鞋天子に著レ之給ひて臣下は不レ用。但法中には用ゆとかや。そのほか烏皮沓。淺履。深履などゝて樣〻侍るよしたれと不知

一雪駄を　○せきだといふはわろしといへど。苦しかるまじき歟。せちだ。せつたなどいふは耳に立てあしゝ。是はまだ無下に近きころ。京の者が作らせてはき侍りしを。利休と云し茶湯者が世にひろめて。はやり出侍しとかや。竹のかはには自然と般若の文字の侍ると云傳へて。笠などにはせしかど。足にはく物には。むかしはもちゐざりしを。末の代には。色〱を改りて。古風をうしなふを是に限らずと云り

一草履を　○じやうりはいやしきといふ人あれども外もくるしからず。金剛といふもよし。誰もしりたるとなれど。睿山の安然上人の作りて賣給ひしより此名おこれり。それをこんごといふは如何

一木履を　○ぶくりはわろし

一尿瓶を　○しゆびん○しんびん○しゆんびんなどわろし

一合子を　○ごつたいはいかゞ

一食籠を　○じきりやう

一飯銅を　○はんど

一行器を　○ほつかい

一藥器を　○やづきん

一茶巾を　○ちやづきん

一茶筅を　○ちやつせん

一雙六盤を　○すごろくはわろしと云り。かんなにはすごろくと書て。唱ふる時はしごろくといふがよしと云り。ずぐろくとも書歟。雙陸とも

一香爐を　○かうろん

一青磁の物を　○せんじ

一珊瑚珠を　○さんごじ

一膠皮を　○みかは

一松脂を　○まつやね

一砥を　○とう

一温石を　○をうじやく　○をじやく
一象牙を　○ざうぎ
一耒　○まんぐわん農具の事也馬杙とも書侍るよし
一釿を　○ちよんの、○手斧共書
一剃刀を　○かみすり
一ちいさ刀を　○ちしやがたな
一手裏劔を　○しりけん
一羽子板を　○こぎたは如何○はごいたはよし
一馬具の當胸を　○むながいはいかゞ○但鞦などゝもいへば○むながいも苦しからぬ歟
一手綱を　○たん
一衣桁を　いと
一倚子を　○ゆす○但いしとはいふ
一反古を　○ほんぐはいかゞ○ほことはいふ
一八卦を　○はつけい
一暦を　○こゆみ

一奉加帳を　○ほんぐはんちやう
一百人一首を　○ひやくにし
一玉篇を　○ぎよくへんはいかゞ
一節用集を　○せつちやうし
一太平記を　○たいひいき
一大部の書籍を　○だいぶんの物
一千駄櫃を　○せんだんびつ○又馬の荷一駄二駄を○一だん○二だんはわろし
一弓うつぼを　○おつぼ
一枴を　○おこ
一飛礫を　○つぶせ
一ほうろくを　○ほうらく
一助老を　○ぢよろ
一斗皃を　○けいびき
一續飯を　○そつくひはわろしそくひとはいふへし
一漿粉を　○しやうふ但是は苦しかるまじきか。一溫飩をうどんと云がよしといへり。いや只ふんとはねて然る

一胡粉を　○ごふ

一笄刺は小刀也是をはんさしは如何

一沃懸地を　○いつかけ地は如何不苦歟

一臥籠を　○ふせがうは悪シ富士篭とは云

## 支躰部

一項を　○うなじといふくるしからず

一咽を　○のどゝいへども。腮を○あげなどゝいふはあしかるべしと云り

一喉の吭を　○のどびえといふは如何

一肱といひてもきこえ侍るべき時に肱尻といふこと葉誤にはあらねども。女房少人のこと葉には似合ず

一腕香を　○うでご

一指を　○いび

一腓を　○こむら

一踵を　○きびす

一三里の灸穴を　○さんじ
一媚のよきといふを　○うめよし
一御ぐしを　○おごし
一そがうびたいといふとは。十河どのといふ武家の人の。かしらつきより云出たることぞ。無下に近き代のことなり
一手穴とは　○甲などにいふ言葉なり。それを人のつぶり。天窓などの時にてつべいといふは如何。又まつかうは正面と書也。又眞甲とも書べき歟然るをめつちやうとはいかゞ
一唇を　くちびろ
一かうづかを　○こづか
一胞衣を　○ゆな
一後つきを　○おしろつき
一拳を　○こぼし
一胸中を　きうちう

## 病名部

一日腫を　○につしやうの物。につしよ
一風毒腫を　○ほうどくしゆ
一霍乱を　○はくらん
一腫物を　○しんもつ
一疱瘡を　○はうそ
一黄疸を　○きわうだん
一瘰瘡を　○かつちやい。かたいとは云べし。乞兒と云歟
一瘻　を　○かいがり
一淋病を　○せうかちとはいかゞ。消渇といふは。別の病の名也とぞ
一積聚を　○しやくじ。此積聚も病ふたつの名とぞ
一癆瘵といふは　○癆と瘵と二病の名なり。こうじて傳尸病といふとぞ。常には癆氣なるものを　○らうさいやみといふ。わろしとぞ
一痃癖を　○けんびきはわろし。扨よのつね肩のいたきを痃癖といふは如何とぞ肩のいたむは肩痛といふ物なりとぞ
一灸を　○やいとも　○やいとうともいへど。やいひとはわろしと云り

一脉の數うつを　○どしといふは誤也度數といふべき也

一ある病人にむかつて扨も〳〵そこの御腫物久しうなやみたまふ痛はしさ笑止さよなどいひける返答に。されば其の御事。なをるかとおもへば平愈し。なをるかとおもへば平愈して。はてもやらで氣の毒にて侍ると云れしとかや

一瘂を　○をしごろ

一淸盲を　○あきじり

## 木部

一栴檀を　○せんだ

一菩提樹を　○ぼだいじ

一樒を　○しきび

一柘榴を　○ざくろ

一赤楠花を　○しやくなぎ

一沈丁花を　○りんちやうき

一樟を　○くのぎ

一馬醉木を　○あせぼも苦しからぬ歟
一樓櫚を　○しよろ　○すろとは哥にもよめり
一碧桃緋桃を　○しろもゝ　○あかもゝ　○あかもゝとは云べからず　○ひたう　○へきたうなどのこと葉は○兒若衆女房などのいひても冷じからず。しろもゝ　○あかもゝといはゞさもしからん　○白きを白桃と云はわろしとぞ
一柞を　○はうそといふはいかゝ○但又別の木歟。又箒をはうきともいへば○はゝそを○はうそも苦しからぬ歟
一柚柑を　○ゆつかうはわろし○ある人○柑類といふは一切のくだ物のことぞと心得て。栗をも柿をもかうるひと云り○垂仁天皇の御宇に。筑紫の毛理といひしものが。とこよの國より九種の柑類をとりて來りしとかや。いでその九種はしらねども　○橘　○柑子　○蜜柑　○橘柑　○柚　○柚柑　○橙　○枳殻溫州橘などにや。是等を柑類と申べき歟可尋又海草といふを○鮑　榮螺の貝の類と心得侍る人あり。海草は○海松　○水雲　○昆布　○青海苔。甘苔　○海羅　○和布　○若　○和布〔○若和布と續くべきを誤りしか〕○荒和布　○搗和布　○雞冠苔　○於期苔　○堅海苔　○海鹿　○神　馬藻　○穗俵同上ニ　○十六嶋雲州ノ嶋ノ名　○白藻　○強藻　○松苔　○櫻苔　○經　紐　○かゝる類を海草といふ。今めかしけれど愚子か爲に書つく

## 草部

一雞頭花を　○けとぎ○けいとぎ

一葎を　○もぐら
一蓬を　○ゑもぎ
一萠黄を　○もえぎ
此二つかんなにはゑもぎもえぎと書て。口に唱ふる時は。よもぎもよぎと云べしとかや
一茎立を　○くきたちはわろし　莖とも書歟
一紫蘇を　○しそう但し紫草とは別草也
一芋を　○からむし。但不苦とも
一水瓜を　○ぼうぶら
一零餘子を　○むかご
一磐梨を　○いばなし
一牛房　○ごんぼ　○ごんぼう
一大根を　○だいこ。又蘿蔔とも書り。ほそくきざみてうじたるを繊蘿蔔と申すを。せろつぽんと云はいかゝ
一天蓼を　○わたゝびといふ点ありとも。またゝびとよむべしとかや。蒟醬とも書り
一萲薫を　○をうもと。老母草とも書歟
一早稲晩稲を　○わさ　○おくてはくるしからず

一茨薔薇を　○いばらしやうべん
一莧を　○ひやう
一射干を　○からすをぎ
一山女を　○わけび
一烏芋を　○くはへ
一車前草を　○をばこ
一紫陽草を　○あんさい　○あんじさい
一藕を　○はすのはへ

## 虫部

一蜥を　○やもりといふは如何或説に○家にあるを。やもりと云○井にあるを。いもりといふといふは誤なり。
いづくにすむもいもりといふがよしとぞ守宮と書也
一蜓を　○とんぼ
一蠶を　○かいこう
一蝱を　○はり

一龍子を　○とかき
一蚯蚓を　○めゝず
一田螺を　○たのし
一蝦を　○かいる　○がへる
一蟬を　○せび
一蛇の蛻を　○まぶし
一毒はみ　○どくはめ
一なむさうとは蛇の一名とかや。それを。おなむそ。といふはいかゞ

## 魚部

一魚　假名にうをと書ていをとよむべし
一鰧を　○おこぜ
一鮭を　○しやけといふはわろし。此魚子を生んとては。腹のさけ侍ると哉らん云り。さるによてさけと云歟
一鰻を　○おなぎ
一土鰌を　○どんぢやう　○どんぢよ

一河豚を　○ふぐ

一江豚を　○ゆるか

一名吉を　○みやうげち。名よしといふ魚也

一鮎を　あゆ

金葉集には○何にあゆるをあゆといふらんとよみたれど。たゞとにいふ時は。あいと唱ふべしとぞ

一泥龜を　○すつぽん○すぼんなど〻いふは如何。此龜のなくこゑの。すぼんといふによて○頓て名になれるかといふ人も侍り。されどもかれがなく聲いまだ聞侍らずさもや有つらん。郭公雁なども。なき侍る聲の即名に成たるとかや。さるによて此二鳥の啼をは。名のると哥にもよめり。又かり金とは。雁が音といふ心とぞ。然れども。人すい龜をすつぽんといふは。きゝあしくや侍らん。又水鷄の啼をたゝくといふは。かれがなく聲の。戸などをたゝくに似たるゆへとぞ。皆爰にはいらぬ事なれど愚子が爲に書つく

一鮟鱇を　○あんご

## 鳥部

一鵯を　○ひよとりもよしと云り

一鶺鴒を　○せきれんはわろし

一鶚を　みしやごの鵰鷚とも書歟

一鳶を　○とんび

一鶫を　○つむぎ

一鷦鷯を　○みそさゞい。此鳥棲レ溝三歳。故云レ尓とかや。○かやぐきといふも。○此鳥の一名

一啄木鳥を　○けらつゝき。但又鴷とも書歟。けらつゝき。てらつゝきは又別鳥か可レ尋

一梟を　○ふくろ

## 獣部

一狐を　○けつねはわろし　○くつね　○くつに　○きつ　○きつに　○野犴などはよし

一狸を　○たのき

一狼を　○おほかめ

一菟を　○おさぎ

一蝙蝠を　○かうむり　○かうもりといふやうによむべし

一土龍を　○うごろもち。但是は不苦歟　○蚡と書り

一河童を　○がう太郎

一獺を　○かはうそといふは苦しかるまじき歟。をそのたはれ尾とよめり　○此けた物　○尾をふりて人をばかすと云り。世俗に獺をうそといふこと葉も。是よりおこれりと云り

一畜生といふべきを　○ちくしやう

一特牛といふを　○こつていうじは如何。こつといとはいふ歟。但平家物語に。木曾義仲のこと葉にうしこてい云りしは別のこと歟。又こと。てとは五音通し侍れば苦しからぬ歟

一水牛を　○すいぎやう

## 飲食部

一酒を　○九献といふは。をんなこと葉のみにもあらず。おのこもいふべし。三々九献といふの上略の詞なりとぞさゝといふも男女に通ずる詞と。仕付かたの書にみゆ。又三寸の酒といふ詞はいらぬ重言歟

一新酒を　しんしゆとすむをわろしと云り。濁ていふべしとかや

一味淋酎を　○みりんしゆといふはわろし

一温飩を　○うんとんどいふもゆき過てわろしとかや

一煎餅を　○せんべ

一粽を　○つまき

一菓子を　○くはしん

一筍羹を　○しゆんか

一田樂豆腐　○れんがくどうふう

一潮羹を　○をしほに

一强飯を　○こはひ赤きをばせきはんといふ歟

一香物を　○この物

一繊蘿蔔を　○せろつぽん

一和物を　あいもの

一饅韲を　○のたあへ

一蒲鉾を　○かまぷく

一山椒を　○さんしよ

一陳皮を　○ちんぴん同ちんぴのかは

一串鮑　○くしおび

一粥を　○かいといふもよしと云り

一御湯を　○かい

一梅干を　○うめぼうしとはいふまじきことなれど是等はくるしかるまじくや

一女のこと葉に麩焼を朝がほといへるは火にてあぶり侍れば。しぼむによりて○蕣の華の○日にしぼるゝゆへに。名付。初しといふ説は如何。花車なるやうにて。さもしき注成べし。只。人のつくろはぬ朝の貌のやうなるといふ心なるべし。又南良には○瓜や糟のおほきゆへに。かしこにて漬初たる香物の風味のよきをほめて。ならづけと云ならはしたるを。あるこざかしき人の説には。かす香のするといふ事と云り。春日を糟香といふこと。いとむつかしき説也。正義にあるべからず。惣而かやうの謬説は。打きくに。耳おどろきて。おかしき物なれど。よく心得ればことさめ侍る物なり。又味噌のからなを東坡と付たるやうのことは。やさしく侍る。かやうのさかひよく心得べしと云り

## 國名所并寺號部

一美作國を　○いまさかはわろし

一攝津國を　○せつのくに

一紀伊國を　○きいのくになどゝよまず

一讃岐を　○さのきは惡けれど壹岐をは。ゆきとは哥にもよめり

一富小路を　○とびのこうじはくるしかるまじけれど。押小路をうしこうじはわろし

一冷泉を　○れいぜんとはとなへず。文字にそむきて。れんぜいといふがよしと。王代のよみがたに侍り

一櫻馬場を　○さくらのばんば

一東洞院西洞院を　○ひがしのとい　○にしのといなどは如何

一壬生は　○にぶとも　○にぶともよむ。くるしからず

一室町は　むろまちも　○もろまちもよしと云り

一三條を　○さんでよ

一聚樂を　○しうらく

一嵯峨の釋迦堂を　○しやかんだう

一觀音堂毗沙門堂などを　○くはんのど　○びしやもんど

一清水の奥の千手を　○おくのせんじ又瀧水を　○たけのみづ

一施藥院を　○せやくゐん

一曇花院を　○どうけゐん

一青蓮院を　○しやうれんじ

一神泉苑を　○しんでんでん

一頂妙寺を　○ちやうめんじ

一本能寺を　○ほんのじ

一誓願寺を　○せんぐはんし

一妙心寺を　○みやうせんじ

一建仁寺を　○けんねんじ

一南禪寺を　○ないぜんじ

一那蘭陀寺を　○ならんだし　天竺の五山の內也

一當麻をは　○たいまといふ点もあり但たうまとはいへどたいまは如何

一御廟の橋を　○むみやうのはしはわろし又ごひやうのはしもわろし

一泉涌寺を　○せんにようじ

一法隆寺を　○ほうりやうじ

一御影堂を　○みゑんだう

居所部

一石墻を　○いしかけはわろし

一棧敷を　○さじきと云も不レ苦とかや

一圍爐裏を　○ゆるりはわろし。又いるりとはいふべし。假名遣ひの書にいるりとあり

一釘貫を　○くぎのき

一關貫を　○くはんのき。但關の木といふと歟

一蔀を　○しとめ

一格子を　○こし

一屋根のかうばへを　○こうばいといふは如何。但しらぬとなれば人に可レ尋ために書つく。又人留をしとゝめ如何

一厨子といふべきを　○ずすは如何但不苦歟

一旦過といふは。往來の沙門などの一宿の爲にたて置たる所と云り。それを。たんぐはんやといふは誤成べし

一馬ふせぎを　○馬びせき

一墓所をしなべて卵塔とはいはず。いしをとりの卵のなりに切たるをのみいふとかや。つねの廟所を皆々

らんたうとは云まじきとこそ

一北にあるを　○雪隠又雪陣と云歟それをせんちとはあしかるべし。東にあるを東司といひ。西にあるを西淨又西城といひ。南にあるを後架厠などいふと云り。又かうやとは。かはやといふことなるを。紀伊國の高野山のことにいふ一說侍る金剛峯寺。高野山。緣ニ地形悉表ニ曼陀羅義ニ不レ令三人ノ々留ニ不潔於此山一。故糞屋必架ニ河上ニ而。流ニ不淨ニ也由レ是高野ノ一山呼ニ東司ニ曰ニ河屋ニと云り。又こざかしき人の云えは。かの山にのぼりて發心する人の。髮をおとし侍るによて。不淨の所にて紙を落すになぞらへて。かうやといふと云りとかや。是はゆき過たる說なり。かやうのことたび／＼あるもの也必すもちゆべからず。只かうやは。かはやといふこと斗なり。河内を。かうちとよむがごとし揔而謬說は正義よりうちきゝのおもしろき物なるゆへに人のまよふことなりとかや

一懸魚を　○げんぎやう

一木舞を　○こまへ

雜詞部

一とらゆるといふべきを　○つかまゆるとはいへども。とらまゆるといふはかたことなりとかや。乍去まの字は付字にて苦しかるまじきかとおぼゆ。縱へば。人を睨むを。にらまゆるといひ。崇むるを。あがまゆるな

どゝいふヿ葉おほし。其類ひなれば。とらまゆゑも苦しからじ。ろ。ら。ま。すは昔の付字也
一物の隅に隠れかゞむといふべきを　。しやがむといふヿは如何。但しやがむは。しや。かゞむといふヿを。ヿ葉をつゞけて云たるヿ成べけれども。耳にたちてさもしう聞ゆ。いはぬにはしかじ
一其様なヿ　。此やうなヿ　。どのやうなこと。たゞどいふべきを。そんなヿ。こんなヿ。どんにやヿ。そがいなヿ。こがいなヿ。そんにやこつちや。こんなこつちやなどいふヿ葉を。よく〳〵つゝしみ嗜みていふべからず。と云り。京の者の口になれて。むまれ付たるヿ葉のやうにて。たをりがたし。とりわきみづからなどはえなをし侍らず。田舎人のわらひ侍る京こと葉は是等第一なりとかや
一人をしかり罵る時に。をのが腹のたつ儘に。息まき赤面して。せめてちくしやうともいはで。いきづくしやうめ。しにづくしやうめ。いきだかけ。しにだかけ。がつきめ。おほうめ。ふんちうめなど。いとさもしく冷じういふヿなかれとぞ。すべて。生死めの三字を付て。人をのゝしり侍るヿ。浅ましうすごう侍る物なり。奴婢雑人も。左様に浅ましうしかられては。いたう口おしかるべし。されば結句その主人にしたがはずしてさかひ侍るヿも有べし。又はみじかき心もたるものは。いかなる恨をもむすび侍るヿのあるらん。心すべきヿなりかし此ヿは前にも書て侍哉らんなれど。又〳〵書つく
一それ〳〵を　。そりや〳〵とはいかゞ但それよく〳〵。それや〳〵と云畧言歟
一どれ〳〵を　。どりや〳〵

一ねむたきを　○ねぶたひ

一まじろくを　○ましくしや

一まだ〻き目ぐはせなどいふべきヿを　○めはじきといふはさもしくや侍らん

一物ごとのきはまりを知侍るヿをば。底を盡して知といふはよろしう侍るを。かたつ田舎人は。根をして
など云り。などやらん聞あしう侍るは。僻心得ならんか。そ〻けたる。ほ〻けたるぞなどいふをさへ

一次第に自由になるといふやうのヿを。手がいればあしもいるといふヿ葉のおこりも。何と設らんおかしき
かた侍るは。例の僻心得にや

一ゆがみたるといふヿを　○いがみたるといふは如何。中風なやめる人の。口のゆがみ侍るやうのヿを。いごう
といへるは。兎口の字にや。いがみたるはよろしからぬ歟

一ぬれたる物をのごふを　○ぬぐふとは如何。五音は通じても聞あしき歟

一ひよんなヿ〻いふを　○ひよがいなヿ。ひようげたヿなどいふは如何と云り。是はひよんといふ木の實の。
えもしれぬ物なるよりいへるヿ葉歟。又瓢のなりのおかしう侍るより。しれぬヿの上になぞらへて。ひよ
うげたヿ〻云初たるか。又は。へんなヿ〻云ヿ歟。へんなは。偏屈なるヿ成べし。いかさましらぬヿなれば。
物に書付て置てこそ。人にもたづね侍るべけれ

一物をたくはへ置侍るやうなるヿを。たばふといふを。かたゐなかの人は。かこうと云り。如何。若是は唐

一人口成べき歟。日本より。もろこしに渡りぬる舟の。かしこにて年ををくり侍るをば。かこふといへるより出たること葉歟。但かるたといふ物より出たること歟。又前栽をかこふぞ。とまやかた。かこふぞ。茶湯所をかこふぞなどいふより出たること葉歟。物をたくはふることにいふは。心得がたし可ㇾ尋

一足にてまたがるといふことを　○はたかるといふは如何。またぐるはよき歟。又海のはたなとを。へたとも云べし

一ぬまめくといふべき處を　○ぬんまり。ぬまりなどゝいふこと如何。沼は泥にて。踏にあしをためえぬゆへに。ぬまりは。沼にて。りは付字歟

一道をありくといふべきを。あるくといふは五音通してもよろしからぬ歟

一虫の子をうみ付侍るを　○子をへるといふは如何。ひるといふべき歟。ひるとは。子をうむ時に鳴侍る音にや。又隣のかたに鼻もひぬかなとよめるも。鳴音歟

一物のつゞまやかなることを。つんまりとは如何。つましきとは。つゞましきと云中略のこと葉成べし

一ちいさき物を　○ちんまり。ちよつぼり。ちつぼり。ちよぼ〳〵。ちよつこり。ちぼ〳〵などいふこと葉。よしあし知侍らず。中にても。ちんまり。ちんぼり。ちよぼ〳〵。ちぼ〳〵などはやさしう聞え侍る歟。又人の小足に歩み侍ることを。ちよこ〳〵といふも。ありき侍るかたち。にや。しほらしきこと葉成べし

一物をきり侍るを　○ちよんときり　○すかときる　○つんときる　○すんときる　○すつかりときるなどいふは。い

つれまされるにや。すかときるは。すか〱ときるといふこゝろにや。すか〱速の文字歟。はやくきる心成べし。それを濁りて。ずか〱。ずか。ずつかなどゝいふは如何侍らん。茶具に。つんぎりといふは。頭切の文字也。棗のかしらをきりたるやうのかたちなれ。ば。頭切と書歟

一ふつといふべきを　ふつつとつめていふは。時によりて苦しからぬヿ歟又ずんぶ　。ずぶとなどいふは。あづまヿ葉にや。ふつと。ふつつとなどいふは。緒や紲などのきれ侍る音を。やがて言葉に用ひそめたるヿ歟

一其儘そこにあれと云べきを。やつばり。やはり。やつばしなどいふは如何。此うちにもやはりといふヿ葉は若矢强の字歟弓に矢を引くはへて。むかふ敵を射すまさんと心にくす見て待まふけたるやうのヿ歟

一さつぱとしたるといふべきヿを　。ざつぱ　。しやつぱなどいふは如何

一しやつばりといふべきを　。じつぱり。しいわりなどいふは如何。但木の枝などのたはむ音をしつぱりと云。とき洗ひぎぬや。板張のきぬなどのさは〱となるやうなるを。しやつばりといふにや

一木の枝のたはみ侍るやうのヿを　。しはむ。しはるといふも音をヿ葉に用ひたるものにや

一ひら〱　。びら〱　。ひらり〱　。べら〱　。へら〱　。めら〱などいふヿ葉は何たる事にや。　ひら〱とは縦へばうすき物のちりて光るかたちにや。ぴら〱とは是も薄などのちれるさまにや。ひらり〱といふもおなじかるべし。べら〱　。へら〱　。めら〱は皆等しかるべし。火などの付て焼侍る音なるべし。安倍のむらじがかくや姫にをくりし火鼠のかはの。めら〱と焼たるといふヿを。竹取の物語に書

り。あへなしといふヿ葉も。此安倍氏のヿよりおこれりと書り

一たゞれたるといふべきを。たゝくれたるといふは如何

一塗物のはけそんじたるといふべきヿを。はげごうちやくしたるといふヿ葉は如何。たづぬべし

一しく／＼と泣といふを　。しくほく

一しやべるといふべきを　。さべる

一つめたきといふべきを　。つべたい。つんめたいなどいふはよろしからぬにや。つめたきとは。爪いたきと云中畧のヿ葉成べし。冷侍る時は手あしの爪のいたきものなり

一みたむなひ　。したむなひ。居たむなひ。いきたむなひ。ねたむなひ　などゝいふべきを。見とむなひぞ。しとむたひぞ。居とむなひぞ。ねとむなひぞなどは如何と云り

一人の名の彌兵衛ぞ作兵衛ぞなどいふべき畧に　。彌へい。さくべいなどゝいふは如何。彌兵ぞ。作兵ぞ。などはいふべき歟。又權六。善六などは。ぜんのく。ごんのくといふがよし連聲なればなり。太夫をたよふといふはわろし

一あたゝかなるヿを　。ぬくきといふはよろしと云り。ぬくときもよしと云り。ぬくともるなどはいやしき歟

一なゐのゆるといふべきを　。なへのいるといふは如何。地震のゆるとは有べし。ゆくといふはいかゞ。但ゆりもてゆく物なれば。ゆくとも云べし

一ふかしひとはあらじと云る詞は。いぶかしきとはあらじといへる畧語にや。又ふかひとはあらじといふべきを。しもじをやすめに入たるにや。但不可思儀といふ詞にもかよふべきかといふ人も侍り如何

一けふさへ。あすさへ。それさへ是さへなどいふさへは。副の字成べし。然るを。さいといふ詞あしかるべきかと云り

一滑かなるを。ぬめるぞすべるぞとは苦しからぬ歟。ぬんめりは如何

一物のはじめといふを。しよつきりといふは何たる詞にや。何さまよろしうは聞えぬ詞歟

一ひようにあはぬといふ詞はいかなるとぞ。評の字歟評判に及ばぬといふこゝろ歟

一まうに違ふといふは何とにや猛の字歟。蒙の字歟。間歟。又舞歟。立舞に。拍子のたがふ詞歟たづね侍るべし

一ほうどなどいふ詞。物の砕けつ。おれつなどする時にのみいふべきにや。掊と書てほうどくだくるとよむとかや

一ひつたりといふは。うすくひらき物の。水などにひたりて。物につきたるをいふにや

一びつたりは　ぬれたるかた歟強うぬれたるやうのかたち成べし

一しとゝにぬるゝとは。帷などの身につく程ぬるゝをいふべきかと一條禪閤の宣り

一しと／＼とは。春雨などのしづかなる音歟。それをじと／＼といふは如何。じと／＼とは薫物に蜜やあまづらなとの過たるをいふか。又しく／＼とは聲をたてずして泣と歟それをしくほくとはいかゝ

一へつたりは　○ひら〳〵座する貌何にてもひらめなる物をすへたるをいふ歟

一べつたりは　○前に同じ心にて　○少もたれたる心にいふにや

一ぼつたりは　○おもくやはらかなる物の落たる音歟

一ほつたりは　○さのみおもからぬ物の落たるかたにや

一ほた〳〵は　○大なる花のりんなどの落たる貌歟

一こつとりは　○かたき物の少なる音歟

一ごつとりは　右に同じ樞などのおるゝ音歟。むかし狂哥の探題をとりて寄樞戀といふことを當座に老師のよめる

きぬ〳〵の別れよりうしよせじとておろすくるゝのごつとりの聲

一がつたりは　○もろくたふれたる貌歟。又物にあたりてかたきをと歟

一がた〳〵は　○齒などのあはずしてふるう音歟。藥など細末してふるう音歟

一かた〳〵は　○かたき物の屡なる音歟

一しつこりは　○かたくおもきかた歟

一につこりは　○笑ふ貌歟

一わんごりも　○右に同じくゑむ貌歟

一くつさりは　○少かたき物をつく音歟
一ぐつさりは　○和らかなる物を突音歟
一つべかし　○つべ／＼　○つべかはゝ　○よく物いふことに云ならはせり
一ぞんべり　ぞべ／＼は　○物のつやゝかなるこゝろ歟
一もゝ／＼は　○こまやかにうつくしき心歟
一ぐつちやりは　○いやしき詞にや。しどけなきかたにいふ
一しつかりは　○毒虫などにさゝれていたむかた歟。又湯などのあつきことに云
一しか／＼は　○同しく虫のさしていたむ心歟。又熱湯にてかゆがりをたづるやうのこと歟
一しかほかは　○同じく毒虫などのさして跡のほとほる心歟。ほとほるのほは。火也
一ほつこりは　○あたゝまるかた歟是もほは火成べし
一ぼつこりは　○やはらかなる皃歟
一ほや／＼は　○いかにもやは／＼の心歟
一ほつとは　○息吹皃歟　燈けつさま歟
一ほつちり　○ほつちは○寝入たる目を覚して開く皃歟
一ほつしりは　○的などに矢の當りたる音歟

一ほし／＼は　○夜をいねずしてさびしう明したる心歟

一つく／＼は　○物あんじながめたる皃歟

一つゝくり　○さびしう獨立たるさま歟

一ぽつとり　○やはらかにいとおしきかたち歟

一ぽじや／＼も。なよ／＼も右に同じ心歟

一くつと入るといふはあしき言葉歟。ごつと入るといふとぞ。軏の字成べし

一こと／＼は　○戸などの鳴音歟

一ごと／＼は　○箱などの中のくつろぎて入たる物のなる音歟

一くはつたりは　○重き物の落る音歟

一ぐはつたりは　○ひびきて落る音歟

一じや／＼　○痰などの咽につまりたる音歟

一どや／＼は　○人こぞりてうごく皃歟

一どしやくしや　○とやくやも○さはがしきかた歟。いやしきこと葉にや

一ずつしりは　○いかにもおもき物の落る音歟

一でつくり　○どつしりなども重きかた歟

一ひつしやりは　○神鳴なとの落たるやうの音をいふ歟
一びつしやりは　○物のつぶれたるかた歟
一がんじりは　○かたき物嚙あてたる音歟。馬のくつはをかむ音歟
一かつしりは　○かたき音歟。又岩の上を駒のゆく足音歟
一かつさりは　○爪にて物をかくをと歟
一がつさりは　○障子など窓にあらくあくる音歟
一くんじりは　○くじけたる音歟
一びちよくは　○小水に魚などの動く音をいふ也
一ひちよくは　○小鳥の飛啼の聲歟
一かんごりは　○かごやかにおくまりたるかた歟
右五六十のこと葉は大かた音響をもて願而唱ふる歟。皆をしはかりの注なれば誤のみ成べし。よく心得ていふべき歟。此等の内こゝに漏れたること葉はいやしう聞え。すめるはやさしうおぼえ侍るなり。但すめるゝとによりて侍るべし。かやうのこと葉是に限るにはあらず。大概斗なり。餘はなぞらへはかりしるべし
一必ずさうあるもりよたなどゝいふやうの時。えてさうあるぞ。又えてのとぞなどゝいふは如何。得手と書侍るべき歟。但いはずとものこと葉歟

一文字の篇に。小ざと大ざとなど云べきを。小猿篇ぞ。大ざる篇ぞなどいふは誤なりとかや。小ざとは阜の字の畧。大ざとは邑の字なりと云り。都のつくりなどを云りとぞ

一ぶらりといふヿ葉は。高き所より落もはてずして。半にあるやうの貞歟。不落離と書よし云り

一そなたこなたの詞の事。をのれがヿをさしてこなたといひ。あい手の上をいふ時は。そなたといふべきを頃の人は相手の上をこなたといふ。是等誤成べけれど。人毎に云なれ来りたれば。今更改むべきやうなしと云り。乍去。をのぞ。をのれぞ。人ぞ。我ぞなどいふも。むかふ人にも。みづからの上にも。かよひていふヿも侍れば。そなたこなたもくるしかるまじき歟。それさま。そのほうさま。そなたさま。又みづからを。こなた。わたくし。身ども。それかし。我等。やつかれ。拙者などはいふべし御前といふは。貴人ならずはいふべからさる歟。貴所とは。同輩の中をいふべきヿ葉歟

## 湯桶言葉

一夜咄はわろし　。夜は聲にて。咄をよみにいふによてなり。よばなしはよし。萬是に准へて知べし。夜話といふはよきヿ葉也とぞ。但又湯桶ヿ葉にて。結句よきが侍るものなり。詩ふべからず

一夜盗　。是はやたうといふべきとなれども。やたうはわろしと云り

一手者　。手便　手燭などもよし

一樂痳　○是はあしかるべし
一ふるき都とはいふべし。古京とはあしゝと云り
一前月といふべきを○さきげつとはわろし。さきのつきとはいふべし
一生靈　○金具　○落書など〻云は湯桶こと葉にてもよしと云り。此うち生靈は。生死といふ詞に靈の字をとりそへて生靈ぞ死靈ぞとつゞきたればよしとかや
一關所は　○せきどころと云がよしとかや
一滿足といふこと葉も湯桶成べしあしかるべき歟
一丸盆といふはあしきこと葉とぞ盆といふは圓きこと也。いらぬ重言こと葉成べし

いはずしてもとかき侍るまじきこと葉

一雁は八百矢は三文　○せめて矢一筋となりともいへかし。三文といふとこそうたてけれと云り
一蔥八百といふこと葉　○由緒こそ侍るらめと。よき人のいふこと葉にては有べからず
一さはり三百
一小豆俵てあかめつる
一糊するあま

一犬の蚤で嚙あてた
一雀は百になれど踊わすれぬ
一七里けんばい
一こぼれ幸ひ
一くさりても鯛
一賣と葉に買とば
一法論みそ賣の夕立
一三寸の見直し
一鱓も一期蝦も一期
一人間は身がいればあふのく。ぼさつは身がいればうつぶく
一むかしの因果は皿のはたまはる今の因果は針のさきをめぐる
一廿五の菩薩もそれ〳〵の役〳〵
一にんにくむきたるがごとし
一こまたとられてもかつがはん
一ひろき家はさやなり

一穂をひろふてめうにまいらする

一世間は張物

一思案のふんの字が百貫する

一さらに桃をもる

一百日に百ばいはもれど一日にはもられず

一茶碗をたげば綿にてからとよ

一やすき物は銭うしなひ

一ある袖はふれどもなひ袖はふられぬと云を

一山もゝのえりぐひ

一禅僧の索麪をくふやうな

一佛のまねはすれど長者のまねはならぬ

一部屋住三年山ぶしの嶺入

一姑の場ふさがり

一年寄親と持佛堂は置所なし

一隙とも談合

右三十ヶ條余のこと葉を假にもいふことなかれ。是等のこと葉をこのむ人は。胸をたゝきて饑ふものゝ。なりのぼりて人にまじはりたるやうにおぼえ侍ると云り。かやうのいやしきこと葉は。世話にも五六十に過べからず。それをたしなみていふまじきは。いとやすきこと成べし。一言の上にて人に見落さるゝことぞかし。かゝるつたなきことを爰にしるし侍るも口おしけれど。愚子にしらせんとの心のやみぞかし。あいかまへて〳〵つゝしみていふことなかれ。これをわきまふまじきは歎かしきこと

一蚤の息さへ天にあがるといふこと葉。ある人の云るは。農民の息さへといふことゝぞ。かやうのこと葉もいはずして有べし

一むかしの劔に今の薙刀。是をある人の云へるは。むかしの劔は今とても劔なるべし薙刀にへりくたると有べからず。是は菜刀といふことには有べからず。名刀といふことなりとぞ。此說もさも有べけれど。いとしも信じがたし。名ある刀を。名刀といふこと葉もなし。とにかくに。かゝる俗語は。うち〳〵にても云べからずと云り

一寵愛こうじて尼になすと云べきことを。てうらいこうじて尼になすといふは誤かといふ人侍り。縦へば人の娘などを。いとおしみの餘りに。親の手を放ちて。余所の家に嫁せしめんことをくるしがりて。年闌侍るまで獨住にて侍るが。あらぬことなど出來て後。尼になせるやうのことゝ云り。さもや有べけれど。いはでもとかくまじきこと葉成べし

一やせぼうしのすごのみといふこと葉は。酢好みには非ずすごの目といふことゝ云り。痩たるものは。まかぶら落入て目のすごくみゆるといふことなりとかや。さも有べけれど。いはでもとかくまじきこと葉にや

一人ごといはゞめしろをけといふべきを。迸しけといふは如何と云り。是等のこと葉もさもや有べからんなれど。いはでもとかくまじきこと葉にや。又日代を付置て。人ごと云んも無下のことなり。さりとて又いはで叶はぬことも侍るべし。さある時はいかゞせん。又そのいはれ侍る人。もれきゝて。わが記分を改め侍るやうのことならば。いひても。なしかはくるしかるべき。されども。人ごとは口くせになる物とぞ。いはぬにはしかじ。つゝしむべし／＼

一欲垢煩惱といふことは。よく人の云つゞくること葉なり。かくつらなりたること葉。もし經などに侍るやらん。出所しらまほしくて書付侍る。煩惱といふこと葉は。あながちに婬事のみにあらずかし。わづらひなやむこと謂れば也。是等のこと葉もいはでとかくまじき歟

一順のこぶしにもはづれぬがよひといふこと葉を。ある人不審していへるは。いかに順のこぶしにても。はづれずして。たゝかれてはよかるべきいはれなし。これは巡のごぶしにもはづるゝがよしといふこと成べしと云り。とかく是等のこと葉も。いはでことかくまじくはいはざらんにはしかじ

一すつべの皮といふ皮は。いか様なる物にや。しらまほし。又いはでもとかくまじきこと葉成べし。しらぬがまさり侍らんか

一湯を飲ふ水をのまふ。何をくはふぞ。かをかまふぞなどいふべきを。湯のも。水のも。何くを。かくをなどと云るヿ葉。畧なれば耳にもさのみたち侍らねども。このましからずや。心すべきヿなるべし。又。爰へゆかう。かしこへいかう。又もはや參らう。もはやいなふ。もどらふなどいふべきを。爰へゆこ。かしこへいこ。まいろ。もどろなどやうにいふも然るべからざる歟。但。候といふヿを。そろといふやうの類ひなるべければくるしからさるべしといふ人も侍れど。いかにぞや聞にくき歟

一ヿふりたる物語なれど。むかし〳〵有所に。八景をゑかきし屛風のありしを。人〳〵見て襃侍ける中に。ある人。遠寺の晩鐘といふべきを。げんじのばんしやうといはれければ。そばより又こざかしき人のさし出て。こなたに侍るは平家の落雁なりと。口とく對句にかたどしければ人〳〵。興じけりといふ物語を。又ぎきに聞て。評判しけるは。かのこざかしかりし人の。後に云るは。平砂の落雁にてこそ有べけれ。平家のといへるこそ猶かたヿにて侍れ。いかでこざかしき人とはいふべきぞといへりしこそ。笑止におかしかりけれ。又むかし〳〵東山の花見に。細河幽齋法印御あるじがたにて。いみじうとりまかなひ。茶などたてたまひて後。酒宴になり侍りしに。幽齋。香爐とり出。えならぬ香をつぎつゝ。座上におはせし南禪寺の。何和尚とかやの前にもて出給ひて。御腰にありし。帛物をしきて。その上に。香爐をすへて。立のき給ひさまに。茶具をのべ香をたきといふ一ふしを。しなよく謠ひ給ひしかば。滿座興に入たりしを。かの和尚の宣へるやうは。いかに幽法。そのほうは物の名人なり。ヿさら太鼓などまで上手のよしうけたまはれりしに。ふしぎなる儀

言をうたひたまふものかな。今のうたひは。さだめて坐具をのべ香を焼にて侍るべし。茶具をのべとはうたひ申ましき。坐具がしかるべしといはれしこそ。さだめて侍れ。そこにて幽斎の御返答ありしは。利休のおほせもつともにて御座さふらふ。坐具とうたふべかりしものを誤りて茶具と申せしと宣ひければ。幽斎の名人。物なれの應答を人々かんじて涙をながし侍りけりとぞうけたまはれる。然れば秀句などにも。昔はたとに作りていへるは興ある物にて侍るなり。然れども此頃。こゝら人の宣ふ秀句をきゝ侍れば。譬へば。當流をみては。當代のはやり物ぞといひ。豆腐を出せば當風のはやり物ぞなどゝいひて皆かんな遣ひの秀句を口にまかせて吐出さるゝは。つたなくこそ侍れ。惣じて秀句などいふ人は。よく心すべきことなり。麁末なる秀句や。又はたれも／＼云なれ聞ふれたる抜返しの秀句などは。うたてしくて。そのいふ人の心ざまも見おとさるゝ物なりかし

一雪霜雨霰などの降侍る日。人前にての挨拶や。消息の文章などには。むかふ人によて。心づかひ有べき事かといへり。片田舎の人こそ。時をも分ず所をも嫌はずして。あしき雨の日や。さまたけなる雪道やなど。こと葉にさへ云けつなれ。つれ／＼草に哉らん。雪のおもしろう降たりしあした。人のがりいふべきことありて文をやるとて。雪のことを何ともいはざりし返事に。此雪いかゞ見ると。一ふでのたまはせぬ程の。ひが／＼しからん人のおほせらるゝこと。聞いるべきかはとかけりしこそおかしけれ。それまでこそ艶たらずとも。せめてにくの雪や。うるさの雨やと。獨腹たてずともあれかし。北國などはしらず。雪はいとおもしろ

き物なり。下京のそこ〳〵に。茶湯に侘たる翁の侍るが。雪の夜は。蓑笠のしたに。古袴腰につけて。たゞ獨あかつきがたに友たつね侍ると聞しこそおかしかりけれ。わらはべにて侍しおり。親たちのせいしたまふも聞いれずして。雪ころ〳〵と庭に出つゝそほれあそへりしに。花開のなにがしの

芭蕉葉にふらせてしかなだびら雪

とのたまはせしも。まだきのふけふの心地ぞする。簾たかくまきあげて。香爐峯の雪をもおもひやりぬる人は。心ある友もかなとゆかしかるべけれども。跡つけん庭をいとひて。獨うそぶくやうのおりふし。あしくとも一ふでの消息に。哥でまれ詩でまれ。ふるくともあたらしくとも。書て贈られましかばうれしかるべし。しかはあれど。歌よみの哥にまつはれ。おかしきふるヿをもはしめよりとりこみつゝ。冷じきおり〳〵よみかけたるこそ物しきヿなれ。返しせねは情なし。えせざらむ人ははしたなからんとかや書をきし。なにがしの筆の跡もげにさるヿぞかし。なに事もそのおりふしと。むかふ人によるべきヿといふも今めかしや。むそぢあまりの春秋。袖に朽にし涙の雨も。あはれなる世語なりかし。冷泉爲秀の

心ある友こそかたき世なりけれひとり雨きく秌の夜すがら

と讀給ひしこそ。あはれにかなしけれと云し人もこそあれ。世に捨られたる人。まづしき人。おもひある人。うれへある人。老ほけたる人などさへ。こゝろ〳〵にたのしめるも有べし。まして公家上﨟富貴榮花の人などにむかひて。いやしき挨拶はこゝろすべきヿなり哥連歌に譽なし侍るはヿふりにたればかゝず。近き

ころ。玄旨法印の御狂句に

よしやふれ麦はあしくと華の雨

とのたまはせしこそおかしけれ。むかし山崎の宗鑑法しと云しえせもの丶

かしましや此さとすぎよ郭公みやこのうつけさこそ待らん

と讀侍りしは。いとさめてにくきやうなれど。是はいるまやうとて。狂哥狂句の本躰とこそ承はれ。古人のあまねくめでさせられて。一聲に命をかけしほとゝぎすを。よしなしとおもひ捨たるにはあらず。されば花まつ比の春雨。郭公さそふむら雨。卯花くたしなどのおりたがへぬこそめでたけれ。さつき五日は雨降侍るをよしと。清少納言がふみにも書侍りしとかや。賀茂のくらべむまのかへさに降出て。笠きあへずしとゞにぬれつゝ。沓は腰につけ。すあしになりて。黒う毛がちなる居ところたかくかゝげて。河原のいしたかき道を。かほしかめつゝいそぎくるに。友人の。あしはやうさきにすゝむもにくしや。跡にさがれるは見うしなひぬ。さゝへもかろくなりて。腹たゞしく。またいと。あかき日のうちに。都の大路たとり侍らましかば。知人にや逢侍ろとはつかしく心づかひもすべきに。町のはづれまで乗物むかへ來りしこそ。げに親たらでは。妹ならではと嬉しゝや。かくからきめに逢侍りても。雨はにゝからぬといふ人もあればある世ぞかし。なんぞ此廣き世界にふり侍る雨の日や雪の空を。心せばく鳥とはらをたつべきぞ。水無月には地もさけて照ぬる空に。一にぎりほどなる黒雲の。みるがうちにはびこりて。さと降來る夕立の雨。誠はた

なばたまつる夜。いて此日みつぶとふれば。銀川のみかさまさりて。星のあふせもなきといひためる。わらはごともおもひ出て。もしさにやといとおかしゝ。けにそよこしかた戀しきはわらはとなりかし。かの花開の先生の

正月にうちしは夢か玉まつり

とせられしは。春過夏たけて秋にうつるのみにもあらざるべし。少年のむかしの。夢と過にし名殘をおもふ成べし。今よひはなき玉の。此さはにかへり來ますといふに。心なの雨や。あさがらの杖にはすの葉笠うちきて。かほのいろはいとゞ青〱とおはせんさま。おもひやるもかなし。持佛の前の遣戸とりはらひつゝ。おりうづ。ひわりごやうの物に。供物所せきまでそなへて。もてなすなるをんな心は。けにはかなき物から哀なり。季吟子といふわかうどの。此有さまをみて

まざ〱といますかとし玉祭

とせしこそ。時にとりておかしかりき。八月になりてこそ。月の爲に雨は人ににくまるれ。さいへとつねにも二三日とふり侍れば。人にはあかれぬれど。おりたつ田子のよろこふべしとおもひもやらば哀成べし。うちしぐるゝ神无月の空は。誰がまことよりとおぼしく。そこはかとなふかなしと云し木葉の雨は。月にもさはらで嬉しゝや。寒き霜朝は。床も起うく。おなかさへ。神鳴のやうになりて。あなはら〱もかゝへつべし。枕がみにつめとぎ侍る猫の。えりのまはりにかほさし入るもむつかしけれど。なれよ何しに又ねう

〳〵となくぞ。いで火おこしてあたらせんと。すびつにはひより。釜ひきあぐれば。宵の名殘もなふ。ぜうといふ物ばかり侍るを。からうして秋の螢よりけにかすかなるひとつほり求めて。きせるさしよせつゝすゝれば。此香にむせびて例の猫ぜをたて。身ぶるひしつゝ。くさめ〳〵といふもつき〳〵しや。ほどせばき庭には。霜にそむべき木々も栽ざれば。何の詠めもなけれど。ひきゝ軒端にしろうをき渡し侍るが。つらゝのさがりたるは。玉のうてなもと。かたらふべき人戀しや。みぞれこそ何のやくなくつめたき斗が取どころのやうなれど。中にちら〳〵と雪のうちちりたるさまは。花の雨にまがへつべし。かのそゞろ寒かりし調樂のかへさもおかしければ。よし。よるのみふれがしとぞおもふ霧は旅だつあした。宿りとく出るに。霄までははなかりし海をたゝへ。松杉の木ずゑのみうき草のやうに見えておかし。すべて深山の旅寢せぬ人は。かゝるあはれさえもしらじ。槇の葉に立のぼれる村雨のはれま。又〳〵興あり。露は四季ともにあしたもゆふべも。霄も曉も。花に置たるも紅葉にむすびたるもおもしろけれど。わきて朝がほ薄がうれ。霰は玉ざゝ。まことのさゝに入たるもよし

慶安三庚寅曆

應鐘下浣日書之

中野道伴刊行

# 浮世鏡　第三

（片言補遺）

# 篇目

都名所之部并余國　寺号之部
公家之稱号官職等之部　佛名之部付り祖師
人倫之部　支躰之部付病名
魚之部　鳥之部
獸之部　虫之部
食物部　藥種并合藥之部
衣類之部　居所之部
時節之部　草之部付り竹
木之部　器財之部

# 浮世鏡　第三　（片言補遺）

此卷より下は詞のあやまれるをしるし侍る也。　これよりさきに徘諧師貞室が片言の書五册をあみて世におこなひぬ。これにもらしたるをかき侍れば更にひとつ事にあらず。此故に是にもれたるは彼書にありと知給ふべし。都の人のいへるは田舍人は音濁とてわらへり。尤音律のたがひは國風なれば是非なし。都は土地清らに水すなほなれば音律かろくすみてたゞしとかや。されども片言は夷中にまさりておゝく侍り。と或人のいへり。其人に亦人とふていはく、都に住人の片言おゝきはいか成事ぞや。答て云。尤所は無上の花洛なれども上が上成はいたりて高く、中品より下なるがおゝくすむ所なれば、片言は皆これがいふ事也。それをあやまりもて上り、中品より上ざまの人もあやまり國風となれる也と云々。先都の訛をいふにて夷中は自然ときこえ侍るべし。心をつけて嗜べき事にこそ

都名所之部并余國

めんしよ　名所なり

○じうらく　聚樂也。西京にあり。此所は羽柴關白秀次公の亭ありて、善つくし美つくせるよりて聚樂とはたのしみをあつむるの儀也。今に其境內のあたりをも聚樂といふ也

○二条のばんば　馬場也（御馬場同し）

○うち井　雲林院也。此所はむかし寺也。其寺号則所の名とするなり

○あぐ井　安居院也（此所も右に同し）

○うぐるす　小栗栖［○栖カ］也

○しつはら　靜原也

○なるたけ　鳴瀧也

○にぶ　壬生也（哥道にてはよみぐせ別にあり）

○ろくんぞ　六地藏也。伏見ノ東

○よこおち　横宇治とかける書あり。是本說にや考を待つ

○よしむね　善峯也。峯といふをばいづくにもむねといふ也。播广の民ひろむねといふも廣峯也。姬路の西

壹里ニアリ
○かんまき　上牧也
大和河内の民こんがうせといへるは誤成べし　金剛山
○あんなんこうじ　安樂小路也。昔安樂光院此所にあり
○ちやうめんじ通　頂妙寺通也
○ごこまち通　御幸町通也
○ゑべす川通　夷川通也

## 寺号之部

○ぶんかう寺　仏光寺也（仏光寺どをりに有）
○まんじやうじ　万壽寺也（今東福寺の内に有）
○ちやうにん　ちをにん（みなひが事なり）智恩院也。東山にあり
○ちやうめんじ　頂妙寺也。（三条大橋にちかし）
けんねんじ　けんねじとも　建仁寺也。四条大和大路にあり
○どうけゐん殿　曇華院也。三条東洞院にあり

ぶつだいじ　仏陀寺也

あみだいし　阿弥陀寺也

（ともに寺町通今出川ノ上にある也）

○しんにようだう　眞如堂也

○とうほくゐん　東北院也

（ともに寺町通今出川下ル町）

○じやこじ　寂光寺也。（寺町竹屋町下ル丁）

○せんぐわんじ　誓願寺也。寺町三条

○あんにようじ　あんによじ　安養寺也。（寺町通たこ薬師の南）

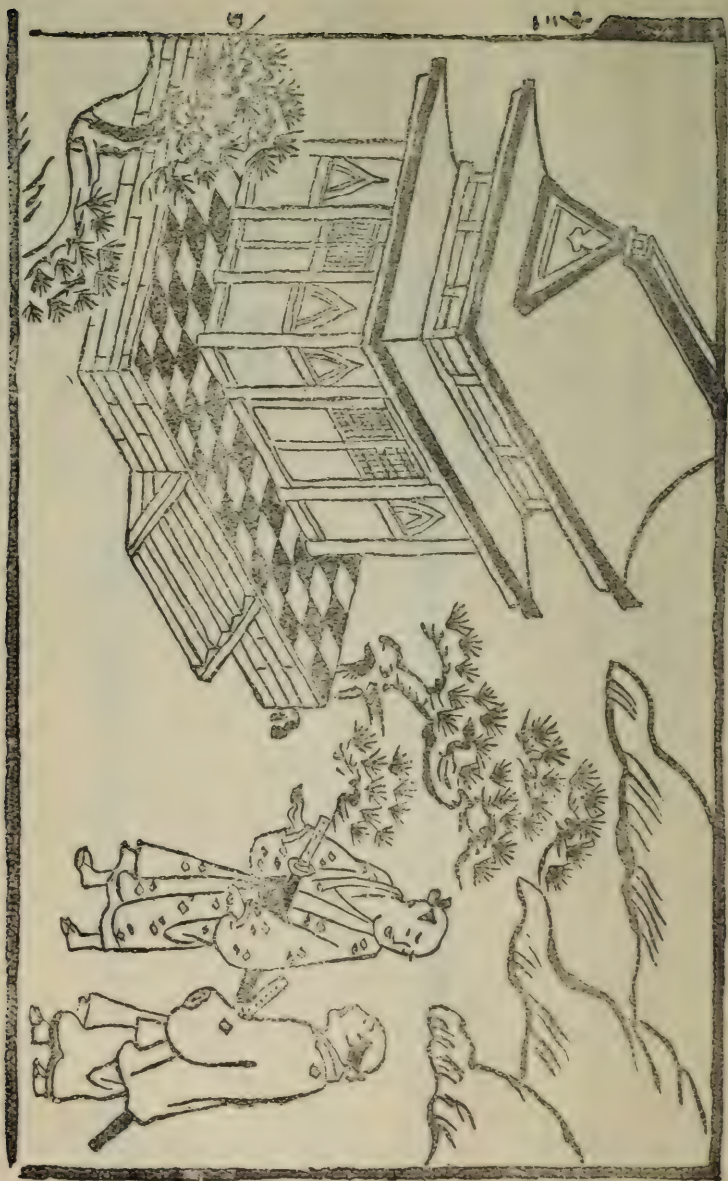
○ていやん　貞安也。大雲院とも（寺町四条下ル丁貞安上人名高きゆへ寺の名によぶ也）

○みえんど　御影堂也。（五条大橋ノ西）

○ちやうごんだう　長講堂也。（白川法皇の御草創の所也。寺町五条にあり）

○せんにようじ　泉涌寺也。（大仏殿のほとり）

○とふくじ　東福寺也（泉涌寺のほとり）

○ふどんだう　不動堂也。（油小路のすゑに有）

○ほこんごゐん　法金剛院也。（おむろの邊）

○へんじやうし　遍照心院也。（東寺の邊）

○悪光寺とて日蓮宗の弘通者の説法する寺一条通堀川の西にあり。別名を弘通所といへり。それをごずいしよといへり

## 公家之稱号官職等之部

•かんばく殿　關白殿也

•たかつか殿　鷹司殿也

•くはんじやうじ殿　勸修寺殿也。（但公家ノ名目にてはクハジヤウジトトナユルトカヤ）

•てぶり三条殿（てんぶり殿とも）轉法輪也

•からすま殿　烏丸殿也

•おきまち殿　正親町殿也

•なんばん殿　難波殿也

•とびのこじ殿　富小路殿也

•れいぜい殿　冷泉殿也

・いせのさいしん殿　祭主也

しつのふ　出納なり

公家の衣冠のとき後にひかるるをとびの尾といふは俗説也。裾といふとかや。冠の左右につきて耳のうへの方にある物を緌とこそいふなるを、これをきたるをなべとり公家とはいつの比より誰がいひ初し

・にんぶ　民部也

・かげい　勘解曲〔○由カ〕

・はいと　隼人也。（はいとんといふ点モアリ）

づしやう　圖書也

とのむ　主殿也

もんどう　主水也

かずへ　主計也

たのむ　頼母也

○佛名之部付り祖師

めうり觀音　如意輪觀音也

觀音もくはんのんと唱るがよし

しよ觀音　聖觀音也

せんじ觀音　千手觀音也

せいしゆ菩　勢至菩也

こくぞ　虚空藏也

こぼう大し
こぼ大師　弘法大師也

れんぎやう大し　傳教大師也

くわんだい大し　元三大師也

もつけ和尚　牧溪和尚也

しよ一國師　聖一國師也

因に云。都にて和尚と云人すくなし。下品の族は大かた「おうしやう」といふ也。ひとゝせ百万遍万靈上人江戸にくだられし事有。いまだ歸寺なかりし比、此宗旨方打よりては、まだ「おうしやうは、おのぼりでない」といへり。俗「□（虫クヒ）穴〇さへ」有を或出家のかくいへり。最おかし。但和尚は禪宗にていふ詞也。和尚といふがよしと或博識のいへり。天台家にて慈鎭和尚などとなへきたれり

禪宗のせいと　西堂なり

しうと大夫　舅也（大夫いらぬもの）

## 人倫之部

京の人の下人にむかひて「あがみ」といへるは「我身」といへる事の誤成べし、と或田舎人のいへり。尤聞えたる不審ながら、是はよき詞成べし。尤我身といふ事也。六根清浄秡に我身波則六根清浄奈利と和訓せり

身どもといふは　自身の事尤聞えながら、其人がらと扨はむかひのあひて吾より下様の人にならではいふまじき詞也。其わいためなくしてむさと身共〳〵といふ人有いとおかし

しゆしやう　師匠也

おとうと　弟なり

おほ大名（上のおほの字いらず。大名にて聞えたり）

げんぶくしや　験佛者也

人こんじよ　群集也。（上の人の字いらず）

じしや衆　儒者也

ずちやう　仕丁也

こつちやう　功長といふ儀にや

せいらいといふも物のめいじんらしき事をいへり。西來の儀にや。禪宗の祖師西來といふ詞をとりもちひたるか。但出所有にや

ほいと　陪堂也。乞食

京にては町の年寄といふを田舍にて目代といふ、聞えたる儀也。それをもく大夫はひがこと

田舍の民庄や年寄めきたる者をまどころといふは、政所也

家美樣といふを、京にてかみんとはねていへるは僻事ならし。公家方に奧樣をかみさまといへども、町屋にては後家になりて子にかゝらねばいはず

よめをおへゝといふは余國の詞也。東には侍の嫁をば御新造といふ也。又それを御しんぞは誤也。お方樣といふべきを、おかつさま、おかさまは京のことば也

うらといふは　烏郎といふ義にや、小者僕の事也。いづくにても田舍の下輩の詞也。近國にては近江のことは也

そなたといふべきを「すなた」はたゞが事也。田舍には、「あんに」丹波「あれん」といふは中國の詞也

そんた、あんたといふは備前備中備後等の中國の詞也。自身の事を「うら共」、「おども」などいふも右に同じ

わごれ、わごりよ　吾御料也。あの人はよといふ事を。あのごりよといふは丹後但馬の詞也
おのし　御主成べし。御主様同じ。吾ぬし、吾殿同儀也
だんなん　相那なり
かむろ　丫髻也
かしき　喝食
わかし　若衆也
びくにんぶくに　比丘尼也
ぼん様、ぼ様　坊なり
しやうにゝ行といふは如何　證人也。人質なり
二親のふたおや　重言也
あにきのきの字は兄君といふ下略詞也といふ說あり。しからば他人に對していふは不禮のことば成べし
兄第二人といふ事をはしおりかゞみといふは、物の兩端を折かゞめたる時はともにむかひあふ也、其ごとく間に物なく、ひしとあひたる義歟
ゆわらぢ　家主也（女家主をいへり）
かんのし　神主也

ばんじよ　大工　番匠也

ばくろ　馬口勞也

たかんじよ　鷹師也、匠共

わろ　わろう　童子也

御れうに　御料人也

あきうど　商人也。（中國の詞に「あきびと」聞にくし）

だれぞ　たそ　誰ぞ也

だいつめ　どいつ　誰奴也

こいつ　是奴　そいつ　其奴

めうとつがひといふは夫婦二人くらすを京の下輩の詞也。妻夫番にや至りて下劣也

あんだら　唷太郎也といふ人有。中國に腔を「あんごう」といふ也。唷向也

三談といふは三人談合する事也と心得たる人あり。三人に限らず、ひそかに談ずる事也。密談なり

類字

外甥　文公　婭　妯娌　嫂　生子　傅母　小奴　僕同　石女　牙人男　牙婆女　蔞蘱　才人　馬奴

矢人　左完　虚無僧　優人

## 支躰之部付病名

くちびろ　唇也

あげ　あごた　腭也

つらかばちといふは中國の詞也。輔車也。つらたましゐとは吾東のことば也

ほうげたといふ「げた」の字は何の字にや　頬（ほうつら）備前備中等の詞に「げな」といふやうの詞に「げた」といふ也。縱ば「あほうげた」「りこうげた」などいふ也

みゝたぶ　垂珠也

みゝせゝ　耳の根を京のことば也。字未レ考。（ある書に完骨）

たましん　魂也

しりべた　尻片

しりげた　和名鳥獸之尾也

しりこぶた

しはくた　しはくちや　皺也

いび　指也。備前備中備後美作等の詞に。いべといふ也。手を「てう」といふ也。美作にて「てうあていて

うあい「と」わめきければ「いべのあひからぬけた」と答けるもおかし

わきばらを「いきざし」とは同國之詞也。氣調遊仙窟

手をほでといふさへ賤しきを、ほだかし

めゝがよい　媚也。（○まへ、〔○まへ虫クヒニテ確ナラズ〕目ノ上瞼也）

あきじり　青盲也

あかぎれ　皸也

あせも　汗瘡也。（熱沸瘡　同）

ほろせ　疹也

だつこ　脱肛也

こひ　喉痺也

瘂五郎　五郎いらざる物か

にやく　脉也（中國の詞）

かゆがり瘡氣なとを濕氣といふもあたらぬ事なるにしゆつ氣といふは猶ひがこと

よだれ　涎也。（よだり）

つはけ　唾也。（つばき）

魚之部

うはし　鰯也

おこぜ　鰧魚也

かれ　鰈（かれい）

とびいほ　鰩（とびを）

おなぎ　鰻鱺（うなぎ）

じやこ　雜喉

がざみ　蝤蛑（かざみ）

たのし　田螺（たにし）

くしおび　串鮑（くしあはび）

鳥之部

はやむさ　隼（はやぶさ）

ほじろ　畫眉鳥（ほゝじろ）

かつこ鳥　鳲鳩（かつこうどり）

ひよどり　鵯（ひゑどり）
あひる　鶩（あひろ）
とんび　鳶（とび）
ぎよ〳〵し　百舌鳥（けゝし）
東にては葦原雀　西國にては麥熟といふ也

## 獸之部

たのき　狸（たぬき）
おほかめ　狼（おゝかみ）
おさぎ　菟（うさぎ）
けつね　狐（きつね）
りす　貂鼠（栗鼠同）
うごろもち　鼹鼠（うぐろも）中國にては「むくろもち」
おなめうじ　乳牛（うなめ）
とていうじ　特牛（ことい。犢牛同）

## 虫之部

ほたろ　ほうたろ　螢（ほたる）
めゝず　蚯蚓（みゝず）
とんぼ　とんぼう　蜻蛉（とばう）
いぼじり　蟷螂（いもじり）
せび　蟬（せみ）
へこきむし　氣蠜（へひりむし）
がいる　蝦蟆（かいる）
たのし　田蠃（たにし）
ぼふりむし　孑孑虫（蛣蟩同）
こめ打むし　叩頭虫（ぬかづきむし）頭を上下するをぬかづくといふ也
ぶゆ　蜉蝣也（朝生夕死ナリ）
しらめ　虱（しらみ）蟣
ひらたぐも　壁錢（ひらぐも）
虫をむしこうぐ〜といふは京の詞也。按ずるに仏書より出たる無始曠劫の事にや、是ははじめもなくおは

りもしられぬ程久しき事也。諸寺の談儀に度々有事也。それをむしの事に心得たるにや俗説うけたまはりたし

## 食物之部

くはしん　菓子（くはし）

ぢをせん　地黄煎（ぢおうせん）中國には「ぎやうせん」「じやうせん」平にかためたるをば飴がたといふ也

せんべ　煎餅（せんべい）

こはい　强飯（こはいひ）白きは「せきはん」といはず。小豆のいりたるはあかきゆへに「赤飯」といふ也

しらかい　殘食（しらかゆ）

じぶ　煑鳧（じゆぶ）

よふめし　夕飯（ゆふめし）

この物　香物（かうの物）

## 藥種幷合藥之部

しそう　紫蘇（しそ）

びやくぜつずつ　白朮（びやくじつ）
だいおん　大黄（だいわう）
ぶくりう　茯苓（ぶくりやう）
たんは　丹礬（たんはん）
くはつろうこん　活蔞根（くはつろうこん）〔○上下トモ同ジキハ一方誤アラン〕
こぶし　香附子（かうぶし）
ちんひん　陳皮（ちんひ）
こおれん　胡黄連（こわうれん）
ちやうぜん　丁子圓（てうじゑん）
ゑうれたん　延齢丹（ゑんれいたん）
そこゑん　蘇香圓（そかうゑん）

## 衣類(いるい)之部

きり物　衣(きもの)　服同
さいみ　貲布（さよみ）

たふぬの　太布也。布はぬの也。たふぬの重言也

のゝ　布ぬの也

もんめん　木綿（もめん）

づきん　頭巾（づきん）　賀州には帽子といふ也

てぬぐひ　手巾（手拭同）

ておひ　手覆也

ふんどし　褌（ふどし）

きぬけんふ　重言也。絹布の二字きぬぬのといふ事也

## 居所之部

禁中様のしゝでん　紫宸殿

げんくは　玄關（げんくはん）

ろうぢ　廬次（ろぢ）

へいぢもん　屏重門（へいぢうもん）

ゆるり　圍爐裏（いろり）

ゑ　□ゑ　家（いゑ也）
らんか　欄干（らんかん）
邸　出居　中國にざしきを「でい」といふ也
せんち　雪隱　後架　中國にては「かんによ」共いふ

## 時節之部

年しの始　年首始成べし。年首則年のはじめといふ事也。然ばいらぬ重言也
正月の元三　元三則正月也。夷中にはなき事成が京にて極月のすゑに正月のために、小松を根ながら引て、ねのびの松とてうる也。町屋に是をかひて門口をはじめ方々にさし、年德神の棚其外何にも此小松をかざる也。松をかざる事は唐土よりはじまる事にてめでたきためし也。正月初の子の日に野邊に出て手づから小松を引て千代をとぶくを子日の松といふ也。今のねのひの松、鶴の觜にてほるなり
さぎつちやう　左儀長也
唐土とはやすゆへに唐土ともいふ也。それをとんどといふもおかし。備前備中等には「しぶんぢよやどんど」といふ也
はる〳〵べ　春邊也。邊は付字也。和語には此たぐひ多し。然ば春といふ事也。はる〳〵べとはいらぬ重

言也

しよんぐはつ　正月（にん月、しん月同し）

天氣のよきを津國播广なんど海邊のことばに「にはがよい」といふは「日和」也。ひよりとよむなり

いづつも　朝暮也

いんぜん　已前（いぜん）

きによふ　昨日（きのふ）

さくづゝ　昨日也

おとつひ　一昨日也（おとゝひ）

ひつてい　ひとひ也

常住といふ事をよつびとひ。よつびとゝいふはいか成事にや。假ば「こんじやうそれに、よつびとたまされた」なんどいふ也

いりやひ　晩鐘（いりあひ）

よさり　夕去　晩同

よさもと　ばんもと（何もいやしゝ）

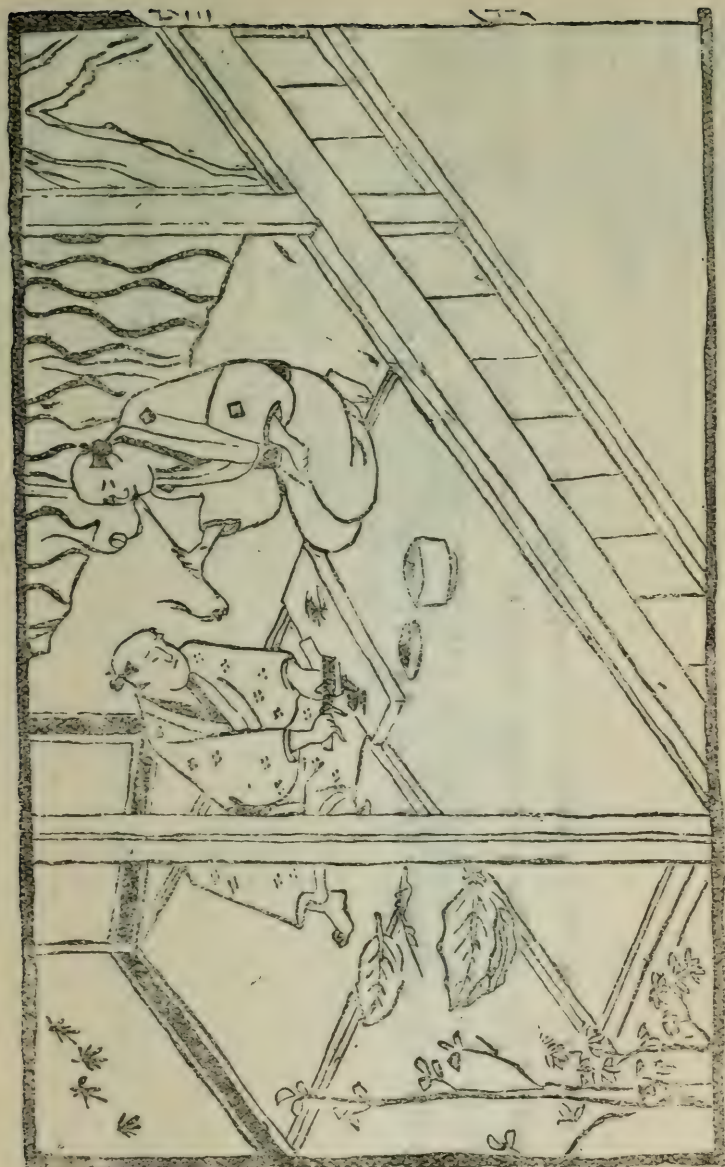
よさりごんめ　夕去毎也。賤しきことばなり

よんべ　夕（ゆふべ）
ひくらもと　日暮許與
かひ日のぐれ　顆日暮與
ひにごて　日毎也
やばなし　夜ばなし也
ありやけ　晨明（ありあけ）
曉といふ事を　三夜の曉といふは三會曉の取違にや。是は弥勒仏上天より下生の時の事也
あとげつ　跡月といふべし。げつと聲にとなゆる事つたなし
ぼに　盆を中國にてぼにといふ也。盆帷子

## 草之部付り竹

さゝぎ　小角豆（さゝげ）
いちじく　一熟（いちじゆく）
ほゞづき　酸漿（ほをづき）
ほうれんさう　菠薐草

ほんだはら　神馬藻（ほだはら）
ひづる　蔆蔞（ひづり）
ひよう　莧菜（ひゆ）
ゆふがう　夕顏（ゆふがほ）
そぐりわら　藷（すぐりわら）
わらすぼ　藁藻（わらしべ、すべ）
しのべ竹　百葉竹。同長間竹
なひ竹　簾竹（なよたけ）
しんまい　新米也。米の初て出來たるをこそ新米といふべきを、何にても初ての物を新米とは京の下劣成がとば也。縱ば新米のたばこ、新米の海帶いとおかしゝ。亦はみづから植作たる畠物をてしゆといふ也。按ずるに手酒といふ事にや。然ば酒より外はいふまじき也。或者のいふやう此煙草は新米でござる。わたしが。てしゆにつくりたでござる。あひての云はつてなか〳〵でござる。こなたはめんような人じやといひけり。皆片言なり
わたし　私なり
めんよう　名譽也

木之部

ひらぎ　柊（ひいらぎ）　同拘骨

くのぎ　櫟（くぬぎ）

びやくしゆん　柏槇（びやくしん）

ごよの松　五葉松（ごようの松）

なつてん　南天（なんてん）

ゑんじゆ　槐（ゑんじ）

びや　枇杷（びは）

京にて新の柴といふを但馬にてはおどろとも。しもとゝもいふ也。荊棘　標　同楉（詩經）　中國にてはあや木といふ也

標ゆふかづらなんど哥にも讀たり

柴のをれを　きほせといふは京也。きなぐせといふは丹後但馬の詞也。ぼうぎれといふ。中國の詞なり

器財之部

神事に持出るを「ほうこ」といふは京の詞也。縦ば祇園會のほうこなんどいふ也。矛也。同鋒

是のみならず都人はあとを引ていいへる事おゝし。十といふべきを、とうを。野といふを、のうといへる躰事ならし

ひちりき　篳篥（しちりき）

しやみせん　三線（さみせん、三味線は俗字也）

とびやくせう　調拍子（とびやうし）銅鈸子同（中國にてはをきあはせ）

物をいりかはかす器を「いりがうら」といへり。沙鍋（いりがはら）

よぼし　烏帽子（ゑぼし）

こひのよぼし　小結烏帽子

どゞもとひ　童頭髻（どうとうもとゆひ）童子の髪置に用る也。因に云。かみをけ　髪置也

もとひ　もつてん　髻也

うろこがた　鱗形（いろこがた）

とつくり　陶（とくり）

わりぎやう　樏子（わりご）

こうろけ　小土器（こがはらけ）

れいてんぐ　齏等（れてぐ）

ふんどん　分銅（ふんどう）
わげもの　棬（マゲモノ）
ゆびつなり　飯櫃形（いひびつなり）
ぶんこ　文夾（ぶんかう）文函（同）
ふせがう　薫籠（ふせご）
かうろん　香爐（かうろ）
こうり　骨柳（こり）
じんどう　磁頭（じどう）
しもく　鐘木（しゆもく）
あぐた　胡床（あぐら）
ますかけ　斗格（ますかき）
とかけ　斗槩（とかき）
あんどう（あんど）　行燈（あんどん）
とうしん　灯心（とうしみ）
ひそく　紙燭（しそく）

ごつない　合子（がうし）中國には非合子といふ也

れんぎ　擂木（れいぎ）　擂槌（すりこぎ）

てつきう　鉄橋（てつきやう）

まいのは　攪樹（まいば）

けいさん　卦算（けさん）

はつけい　八卦（はつけ）

やつくはん　やかん　薬罐（やくはん）

しんし　簇（しいし）　しんし、京の詞也。田舎は「しいし」也

万どうろ　万灯（まんどう）

できのぼう　でくるほう　でく　吾妻の詞、でこ。てぎのぼうは中國の詞也。傀儡子、屈儡子同人形也

用心らしきとき棒つき杖を持出るやうの事をつえぼしといふは京の詞、ぼうちきりきといふは但馬などの詞也

棒　千切木（ぼうちぎりき也）

竿を竿竹とは京の詞なり。竿則竹の事也。いらぬ重言成べし

諸國方言

# 物類稱呼

天地
人倫

一

# 物類稱呼序

二條の家の筑波集に草の名も所によりてかはりけりと
いふ句に救済法師なにはの芦はいせの浜荻と附しは
もつとも慥なる諸國の方言物ひとつにして名の数々
ある名ひとつを探り選ひて五の巻となしけりしるもく
いにしへを考る事思ふしてそのいにしへも詳にしつゝ
かはりて本語を失ひたるも世に多かる庵し中にも都會
人物ハ萬國の言語にかよふてものづから訛もなく志ハ

あるひハ漢音の音韻に泥ミて却て上古の遺言を忘るゝ者おほし
辺鄙の人ハ一郷一邑の方語にして且てにをはしく訛れり
されども質素淳朴にして是ぞまことに古代の遺言をのこし
なをびて大凡我朝六十余州のうちにても山城と並て又美濃
と尾張より西の国々薩摩の方はしの果まで人みな
直音にして平声なり北ハ越後信濃東国にいたりてハ
常陸をよひ奥羽の国々すべて拗音にして上声多きハ
是風土水気の然らしむるなれハあながちに偏執すべ

さるも亦ハ畿内にも俗語あれバ東西の遠国にも
雅言ありて是非なかるしおのづから正音をはぶるハ
花洛にゐる人ハいまだかつてハむしろ真言の
辺土にきおミを物かたれバもあらずて他郷を知らざる
の児童戸をも出ずして路頭物に異名ある事を
はるばる遠方よりまゐれる旅人の詞を笑ふもある
の罪をまぬかれしめんがために編て物類称呼と
なづくる事になんなりぬ

安永乙未孟春日

江都日本橋室坊　越谷吾山識

# 物類稱呼凡例

一此書あつめて五冊となし天地。人倫。艸木。氣形。器用。衣食。言語。等を七門にわかつは、簡易にして探り索めやすきを要とす。それが中に天地と言語と器用衣類の如きまゝ交へ出すもの有。もとより街談巷説を、聞るにしたがひてしるし侍れば、管見不堪の誤多からむのみ。又其國にて如ㇾ此稱すとは、國中凡の義にあらず。一國は勿論一邑のうちにても品物の名異るもの也。具に錄する事あたはず

一諸品の和訓は源順ノ和名鈔及漢語抄、本朝印行の諸家本艸等に讓りて審に誌さず。聊是は識者のためにに非ず、專童蒙に便せんとす。故に事物の悉く知りやすきのみを載て、なを又所々註釋をくはふ

一引用る所の書の目には［　］をもふけて是をわかつ。又方言の讀法には｜をもつて知らしむ。たとへば花鳥風月くは｜ちやう｜ふう｜げつ　如ㇾ此の類ひなり。余是に准ず

一諸國ともに中品以上の人物は言語あやまらす、音聲自然と和合して能通用す。故に爰に洩す事多し

一此編に著す所は唯民俗要用の事のみをしるす。廣大なる國郡無盡の言語、いくばくの歲月を經るとも大成する事難し。殊更短才をもはからず、をそらくは蠡海の譏もあらんかし

物類稱呼凡例畢

# 物類稱呼卷之一

## 天地

江都　越谷吾山秀眞　編輯

**北辰**　ほくしん（北極と稱するもをなし、うごかぬ星なり）○上總國にて。ひとつのほし又番のほしと稱す

**北斗**　ほくと（うごく星なり）○東國にて。七曜のほしと稱す。又四三の星ともいふ

**昴**　ぼう（すばる星と云、二十八宿の內之）○東國にて。九ようの星と云、江戸にては。むつら星といふ

**參**　しん（からすきぼしと云、二十八宿の內之）○中星の横につらなりたる三の星を江戸にて。三光といひ又三ッ星といふ。關西にて。親になひ星と云。東國にて。三ちやうの星と呼、武藏の國葛西にて。さんるぼしといふ

**風**　かぜ○畿內及中國の船人のことばに、西北の風を。あなぜと稱す。二月の風を。をに北といふ。三月の風を。へばりごちと云。四月未の方より吹風を。あぶらまぜと云。五月の南風を。あらはへといふ。六月未の風を。しらはへといふ。土用中の北風を。土用あいといふ。七月末の風を。おくりまぜと云。八月の風を。あをぎたといふ。九月の風を。はま西といふ。十月の風を。ほしの入ッごちといふ。十一月十二月の頃吹風を。大西と云○西國にても南風を。はへと云。東南の風を。をしやばへと云○北國にては東風を。あゆの風といふ。西北の風を。よりけと云。北風を。ひとつあゆと云。東北の風を。ぢあゆと云。丑の方より吹風を。まあゆと云。

南風を。ちくだりと云○江戸にては東南の風を。いなさといふ。東北の風を。ならいと云（つくばならいといふあり）西北の風を。はがちと云。東風を。下總ごちといふ。未申の方より吹風を。富士南と云○伊勢ノ國鳥羽、或は伊豆國の船詞に、二月十五日前後に一七日ほど、いかにもやはらかに吹く風を。ねはん西風といふ（但し年毎に吹にもあらず）三月土用少し前より南風吹。あぶらまじといふ。四月よき日和にて南風吹。おぼせといふ。五月梅雨に入て吹南風を。くろはへといふ。梅雨半に吹風を。あらはへと云。梅雨晴る頃より吹南風を。しらはへと云。六月土用半過ゟ北東の風一七日程吹年有。ごさいと云（六月十六七日伊勢の御祭礼有、出家も參事之。故に御祭といふ之）六月中旬東風吹年あり。ぼんごちと云。それ過てゟ南風吹。をくれまじといふ。八月の風を。あをぎたと云（はじめは雨にそひて吹、後はよくはれて北風吹なり）又。雁わたしとも云。十月中旬に吹く北東の風を。星の出入といふ（夜明にすばる星西に入時吹之）又大風には二月吹を。貝よせと云（正月の節より四十八夜前後の西風之）三四月東南の風吹を。なたねづゆと云。四五月吹東南の風を。たけのこづゆといふ。八月に吹風を。野分ギといふ（正月の節より二百十日め前後にふくなり）十月西風吹。神わたしと云（霜月の荒といふは、廿三日より晦日までの間に荒るとしあり）○近江國湖水にて、風の定らぬ事を。論義といふ。日和風を。といてと云。湖上の風を。根わたしと云。秋冬の風を。日あらしといふ。春夏の風を。やませ風、又。ながせ風、又せた嵐など云○播磨邊、又四國にて、春南風にて雨を催す風を。やうずと云○越後にて、東風を。だしといふ。西北の風を。しもにしといふ。西南の風を。ひかたといふ

今按に、西北の風を名づけて「あなぜ」といふは「あなじ」の轉語也【後拾遺】に

〽あなじ吹瀬戸のしほ合に船出してはやくぞ過るさやかた山を

と詠せし是。上古風をは「し」と稱し「ち」と稱せり。嵐。こがらし。こち。はやちなといふ是也。又神社の棟に有千木といふ物も「風木」とも書之。倚說あり。又二月ふく風を「鬼北」といふは、丑寅の間より吹くをいふなるべし。丑寅の方を鬼門といへばなり。又「あぶらまぜ」は「あぶらまじ」の轉語か、あなじとをなじき心にや、又はへは薫風也【呂氏春秋】ニ東南ノ風を云と有【事文續集】ニ夏ノ風也と見えたるも同し。俳諧に風薫と句作するもこれなり。又星の入ごちと云有、惣じて九月の節より正月の節中は、すまる星の出入に日和かはりやすき物之。常には月日の出入をよく心得べし。夜ル入る月にはひよりそこねやすし。夜出る月には少悪くも直る事あり。是を若月の入りそこね、出月の出直りと船の上にていふ事之。又俗に春北風に多雨、いつも東は定降の霖雨といへる諺有。又

〽五月西、春は南に、秋は北、いつも東風にて雨降るとしれ、とよめる俗哥もあり。其國〱におゐて方角のかはりめ有。大凡關西は西風なれは則雨降、東風にて則晴るといへり。關東にては西風にて晴れ、東風にて雨降る之【詩】ニ「習々タル谷風以テ陰以テ雨フル」と有、谷風は則東風之。しかあれば異國にても東風にて雨降ると見えたり。又東武にて。はやてと云　爲家卿の哥に

夫木〽浪しらむ沖のはやてやつよからし生田かいそによする釣舟

〔舊事紀〕ニ疾風と有、是也。又八月の風を暴風と云。歌連俳ともに野分キと詠ス。陸奥にて鮭下風とよぶ、此頃より鮭の魚を捕といへり

夏雲　なつのくも　○江戸にて。坂東太郎と云（坂東太郎といふ大河あり）大坂にて。丹波太郎と云。播磨にて。岩ぐもといふ。九州にて。比古太郎と云（比古ノ山ハ西國の大山なり）近江及越前にて。信濃太郎と云。加賀にて。いたちぐもといふ。安房にて。岸雲と云

今案に、これらの異名夏雲のたつ方角をさしていひ又其形によりてなづく

夫木へ　水無月になりぬと見へぬおほそらにあやしき峯の雲の色かな

と詠し給ふ【古文前集】四時ノ詩ニ云、春水滿ツ四澤ニ、夏雲多シ奇峯。とあり。この詩より、今俳諧に雲の峯と句作なす歟

虹　にじ　○東國の小兒このじと云。尾張の土人鍋づるといふ。西國にて。いうじと云。【萬葉】ニぬじ又のすとも詠り（西國にていうじと云は夕虹の略語か）

液雨　しぐれ　○美濃加納にて。山めぐりと云【丹鉛錄】ニ曰、張野廬ガ廬山ノ記ニ云。天將レ雨ノラントス則有ニ白雲一、或ハ冠シ峯岩ニ或ハ亘ル中嶺ニ、俗謂ニ之ヲ山帶ト、不シテ出ニ三日ヲ必雨フト云々。又唐詩ニ風吹テ山帶ヲ遙ニ知レ雨ヲなども作れり。又不時に村雨の降を、相州箱根山にて。わたくし雨といふ

雪　ゆき　○東武にて。綿帽子雪といふを、西國にて。花びら雪と云。中國にて。へだれ雪と云。越路にて。ぼた雪

といふ。上總にて。ぼたん雪と云。雲州にて。だんびら雪といふ。又ほろ／＼降る雪を越路にて。はだれ雪と云

**霜** しも ○關西にて。露霜（いまた霜の形をなさゞるをいふ）といふを、關東にて。水霜といふ。なを說有略す

**氷柱** つらゝたるひ ○越後にて。かな氷と云。奥の津輕にて。しがまといふ。同南部にて。墮氷と云。仙臺にて。たるひと云。會津及信州邊にて。すごほりといふ。西國及近江邊にて。ほだれと云。下總にて。とろゝといふ。下野にて。ぼうがねと云。伊勢白子にて。かなごと云。出羽最上にて。ぼんだらと云（氷柱垂氷の說有略す）

**凍** いて ○山陰道及相州箱根小田原邊にて。しみと云。源通村卿の詠に

〽はこね山また明ぬまに越ゆかん道のぬかりのしみとけぬまに

**水** みづ ○上總下總邊小兒の詞に。まんまと云。薩州にて。あかといふ。閼伽は水の梵語之。但シ舟にては諸國共に「あか」といふ

**泥** どろ ○備後福山にて。だべんと云　今按に金泥・銀泥なといふ物も此意成へし。可シ後勘ス（和名「ひちりこ」又「こひぢ」と云、戀路によそへて歌によめり）

**水口** みなくち ○（苗代へひく水くち之）上總にて。水の手といふ。越中ノ國にては。いのくちと呼。東國にて。水口と稱す　今按に、苗代とは上古田地を代といひし之。今もしろをかくと云事有。又鳫など時々に田を飛さるを、代をかゆるといふも此こゝろなり

原　はら○筑紫にて。はるといふ（何のはる、かのはるなどいふ）

土堤　どて○上總及信濃にて。まゝといふ（つゝみといふ有、土堤とは別之）

岸險　がけ○筑紫にて。ほきといふ

谷　たに○關西にて。たにと稱す（黑谷鹿谷のたぐひ之）相州鎌倉及上總邊にて。やつと呼（扇か谷、龜か谷等なり）江戸近邊にて。やと唱ふ（澁谷瀨田谷等之）

岩窟　いはや○鎌倉及上總にて。やぐらと呼ぶ

穴　あな○東國にて。めどと云。【東雅】ニ曰孔竅を呼てめどと云、あなめど又轉して「みづ」と云、針の穴を「みづ」といふが如き是也

四會　よつゝじ○奧州津輕にて。十文字と呼（十字【說文】ニ云衢也）信州にて四方の辻と云。越後にて。四ッ口といふ。同長岡にて。よつかどゝ云。下總にて。四ッ岐といふ

小路　こうぢ○京都にて稱す。江戸にて。橫丁（但式ア小路。藪小路、又浮世小路など呼有）大坂及伊勢松坂にて。小路と云。勢州山田にて世古と云

○辻子　京にていふ、江戸大坂ともに。ろぢといふ

河岸　かし○江戸にて。かしといふ（本町河岸、或は濱町がしなと云）大坂にて。はまといふ（濱の芝居などいふ）京にて。川ばたといふ

閨房　ねや　○遠江にて。ほそをりと云。下總て。こざといふ。武藏にて。をかたといふ

庇　ひさし　○關西にて。をだれといふ。越後にて。がぎといふ（いせの國にて家居にあるを庇といひ、土藏に有をがぎといふ。江戸にては商家の暖簾といふものをかくる具に尾垂といふ有）

地震　ぢしん　○關東及北陸道にて。ぢしんといふ。西國及中國四國にて。なゐといふ。【日本天智天皇紀】是春地震と有

石　いし　○畿内にて。ごろたと云は。石の小なる物を云。東國にて。石ころといふ。山陰道にては。くりと云（細小なるものか）越中にて。いしなといふ。江戸にて。じやりと云

日南　ひなた　○野州栃木にて。てるみといふ。日陰を。てるくみといふ（東國にて樹陰を。こさといふは木さはりの略語にや、又爲家卿の哥に「こさふかはくもりもぞするみちのくのゑぞには見せし秋の夜の月と詠し給ひしは、蝦夷人の術に胡砂吹といふ事の有よし也）

神無月　かみなづき　○出雲國にて。かみありづきといふ（貝原翁いづもの國にても神在月とは稱せずといへり。然とも大社神領はみな神ありづきと稱す）

晦日　つごもり　○阿波の國にて。こもりといふ。奥ノ津輕にては十二月小月なれは翌朔日を入て終歳日として、正月二日を元日とす。是を津輕の私大ともいふ之

**父**　ちゝ○大和にて。あんのうと稱す。播磨邊より西國にて。てゝらと云。長崎にて。ちやんと云。肥前佐賀にて。別當といふ。越前にて。のゝといふ。父を「てゝ」と稱し「とゝ」と呼ふは諸國の通稱之【萬葉】及【宇治拾遺】等に「てゝ」と見えたり。「とゝ」は【稗文】に爹爹（とゝ）と書侍るもあれど「てゝ」といひ「とゝ」といふは、父の轉語なるべし。又上總にて祖母を崇めて「のゝ」と稱し、越前にて父を「のゝ」と呼は極老の剃髮せしなどを「のゝ」といひならはしたる物ならん。小兒に對して如來を如々と略語し、如々轉して「のゝ」となりたる物か。但し古代よりの詞なる歟しらず

**母**　はゝ○西國にて。かくといふ。長崎にて。あひいと云（阿妣なるべしといふ說あり）肥の佐賀にては。あうぼうと云（阿母といふの轉語にや）出羽にて。だゞといふ

山崎垂加翁ノ云、俗人の母を稱して袋といふは胞胎（ハウタイ）の義によると云云。又母といひ「かゝ」といふは、諸國の通稱歟。京にて兒童は。ハワサンと呼ひ、年長しては母者人と稱す。東國にては。かゝさんといふ【袖中抄】にきりぐ＼すのなく聲つゞりさせかゝはひろはん「註」にかゝとは古きつゞれなとの事と之。しかれは下賤の者の妻女を「かゝ」と呼は是より出たる歟。又「はゝ」と云詞轉して「かゝ」となりたる歟。父といひ母とよぶはもとより通稱にして、それぐ＼轉したる詞も國々多かるべし。たゞけやけき語のみをこゝに記

す。以下准之

兄

あに（嫡子也、俗に總領といふ）（越後にて。あんにやさといふ。東國にて。せなといふ。出羽にて。あんこうといふ。奥ノ南部にて。あいなといふ。九州にて。ばぼうといふ。備前にて。親かたといふ。土佐にて。おやがたちといふ（備前にていふ親かたもをなし心か）　西川氏ノ云、ばぼうと云は破茅なるべきか、或書の中に茅の始て土中に生したる物を破茅といふと見えたり云云。吾山熟案に、破茅の說も可ならん。しかはあれどばぼうは梅朋の略ならん歟。梅は花の兄ともいへば梅の朋と云意なるべし。又曰兄を「せ」といひ、弟を「なせ」といひし事【日本紀】ニ見へたり。又妹背といふは妹と背との事なるよし、東士にて「せな」といふも古代の遺風なるべし

姉

あね　○九州にて。ばぼうぢよといふ。上總房州にてなゝといふ（兄弟に限らず、目上の女を尊んて「なゝ」といふ）

夫

をつと　○薩摩にて。との丈といふ（夫男夫子など哥書にをゝく出）

妻

つま　○京にて他の妻を。お内義さんとよぶ。大坂にて。おゑさんとよぶ（お家さまゑ）江戸にて。かみさまといふ。甲斐にて。中居といふ（甲州の國風の哥に、へ甲金や三升舛に四角箸切はふづくりをこれお中居とよめり）播摩邊、又越後わたりにて。ごりよんと云（よめ御料などの轉語か）奥州南部、又は津輕にて。あつぱといふ（吾が母といふの轉語なるべし、小兒の母に對していふ詞か）仙臺にて。おかたとといひ、又ごゞさま

と呼は、たつとぶ詞なり。御は尊稱之。御は女の通稱之。故に御をかさねて唱るにや。又仙臺にては媳婦を呼て。をむかさりといふ。上總にて。めことといふ（【源氏】にめこのかほも見でと有これは吾妻之）他の妻をば。をちようと云（御女郎の略語か）伊勢に。やよといふ（下賤の妻をいふとぞ）尾張にて。お家とよぶは、江戸にてお袋といふにあたる、同國にて。かみさまとよぶは、老女の稱之。對馬にて。をゆみといふ。肥ノ佐賀にて。をとも女郎といふ（おともとは手前の事をいふ、おとゝいふ時はそこもとゝいふにひとし）又をかたといひ、女房內儀なとやうの詞は、通稱にして記にいとまあらず

**小兒** をちご〇京にて。いとゝ稱す（いとをし、又いとけなしなとの下略なるべし）關東にて。ねんねといふ（やゝとよぶは諸國の通語之）信州にて。あかといふ（同國にて。びいとよぶは幼女なり）越後にて。ぼゞつこといふ（同國にて「にがこ」と云はみとりこの事之）奧羽にて。わらしといひ又ぼことい ふ（わらしは童男之【和名】童わらは又假子わらはべ、注ニ童男女と有、今わらんへともいふ通稱之）長崎にて。さまといふ（同所にて「ごゞ」と云は小女の事之）奧ノ南部にて末子を。よてことといふ。武藏下總にて。てごといふ案に、奧羽にて。ほことといふ詞は古代の遺語なるべし。東武にても。をぼこと云。二度をほこなと云詞有。是も小兒を「ぼこ」といふ意之。又「わこ」といふ詞有。上古「わけ」といひし詞轉して「わこ」といふ【古語拾遺】ニ男兒をワコとよみたり、俗に若子の字を用るはもと是弱の字を用ゆへき事なれと、其字又讀て「よはし」といふを嫌ひて若の字を借用ひしぞといへり【萬葉】かつしかのまゝのてこなと詠せしは、かの邊に

てすへの子を「てご」といひぬれば、てごの女といへる事なるにや未詳

**息女**　むすめ ○京畿にて。ごれうにんといふ。薩摩にても。これうといふ。中國及奥劦にて。おごうといふ（御とは女の稱之）奥の南部にて。をごれんといふ。越後ノ高岡、長岡にて。をこれんといふは他(ひと)の妻女を云也。備前なともをなし

**乳母**　めのと ○（俗にうばといふ）○畿内の小兒は。ちいと云。江戸の小兒は。をちゝといふ。尾張邊又陸奥にて。まゝといふ（古き詞にて源氏物語にも見えたり）【南留別志】に云、あことはうばの事之。上總國一宮といふ所は、あこなし御曹子の城なり、と千葉介が乳母にうませたる子之「なす」とはうむといふ事之。又

〽うつくしやへにゝも似たり梅花あこがかほにもつけたくぞある

菅家のいときなき時よみ給ふるといふとあり。今案に、徂來翁の說明らかなり。然とも小兒をも「あこ」といひしにや。日本紀に見えたり【職人盡歌合】機(はた)織女の詞に、あこやうくだもてこよと有。是は小兒をさして「あこ」といひしやうに聞えたり。今も東國の邊土にて「あこ」といひ、京畿にて「わこ」といふ類皆通音にて同し意ならんか。又「須兒」といふは、賤きものをいひて、小兒にてはあらず。俊賴朝臣の哥に

〽山里はすこが竹垣さきはやす萩をみなへしときませにけり

**寡**　やもめ（俗に後家又後室ともいふ）○京にて。やまめと云。尾劦にて。やごめといふ（これらは轉訛してかくいふものか）遠江にて。つぐめといふ

妾　おもひもの　○京師にて。てかけとよぶ。東國にて。めかけと云。西國及尾張にて。こひと云（御妃にや）。奥ノ南部にて。おなめといふ

遊女　うかれめ　○畿内にて。をやま又けいせいと云。江戸にては。女郎といふ（江戸にてはをやまと云名は戯場にのみ有）伊勢ノ山田にて。艶女といふ。同國鳥羽にて。はしりがねと云（鳥羽は湊成によりて、はしるとは船人の祝詞なるべし）近江にて。そぶつといふ。出羽秋田にて。ねもちといふ。奥州にて。をしやらくといふ（國によりて遊女のなき所も有之。他郷の遊女をさしてもいふなるべし）奥州松前にて。やかんといふ。越前敦賀にて。かんひやうと云（夕がほをさらすといふ心なり）又越前越後の海邊に浮身と云物有、是は旅商人此所に逗留の内、女をまうけて夫婦の如くス。此家を浮身宿と云

〽海に降る雪や戀しき浮身宿　はせを

今按に、傾城の名は李延年か詩の意をとりて倭俗遊女の稱とはなせり。和漢に遊女の名有事久し【詩】ニ漢ニ有ニ遊女一云々【東鑑】ニ淸水冠者を遊女の別當とせられし事を戯たり。又遊女の異名をゝし。所謂ながれめ『うかれめ『うかれ妻『海士の子『たはれめ『ひとよ妻等也。古哥に詠せし地名は美濃の野上の里、靑墓の里、近江のかゞみ山、野路、小野のしの原、尾張にはかやつの原、山城に大井川、小倉山の麓など詠せし之。川竹のなかれの身なといへるは、或は備後ノ鞆の津、津ノ國ノ神崎より出て揚屋、新屋、水揚、引舟、これらの品類悉く水邊によるの名なりとかや。淫語にかけるといふ詞有。これ又水邊によせて、橋の縁よ

りいひならはしたる物か【拾遺集】

〽中〳〵にいひははなたてしなのなる木曾路の橋のかけたるやなそ　源頼光

かゝる哥の心ばへにもかよふなるべし。また古は軍營へも妓を迎へし事有。妓者待ニ軍士無キ妻者ヲと見え侍る。妓は十人にすぐれたる奴を見立て妓に仕立る故に、奴の字の上に十字を冠らしめて妓字とすともみえたり。又花柳に入の客を呼て大盡といふを、大神になそらへてみな神樂の縁語をつけたる物か。末社・察頭・御幣持・ヲヒヤル（笛の音によるか）神なとゝよぶ類之。妓有と云物有。若いものといふ。ぎうは牛にて牛は鼻にてつかふ之。又ぎうは花にてつかふ之（花は客の賜物之）又は遊君を花と見て花に遣はるゝといふ意にもあらんか。既に忘八屋の妻を花車といふ。花をまはすといふ意之。大坂の新町はいにしへの神崎を此地に引たる遊所之。遊女の詞一格有。又京都にて西嶋訛といふは、嶋原詞と云事之。たとへば祇園町にて『なさるか』なはらんかなどいふを、島原にては『なますか』なませなとゝいふ。江戸吉原にて『よくありんすといふを、京にては『よいわいなあといふ。吉原にて『すきんしんよといふを、京にては『すかんわいなあと云。如此の妖言は、其ひとつ二ッをあげて省て記さず。又いはく、遊女は老去まて眉を描しにや【金葉集】

〽さりともとかく眉墨のいたつらに心ほそくも老にけるかな

遊女を君といひし事は【彌世繼】ニ云、とをとうみの國はしもとの宿につきたるに、例の遊女えもいはずさ裝

うぞきてまいれり、頼朝卿うちほゝゑみて
へはしもとの君に何をかわたすべき、と有ければ、梶原平三景時下の句つかうまつりしことなと有。爰に
略す ○傀儡は美濃國野上ノ里なと共外國〳〵の驛舍に有て、今云人形なとまはして旅客をなくさめし遊女
之。今時飯賣又飯盛なといふも彼傀儡の類にや

○遊客の曲廓に至るを京都にて。騒と云。江戸にて。そゝりと云。長崎にて踹ふりといふ ○京大坂にて茶
屋とよぶは、芝居の茶屋又は水茶屋の事を云。遊里に有茶屋はみな揚屋といふ。江戸にては吉原中ノ町共
外残らす茶屋と呼なり

○京大坂の旅人宿の下女を。はすはといふ。東海道筋にて。をじやれといふ。越後にて。しやくといふ（す
こしの流をくむといふこゝろなり）。相州小田原邊にて。ばくといふ（遊女をよねといへは、米に對したる
麥なり）。勢州にて。出女房といふ。又同國及美濃にて。もか共云。遠州にて。やぞうといふ。信州輕井澤
にて。をしやらくといふ。出女は驛舍の婢之。【風俗文選】に出女ノ說有、今こゝに贅せず。旅篭屋とい
ふも古くいひつたへたり【萬葉】ニ八多篭良と書【和名】ニ篼 飼レ馬籠一也と有。又西國及東國の童謠に、旅
篭はいくら、十三はたごといふ事あり。いにしへ鳥羽街道にて十三錢の旅篭ありし事なりとぞ

**夜發** やほち【和名】 ○京大坂にて。そうかといふ（いにしへ辻君立君なといへるものゝたくひか、大坂にて濱君
なとゝ古くいえり）。江戸にて。よたかといふ。紀州にて幻妻といふ。長崎にて。はいはちと云。四國にて。

けんたんといふ（間短と書か）。大坂及尾張にて人の妻をげんさいと云。是は罵る詞に用ゆと見えたり。【春秋左氏傳】昭八年有仍氏ノ女黛黒シテ而光リ可ニシ以テ鑑ニ名ケテ曰フ玄妻ト。

**漉酌奴**

ろくしやく　○京都にて造酒屋の下部を。ろくしやくと云（又乘物を舁ものをもいふ）東國にては造酒家の桶の大いなる物をいひ、又乘物をかくものをいふ

或云、主人たる人の心を京間六尺五寸間にたとへ、下男の心を田舍の六尺間にたとへて、下部たる物を六尺とはいふ也。　案に、酒家の下男をろくしやくと名くるは、酒を漉酒を酌を役となすものなれは、漉酌といふ意を用へきか。又。乘物を舁ものをろくしやくとよぶは【史ノ始皇本紀】ニ秦ハ水德を以て王たり、故に六の數を用ゆ。輿は六尺なり、と見えたり。しかれは輿の六尺の數よりろくしやくの名も出たるにや。又かの乘物舁く者はきはめて長高きものなるが故にかくなつけたる歟

○酒製事を司とるものをとうじと云は、一說にいにしへ藤次郎と云ものよく酒をつくる、是とうじといふは爰にはじまるといふ。又一說に頭兒と書て酒家のかしらおとこといふの儀なりと。又異國にては杜康よりはじまりたれは杜氏なりといふ說有。【東雅】ニむかし酒造司に大刀自・小刀自・次刀自とて三ツの酒造る壺有ける。其大刀自は酒三石ばかり入し物と。後に酒つくる人をも刀自といひしは、古よりいひつぎし言葉なるか、彼酒造司の刀自は、三條院の御時大風に司たふれし時に、自らちわりてけりと古きものにしるし置けり。是等の事の如きも、世には異國のことなど附會していふ說ありと見えたり、と有

**奴** 〇酒狂人を東國にて。なまゑひ又よつぱらひといふ。大坂にて。よたんぼといふ。遠江にて。泥ぼうといふ(酔て泥の如しといへるこゝろにや)。薩摩にて。酔食ひといふ。肥前唐津にて。さんてつまごらと云
しもへ(俗に下部と云、僕をなし)〇上總にて。けご(けごは古きことば也)越後にて。なごといふ。備前にて。できといふ(できは東國に云やろうをなし)。京にて。久三(一季奉公人をいふ、江戸にてはわたりものといふ)

**陰陽師** をんみやうじ(をんやうじと唱ふ。然ともをんみやうじとよむ也)〇備州にて。かんばらといふ(尾州にて寒中に寒ッの御祈禱寒はらひといふて、鈴をふりてよびありく有、此たぐひにや)京にて。しやうもんしと云(唱門師は、人の門にたちて金鼓を鳴らし、米錢を乞ふ僧の事也。しやうもんしとよぶは心得違なり)

**梓巫** あづさみこ〇東國にて。降巫又口よせといふ。播磨にて。たゝきみこと云。中國にて。なをしと云〇京にて。大原神子といふを、東國にて。かまはらひといふ

**氏子** うぢこ〇山城紫野にて今宮の氏子を。御幣子といふ

**盜賊** ぬすひと〇美作邊及東海道にて。じらといふ(中國四國ともにまれにじらといふ、但しらなみの略語にや。白波ノ故事有【後漢書】ニ出)武藏及上總下總邊にて。せれうともいふ。近衞龍山公薩摩の方言にて詠給ふ歌に

〽ぬすとでゝおらぶにはたとたまかりてくわくさつからにせゝくりそすや

〇須利　東國にていふ（すりはぬすびとの梵語之とぞ。　又【三才圖會】ニ設有略ス）江戸にて。きんちやくきりと云。上總にて。さがらといふ。　播州にて。ひるとんびといふ（とんひは鳶之。ものをさらふと云心とかや。東國にてまれ〳〵にかくもいふ之）。

〇かたり　東海道及中國にて。ごまのはいといふ。日光道中にて。道中どつこと云。南部にて。よろ〳〵と云

乞人　ものもらい　〇江戸にて。乞食といふ（【法華經】ニ清淨乞食又乞食頭陀ノ行これは僧を云）長崎にて。ばん藏又。山ばん、中國及四國又奥羽より越後越中邊にて。ほいたうといふ。　【庭訓抄】ニ陪堂飯米を副る僧なりと有。又筑紫にて。ごうといふ。此國にてはこじきといふものは癩病人なり。江戸にていふ菰かぶりといふものをへいたうと云。上總にて。へいたう是は乞食之。下總にて。氣らくといふ。　肥ノ唐津又は薩摩日向にて。ぜんもんといふ。京にて。ばんたといひ又ひでんじといふ。大坂にて。垣外といふ

今按に、悲田寺は京都鴨川西の邊に有。【拾芥抄】ニ云、聖武天皇施藥。悲田の二寺を建て、施藥院は大人の病を療し、悲田寺は小兒及乞食の病を治す。後終に乞食の寓と成よし見えたり。今におゐて癩病人の親族に捨らるゝもの般若坂に集り、往來の人に物を乞ふ。【續日本紀】云、武州入間郡の界に悲田所を置と見えたり。然らは京師のみに限らす、所々に在し事にや。又聖德太子悲田院を建て郭内に居らしむ、魁首を長吏として郭外のものを非人とす。故に今も東國にて穢多を呼て長吏といふはかゝる遺風にや。（或說に、

癩病人をかつたいといふは、悲田院と書て悲田院より起たる名之といふ。是は鑿說也。【證治要訣】に癩大と有。又關西に物よしといふもの此たぐひ之とぞ。また乞食は乞食の事にて別之、混ずべからず。【土佐日記】【伊勢物語】等にも見へたり。又增賀聖のいせより裸になりて、かたいだにこそよけれ、と大路を讀て歸られしなど今いふ乞食の事之。【發心集】（增賀傳云）名聞こそくるしけれ、乞食の身こそたのしかりけり。此事徒然草にも見ゆ

**罘兒**　ゐた（和名ゐとり）○近江にて。くぼといふ。備前にて。よろと云。薩厂にて。人外といふ。東國にて。かはだと云。上總下總にて。かはぼうといふ。越後にて。ぶんじと云。同國長岡にて。じなみといふ。奧羽にて。かんぼうと云（革坊なるべし）

**髫**　すゞしろ（みどりこのうふ髪、百會のうしろにのこりたるをいふ）○江戸にて。けしぼうずといふ。上總にて。さらげといふ。相摸にて。なかやまといふ。　韃靼の人物は皆かくの如し。江戸深川に住しその女は勢州山田の產にして度會氏也、老後に髮を剃といへとも、神家の女なれは僧形を忌て罘兒のごとくに髮を殘して剃たり。風雅の鐵心に男女の情をわすれたりと常に語られしとぞ。其貞賞すべし
○髮の結ひめを京にて。わげといふ。江戸にて。まげといふ。いせにて。ゐびと云（同國にてゐびをりと云を江戸にてまげぶしといふ）○角前髮といふを、京大坂にて。すんまと云。肥前佐賀にて、あまじほと云。肥後にて。かどすと云。薩厂にて。りはと云。上總にて。ごひたいといふ

**眉** まゆ ○關西にて○まゆげといふ。東國にて○まみあいといふ。奥刕にて○こうのけといふ。常陸及上總にて○やまといふ

**腹** はら ○畿内近國及中國四國にて○ほてといふ。東國にては腹とのみ唱へてほてとはいはず。然ともほてくろし、又ほてつぱらなどいふ詞有。ほてくろしと云は【枕双子】ニ腹黒(はらきたなし)とあるにをなじ。又東國て臍黒(へそぐろ)といふ詞もをなし心ばえなり

案に、いにしへ相撲取をばほてと云けるゝ。【三代實録】ニ寂ハ相撲ヲ云と有。今いふ關取といふもの是也。

腹をほてと云も、すまひとりを寂(ほて)といふより出たる名にや、未詳

**膝** ひざ ○豐刕にて○つぶしといふ。中國にては○ひざのさらといふ。薩广にて○ひざつぶしと云。奥刕南部にて○ひざかぶと云。越後にて○ぶしやかぶといふ

**尻** しり ○相摸の三崎にて○でんぼと云。備後にて○こつべといふ。伊豫にて○つへといふ

**陰** へへつび ○奥羽及越路又尾張邊にて○べゞといふ(關西關東ともにべゞといふは小兒の衣服の事なり)上總下總にて○そゝといふ。此外男女の陰名國〳〵異名多し、略す。(江戸にて物のそゝけたつなといふ詞有、和泉及遠江邊にてはほゝけたつと云。江戸にてはさはいはれぬとばなり)

**腨** こむら ○東國にて○ふくらばぎといふ。信濃にて○たはらつばきと云。中國にて○ひるますぼといふ。讃岐にて○すぼきといふ。伊豫にて○ふくらと云

踝　くろぶしつぶし（長崎にて○とりのこぶしといふ。播磨にて○つくるぶしと云。遠江にて○うちめぬきそとめぬきと云。三河にて○くろこぶしと云。仙臺にて○たゝみいぼと云。上總にて○うちいしなごそとていしなごといふ

跟　きびすくびす（關西にて○きびすと云。關東にて○かゝとゝ云。安房にて○平三郎と云。遠江にて○あぐつと云。信劦にて○あくつと云。陸奧及越後にて○あぐといふ。九州にて○あどゝ云

物類稱呼卷之一終

諸國方言

# 物類稱呼

禽獸
魚虫

二

# 物類稱呼卷之二

## 動物

**馬** むま ○下總國にては。まあとよぶ。同國猨嶋郡及び下野國にては。まあめといふ。其外此國にて。蚊め。とんぼめなど﹅下に「め」の字を付てよぶ。是は今つばくら。はたをりむしなどいふ物を。いにしへつばくらめ。はたをりめ。といひしたぐひにて、古代の語の遺たるものなるへし。牡馬を伊勢國にて。まる馬といふ。牝馬を奥州南部にて。かけだといふ。西國及四國又は上總にて。だまとも。だ馬ともいふ。駝は和名。におひむま、今いふ小荷駄なり。又諸國にて。ざふやくと云。其意は軍馬に用ひず、もろ〳〵の雜役につかふ故之

**牛** うし ○特牛を畿內及び中國西國ともに。こつといと云。東國には。こてといふ。遠江國にては。あこと云 ○犢を四國にて。べゞの子といふ。中國東國ともに。べことといふ。又こつていといひ、こてといふは【和名】ことひの誤なり。又牝牛は諸國ともに。あめうじと呼なり

**野猪** いのしゝ ○牡を四國にて。うのをとよぶ。牝を。かるいといふ。兒を江戸にて。瓜ばうといふ。畿內にて。こぶりことよぶ

**狐** きつね ○關西にて晝はきつね、夜は。よるのとのと呼ふ。西國にては。よるのひとといふ。又關西にてすべて。けつねとよぶ之。又哥には「きつ」とも詠し【詩經】には。くつねと訓たり。又東國にては晝はきつね、夜

は。とうかと呼。常陸の國にては白狐をとうかといふ。是は世俗「きつね」を稲荷の神使なりといふ故に、稲荷の二字を音にとなへて「稲荷」と稱するなるべし。又晝夜とかはりて物の名をよびわくる事あり。予思ふに婦人兒女のものにをそれ。又は物いまひする人、かゝる迂遠の說を設たるなるべし。或は蛇の事を夜は「長虫」といひ。又灯心を「やせおとこ」と云、灯心を調る事をば「やとふ」と云。又日くれて酢を買ふ事を忌む。若もとむれば「酢」とは呼ず。「あまり」といふ。此ことは【職人盡歌合】にも見へたり。又京都に。「ひめのり」といふ物を晝は「のり」といひ、夜は「ひめのり」とよぶゑ

## 猫

ねこ　○上總の國にて。山ねこと云（これは家に飼ざるねこなり）關西東武ともに。のらねことよぶ。東國にて。ぬすびとねこ。いたりねこともいふ

夫木集へ　まぐす原下はひありくのら猫のなつけかたきは妹かこゝろか　仲正

この歌人家にやしなはざる猫を詠ぜるなり。又飼猫を東國にて。とらと云。こまといひ又。かなと名づく

今按に、猫を「とら」とよぶは其形虎にたる故に「とら」となづくる成べし。【和名】ねこま、下略して「ねこ」といふ。又「こま」とは「ねこま」の上略なり。「かな」といふ事は。むかしむさしの國金澤の文庫に。唐より書籍をとりよせて納めしに。船中の鼠ふせぎにねこを乘て來る。其猫を金澤の唐ねこと稱す。金澤を略して「かな」とぞ云ならはしける。【鎌倉志】に云、金澤文庫の舊跡は稱名寺の境內阿彌陀院のうしろの切通、その前の畠文庫の跡ゑ。北條越後守平顯時このところに文庫を建て和漢の群書を納め、儒書には黑印、

佛書には朱印を押と有。又【鎌倉大草紙】に武州金澤の學校は北條九代繁昌のむかし學問ありし舊跡なり、と見へたり。今も藤澤の驛わたりにて猫兒を貰ふに、其人何所猫にてござると問へば、猫のぬし是は金澤猫なり、と答るを常語とす

花山院御製歌に

夫木集　へ敷しまややまとにはあらぬ唐猫を君か爲にと求め出たり

又尾のみじかきを土佐國にては。かぶねこと稱す。關西にては。牛房と呼ふ。東國にては。牛房尻といふ。

【東鑑】五分尻とあり

**鼠**　ねずみ　○關西にて。よめ又よめが君といふ。上野にて。夜のもの又よめ又おふく又むすめなといふ。東國にも。よめとよぶ所多し。遠江國には年始にばかり「よめ」とよぶ。其角か發句に

へ明る夜のほのかにうれしよめがきみ

嵯峨住去來が曰、除夜より元朝かけて、鼠の事を「嫁か君」と云にや、本說はしらずとぞ。野坡か云、嫁が君は春氣にてねずみの事なり。今按に、年の始には万の事祝詞を述侍る物にしあれは寐起と云へる詞を忌憚ていねつむ。いねあぐるなど唱ふるたぐひ數多有。鼠も寐のひゞきはべれは、嫁か君とよぶにてやあらん。又春氣といふ時は春三月のことなれはいかゞ有べき。尙說有。こゝに略す

**鼴鼠**　うごろもち　○京にて。うごろもち、東武にて。むぐらもち、西國にて。もぐら、中國にて。むぐろもつ、四國にて

○をごらもち、遠江ニて○いぐらもち、大和及伊賀伊勢にて○をごろもち、越後にて○土龍といふ

**蝙蝠**　かぶもり（いにしへに、かはほりといひしなり）○畿内にて○蚊くひ鳥とも云。近江にて○蚊鳥とよぶ

【新撰六帖】に衣笠内大臣

〽日くるれは軒に飛かふかはほりの扇の風もすゞしかりけり

又、【枕草子】に過にしかたこひしきもの。こぞのかはほりと書るは扇の事なり

**鼯鼠**　むさゝび ○畿内にて○野衾といふ。東國にて○もゝぐはと呼ふ。西國にて○そばをしきといふ。薩摩にて○もまといふ

もまとは【和名】もみの轉したるなるへし。古哥に大和國春日山高圓、津國三國山などよみあはせたり。東國にては日光山にすめり。其鳴聲人の呼がことし。常に梢に穴居して夜高きより飛んて人の面をおほふ。ひきゝより高きに上ることあたはず

夫木〽春日山夜ふかき杉のこすえよりあまた落くるむさゝひのこゑ

**川童**　がはたらう ○畿内及九州にて○がはたらう又川のとの又川童とよぶ（九州に多し、わきて筑後の柳川尤多し）

周防及石見又四國にて○えんこうといふ。

土佐國の土民は○ぐはたらう又かだらう又えんこうともいふ。其手の肱よく左右に通りぬけて滑なり。猨猴に似たるが故に、河太郎もえんこうといふ

東國に。かつぱと云（川わつぱのちゞみたる語也。小兒をしかるにも（ママ）かつぱともいふ）。越中に。てがはらと云。伊勢の白子にて。かはら小僧といふ

其かたち。四五歳ばかりのわらはのごとく。かしらの毛赤うして頂（いたゞき）に凹（なかくぼ）なるさら有、水をたくはふる時は力はなはたつよし。性相撲（せいすまふ）を好み。人をして水中に引入んとす。或は恠（あやしみ）をなして婦女を姦婬（かんいん）す。其わざはひを避（さく）るには。猿（さる）を飼（かふ）にしかずとなん。又九州にて川渉（わたり）の人詠吟する哥に

へいにしへのやくそくせしをわするなよ川だち男氏は菅原

右の哥を吟詠すれば害をのがるゝよしいひつたふ

雎鳩　みさご　○播州にて。みさゝぎ、伊豆駿河邊にて。びさご、薩摩國にて。びしやごといふ

びさご。びしやご、ともに。みさごのあやまりなり

刀鴨　こがも　○越後にて。あじとと云。奥州に。たかぶと云。關西關東にて。たかべといふ。則和名なり

鸊鷉　かいつぶり（是和哥に詠する「にほとり」也。俗に「いよめ」といふ）○畿内及中國東武共に。かいつぶりといふ。上總にて。みほといふ。長崎にては。鳰（にほ）といふ。土佐國にて。いちつぶり又いよめといふ。遠州にて。めうちんといふ。東國にて。むぐつ鳥、武の神奈川にて。でつてう。むぐつてうといふ。上州。かはぐるまといふ。信州にて。めうないと云。駿河にて。ひやうたんごといふ。仙臺にて。かはきじといふ

白石翁云。「にほ」とは湖（みづうみ）をいひぬれは。「にほ」とは湖中（こちう）にあるの義にやあるへし。又「かいつぶり」とは

其水に没する音をかたどりいひしと見えたり。又俳諧師支考がいはく。にほの海とは鳰鳥のすむ程のさゞ波なればにほの海と云、　今按に「鳰」は「にほひ鳥」の意之。にほの海とは。うら／＼と日の出るに海のにほへるなり。にほふとは香のことにあらず。艶色のことゝ。光源君のことを。桐壺の巻に此御にほひにはといえり。又法橋昌長翁のいはく。研師刃を研上て。それに色を付るをにほひをつけるといふ。則鳰の脂を引となり。又にほふ霞なども日に映ずるをいふなり

**鷗**　かもめ　〇中國に。うはみと稱す。肥前にて。ねこどり　又大雁といふ。（沖にすむ鷗は大なるもの之）土佐國にて。かごめ共いふ。上總及武の品川にて。うみねこ、本牧にて。濱ねことも呼ぶ。近江にて。苗代鳥又　。ねこさぎといふ

鷗の鳴く聲猫のなくに似たり。故に異名とす。【萬葉集】に加萬目又鴨妻と書り。鴨妻とは鴨のごとくにして小しきなるをいひしなるへし。一説に。沖にあるをかもめ。礒に集をいそちどり。河に詠合するを都鳥といふと。直龍翁の説なり未詳

**魚狗**　かはせみ　一名少微〇中國に。すどり、京都及東武にて。かはせみ、武州及下野にて。そな、奥州仙臺にて。すなむぐり、出羽國にて。るり、下總にて。じよな、甲斐にて。そびな、駿河國沼津邊にて。そびとり、加州にて。むぐり、美作及備前にて。しよに、伊勢及出雲肥劦西國にて。しやうび（或はしやうびん共いふ）薩摩國にて。ひすい、と稱す

「かはせみ」といえるは深山そびと云物あるに對しての名なり。薩隅に深山ひすいとよぶ。東國にて深山しやうびん共、或は所によりては水乞鳥と云。又淸盛などゝ異名す。其故は此鳥飢渇して水を好によりて名付と云ッ。關西にて雨乞鳥と稱するも此鳥なるへし【舊事紀・古事紀・日本紀】ともに翠鳥と有

鵲　かさゝぎ○西國に有。唐がらすと云、又。高麗烏と云。五畿内及東國になし、鳩より小し、羽に黑白有、天武帝ノ御時新羅より鵲一隻を献す

信天翁　らい○九州にて。らいと云。土佐國にて。とうくらうと呼。丹後にて。あほう鳥と云。長門國にては。沖のたゆふと云（此鳥うす靑く白し、觜長く脚赤し、海邊にあり）

加賀國白山に鴷と云鳥有、同名異物也

〽白山の松のこかけにかくろひてやすらにすめる鴷の鳥哉

秧鷄　くゐな○仙臺にて。なます鳥と呼（其鳴聲、戸をたゝくに似たり。因てたゝく水鷄と哥に詠す）

鴽　かやくゞり○東國にて。ぼとしぎと稱す。駿河にて。かんしん鳥と呼

〽をく霜にかれもはてなてかやくきのいかて尾花の末に鳴らん

【月令】に三月田鼠化して鴽と有、是なり

蒿雀　あをしとゝ○遠江にて。靑ちゝんと云。東國及四國にて。あをじと云。美作にて。靑じやうと云（鵐に似て靑色なるものなり）

「青しとゝ」を略語して「あをじ」と云。鵐は山林に在て原野にいでず。「青しとゝ」は叢林にすむものなり

畫眉鳥　ほうじろ○遠州にて。赤ちゝんと云

其聲「ちゝり」といふ物を片鈴と名付、又ちりゝころゝちゝりと云か如のものを諸鈴と云、此鳥巧に聲をなす、故に東國にては「一筆令啓上候」と鳴くと云。遠州にては「つんと五粒貳朱まけた」と鳴くと云。薩州にては「をらがとゝは、三八二十四」と囀と云。歐陽公カ詩ニ百囀千聲隨ツテ意移ルと有。異域同談なり

百舌鳥　つぐみ○五畿内の俗。つむぎと云。關東にて。てうまと呼。加賀にて。かごめと云。遠江にて。つぎめと云。仙臺にて。つぐと云

【本朝食鑑】鶫【釋名】馬鳥　鳥馬也。螻蛄をつなぎ置て此鳥を取。東國にて鳥馬をまはすと云。又諺に「けら腹たてば、つぐみよろこぶ」といえるもかゝる事を云にや。京師にて除夜毎に是を炙り食を祝例とす

繡眼兒　めじろ○薩摩にて。花吸と云。上總にて、をかまの鳥と云

布穀鳥　つゝどり（いにしへふゝどり）○伊豆駿河邊にて。すみだ鳥と云（土人のいはく此鳥鳴頃田の水澄とぞ）

蚊母鳥　かつこうとり（俗かんこ鳥共いふ）○甲州にて。豆うへどりと云。東國にて。豆まき鳥ともいふ。【大和本艸】にいはく、俗にかんこ鳥を杜鵑の雌之と云。もの遠からず【本朝食鑑】に云、ほとゝぎす樹に上ツて鳴く時、其かたはらの樹邊に必聲なきほとゝぎす有、是則チむしくひ鳥之。故に世俗ほとゝぎすの雌之とす。

今按に、此說による時は、ほとゝぎすの雌は虫喰鳥成へし。かつこ鳥をそらくは杜鵑の雌にてはあるへ

からす。杜鵑は鶯の巢をかりて子を生し、かつこ鳥は頰白鳥（はうしろ）の巢に子をなすものなり

**杜鵑**　ほとゝぎす○伊豫國松山邊にて。こつて鳥と稱す。是子規（ほとゝぎす）一名を沓代鳥（くつてどり）といふ。「くつて」「こつて」轉したる詞なるべし

**燕**　つばめ○但馬國にて。ひいごと云。播刕にて。ひごと呼
【和名】に【爾雅集記】を引て「つばくらめ」と註せり。今俗に「つばめ」といひ、又「つばくら」と云は、後人其語をはぶきて呼也。片田舍の人は「つば」とばかりも呼。又哥には。「つばくらめ」とも「つばめ」とも詠す。「つばくら」とは詠格なし。俳諧には「つばくら」共作例有、又「つばくらめ」とは。土くらひの和訓之と篤信翁の說なり。又胡燕。越燕。漢燕等有。胡燕は「やまつばめ」と云、越燕よりは稍（やゝ）大にして山上岩穴（がんけつ）にすむ。巢は横に長く脇の方より出入す。越燕は巢の上より出入す。但馬國村岡にて「妙見ひいご」と云は胡燕なるべし

**斑鳩**　つちくればと（古俗の稱之）○東國にて。きじばとゝ稱す。西國にて與惣次（よそうじ）ばとゝ呼（關西にて。としよりこひと鳴くといへり。東國にて〳〵てゝつぽう〳〵。かゝほう〳〵と鳴くといふ）

**木啄鳥**　てらつゝき（又けらつゝきといふ）○江戸にて。きつゝきと稱す。又東國にて。をげらと呼。下総にて。番匠（ばんじやう）鳥と云

**鴞**　ふくろふ○常陸國にて。ねこ鳥と稱す（この鳥よく鼠を取によりてかくなづくるにや）上総にて。よごろうと

呼。伊勢白子にて。鳥追といふ

【擧白集】に「のりすりおけ」と鳴く。をのれが毛衣の料にやと有。又俗に「夜明なば巣つくらう」と鳴とも、又片田舍の人は「五郎七ほうこう」と鳴く共、薩摩國の人は「此月とつくわう」となくといへり

**鷦鷯** みそさゞい（上古さゞき）奥羽にて。みそぬすみ、仙臺にて。みそくゞり、下野にて。みそつぐと呼。西國にては。みそつ鳥と云

或說に。此鳥溝の邊に三歲棲て長す。故にみぞさんざいと名付るを、みそさゞいといふとぞ。　今按に。「みそ」は「溝」なり「さゞい」はいにしへ「さゞき」といひし名の轉したる也。「さゞ」とはさゝやかなる意。小き事也。三歲といへる義にはあらざるべし。又鵙と云鳥にはもろ〱の小鳥怖れて飛去る。鵙も鷹の屬也といふ。それが中にみそさゞいは曾て怖れず。却テ蜘蛛其外の虫を捕て鵙にあたふ。其時悅ぶ躰にて食ふ。予正サに是を見ル

**鶺鴒** せきれい（和名にはくなぶり、日本紀私記ニとつぎおしへどり）○播磨にて。かはらすゞめと云。西國及四國又は奥羽にては。いしたゝきと呼。伊勢白子にて。はますゞめと云。遠江及上總常陸にて。麥まき鳥と云。東國にて。せきれいと云。薩摩にては青黃色なるものを。いしたゝきと云。黑白なるものを。せきれいと云（舊說には。にはたゝきとも、いしたゝきとも、いなおふせ鳥とも見えたり）

**剖葦鳥** よしはらすゞめ ○畿內及勢州邊。よしはら雀と云

「よしはら雀」といふは葭割雀なり。葭をわりて其中の虫を喰ふ、故に此名有、と石川丈山子の説なり出雲及西國四國にては。ぎやう〳〵しと呼（土佐の國にては。むぎからし、又をげらなどゝもよぶ之）加賀にて。よし鳥と云。播刕にて。けゝしと云。仙臺にて。から〳〵しと云。東國にて。よしきりといふ「あし」を「よし」といへるは、物忌するものゝ云ゟなるべし、と徂徠翁の説なり。此「よしはら雀」の難波のよしあしも分たず、鳴聲のかまびすしきはいかにぞや。〽よしきりの浮世もよしやあしの上　吾山

鯉　こい○武藏國にて鯉魚の小なるを。ぶんしろと稱す是は文正といふをあやまりて呼之。或時予が僕の、鯉を庖丁せんとて筒井のもとへもて行て井の中へ落しぬ、といひはべりければ、狂哥よみける

〽つゝいづゝ井筒にこひを落しけりむかし男も今の男も　吾山

鱮　たなご○關西にて。たなごと云。關東にて。にがぶなと呼。つくしにて。しぶなと云（たなごは鮒の類之。又海に鱮魚有、同名異物なり）

鯔　なよし（此魚の惣名之。世にぼらと云。日本紀に云口女これなり）○極小なる物を江都にて。をぼこと云（東國に小兒をおぼこと云。故に此魚の小なる物を云）加賀にて。ちよぼと云。土佐にて。いきなごと云（土刕にてはいきなごを塩辛とす、鍛びしことよぶ）小なるものを、關西關東ともに「いな」と呼（いなは稲の莖くされて魚と成といへり。然る時は「いな」とは稲魚なるへし。いにしへは魚を魚と稱せしなり）洲走、遠刕

にて。はしりと唱ふ

漁人簀の四方に網を張て是をとるを簀引と云。因て簀走の名有。一說に、此魚河と海との潮境を往來する頃を賞して洲走の名有とぞ。江戸にては六月十五日より洲走と呼、十四日迄を「いな」と云也。九月にいたり泥味なく、脂多くして、いよ／＼味ひ美也。色又さらし洗ふたるが如し。此時を畿內にて。こざらし江鮒と稱す、泉州堺の名產なり

。なよし。ぼら。伊勢ごい、長崎に。まくちと云。勢州及尾張にて。めうぎちと云

「いせごい」とは勢州鳥羽の海濱にて多く是をとり、又鯉に類するをもつて「いせ鯉」と云、關西の稱なり、東國には「ぼら」とのみ呼之。又「まくち」とは上古「くちめ」といひし詞の遺りたる之。「めうぎち」とは名吉の音讀を用たる之

**棘鬣魚** たひ○豐前にて。へいけと稱す。蟠龍子ノ曰、鯛をへいけと云は平魚なるべし。【延喜式】に平魚。今按に、東武にて弁慶鯛といふ物を、肥前唐津などにては「へいけ」と呼、又土佐の海に「へうだひ」と云。其子を「へうご」と云有。是も平魚の轉語なるべし

。櫻鯛（堺鑑に櫻鯛。泉州堺の名產なるよし見えたり。東武にても櫻の花盛の頃此名有）。麥藁鯛、中國四國ともに四月出る鯛を云。前の魚、津の國にて稱す（攝州西ノ宮社前の海上にとる物を前の魚と呼。東武にて江戸前うなぎと云が如し）。甘鯛、畿內西國東武共に「あまだひ」と呼。出雲にて。こびるといふ。關東にて

。奥津鯛と呼（駿河奥津にて多く是をとる。鱗に富士のかたち有と云つたふ）

**烏頰**　くろだひ○東武にて。くろだひと云。畿内及中國九州西國ともに。ちぬだひと呼。　此魚、泉州茅渟浦より多く出るゆへ「ちぬ」と号す。但し「ちぬ」と「烏魚」と大に同して小く別也。然とも今混して名を呼。　又小成物を。かいずと稱す。　泉州貝津邊にて是をとる、因て名とす。　江戸にては芝浦に多くあり

**比目魚**　かれい。ひらめ○畿内西國ともに。かれいと稱す。　江戸にては大なる物を。ひらめ、小なるものを。かれいと呼。然とも類同くして種異也。　常陸上總下總の浦〳〵にて大ィなるを鰈といひ、小なるを平目といふ。　江府の魚市に至る時は則チ名を變ず。　又ある漁子此魚兩種相偶して洋中を游ぐ、頭をならぶる時は左右の違ひ有物なりといへり。　貝原翁はかれいといふはかたわれ魚の略なりといえり
越後にては小なる物を。こつぺらと呼（こびらめと云の訛にや）佐渡にて大ィなる物を。さかむかひと云。江戸にて云霜月びらめを、越後の糸魚川にて。あさばとなづく。江戸に云。ほしびらめを、駿河にて。まつかはびらめといふ。一種。このはがれいと云有（至て小なるものなり）泉州にて。岡田がれいと云

**鞋底魚**　うしのした一名くつぞこ　關西及東國の海邊にて。うしのしたと稱す。江戸にて。舌びらめと呼。　備前には。くちげと云。越前にて。ばゞがれいと云

**幾須古**　きすご○關西に。きすご、江戸にて。きすと云。伊勢ノ白子にて。あめの魚と云（雨ふる日多くとる魚之。故に名とす。然とも別之）紀州にて。だうほうと云

め」と云を「なめる」といえるこゝろにて、駿州には「べろ」と名つくる歟「なめる」とは關東にて云、畿内にて「ねぶる」と云におなじ

保宇保宇　ほう〱○佐渡にて。きみうをと云。薩广にて。ぼこの魚と云

方頭魚　かながしら○參河にて。かなごと云。越後糸魚川にて。いぢみと呼。常陸下總にて。ぎすと云（其かしら角ありてかたし、故にかなかしらといふ）

石鮅魚　おいかは○筑紫にて。あさぢといひ又あかばゑ又山ぶちばゑなど呼。京都にて。をいかは、攝津にて。あかもとゝ云

京師の俗大堰川を略して「おゐかは」と云又赤もとゝ云は赤斑の略なり。又北國にて「おいかは」と呼魚有。同名異物也

鰷　いさゞ○北國にて。かねたゝきと云。京師にて。だんぎばうといふ。京にて目高・いさゞ共に「だんぎ坊」と云。目高の条下にくはし。又俗に「ちりめんざこ」といふは、此魚の乾たる物也。又駿河にて「かねたゝき」と云は別物也

麪條魚　どろめ○大坂にて。どろめと云、筑紫にて。しろうをと呼。土佐國にて。どろめざことといふ。此魚三月海より川水に上るを簗にて是を捕、長三寸、江戸に云白魚より小也。其潔白なる白魚に相同し。氷魚と呼も又是に似たり。近江の湖水、宇治の田上などに產する物也

丁斑魚　めだか○東武にて。めだか、京にて。めゝざこ又。うきんじよ又。だんぎばう。大和にて。こめんじやこ、南都にては。めたゝき、大坂東南にて。うきた、大坂西北にて。こまいじやこ。和泉にて。めたばり、同國堺及近江因幡越前にて。めゝじやこ、伊勢にて。めばや又ねばい、同國白子および美濃にて。こばい、尾張にて。うきす、遠江にて。ねんはち又。めんばい、相摸三浦邊にて。びつこ、出雲にて。めんばち、同國及越後にて。うるめ、伊豫にて。うきいを、土佐にて。あぶらこ、肥前にて。たうを、越中にて。かねさ又。こめざこ、陸奥にて。はりみず、同國南部にて。めざこ又めぬけ、出羽最上にて。じよんばらこと云。　按るに、京都にて目高の異名を「だんぎ坊」とよぶは凡僧の經論も見ずに咄すを、水に放すと云秀句にて、談義坊といふとぞ。又江戸半太夫節の浄瑠理に、くらき御目のかなしさは。月日のかげも水鳥の（下略す）此文句にも「見ず」を「水」に云かけたり。みずの假名は「す」の字也。水はみづにて「つ」の字也。かな違ひ也。然ともくるしからさるか、守武大人の句に

〽ちる花を南無阿彌陀佛とゆふ邊かな。守武は伊勢内宮の神官荒木田氏。連歌を好て【新撰筑波集】にも入し作者也。かつ俳諧の鼻祖なり。右の句は「いふ」を「ゆふ」とせられし也。作例有こと成べし。又此吟を辭世なりと後人おもふはあやまり也。天文十八年八月八日七十七歳にて卒す。辭世

〽こしかたもまたゆく末も神路山みねの松風〳〵

鮫魚　さめ○播州にて。のそといふ。越前にて。つの字と云。その故は。此魚捕て礒へ上れば仮名の「つ」の字の形に似たりとて越前の方言につの字となづくと也。大和にては。ふかと云。さめと鱶魚とは大ィに同しくしてす

こしく異(こと)也。ふかの類多し、或は白ぶか、うばぶか、かせぶか、鰐(わに)ぶか、もだま、さゞいわり等有。皆さめの類なり。四國及九州に「さめ」の稱なし、すべて「ふか」と呼。又江戸にて一種。ぼうさめと云有。下野國宇都宮(うつのみや)邊にては。さがぼうとよぶもの之。江戸にて云。ほしざめを、西海にて。のうそうと云。江戸にて。しゆもくざめと云を、西國にて。念佛坊といふ。是土佐の國にて云。かせふかなり。又土州にて一種。なでふかといふ有、船端(ふなばた)に人立時は、必尾をもてなて落すと之

**王鮪**　しび　○幾內にて。はつと稱す。江戸にて。まぐろとよぶ。江戸にてまぐろのすきみといふものを、幾內にて「はつのみ」と云。又江都の魚店にて。しび。まくろ。びんなが等の品有といへとも、東國の俗皆「まぐろ」と云、然共至て大ィなるなし。むかしは江都の魚市にて「まぐろ」を賣買ふこと有しが、近年は來らすとなん。又「びんなが」といへる物はあぶらを去て肉糕(かまぼこ)となすもの之。又二尺以下の小なるを江戸にて。めじかと云、一名。そうだと云。ひらそうだ。丸そうだなと二種有。京都難波の俗。目ぐろといふ是なり。又二尺已下のものは相摸にて。よかごといふ。一尺余りなるは同國にて。めだいしびと云。本艸ニ鼻ノ肉作シテ脯ト名ヅク鹿頭ニ又名ヅク鹿肉ニと有。是目鹿(めじか)となづくる故有に似たり。一說に目ぢかとは其眼の近きなり、まぐろと云もの之小しきなるをいふ。まくろとはその眼の黑き之。又哥に鮪(しび)と詠り。山邊赤人が藤井の浦にしび釣と詠ぜしたぐひ之

**鰤**　ぶり　○この魚の小なる物を、江戸にて。わかなごと云。五幾內及西國四國にて。わかなと云。又。つばすと云、一尺程なるを、西國にて。目白と云。一尺余り二尺にも至るを、江戸にて。いなだと云。北陸道及奥州にて。ふ

くらぎといふ。関西にて。はまちと云。漸大ィになりたるを、江戸にて。わらさとよぶ。是を北陸道にて。らぎといふ。霜月の頃、三四尺五六尺となる、是則「ぶり」なり。薩广にて。そうじといふ。筑前及上總にて。大うをといふ

**松魚** かつを〇一種。すぢかつをといふ有、皮の上に縦に白き縷三四條有、是を加賀にて。たてまんたらと云。又關西にて。うつわとて小なる物有、又。よこわとよふ有、今按に。うづわ、一名茶袋。又しぶわといふもの有、是等を江戸にて「小かつを」と呼て賣之。然共別類也。よこわと云は「めじか」と云魚の子之

**河豚** ふぐ〇京江戸ともに。ふぐとよぶ。西國及び四國にて。ふくとうと云。又江戸にて異名を。てつぽうと云。其故はあたると急死すと云意之。又。しほさいと云有、小しきなる物なり。肥前の唐津にて。ちんぶくとうと云是之。又まふぐといふ魚は、冬の内賞翫す。とらふぐと云は春夏ともに喰ふ也

**鰯** いはし〇をむら女詞之。をほそ同斷。あかいわしといふ物は塩につけたるを云。肥前の長崎にて。からがきと云。中國にて。やすらと云。紫式部いはしを賞して

〽ひのもとにはやらせたまふいはしみづ參らぬ人はあらしとぞ思ふ

【玉葉集】に住吉明神の御哥に

〽いよの國うわのこほりの魚まても我こそはなせ世をすくふとて

**鯷** ひしこいはしの屬之〇相摸及西國にて。かたくちいわしと云。又片口と計もいふ。駿河にて。くだいわしと

云。上總にて。小いわし、下總及常陸にて。せぐろとよぶ。今按に、上總の國にて小いはしと稱すといへども、子の義にはは（ママ）あらず。又鰯の小きをも「小いはし」といふ。秋をもて氣とす、是にまがふなり。ひしこを云は、小きいはしの如しと云意なるべし。又西國の産物に「銀びしこ」と云有。是はこゝに云鯷にはあらず。鰡といへる魚の子を塩漬になしたる物也。又鯔の小しき物を製したるをもいふ也。なを蟹の条下を合せて見るべし。又。ごまめと云物有、是はいはしにてはなし。ひしこの干たる物也。相摸及越後、奥の津輕にて。干鰯と云。仙臺にて。ひいこと云。加賀にて。かいぶしと云。九刕にて。すぼし又。片口とも云。伊賀及伊勢、出雲又奥刕の内にて。田つくりと呼。△按に、ごまめとは常の稱号也。春の始に小殿原又田作りなと唱へて祝し侍る。是稻梁を植る物。干鰯干鯷をもつてす。故に田つくりの名有。又すぼしと云るは。簀の上に干を云也

**青魚**　かど　一名にしん〇つくしにて。高麗いわしといひ又。せがい共云。阿部氏の云。此魚あつまる時は沫を吹て水面に浮ぶ。雪の降たるが如し。網をもつて是をとる、腹に子有て滿り。干て數の子と云。和俗鯡の字を用ゆ、東海に出るをもつてなるべし。今按に。津輕にてなまにしと云は干たる魚をにしんといへば生のにしんと云意なるべし。又江戸にて「かどいわし」と云て鰯の中に交りてあるもの也。松前の旅客に問ひ侍しに少しかはる樣におぼへぬると答侍りし

**鯯魚**　このしろ〇此魚の小なる物を京都にて。まふかりと云。中國及九刕共に。つなしと云。薩摩にては。ながさき

と云。此魚長崎に多し、故になづく。筑前にて。はだらごと云。又土佐の海に。はらかたと云魚有。是は「すぢごのしろ」といふもの也。今按に、鯯童と云魚は。江戸芝浦、品川沖、上總下總の浦々より是を出す。西海にはこれなし。鰶の子にあらず。別種也。駿河にてつなしと呼は小鰭也。此國にて「こはだ」と云物は江戸にて。さつぱと云魚なり。このしろ・こはだ・さつぱは是皆種類也。或人の云、世間に子生れて死し、又生れては死す事有。其家にては子生るゝ時胞衣と鰶とを一所に地中に藏れば其子成長す。尤其子一生このしろを食せざらしむ。このしろは子の代なりといひつたへたり。古哥に

〽東路のむろの八嶋にたつ煙誰かこのしろにつなしやくらん

此哥につきては古き物かたり有、普く人の知れる事なれは爰に贅せず

## 鰻鱺

うなぎ○山城國宇治にて。うぢまろと云。此魚の小なる物を京にて。めゝぞうなぎと云。是はみゝずうなぎの訛也。江戸にて。めそと云。上總にて。かようと云又くわんよッこと云。常陸にて。がよこと云。信濃にて。すべらと云。土佐にて。はりうなぎと云。今按に、京都にてうなぎを鮓となすは宇治川のうなぎをすぐれたりとす。よつて宇治麻呂と人の名を以てす。江戸にては淺草川深川邊の產を江戸前とよびて賞す。他所より出すを「旅うなぎ」と云。又世俗に、丑寅の年の生れの人は一代の守本尊虛空藏菩薩にて、生涯うなぎを食ふ事を禁ずと云り。徂來翁【なるべし】に、鳩を八幡の使者、猿を山王の使者と云るも、はちまんの「は」、さんわうの「さ」をとりていへるなるべし。鹿を春日といふも、「か」もじなるべしといへり。此書に傚て考るに、

丑寅の年の人うなぎくふ事をいむは。いにしへうなぎをは「むなぎ」といひしゑ。虚空藏の虚の字「むなし」と訓ずれば「むなぎ」をいみしなるべし。「む」は「う」にかよふゑ。いにしへ「梅」は「うめ」「馬」は「うま」の仮名にて有しが、後に「むめ・むま」と書もおなじことはりなり【萬葉】に吉田連石麿と云人のかたち甚やせたるを笑ひて作たる歌　大伴家持

〽いしまろに何ものまうす夏やせによしといふ物ぞむなぎとりめせ

【拾穗抄】に「むなぎ」は「うなぎ」なりと有、又烏を熊野の神使なりと云。熊野は三山なり、烏に深山烏と云有。山にすみて村里にうつらず。されは三山と深山おなじ音なるゆへ、神使なりといひならはしたる物か。識者のいはく、尾張一宮にて鷄卵を食せず。神代巻發端にはゝかるとぞ。同津島にては鳥を食せず、そさのおの「島」の字「鳥」に書たる本を見しよりゑ。熱田には筍を食せず、やまとだけにてましますゆへとなん。手を打て笑ふべきにもたへず。さいはゞ天下の神人すべて紙は穢たることにつかふまじきやとあり。是等の說爰にあづからずといへども。筆のついでに記て童蒙に知らしむ

**海鰻**　うみうなぎ○畿內にて。海うなぎと云。西國或は伊豆ノ熱海にて。うみぐちなはと云。攝劦西宮海邊にて。へんびと云。此魚海邊の穴の中にあり。漁人多く釣こと有。毒ありと云傳て濱に捨ッ、蛇に似て黃色に黑キ文有

**黃顙魚**　ぎゞ○備前にて。ぎゞ、東國にて。ぎゞう、北國にて。あいかけ、加賀にて。ざす、奥劦及越後にて。はちうを、越前にて。あかにと、出羽にて。がばち、上總にて。川ばち、伊勢にて。ども、土佐にて。ぐゞといふ。此魚背の上に

刺有て人を螫す。ごき／＼と鳴く。人これを捕ふ時ははなはだかなしむ聲を出す。今按に、享保十三年戊申ノ秋、東國所々洪水せしころより此魚うせたり。しかふして後鯰と云魚東國に生ず、うたがふらくはぎゞ鯰に變したる物歟。

鯰魚　なまづ○安房國吉濱村わたりにて。なまだといひ、又。にぜんぎやうと云。今按に、此郷に妙本寺と号する日蓮宗有、此宗派にては大乘法を受持して一切諸經は二漸の經行なりと誹謗す。爰に淨土宗門の在家ありて鯰を「なまだ」と呼、「なまだ」とは「南無阿みだ」の名号の略語なれば、それに對して日蓮宗の里民は「にぜんきやう」と呼にてやあらん

杜父魚　かじか○京大坂にて。いしもち、加茂川にて。ごり、嵯峨にて。いまる、伏見にて。川をこぜ、近江にて。むこ、又どうまん又いしぶし又ちゝこ、九州にて。どんぽ、筑前にて。ねんまる、越前にて。かくふつ、出雲にて。こす、伊賀にて。すなほり、相摸及伊豆駿河上總下總陸奥其外國々にて。かじかと云。駿河沼津にては。かじいと云。今按に、此魚種類甚多し、其水土によりて形すこしかはり、大小の品有といへ共、一類別名之と云り。江戸にて賞する鯊、これ又品類多し。まはぜ。三年物をいふ。道風の淨瑠理に、はぜ釣ばりに三年物、戀一ト通りはこつちのゑて。とあるは「はぜ」におかしき異名あればふくみて書る文なり。又。だぼうはぜ、是は下品也又。しまはぜといふ有、是かじかゝ。又いし臥といへるは【源語玉霰巻】に、ちかき川のいし臥などやうの消遙し給ひて（下略）【河海】ニちかき川とは賀茂川之と有。又下賀茂糺森の茶店にて「ごり」を調味して「ごり汁」と名

付て賣之、又加賀越前の土人は「ごり」を鮓となしてたしみ食ふ、これを蛇の鮓といふ。又木曾の谷川などにて諸木の倒たる有て、年を經枝くさりて石鮎に化すといへり。それを土人ごり木といふ。又かくふつといふ物は、北海にて雪霰の降るとき腹を上になして水上に浮ぶ魚之【續猿蓑】ニ詞書有て

へ角鮒や腹をならべて降るあられ

鮇魚　かまづか【倭名抄】○京にて。かまづか、鴨川にては。かまきすご又かなくじりと云。其形はぜに似て又きすに似たり、大ィなる物をかじかと云

吹沙魚　かなびしや○京にて。かなびしやと云。四國にて。じんぞくと云。肥前にて。じやうとくといふ。江戸にて。こちじやこと云。湖水及谷川の石の間に住小魚之。形色共に鯒に似て小さし。其大サ一二寸細なる黒點文有、其尾岐あらず

鰺　あぢ○紀州にて。とつかは、土佐にて。とつぱこと云。小しきなる物を、西國にて。こびらこ、相州にて。ぢんだんご、加賀にて。さくざねと云。此魚播州室ノ津にて多く捕る、故にむろあぢの名有

文鰩魚　とびうを○中國及九國にて。あごといふ。婦人臨產の月是を帶れは產やすしと見えたり。今又乳のたるゝ藥なりとて婦女は珍重する也

和加佐幾　わかさぎ○駿河にて。すゞめの魚、伯耆にて。しらさぎ、常陸にて。さくらうを、若狹にて。あまさぎと云。今按に、わかさき、又あまさぎ、同物之。若州三方の湖中に多くこれを獵す。又常州櫻川に櫻魚と云有、是江戸に

ていふ「わかさぎ」也。又俳諧季立の中春の部に「櫻魚」と云有、これは櫻の花盛のころ出る魚を云。なをさくら鯛・柳鮠など賞するか如し

**鰡** しいら○筑紫にて。猫づら、薩广にて。くまびき、肥前の唐津にて。かなやま又。ひいをと云。土佐にて。とうやくと云。乾て賞翫する時は土州にても。くまびきといふ。江戸にても猫づら又ひいをと云。今按に、この魚海船のかたはらを泳ぐ、船人急に釣針をなげて、忽三ッ四ッ釣事有。俗に九万疋と書も、是此魚の數多なるをいふなるべし

**伊多** いだ○畿内及西國にて。いだ、讃岐にて。がうら、東國にて。さい又まるたと云。此魚上州利根川に多し、一説に「さい」とは犀の泳ぎて走るが如きにたとふ。丸太とは山中より材を山川にうかべ流に任せて下るにたとへたり。今按に「さい」とは「材」なるべし。丸太といへるもおなし心之。其魚の圓きによるの名なり

**鮍** うぐゐ○信州諏訪の湖水にて。あかうをといふ、相州箱根にて。あかはらといふ。小なる物を「やまめ」といふ

**毛呂古** もろこ 一名しまうを ○近江及西國にて。あぶらめといふ。土佐にて。もろこ共又。もつこともいふ。近江坂本に「もろこ川」といふ川有、此魚多し、故に「もろこ」と稱す。一説に粟津に木曾義仲ノ社有。かの靈を祭るの日、社の邊の小川にて土人もろこ魚をとる、必數十斛を獲とあり

**石首魚** いしもち○京江戸ともに。いしもちといふ。西國及四國にて。ぐちと云。駿河にて。しろぐちといふ。此魚かしらの中に石有、よつて名とす。又江戸にて「にべいちもち」と云有、別種なり。是にべといふ魚の小なるも

のゝ

鮸鮧　にべ○此魚の小なる物を土佐にて。しらぶと云。大なる物を四國にて。ぬべといふ。又。そぢ共いふ。備前にて。そこにべと云。「にべ」とは魚の腹中に鰾膠(にべ)あるゆへに名とす

齋魚　ひゞ○常州水戸にて。ふぢかけと云。佐渡にて。嶋まはりといふ

魟䱹魚　たかべ○讃岐にて。あじろといふ。能登にて。とこやといふ

鮠　はゑ○東國にて。はやと云。はゑは蠅を好て食ふ、故になづく。且蠅は關西にて「はへ」關東にて「はい」といふ

太刀魚　たちうを○筑前にて。ながだちと云

惠曾　ゑそ○伊勢の白子にて。たいこのぶちと云。土佐國の士人。をばゐといふ。漁人のいはく「ゑそ」は蛇の化したるものゝと。又九州にて「をかまがへる」の化したる物也ともいへり。畿内にて五月の頃「水ゑそ」とよびて賞す。或人ゑそ。うなぎの二品酢と合して食すれは人を害すといふ。今按に、土佐の國の俗にの魚を「おばあ」といふ、是は蛇の姨(おば)といふこゝろなるへし

沙噀　なまこ○大坂にて。とらごといふ。筑紫にて正月は。たはらごと云。唐津にては正月十五日まへは。はつたはらと云。それ過て正月の中は。たはらと云。【匱大和本艸】に、沙噀。和名タハラゴ、今京都の魚舗(うをや)に「きんこ」といふ物なりと見へたり。今按に、正月朔旦海鼠(なまこ)を「たはらご」と賞して祝す。是米穀の義によりてゝ。

「こまめ」を「田つくり」と稱するの意同し

**海鷂魚** えい〇上方にて。えぎれと云。江戸にて。あかえいと云。今按に、京にて。えぎれといへるは、江戸にて赤えいのたちうりといふに同し。えいに種類有、武之品川・芝浦にて。まえい。よこさえい。がんぎえいなどといふ。「まえい」は上品なり。又「よこさえい」は菱形にして色白し、故に「まえい」の血をぬりて裁賣となす。「がんきえい」は下品也。其形丸く、悪臭有。また眞鰩の子いまた腹に在時は刺を中につゝみて、たとはゞ卷葉の如くにて有、又「よこさえい」の子はあみがさの如く、二ッ折になりて刺を中に隠す物なり

**海鰕** ゑび〇關西にて。いせゑび。關東にて。かまくらゑびと云。又年の始に、かざり海老とする物は、關東にても「いせゑび」と。西國にては其海の産なれ共「いせゑび」と呼。又江戸にて小なる物を「芝ゑび」といふ。大坂にて。備前ゑびといふ

**滲路** うみじか 和名〇筑紫にて。うじこ。伊豆大嶋にて。海楊枝と云

**水龜** いしがめ〇西國にて。こうづといふ

**鼈** すほん これかはかめ也。俗胴龜と云〇畿內にて。どんかめ又すつほんとも云。東近江にて。どろそ。周防にて。まがめ。伊勢にて。どち。肥劢にて。とち。加賀及能登越中越後にて。がめと云。四國にて。こがめ。江戸にて。すつほんと云。すべて東國「すつほん」と云、又「かつは」と云所もまゝ有

**蝤蛑** がざめ〇畿內にて。がざみといふを、江戸にてをゝがに又海かにと云。又西國にて「かざみ」と云は甲菱形に

して甲のまはりのこぎりばに似たり。一種蟛蜞あり。江戸にて○こめつきがにと云。西國及四國にて○田うちがにと云。古哥に「いなつきがに」とよめるは是なり。一種豆蟹又蜘蛛蟹と俗に云。備前小嶋にて○いぞ〳〵といふ。今按に、豆蟹小にして形丸し、又其かたち蜘に似たり。蛤好ンで是を喰ふ。又蟹の小なるを「蜘かに」と呼、蜘の小なるを「さゝがに」と呼こそをかしけれ。參州にて○岩蟹と云、塩辛とす。名産也。又幾内にて「かにびしこ」と云あり。攝州輪島邊より出す蟹の塩辛也。「かにびしこ」と云は、蟹の醢漬と云へるを略して「かにひしこ」と呼といへり。又「ひしこ」といへるは醢の誤なりと有。さもあらんか。又薩州指宿の濱に藻蟹とて小き蟹を産す。寸許にして圓也。惣身紅色、此蟹塩辛に製して其色を變せず。甲及八足やはらかにして氣味香く、寔に上品なる物也。又云藻蟹は、藻或はひじきなどに住物也

**甲蟹** かぶとかに○筑紫にて○うんきうと云。薩摩にて○ばくちかにといふ。安房にて○いそほうづき共云。九州の海に有。其甲かぶとに似たり。汐干の頃多し。又大汐にたゞよひて磯に寄を、兒童とらへて繩をつけ、たはふれ翫とす。又「海ほふつき」は「うんきう」の卵也と云。岩或は流木なとに卵を生つけ置を取りて「うみほうつき」とよびて、小女口にふくみ鳴らす物也。其色黄なるを、梅酢をもて是を染、赤色となす也。江戸へは安房國より出ス

**鬼蟹** をにがに○攝津にて○嶋むらがにといふ。兵庫及播州にて○武文かにと云。諸州にて○平家蟹と云。加賀越前にて○長田かにと云。これ元弘の乱に秦の武文　攝州兵庫の海に死す、享祿四年細川高國と三好と攝州に戰

ふ、細川の家臣島村何某敵二人を挾んで尼崎浦に沒す、故にこれ等の說を後人附會する所之といふ

榮螺　さゞえ○相刕三浦三崎邊にて○つぼつかいと云。さゞえのふたを同所にて○とらもいちと云。是は童部の掌顴に、穴一といへる事をすなり。浦里にてあれは錢のかはりに用るもの歟。なを先に出す

鰒魚　あはび○上總にて○かいつけと云。是は鮑の蓋なくして、身は貝につきて有物なれは、貝つけといふか。貝つきなるへし。江戸にて一名○なまがい共云。又あがりたる鮑をば○すいけんと云。泉州境にて此貝の売買○あま貝と云。これは海士のとる貝なれは、海士貝と云か。又鮑の小なる物を「とこぶし」と云。土佐にて「ながれこ」と云。今按に、「とこふし」は鮑の子にはあらず、種類之。又鮑のわたを西國にて「角」と云、又あわびの貝の片おもひと哥に詠せしは『萬葉集』に

〽いせのあまのあさなゆふなにかつくてふあはひの貝のかたもひにして

蛤蜊　はまぐり○上總にて○ぜんなと云。同國にて蛤の大なる物を「小だま」と云、小なるを「大玉」と云（是は雄鷹を「せう」といひ、雌鷹を「だい」といふ詞に似たり。意は別之）

淺蜊貝　あさり貝○勢州にて○きしめ貝と云

朗光　さるぼ○勢州にて○つめきり貝と云。筑紫にて○馬の爪貝といふ。土佐にて○たぶかい又ちかい共云

蜆　しゞみ○畿內にて○ぜゞかいと云。古哥には堅田の蜆を詠す。今は堅田には稀にして勢田に多し。せたは膳所に近き故「ぜゞ貝」といふと之

**鹽吹** しほふきかい○伊勢にて。とんび貝と云。總州にて。つぶと云

**貝多伊良木** たいらき○大坂にて。ゑぼし貝と云

**田螺** たにし○畿内及西國東武其外國々にて。たにしと云。土佐國にては一名田貝と云。北國及房總又駿河相摸伊勢路にて。田づほといふ。又「つぶ」と計も云【和名】に【拾遺本艸】を引て。田つびと書り

**寄居蟲** がうな 一名やどかり ○伊豆及駿河にて。いそものと云。上總にて。がなづうといふ。肥前にて。ほうざい蟹といふ【和名】かみな

**蟶** まて○大坂にて。かみそり貝と云。上總これにをなし

**細螺** きさご○中國にて。いしやらがいといふ。伊勢にて。ごながらと云。肥の唐津にて。こぶらといふ

**石蜐** かめのて○つくしにて。しゐと云。武之品川邊にて。ひとでと云。上總にて「たこのゑんざ」と云（しゐとは其形椎の實の上皮のゑみたるに似たる故名づく）

**海馬** かいば○佐渡にて。たつのをろしごと呼。薩州にて。龍の駒と云。畿内にて。うみむまとよぶ。是婦人安産の守とす

**和尚魚** をしやううを○西海にて。海坊子と云。下總銚子浦にて。正覺坊といふ。漁人の云、むかし僧有、此江に溺死す。其幽魂こゝに止りてたま〳〵顯、容泥龜のごとくにて、四ツの手足指わからず。頭は猫の如し。これを捕得る時は漁人あはれみて酒を飲せて命をたすく。【三才圖會】云東洋大海ノ中ニ有二和尚魚一狀如レ鼈ノ其身

紅赤色云

**蝸牛**　かたつぶり〇五畿内にて。でんぐむし、播州邊九州四國にて。でのむし。周防にて。まいく。駿河沼津邊にて。かさばちまいく。相摸にて。でんぼうらく。江戸にて。まいくつぶり。同隅田川邊にて。やまだにし。常陸にて。まいぼろ。下野にて。をゝぼろ。奥仙臺にて。へびのてまくらといふ。今按に、かたつぶりは必雨ふらんとする夜など鳴ものゝ。貝よりかしら指出して打ふりかたくと聲を發す。いかにも高きところゝ、かたくと鳴て頭をふるものなれば「かたふり」といへる意にて「かたつぶり」となづけたるものか。「つ」は助字なるへし。予隅田川の邊に寓居せしころかれを見て句有。又晋其角か

〽文七にふまるな庭のかたつぶり。とせし句は寂蓮法師の哥の、上の五もじをかへて俳諧の句となしたるゝ

〽牛の子にふまるな庭のかたつぶり角有とても身をはたのまし

**蛞蝓**　なめくじり〇常陸にて。はだかまいぼろ。越後にて。山なまこと云。山中には大、五六寸許のもの有とゝ。貝原翁曰、なめくじり夏月屋上にはひのぼりて螻蛄に變ずる有、然ともことく不レ然

**蛇**　へび〇關西及西國に。くちなは。關東に。へび。薩摩にて女の詞に。たるらむしと云。家くちなはと云るは屋上にすみて鼠を追ひ、鳥の雛を捕ものゝ。是黄頷蛇也。近江にて。さとまはりと云。播广にて。をなぶそといふ。津の國にて。をなびそ又。ねづみとりと云。筑前にて。やじらみと云。一種東國にて。山かゞちと云を、近

江にて。しまへびと云。○一種巨蛇和名をゝへび。東國にて。あをだいしやうと云を、近江にて。あをそと云。又一種幾内及東武にて。からすへびと云を、安房にて。すぐろへびと云。筑前にて。うしぐちなはと云

蝮蛇　まむし○西國にて「ひらぐち」と呼、筑前にて。はめと云。土佐にて。はみ又くつはみと云。上總房刕にて。くちはみと云。是和名はみ也。又一種俗に。ひばかりと云有。土佐にて。日みずと云。小くして錦色なるもの之。人是にさゝるゝ時は、日を見る間なく死すと云心にて「日みず」と云とぞ。漢名熇尾蛇これなり

蚺蛇　うはゞみ○出雲にて。じやばみと云。北國にて。をかばみと云

蜥蜴　とかげ○幾内にて。とかけ。東國にて。かなへび又かまぎつてう。相摸にて。かまきり。西國にて。とかぎり。大和にて。とかき。江戸にては。とかげと「け」の字を濁りてよぶ。一種青とかけと云有。背青みどりにして光り有、縱斑の文有、腹白く口大ィ之。是毒虫なり

蜂　はち○仙臺にて。すがりと云

馬蜂　くまばち○仙臺にて。おほかみばちと云。越前にて。あんどん蜂と云

蠮螉　じかばち○幾内にて。こしぼそと云。仙臺にて。土すがりと云。常陸にて。かそりと云。信刕にて。ぢすがりと云。東武にて。じがばちと云。『日本紀』蜾蠃又『中庸』蒲盧の說古註にも見えたり。『東雅』に『本朝式』を引て、すがるの太刀といふは則今の細太刀と云物之。又「さそり」と云も、細きことなり。常陸にて「かそり」といふも「さそり」之。彼國に賀蘇岡と云岡有。昔此國にさそりばち多きによりて此名有と見えたり

蠶 かいこ○東國にて。おこと云。越後にて。うすまと云。同國長岡にては。ぼこと云。信濃にて。ぼゞうと云。奥州津輕にて大なるものを。とうどこと云。小き物を。きんこと云。出羽にて。とゝこと云。房州にて。かゐこと云

今按に、丹波國桑田郡大原社は蠶飼するものゝ信仰する神なり。毎年五月廿八日おばらざしとて諸人群參す。三月廿三日を春志と云。參詣のもの其社地の小石を猫と名付て借て下向す。是は蠶に鼠のつかぬ呪なるべし。九月廿三日をは秋ざしと云て、一ヶとせに三たび詣事有。又極月晦日の夜、家の大黒柱に灯をともす家有。これ鼠に媚る之。蠶を養ふ人の、ねずみを怖るゝより起りたるなるべし。また蠶もかひこにつくものとぞ、哥に

へ朝かすみかひやか下に鳴蛙こゑたにきかはわれこひめやも

一說に、蓍の草を箒にして蠶飼の棚を、初子の日に、十四五の小女午の年なるに掃すれば、蠶の糸綿成就すると云。「萬葉」に大伴家持、はつ春の初子のけふの玉はゝきと詠せしは此義之。又東國にて繭玉とて正月十四日に餌を製し、柳の枝或は小竹の枝などに付て、繭にかたどり祝ふこと有。又蠶は春より夏にもわたり、又夏の蠶は秋に至て成ものなれは、西國にては其頃しもまゆ玉をつくりていはふ事となん。又蠶の蝶に化す頃、西國にて。ひるろうと云。上野及信濃陸奥にて。ひるといふ。伊勢にて。ひいろと云。又かひこは子を生付て子孫絶えず、めで度物なれば、婚禮にめてふをてふを用る事、禮家の大事とす。今は常の蝶と心得る人

も有とかや。又めてふ。をてふも實は蝶鳥之といへり

**蝶**　てふ○相摸及下野陸奥にて。てふまと云。津輕にて。かゝべとも。てこなとも云。出羽秋田にて。へらこと云。越後にて。てふまべつとうと云。信濃にて。あまびらと云。一種鳳蝶其形大にして黒色羽の縁に文有もの之。上總にて。ぢごくてふ〳〵と云。下野鹿沼邊にて。ぢごくでふまと云。美濃をよび近江にて。かみなりてふ〳〵と云。薩广にて。山でふ〳〵とと云。今按に、蝶種類多し、其あらましをこゝに出す。蝶和名かはびらこ之。羽州にて。へらこと云。野州にては所によりて蝶々ばこと云。これらの詞は「かはびらこ」の略にして「ひらこ」又「へらこ」と轉し、又「へらこ」轉して「ばこ」となりたる物ならん。又胡蝶と云、胡ノ字は其鬚を賞せし名之。江戸にては「てふ〳〵」といふ、一說に蝶は「てふ」之、蝶もとより「てふ」之、よつて蝶〳〵とかさねて呼ともいへり

**蜻蛉**　とんばう○奥州仙臺南部にて。あけづと云。津輕にて。だんぶりと云。常州及上州野州にて。げんざと云。西國にて。ゑんばと云。一種紺蜻、畿内にて。紺蜻といふ有。東武にて。かねとんぼと云。肥前にて。かうやひじりと云。又一種東武にて。赤卒と云。和名あかゑむば之。畿内にて。しやうれうやんまと云。西國にて。しやうれうゑんばと云。常陸上野下野邊にて。いなげんざと云。越後にて。こしやうとんぼ又ちごとんぼと云。奥州にて。なんばあけづと云。會津にては。たのかみとんぼと云。又一種江戸にて。しほとんぼと云有。奥州にて。しもがらあけづと云。肥前にて。しほからゑんばと云。又大なる物を。馬大頭と云。上總にて。を

んじやうといふ。越後にて○山とんぼと云。江戸にて至ッて大なるを○鬼やんまといふ。土佐にて○うしやんまと云是也。【東雅】曰、蜻蛉はいにしへ「あきつ」と云。後、「かげろふ」と云、即今云とんばう也。東國の方言に「えんば」と云。赤卒を「いなげんざ」などもいふなり。あきつとは秋に出て、其類の衆多なれば也。秋津と云「つ」は助字也。「いなげんざ」といふも、稲熟する時に有を云也。「げんざ」とは「ゑんば」の轉語也。童部の「やんま」といふも「ゑんば」の轉ぜし也。「ゑんば」は即「ゑば」なり。なを「八重ば」といふが如し。よのつねの虫は多くは羽二ッ有を、此虫の羽四ッあれは、かさなれる羽といふ意也。又きはめて細く小キなる草むらの間に、其羽をかさね植て止まるものを即今「かげろふ」といふ也。此もの誠にありともなし共さだかに見えぬものゝ也。【南留別志】に、蜻蛉を「とんぼう」といふは吾邦の名を秋津洲といふ故に、東方といふことゝ云々

**蛁蟟** つくつくばうし○上野にて○ほつてうと云。近江にて○つくしこひしと云。今按に、俊頼朝臣「うつくしよしと蟬の鳴らん」と詠し玉ひしは「つくつくばうし」にやあらん【和名】くつくつぼうし

**茅蜩** ひくらし○上總にて○くつはぜみと云、又○かなかなと云

**蟋蟀** こほろぎ○南都にて○きりぎりす、又○ころころしと云。江戸にて○こほろぎと云。武藏府中邊及信濃奥刕南部にて○きりぎりすと云。越後高田邊にて○つゞりさせと云。美作にて○きりごといふ。白石翁曰、是古にいひしは、今云「きりぎりす」也。又古こほろぎといひしは、今いふ「いとど」也。又古「いねつきこまろ」といひしは、今云「いなご」也。また古「いなこまろ」といひしは、今云「はたはた」也。又古「はたをりめ」といひしは、

りす」也。小兒籠にやしなふもの也

竈馬　いとゞ○京にて。くろゝ。伊勢及四國にて。かまご。尾張にて。かまぎりす。遠江にて。かんなご。西國にて。くろつゞ。及いびご。近江にて。くろと云。これ古「こほろぎ」といひし物也。今いふ「こほろぎ」の種類にして小なる物也。竈のあたりにすむ

莎雞　はたおりむし○伊勢にて。やまぎすと云。近江にて。うりすと云。畿内にて小兒。きりぎりすと云。東國にて。きりぎりす又。ぎつすと云。又ぎつちよなど云。其こゑの「ぎい」と鳴くははたおるまねきの音、ちよんと鳴くは筬の音に似たりとて、いにしへ「はたをりめ」とよびしも今「きりぎりす」と名の變したる也

螇蚸　はたはた○江戸にて。がちゝ又。ばつた及。しやうれうばつたと云。上野にて。ばたといふ。信州にて。ほつたこと云。駿河にて。がたきと云。伊勢にて。ねぎどのと云。奥州仙臺にて。はつたぎと云。津輕にて。とらばうと云。出雲にて。ほとけの馬と云。長崎にて。たなばたと云

紡虫　くだまき○一名いとくり江戸にて。むまをひと云。近江にて。すいとゝいふ。土佐にて。くだまき又。くだむしと云

蟷螂　かまきり一名いほじり○江戸にて。かまぎつてう。江戸田舍にて。はいとりむし。信濃にて。かわみそ。相摸にて。いぼしり又いぼくひ。奥州にて。いぼ虫。津輕にて。いぼさし。肥前にて。かまきりてうらいと云。【本草】時珍ノ曰、今人病ム疣ヲ者ノ往々捕ヘテ蟷螂ヲ食セシムト之ヲ云 云

蝦蟇　かはづかへる○仙臺にて。びつきと云。西國にて。びきと云。唐津にて。たんなんびきと云。土佐にて。ひき又おんびき又しやくたらうなど〻云。又一種小ッく青色にして木竹の枝に棲ものを、關東及畿内にて。土黽と云。九州にて。ほとけびき又あまびきといふ。唐津にては。あをびきと云。今按に、但馬國に一種。河鹿とよぶ有。谷川の流にすみて、濁る水にはすまぬものゝ。其聲鹿に似たり、故に河鹿と呼。魚に同名有別物ゝ。常の蛙の群る中へ放す時は、則常の蛙聲をとゞむとなり。肥州にてはこれを「かはづ」と呼。常の蛙を「かへる」と呼ゝ。古歌に「蛙なくよしの〻川の瀧の上に」とよみ、又「みわ川の清き瀬」など詠る類、是皆山蛙ゝ。常の蛙は聲かまびすしく、山蛙は聲清く、寂しきものにて、鹿の聲ともきこえ、また鳥の鳴くともきこゆる物なりとぞ。【無名抄】に井堤の蛙のおもしろきよしを誌す。是山蛙ゝ。近年江戸にもとめよせたりと聞り。余いまだ不知

蟾蜍　ひきがへる○五畿内及參遠又は越路なとにて。ふくがへるといふ。伊賀伊勢にて。ひきこ。西國にて。わくどう又。どつくう又わくひき又くつわびき又鬼わくどう又牛わくどうなといふ。土佐にて。くつひき又。やどもりなどいふ。奥州にて。ひきだ又びつき　又だいてんばいなといふ。出羽秋田にて。もつけと云。房總にて。あんがう又をかまがへる又ふくあんごうと云。武ノ八王子にて。山あんかうと云。上野にて。大ひき　又小なるを。べつとうと云。江戸にて。蟇　といふ

蜈蚣　むかで○上總にて。はがちと云。【日本紀】に出

馬陸　をさむし○關西にて。をさむし、關東にて。やすで。肥前にて。ぐいらうと云

豉蟲　まい〳〵むし○江戸にて。水すまし。同近在にて。さをとめ。京にて。うづむし。泉刕堺にて。ごまいむし。大坂及西國にて。かいもちかき。大和及近江越前にて。まい〳〵。東近江にて。ごまゝいり。四國にて。いたこむし又。しろかきむし。上野にて。ごきまわし。信濃にて。すめ。加賀にて。さをとめ又しけ〳〵。伊勢にて。たまる。上總にて。みづぐるま。美作にて。みこのまひ。薩及肥前にて。ごきあらいむしなと云。此むし形丸く眞黑にして小さし。水面にうかびめぐりてうづまくが如し

水黽　てふま○幾内にて。みづすまし又かつをむし。江戸にて。てふま。西國にて。しほうり又あめだか又あめかた又じやうせんかようなどゝ云。近江にて。しほんしほ。遠江にて。あめかす。越後にて。しほのみ。信濃にて。あしたか。土佐にて。しほたき。薩广にて。あめんどう。上總にて。みづぐるま又かはごみ。武刕にて。かはぐも。これは大なる蚊に似て足高く水上をはしる虫之

飛蛾　こがねむし○つくしにて。ぶどうと云。肥刕にて。かねぶう〳〵と云。此むし夏の夜、油灯に入て灯を消す事あり

兜蟲　かぶとむし○江戸にて。かぶとむしと云。伊勢にて。やどをかと云。大和にて。つのむしと云。此虫は皁莢の樹に住むし之。羽有て飛ぶ。雄は角有、雌は角なし。但「さいかし」は關東にて「さいかち」といふ樹之

蛶蟲　あぶらむし○伊勢にて。ごきくらひむしと云。薩广にて。あまめと云。肥刕にて。ごきかぶらうと云

蛓蟲　けむし一名かはむし〇京にて。ほうじやうむし。出雲にて其色黄成を。はげむし。其色黒を。とげむしと云。奥の津輕にて。がいだかと云。今按に、泉州堺にて六月大暑の頃、人家の屋根の裏に毛虫生ず。此虫の名を。じこうぼうと云。毒虫也。家々にて「じこうがり」とて笠深く着、顔を包、雨具などに身をまとひて、竹竿の先に黐をぬりてかのむしをとる事有。又武州の内にて毛虫の異名。信濃太郎といふ所多し。其心は六月信濃の方に出る雲を「しなの太郎」と云。此虫の黒き形、其雲に似たる故に名つくとぞ

螻蛄　けら〇京にて。しやうらいむしと云。【荀子】に鼫鼠の五技を註して曰、能飛べ共屋上に上る事あたはず。よくのぼれ共木をきはむる事あたはず。よくをよげとも谷をわたる事あたはず。能く穴をうがてども身をおほふ事あたはず。よく走れども人に先だつことあたはず。是を鼫鼠才と云て、實なき人のたとへ也。俗に石臼藝といふも同し心か。又諺にむしけらなどいふは「けら」をのみいひし語の事にはあらず、すべて虫類をいふなり

物類稱呼二終

諸國方言

# 物類稱呼

艸木

三

# 物類稱呼卷之三

## 生植

米　こめよね○遠江國天龍の川上にて。ぼさつと稱す（此所にては、米といはずしてぼさつとのみとなふ）按に、諸國より大峰或は羽黒山なとへ詣るもの、一七日齋す。其内はぼさつと稱して米とは呼ずとなん。西國又は朝鮮の方言にも「穀」を菩薩と云よし見えぬ。【東雅】ニ【雞〔○鶏〕林類事】を引て、白米を漢菩薩といひ、粟を田菩薩といふを「八〇とヵ」記せりと有。又俗間に糠味噌といふは、糠と塩とを和して制れるを名づけて「さゝぢん」と云。是は佛經を書寫する早書の法に、菩薩の二字の艸冠のみをとりて艹としるす事有、さればさゝとはぼさつの義にて、是も又米を「ぼさつ」といふ事によれるゝ。【秘藏記】ニ云、天竺にて米粒を舍利とす、佛舍利も又米粒に似たり、故に舍利といふと云云。是三國同日の談なり。又早書の時のならひに、艹菩薩、点菩提とて菩提を艹とよむ、文聲聞、言緣覺、或は彌陀を汐と書たぐひ、是皆經文の早書キの合文之

へ上もなき大佛もちの本來をさとれは米のぼさつなりけり　未得

秫　ひつぢ（いねかりたる跡に自生す）○尾張にて。ひうちと云（是は轉語なり）佐渡にて。まゝばえといふ。伊勢白子にて。二ばんごと云。越前にて。ひとてといふ

蜀黍　たうきび○東國にて。もろこしと云。中國にて。きみ。伊豫にて。たかきび。加賀にて。ほきび。越後にて。

せいたかきび。奥刕津輕にて。たちぎみ。幾內にて。たうきびと云

**玉蜀黍** なんばんきび○幾內にて。なんばんきび又菓子きびと云。伊勢にて。はちぼく。西國及常陸、或は越前にて。たうきびと云。東國にて。たうもろこし、遠刕にて。なんばんたうのきびと云。奥刕より越後邊にて。まめきびとも又くはしきびともいふ。奥の南部にて。きみといふ（此所にては常の黍をはもろこしといふ）備前にて。さつまきび。因幡にて。たかきびといふ

**紅豆** さゝげ○九刕及上刕信刕總刕にて。ふらうと云。關西にて。十八さゝげと云を、關東にて。十六さゝぎといふ。案に、關東にて大角豆の短く生るものを。みづらと呼、西國にては。ふたなりといふ。【古事紀】ニ美豆羅又【和名】ニ鬘【萬葉】ニ髮匝、註ニ曰、童髮束の時は總角とて「みづらゆふ」と有、今「みづらさゝげ」といふものゝたはねたるも、童子の髮に似たり。これによる歟

**綠豆** ぶんどう○東國にて。やへなりとよび又。とうろく共よぶ。幾內にて。ぶんどうといふ。遠江にて。とうごと云。備前にて。さなりといふ。伊勢にて。かつもりといふ。尾張にて云ぶんどうあづき又十六寸なといふは別種之

**豌豆** ゑんどう○幾內にて。のらまめと云。東國にて。ゑんどうと云。伊勢にて。ぶんどうと云。上總にて。ゑんづといふ

**萊菔** だいこん○はだの大根。相州波多野ノ名產也。江戶にて。はだなと云是之（これ轉語之）京にて。ながね大根

と云。大坂天満にて。ほそね大根といふ。又宮の前の大根と云（河州守口にて是をもつて粕漬とす）西國にて。小大根と云（はだの大根は小大根よりはすこし大之）又畿内にて。なかぬき大こんといふを、江戸にて。をろぬき大こんと云

**菘** な○京にて。みづな又はたけなといふを、近江にて。うきな又ひやうずなと云。鄙にて。京菜といふ。江戸にても。水菜といふ有（京都の水菜よりは葉黒ずみて厚く麁し。京の水菜に及はず。葛西菜又小松川本所牛島邊の多菜においては京大坂にもなし。風味よくしかも一年の内絶る事なし。まことに名産之）又關西にていふ。間引菜と云を、江戸にて。つまみなといふ。西國にて。をろぬき菜と云（江戸田舎にて、菜にても大根にてもおろぬくと云といへとも名付る時はつまみ菜と云、もみ大根といふ）○關西にて。蕪菁と云を、東國にて。かぶなといひ、根をは「かぶ」と云

**韮** にら○上總にて。ふたもじと云。是は葱をひともじと呼故に、にらをふたもじと云

**多葱** ねぎ○關西にて。ねぶかと云。近江にて。ひともじと云（ひともじは通稱なれ共、常に用ゆる所をさしていふ）關東にて。ねぎといふ。「ねぶか」とは根ぶかく土に入こゝろ、胡葱は淺き葱の意、根深に對したるの名なるべし。「つ」は助字なり。和名「き」といふ、故に一文字と云。分葱はわかちとる義、刈葱は刈とる義とぞ。又ひともじを詠ぜし歌に

へ引見れは根は白糸のうつほ草ひともしなれと數の多さよ

野蒜　のびる○加賀にて。ねんぶりと云

蒜　ひる○關東にて。ひるといふ。關西にて。ろくたうと云。筑紫にて。にんにくといふ

芋　いも○駿河及美濃越後高田ノ所在、又常陸にて。ほどと云 ○唐芋を遠江にて。女芋と云 ○蓮芋 武藏品川にて。八ツがしらと云。又栗芋といふ所をゝし ○芋ノ莖 京にて。いもじといふ。東國にて。ずいきと云（これは諸國の通語なり）美濃尾張にて。だつと云。奧州仙臺にて。からどりと云【土佐日記】ニ いもしあらめも歯がためもなきかうやうの國之と云 云「いもし」は「いも」にて「し」は助字成共云

佛掌薯　つくねいも○東國にて。つくねいも又つくいも又山のいも又やまとなどゝ稱す。關西にても。山のいもといひ又一名うちいもといふ。奧州仙臺にて。はだいしいもと云。津輕にては。唐いもと云。土佐にて。手いもと云。上野にて。みねいもといふ

今按に、山のいもと呼所をゝし。然ともやまのいもは薯蕷にて、東國に長いもといふ是なり。又藥物の山藥は自然薯蕷を用ゆ。【南郭遺契】ニ【負暄雜錄】ヲ引テ、山藥本名ハ薯蕷。避ケテ唐ノ代宗ノ諱豫ヲ改テ名ニ薯藥ト、避テ宋ノ英宗ノ諱曙ヲ遂ニ名ク山藥ト云 云。又「つくねいも」を「山のいも」といふは、其形山のごとく又峰のごとし、或ハ石或ハ人の手にも似たり、故にかく名つくるなるべし

黄獨　けいも○畿內にて。けいもと云。東國にて。かしゆうと云（藥種の何首烏にあらず同名にして異なり）駿遠にて。ぜつぷといふ 相模にて。ぜんぶと云。仙臺にて。べんけい芋といふ

**零餘子** ぬかご○相州にて。くろめと云。常陸にて。いもしが子といふ。肥前唐津にて。ばんごといふ。常陸の國にていふ「いもしがこ」は「いもがこ」にて「し」は助字之。平忠盛の「いもが子ははふほどにこそなりにけれ」とありしも、此叓とかや。故事こゝに略す

**甘藷** りうきういも○畿内にて。りうきういもと云。東國にて。さつまいもといふ。肥前にて。からいもといふ
享保年中薩州より來る、味ひ美にして其性よろし。又長崎にりうきういも。てうせんいもと稱する物有。
是は別種にして蕃薯なり

**薺** なづな○（おとこなつな。をゝなつな。をなつな等の名有）○花さく頃。ばちぐさと云。江戸にて。ぺんぺん草。尾張にて。ぢゞのきんちやく。ばゞのきんちやくと云。奥之津輕にて。すゞめのだらことといふ。是薺の實之。形きんちやくの如く、又三線のばちに似たり。津輕にては巾着の事を「だらこ」といふ、故に名とす。東國の俗、四月八日每に此草をとりて行灯に釣りて、夏の虫の油灯に入らぬ咒ひとす

**蘩蔞** はこべらはこべ○加賀及東尾張にて。あさしらげといふ（西尾張にてははこべといふ）丹波邊にては。ひんずりと云

**鼠麹草** はゝこぐさ○遠江國にて。ちゝぐさ、下野宇都宮にて。ねばりもちと云。信濃にて。かはちゞことといふ。尾州にて。とうごと云。上總にて。かうじばなと云。世俗三月三日此草を用ひて餅を制し、母子餅となづく。これを蓬にかへて「よもぎ餅」と云、また「草餅」と云　事實は【文德實錄】に見えたり。又五形蒿と名り、

く。人日七種の其一ッなり

火焰菜　さんごじゆな○播磨にて。あかぢさと云。江戸にて。たうぢさといふ

蠶豆　そらまめ○東國にて。そらまめといふ。西國にて。たうまめ。出雲にて。なつまめ。尾張にて。のらまめ（同名有、別種之。是は空豆の轉語にや）伊豆駿河にて。五月まめ。相摸にて。ふゆまめ。下總にて。ゆきわりまめ。伊勢及遠江にて。がんまめ。中國にて。てんぢくまめと云（空豆とは其實の空に向て生る故になつくとかや）

刀豆　なたまめ○九州及四國にて。たちはきといふ

眉兒豆　ゐんげんまめ○京にて。ゐんげんまめといふ。江戸にて。ふぢまめと云。西國にて。なんきんまめと云。上總にて。さいまめと云。伊勢白子にて。せんごくまめといふ【農政全書】ニ眉兒豆これ扁豆の類と有

黎豆　ゐんげんさゝげ○近江にて。はつしやうまめと云。關西にて。ふぢまめといふ。西國にて。てうせんさゝげと云。勢州白子にて。なたまめといふ（同名有、混すへからず）伊勢駿河にて。にどなりと云。奥之南部にて。さゝげと云（此所にていふ十六さゝげは別之）下總佐倉にて。せんだいさゝげ　といふ。東上總にて。二度十六といふ

莧　ひゆ○東國にて。ひやうと云。奥ノ津輕にて。ひやうあかざといふ。加賀にて。はびやうと云　○馬歯莧　相摸にて。いぬひやうと云○加賀にて。ずんべらびやうと云を、江戸にて。すべりひやうと云

萱艸　くはんさう〇信州にて。とつてこうと云。肥ノ唐津にて。くはんすと云

薺蒿　よめがはき　よめな〇京江戸共に。よめなといふ。畿内の女言に。おはぎといふ。近江にて。はげといふ
今按に、おはぎといふは薺といふ說は非ㇾ之。【源順和名抄】ニ薺和名奈都那又薺蒿和名於八木　如ㇾ此出せり。薺蒿の二字「なづなよもぎ」と訓故に「なづな」とす。文字になづまず、其いふ所につきて正すべきか。【萬葉】ニ宇波疑又菟芽子と詠せり。從「う」の字轉して「お」となりたるもの歟。其例多し。女詞に「御」の字を冠らしめて「おはぎ」といふにはあらさるべし

獨活　うど〇西國にて。しかといふ。西國にては土中に有を。獨活といひ、二三寸地上に生じたるを。うどといふ。尺以上になりたる物を。しかと呼。　阿部氏云、松前千砂野の濱より眞の獨活を出す。土人これを。さいきと云。京嵐山にも有。ししうど又いぬうどといふ

迷蕨　ぜんまい〇上總にて。ぜんごといふ（別種に前胡といふ有、上總にては「ぜんまい」をいふ）

番椒　たうがらし〇京にて。かうらいごせうと云。大閤秀吉公朝鮮を伐ち給ふ時種を取來る、故に此名有。西國及奥の仙臺にて。こせうといふ（東國にて眞の胡椒を「ゑのみこせう」といふ）出羽にて。とこぼしといふ。但奥羽のうちにても「なんばん」と稱する所もあり。上總及參遠にて。なんばんといふ。越前にて。まづものこなしといふ（是は江戸にて番匠の隱語に「かけや」といふもおなし心なり）

茼蒿　しゆんぎく〇近江彦根にて。ろうまといふ。京大坂にて。かうらいぎく又きくなともいふ。關東にて。しゆ

んぎくといふ

土筆　つくづくし○東國にて。つくしともいふ（これ略語なり）作州にて。ほうしといふ

〽佐保姫の筆かとぞみるつくづくし雪かきわくる春のけしきを　爲家卿

冬瓜　かもうり　とうぐは　○畿內及中國北陸道或は上總にて。かもうりといふ。東國にて。とうぐはといふ

東國にて「とうぐは」を「とうがん」とはねてよび、又「大こん」をば。「大こ」といふこそをかしけれ。それにつきて播州伊丹にては古酒を。こうしう又旦那を。だんなん。大坂にて朝夷奈を。あさいなん。京にて坊を。ぼん。畿內にて牛房を。ごんぼ。又にんじんを。にじ。播磨にて粟の穗を。粟のほう又ゐんらうを。ゐんろ。伊勢にて米一斗を。いつとう。二斗ッなどゝいへるたぐひ、諸國かぞふるにいとまあらず

南瓜　ぼうふら○西國にて。ぼうふら。備前にて。さつまゆふがほ。津國にて。なんきん。東上總にて。とうぐはん。大坂にて。なんきんうり又ぼうぶら。江戶にて先年は。ぼうふらといひ。今はかぼちやと云

越瓜　しろうり○京にて。あさうりといふ。一種筑紫にて。つけうりといふ有。江戶にて。はなまるといふ

菜瓜　なうり○京にて。あをうり。大坂にて。なうり。大和にて。はなんぼ。江戶にて。まるづけ。相摸にて。かたうりといふ（東國にあを瓜と稱する有。別種之）

絲瓜　へちま○信濃にて。とうりと云。薩州にて。ながうりと云。「とうり」は糸瓜の上略なるべし。或人の曰、「へちま」といふ名は「とうり」より出たり。其故は「とうり」の「と」の字はいろはの「へ」の字と「ち」の字の

間なれは「へち」の間、といふ意にて「へちま」となつくるとぞ。又諺に「へちまのかはのだんぶくろ」といふ支有。是は此「へちま」にはあらず。へちくわんが馬の革一駄袋といふ事ゝ。「へちくわん」は茶人にて茶器を革袋に入、馬につけて遊行せしとなり。侍の隱遁したるにて粟田口に住めり。利久いまた与四郎とひし頃、或日粟田くちの庵を尋ける。庵主はもとより道化ものと聞及ひ、与四郎ゑぼしひたゝれにて云入けれは、あるじむかひに出、一礼して引込み、數寄屋にしめを張り、あたら數ひさげに塩水を入て、笹の葉にて与四郎をあたまくだし淸め、三寶にかはらけ、洗米をそなへ、神の影向と名づけ、茶をふるまひかへしたりとなん。よにをかしき物なりけり

甜瓜　まくはうり〇西國にて。あじうり。奥の仙臺にて。でうり。佐渡にて。ちんめうと云〇又江戸にて云。ぎんまくはを、備前にて。せんしかと云。奥の津輕又松前にて。しまうり。南部にては。きんくはといふ。眞桑瓜は、美濃國眞桑村の產を上品とす、故に名づくとぞ。又越前にて。ねづみ眞瓜といふ、味ひ甘美なり。吐方に用る所の瓜蒂是なり。其味ひ甚苦し。餘國の產は吐方に用ひて功なし

西瓜　すいくわ〇大坂にて。さいうりといふ

錦茘枝　つるれいし〇長崎にて。にがごうりといふ。是は苦瓜の轉語なるべし

聲梨　いばなし〇京及近江にて。いばなしといふ。北國にて。すないちごといふ。其葉平地木にて、高サ五六寸、三月實を結ぶ。大豆の如くにて圓し。外の色青く、內は紫黑色、味ひ酸く甘し。京幾の小兒好んて食ふ。漢

名未詳

栝蔞　からす瓜○伊勢及紀伊熊野邊にて。うりねと云。越前にて。くそうりといふ。土佐にて。ぐどうじと云（其根を同國にてこびと云）肥前にて。ごうりといふ（和産二三種有、其核玉づさの如くなるものは王瓜なり）

桔梗　きゝやう○信州上田にて。くはんさうと云。【古今和哥集】物名の哥に

へ秋ちかう野はなりにけり白露のをける草葉の色かはり行

防風　ぼうふう○畿内及藝州信州にて。山にんじんといふ（是和名之）

按に、今野菜となす物は濱防風なり。江戸の市にあるもの相州鎌倉よりをゝく是を出す。莖葉ふとくして胡蘿蔔に似たる物、眞の防風なり

澤瀉　おもだか○北國にて。なゝといふ。畿内にて。さじおもだかと稱す。是藥草なり。一種慈姑に似て花さく物をも「おもだか」といふ。同名異物なり

麥門冬　ぜうがひげ○關西及四國共に。ぜうがひげと云。東國にて。りうのひげと云。奥州にて。たつのひげと云。尾州にて。蛇のひげといふ

石蒜　しびとばな○伊勢にて。せそび。中國及武州にて。しびとばな又ひがんばな又きつねのかみそり。上總或は美作にて。いうれいばな又ひがんはな。越後信濃にて。やくびうばな。京にて。かみそりばな。大和にて。したこじけ。出雲にて。きつねばな。尾州にて。したまがり。駿河にて。かはかんじ。西國にて。すてごばな。肥ノ

唐津にて。どくずみた。土佐にて。しれい又しびと花又すゞかけと云又。まんじゆしやけと云有、種類なり

酸摸　すいば〇畿内にて。すいどうと云。江戸にて。すかんぽと云。西國にて。すいばといふ。上野にて。すいこきといふ。加賀にて。すいこといふ。【多識】ニ酸摸すし又すいとう草と有是也

酢漿草　かたばみ　一名すいものぐさ〇京にて。とんぼぐさ。泉州堺にて。すもゝ。筑紫にて。こがねはな。出雲にて。すいぐさ。相摸にて。はすぐさ。江戸にて。すぐさ。奥ノ津輕にて。すかんこ。尾張にて。すいもの草と云

白前　しらはぎ〇江戸にて。しらはぎと云。これ古名なり。駿河にて。しかみぐさと云。加賀にて。かもめぐさと云。伊勢にて。ひよい〱草と云。　按に、葉は萩に似て小白花咲り。唐種にろくゐんさうと云有、上品なる物也

大薊　せんにんさう〇九州及東國にて。ふつくさと云。尾州にて。くつぐさといふ。武州隅田川邊にて。馬の齒かけ草といふ

立葵　たちあふひ〇武州にて。たちあふひヲと云。勢州にて。やうらうぐさと云。阿波にて。ゐれいぐさといふ。漢名未詳

莨菪　ほめきぐさ〇江戸にて。なゝつぎゝやうと云。肥後にて。はしりどころといふ。【貫】大和本艸一葉、商陸に似て小也、根、野老に似たり。あやまつてこれを食へば狂走して止ず、故に「はしりどころ」といふと云々

鼓子花　ひるがほ〇陸奥及上野下野越後にて。あめふりばなと云。越前にて。こうづるといふ。相州海邊にて。へび

あさがほといふ

綟摺艸　もぢずりぐさ　一名ねぢはな○筑前にて。しんこばなと云。　今按に、果子の類に眞糝（しんこ）といふ物有、團子に似て制少し異なり。もぢずりの花形かの「しんこ」に似たり。故にねぢはな・しんこばななどいふか。尾張にて綿繰の眞木の兩の端のろくろを「しんこ」といふもおなじ意なるべし。又餻の類を果子といふ事は【說郛】に見えたり。點心（ちやのこ）ともいふ。【勢陽雜記】に勢州呑海院は絕景の地にて駿河の富士も見ゆる、此所にて一休和尚發句に

〽海をのむ茶の子か雪の富士の餅

白頭翁　ちごばな　一名しやぐま○京都にて。うないこ又ぜがいさう（善界の謡に、大唐の天狗の首領善界坊と有、其髮に似たりとそ）大坂にて。ひめばな。江戸にて。おきなぐさ（是和名なり）畿内にて。ちごはな。美濃にて。がくさう。加賀にて。けし〱まないた。甲斐にて。けいせいさう。木曾にて。かぶろ。越中にて。おにごろ又。てんぐのもとゞり。仙臺にて。ちゝんこ。下野にて。ちゝこ又。かはらちご。筑前にて。ねこぐさ。ぜがいさう。飛驒にて。ものくるひ又。かつしき。四國にて。尉どのと云

兎絲　ねなしかづら○東國にて。さうめんぐさと云。筑前にて。うしのさうめんと云。　案に、下野の國日光山さうめん谷の水中に此草をゝし。東武には隅田川に有

三稜　みつかど○伊勢にて。さぎのしりさしと云。東武にては井ノ頭の池邊に多くあり（三稜種類あり）

玉櫻春　いはくちなし○武州にて。たまてばこと云

石逍遙　まんねんかづら○北國にて。せんだんかづらといふ

連錢草　れんぜんさう○江戸にて。かんとり草と云。駿河にて。かたいかりと云。加賀にて。ねぜりと云。此草地に付て生す。氣味芹の臭有。鉄猫兒(いかり)の形に似て花半分有によりて名づけて「かたいかり」といふ。花又蓮の香有。故に半邊蓮の名有なるべし。是【廣大和本艸】の說なり。松岡氏曰、唐土の書に半邊蓮と云草有。是日本にて繪に書る唐草と云物也とぞ。案に「かんとり草」は古說連錢草と云。但二種有。蔓生なる物とゝに云「かんとり草」疳疾の藥之。其名によりて小兒喰初の器物に此草を画く、今の唐草の初之と云未詳 又一種叢生なるもの「鹿蹄草」和名まらはらしと云。又。積雪草又げんのしやうこなと云。武江本所三圍稲荷社の側に多く有

烏鳳花　しやちく○常陸にて。とんぼはぎといふ

蘡薁柴　七だんくわ○甲州にて。ちやうてまりといふ。花の色みどりにして四出一房に數百花つく。葉莖ねばりて衣に付はなれがたし

鹿蹄草　すゞらん○大和にて。まきをもてと云。江戸にて。べつかうさうといふ。鹿蹄草未詳 江戸には四谷大宮八幡社地に見えたり。同名別種あり

羊乳　つるにんじん○江戸にて。つりがねかづらといふ。木曾山中にて。ちうぶと呼

淫羊藿　いかりぐさ○江戸にて。くもきりと云

薄荷　はつか和名めくさ○西國にて。めはりぐさといふ（ひきをこしといふは山薄荷なり）

沙參　しやじん和名つりかねにんじん○山城山科にて。びしやくと云。越中にて。しやぐしやといふ。但馬にて。きゝやうもどきとよぶ。筑紫にて。してんばと云。南部にて。やまだいこんと云。上總にて。へびぢやわんといふ

大戟　のうるし○山城伏見にて。きつねのちゝと云。江戸にて。たかとうだいと云

澤漆　とうだいぐさ　一名すゞふりばな○備前にて。みこのすゞと云

鴨跖艸　あをはな（つきくさ。つゆくさ。うつしばな）○畿内にて。あをばな又つゆくさと云。江戸にて。つゆくさと云。上總にて。はたをりぐさと云。尾張にて。ぼうじばなといふ。加賀にて。こうやめんといふ。近江にて。こんやたらうと云。讃岐にて。かまづかと云。土佐にて。かまづか又ほたるぐさといふ。白石翁の云、よろづのはなは朝日影にあたりてこそ咲に、此花は月影にあたりてさけば「月草」とも云。今按に「新古今集」にかすが野の若紫のすり衣と詠る、此すり衣は紫草にて摺たる衣にて、女を紫にたとへたる之。惣して摺衣は地に直に草を摺付るもの之。今のもみぢずりの如し。摺衣四色有、爰に略す。又俗に藍紙といふものゝ月草にて制したる物といふ

莎草根　かやつりぐさ○近江にて。とんぼぐさと云。常陸にて。ますぐさと云。安房にて。ますげと云。一名連錢草。

又積雪草を連錢草といふは、其葉錢に似たる故なつく。同名別種之

蕺菜　じうやく　しぶき○江戸にて。どくだみといふ。武藏にて。ぢごくそばといふ。上野にて。どく草といふ。駿河沼津にて。しびとはなと云。越前にて。どくなべといふ

升麻　とりあし　あはもり○京にて。あはぼと云。下野陸奥にて。もくだと云(同國にて葉を「くさちや」又「にがちや」と云)

遠志　をんじ○京にて。ひめはぎと云。西國にて。野茶と云

天麻　ぬすひとのあし○仙臺にて。ぬすびとのあし和名之下野にて。のづちと云

龍牙　だいこんな○江戸にて。たんごなと云。備前にて。だいこんさうと云。其葉菘に似て、實はさやをむすぶ物之。一種狼牙をも大根草と云。未詳

兎葵　いはぶき○越中にて。はこべらと云。加賀にて。はこべといふ。是は正月七日七種のうちの「はこべら」にはあらず

景天　いきくさ　はちまんさう　○京にて。べんけいさうと云。筑紫にて。ちとめといふ。江戸にて。いちやくさうと云

今按に、景天其葉厚く薄白、花一所に集り咲て白く、口紅有てうるはしき小花ひらく。莖を伐て糸をもて釣て置にしぼみかはきて後雷の鳴る時必色を増す草なり。故につよきといふ意にて「弁慶草」と名つくる歟。又一種鋸葉なる物有。是はきりんさう之。又東國にて冬の日老人巨燵をはなれかぬるを「こたつべんけ

い」といふ。其意は亘燧にのみつよきといふ事也。又關西にて「なみだ弁慶」又は「泣弁慶」などいふは、人に負事きらひにて泣勝といふ意なるべし。又關東にて卷藁を尺余ッに制り、繩を以て中ゥにさげて、炙たる魚の串と共に貫置物有、名づけて「弁慶」とよぶ。是は彼の弁慶か七ッ道具といふ差物に似たりとて名づくる歟

**獨頭蘭**　ほくり○畿内にて○ほくりといふ。播磨にて○ほくろと云。四國にて○ゑくり。東國にて○はくりと云又○ほつくりと云○ほくりは略蘭に似て愛しつべき花也。奴僕其根をとりて皸をそくふもの也。關西にて「そくふ」と云は、東國にて「こそくる」と云詞なり。「そくふ」とは「そくい粘・そくひ板」などいふか如し

**荇**　あさゞ一名すつほんのかゞみ○近江の大津にて○ちやんきんと云。尾張にて○とちのかゞみといふ（同國にて泥龜を「とち」といふ）甲斐にて○くちじやけ。伊勢にて○どんがめぐさ。同國白子にて○いけのおもだか。駿河にて○なぎ。加賀にて○いもなぎ。周防にて○えんかういもばといふ（當國にて「えんかう」といふは「かはたらう」のこと也）肥後にて○かはいも。備前にて○すつぽんもく。江戸の四方にて○かへるゑんざ又○かはと又○ぜにもく又じやんぐもく又○かつぱのだまし、などゝいふ。下野にて○くさあふひ。常陸にて○どぶばす。仙臺にて○だぶなぎ。越後及越中加賀にて○がめはな（此國にては泥龜を「がめ」といふ）

今按に、荇は蓴菜の類、夏に至りて黄色の花ひらく、一種白花なるもの有、睡蓮といふ。京都に「ひつじぐさ」と云是なり。未ノ剋よりつぼむゆへに名とす。又浮草は惣名也。苹といひ、蘋といふ種類をゝし。葉

の裏に水沫有ゝのは蘋、水沫なきは荇なり。又田字艸といふものは則蘋にて別種なり。荇は莕に同し。

【詩周南】參差タル荇菜　又　あさゞと詠る哥

夫木へ　おもふことそこ深からぬ浮蓴より心あさゞのさてそ生ける

**浮薔**　なぎ○畿內にて。さはぎゝやう又。水あふひといふ。東國にては水あふひと云（澤桔梗の名はなし）中國及九州にて。あぎなしといふ。大和及尾張にて。水なぎと云。俗に水葱と書く。花を澤ぎゝやうといふ。夏秋ひらく、其色桔梗の如し

**石龍芮**　たがらし○京江戸共に。たがらし又。たぜりと云。西國にて。うしぜり又うばぜり又。ひきのかさと云。上總にて。かへるのきつけと云。下總にて。たゝらびといふ（但「たがらし」と稱する物二種有）

**眼子菜**　ひるむしろ○畿內及北越にて。ひるむしろと云。關東にて。ひるもといふ。信州にて。びりことといふ。奥の津輕にて。びり物といふ。田夫とりて瞼の腫にはるものゝ。【救荒本艸】にさゝもと有、實に笹の葉に似たり

**菰**　こも（海草に「こも」といふ有、よつて「まこも」と云。端午にちまきをまくにこもを以てす）○陸奥にて。かつみと云

古今へ　みちのくのあさかの沼のはなかつみかつ見る人に戀やわたらん

**燕子花**　かきつはた○常陸にて。かほばなと云（これは「かほよばな」の略語ゝ）

かきつばたを坂東にて筆花といふをきゝて

〽ふではなといふことはりをきくからに一首はかうそかきつはた哉　信海

**牛面艸**　たそば○加州にて。かへる草といふ。江戸にて。牛のひたいといふ

**綿棗兒**　つるぼ○山城にて。つるぼといふ。筑紫にて。ずいべら又。たんぽんぐはゐと云。江戸にて。うしのふし又牛うらうと云。田野に多く春宿根より生ず。夏に至て藤色の穗の如くなる花さく。翁ぐさの花に似たり。高さ四五寸、根は水仙の如し

**羅摩**　ちゝくさ○京にて。ちぐさ又。らまさう。江戸にて。ちゝぐさ又。らまさうともいふ。上總にて。やいとばな（花灸に似たり）つくしにて。かぶなといふ。土佐にて。がゞいもといふ。羅摩は腎を益し、精を補ふものゝ。葉の形細長く厚く兩對して、をもてにうす白く筋有、好事の人は茶のかはりとなし、又其根を炙て食す。甚甘し。葉莖ともに日にほして焚ば惡臭を消す。實は細長く三四寸ばかり有。へちまに似たり。名づけて「雀瓢」といふ。秋の末熟し、枯て二ッにわれ、中より綿の如くなるもの出。是を東武藥店ニて和のばんやと云

**羊蹄**　し俗ニしのね○近江及西國にて。ぎしくゝと云。出雲にて。しんざいと云。江戸にて。大黃と云。　松岡氏ノ曰藥家穿眼と稱する物、眞の大黃之。片と稱するは眞にあらす。則羊蹄なりとぞ

**蘭菊**　らんぎく○京にて。らんぎくと云。西國にて。山かうじゆといふ。　是は香薷の類にあらす。漢名未詳

**聚八仙**　かいば○筑紫にて。やぶでまりといふ

車前　おほばこ○甲斐にて。みちばうきといふ。房總にて。ほゝづきばと云。野斐及奥斐にて。かへるばといふ

海金砂　うにくさ○京にて。かにくさ又かんつると云。近江及美濃、或は上野にて。たゝきぐさ又いとかづらと云。西國にて。はなかづら又さみせんかづらといふ

菫　すみれ○幾内及近江加賀能登又東海道筋すべて。すまふとりぐさと云。江戸にて。すみれと云。上野にて。すまふばな。仙臺にて。かぎばなと云。大和の奈良ノ小兒。治郎坊太郎坊と云。西國にて。とのゝ馬と云。

菫一名こまひき草といふ。漢名剪刀草、花紫白二色有、共に莖のかたはらに鉤の形あり。兩花まじへ相ひきて小兒のたはふれとす。故に「すまふとりくさ」の名有。又東武にて「すまふとり草」と稱する別種有。江戸鄙にて「はぐさ」とよぶ草の、穗に出たるを云。漢名不知。尾斐にて。やつまたといふ是之。貞砂が「足を空なるすまふとり草」と聞えし附句もむかしがたりとなりぬ

碎米薺　げんげ○幾内にて。げんけばなと云。江戸にて。れんげばなといふ。筑前にて。翹搖花といふ。今按に、いにしへにいふすみれ草是なり。今「げんげばな」といふ。葉は柳の葉に似て花紫色、形蓮花のごとし。歌人今古詠賞して「すみれ草」といふ。又正月七日、七種の菜羹のうち、佛の坐と云說非なり。又壺すみれ論物之。こゝに略す

錢藤　こふぢ○大和及伯耆にて。ときしらずといふ

燕麥　かるかや一名しもぐさ○奥斐にて。しほがまがやと云。是【本艸】ニ謂ル燕麥の事にて、和哥に詠する所の刈萱

にはあらず。かやは草の總名か【日本紀】ニ萱姫惣て草の始て生ずるの名とす。尙異說有。　又木ノ艸に從(したが)ひ艸ノ木に从(したが)ふの文字をユし。たとへば柿ー梗。山ー茱萸の類にて、草木の稱も相通して難なし。【丹鉛錄】ニ【靑史古礼云】男ー子生ニ而射ニ天ー地四ー方ヲ其文ニ云、東ー方ノ之弧以レ梧ヲ、梧ハ者東ー方ノ之ー艸、春ー木也、南方之弧以レ桐ヲ、桐者南ー方之ー艸、夏ノ木ー也、中央ノ之弧以レ桑ヲ、桑ー者中央之ー木也、西方之弧以レ棘ヲ、棘ー者西方ノ之ー草也、秋ー木也、北方之弧以レ棗ヲ、棗ー者北ー方之艸、冬ー木也、是又可レ稱レ草ト也云 云

天南星　をほそひ○京都江戸ともに。むさしあぶみと云

橐吾　つは○江戸にて。つはぶきと云。大和にて。たからこと云

續斷　をとりばな○江戸にて。をどりこ草といふ。信州にて。へぼくさと云。【本艸會志】續斷をどりこぐさ、又こもそう草と云と有

卷柏　いはひば○伊勢にて。いはまつと云。武州秩父にて。てんぐのもとゞりと云。和名ニいはぐみ、又いはごけと有は、今云「いはひば」之

有通　ありどほし　一名とりとまらず○駿河にて。ねずみばなと云。江戸にて。ありどほしと云。九月實生(みな)りて翌年まで持ゆへ「ありどほし」といふ

紫羅傘　いちはつ○伊豆及駿河にて。ひでり草、又万ー年ー草といふ

水仙　すいせん○房州にて。きんだいと云。一重なる物を金ー盞銀ー臺といひ、千ー葉なるを玉瓏玲(ろうれい)と云

蘡薁　いぬゑび○京にて。いぬゑび。西國にて。がらみ。東國にて。むまのぶすゞ　相撲にて。ゑびぞろ。上野にて。山ゑび。上總にて。ゑびと云（がまごよみ又ゑびづるなとも云、則野葡萄也）

西番蓮　とけいさう○長崎にて。ぼろんかづらといふ。時-計-草は享保年中始てわたる。西-番-蓮となづけて來るよし【笠翁画傳】ニ出

薏苡　ずゞだま○東國にて。ずゞごと云。上總にて。はちこくといふ

日向葵　ひうがあふひ丈菊○江戸にて。ひまはりと云。大和及加賀にて。ひぐるまと云

紫金牛　からたちばな○京にて。からたちばなと云。關東西國共に。やぶかうじと云

鳳尾生

海仙花　はこねうつぎ○武刕にて。をらんださうと云。加賀にて。くろはぎといふ。甲州にて。よめがはしと云
さつきばな○仙臺にて。けたのきといふ。常陸にて。山うつぎと云。紀刕にて。みやまがすみと云。駿刕にて。あかてうじといふ。越中にて。たいほうのきと云。けたのきとは、民俗海蔘(いりこ)の桁(けた)にする故に名つくといふとは通ふなるべしと有

南天燭　なんてん○上總にて。らんてんといふ。【南留別志】ニ【八種画譜】闌天竹と云り。からもやまとも「ら」と「な」とは通ふなるべしと有

玉紫　たまむらさき○京にて。むらさきしきみといふ。筑紫にて。こむらさきと云

荼蘼　ときんいばら○幾內にて。ごやをぎと云。江戸にて。ときんばら又。ぼたんばなといふ。西國にて。きくいばらと云

案に、花は白牡丹に似て小なる物なり。故にぼたんばなといふ歟。又とびろくといへる酒は此花の色に似たりとて、或は酴醾漉或は酴醾綠等の說有。松岡氏「とぶろく」は濁醪の轉語かといへり。【文選】に濁醪「にごりさけ」と訓ず。關西にては「どびろく」と云。關東にては「どぶろく」とも「にごりさけ」共いふ。松岡氏の說によるべきか

**郁子** むべ○奧刕南部にて。木まんぢうと云。 或說に、是は【本艸】に載る木蓮の實也。秋に至りて熟し、味ひ甘し。小兒好んで食ふ。江州高嶋郡奧，島權兵衞といふもの、每年十一月朔日、 禁中ェ献ス。 文武天皇のころより今に絕ずといふ。 土人此葉を採り煎して癰腫を洗ふ、能崩れずして平癒すといふと見えたり

**天仙花** さるのしり○勢州にて。かきのほゝづきと云。 駿刕にて。さるがきといふ。或說に此樹花なくして實を結ぶ。うどんげとするも、天仙花をさすゝと有。今按に「うどんげ」と稱するは、稀に花さく木をすべて呼にやあらん。 無花果【本艸釋名】に「うとんげ」と有。又芭蕉の花をもいふゝ。又天仙花未詳

**合子草** よめのごき○京にて。ひめうりと云。 西國にて。よめのごきと云。 東國にて。すゞめのうりといふ。 安房にて。きんぶんしきといふ

**堅香子** かたかご（かたかご古名ゝ。今「かたくり」と云）○奧刕南部にて。かたくりと云。江戸にて。かたくり又うばゆり又ふんだいゆりと云。京にて。はつゆりと云。野刕日光山にて。ごんへいるといふ。 松井氏ノ曰、

奥刕南部に「かたくり」と云草有。其形百合に似たり。花も「ゆり」に似て正月頃紫色の花さく。其根をとりて葛の如く水飛して、わり餅となして食ふ。【萬葉】及【新撰六帖】に詠ずる所の「堅香子」といふ物なりとぞ

万葉 へもの丶ふのやそのいもらかくみまかふ寺井のうへのかたかこの花

六帖 へもの丶ふのやそをとめらかふみまとむ寺井のうへのかたかしの花

**辛夷** こぶし〇奥ノ南部にて。ひきざくらといふ（一名木筆又迎春花といふ）

**笑靨花** こゞめさくら〇江戸にて。こゞめざくらと云。加賀にて。こめやなぎ。畿内及四國にて。こゞめばな又すゞかけ又ゆきやなぎと云

夷曲集 へそれはきぬこれは木の根にこほれけり粉米の花の風にくたけて

**雪毬花** こてまり〇奥刕津輕にて。しつがけといふ

**八手木** やつでのき〇上總にて。うしあふぎと云。八手木は和品之

**莽艸** しきみ〇遠江にて。かうしば又かうのきと云。因幡にて。はなの木と云。江戸にてしきみの名は勿論たゞ花とばかりもよぶ之。是は「たてばな」の上略なるへし。貝原翁のいはく、樒とはあしき實といふこゝろ之。或人しきみの實毒にあらずといへり。余考るに毒有、誤て食ふべからず。又六月廿四日京師の男女愛宕に詣て樒を求めて下向する事あり。しきみが原名所なり。曾根好忠の哥に

〽あたご山しきみか原に雪つもり花つむ人の跡たにもなし

**木槿** むくげ○東國にて。はちすと云。京江戸共に。むくげと云。常陸及上總下總にて。きばち又。もつきといふ（もつきんの下略之）九刕にて。ぼてんくわと云。奥刕にて。かきつばき又きばちと云。南部にては。きばちすと云（これ和名なり）【萬葉】に〽あさかほは朝露をふてさくといへと夕かけにこそ咲まさりけれ。と詠せし朝貝は槿花ならんか。【和名鈔】に牽牛花「あさかほ」と訓す。【古今物ノ名】けにごしと詠るは。今云あさがほなり。同名異物之

**曼陀羅花** まんだらけ○江戸にて。てうせんあさがほと云。總刕にて。木あさがほと云。遠江にて。てうせんたばこといふ

**五味** さねかづら○大坂にて。びじんさうといふ。東國にて。びなんかづらと云。出雲にて。とろゝかづらと云。伊勢白子にて。くつばと云。土佐にて。ふのりかづらといふ。又さねかづらの實、則藥物の五味子之。相刕底倉邊にて。五九の伊と云

**菝葜** さるとりうばら さるとりの花○近江及讃岐にて。からたちと云。伊勢にて。かんたちと云。備後にて。ほらくひと云。佐渡にて。ないばらと云。筑紫にて。かめいばらといふ。上總にて。かごばらといふ。越後にてさるかきばらといふ
俗に倭山歸來とする物是なり。西國にて異名。五郎四郎柴と云。この葉をもつて小麥餅を包む。其餅を

五郎四郎といふ故に此名あり

〽夕かほに鏑みせはや五郎四郎　支考

山茶科　れうぶ（はたつまり。はたつもり、ともに古名なり）○畿内及美濃尾張にて。りやうぶといふ。遠江にて。ぎやうぶといふ。播摩にて。れうぼといふ

今按に、【救荒本艸】ニ山茶科、和名リヤウブとある是也。山民葉を採りて蒸て食のたすけとなす物之

夫木〽里人や若葉つむらんはたつもりみやまも今は春めきにけり

柾　まさき○武刕にて。まさきといひ又玉つばきと云。上總にて。したはれと云。西國にて。くろぎと云（薪のくろきにはあらす）　案に、西國にて「玉つばき」と稱する物は柾にてはなし。白玉椿にて別種之。【後拾遺】に式部大輔資業の哥に

〽君か代は白玉椿やちよとも何にかそへんかきりなけれは

とよめる是なり

合歡木　ねふりのき○京にて。ねぶりのき。中國及四國にて。ねぶのき。西國にて。かうくわんぼく。近江及越後にて。かうかのき。關東にて。ねぶたの木と云。周防にて。ひぐらし。美作にて。かうかいと云。【萬葉】ニねぶ又かをか共詠り

吉利子樹　うぐひすのき○江戸にて。うすの木と云。伊賀にて。こじきぐみと云。奥ノ津輕にて。しだみといふ。　木は二三尺に及ブ小木にて正月小花ひらく。三四月實熟す。赤くして中くぼみ形臼に似たり。小兒好んで食ふ。葉はつゝじの如く、秋に至て紅葉す。立花の下草につかふ物之。【救荒本草】に一名急縻子。和名ウグヒと見えたり

蚊子木　ひよん○西國にて。さるびやうと云。土佐にて。さるぶゑといふ。尾州にて。きひよんと云。　今按に、土佐の國にて此木を「ゆしの木」と云。又俗に「ゆすの木」ともいふ。其木より生ふる虫の巣之。中より出るむしを尾州にて「いんのこ」といふ。此國にてひよんといふ時は瓢の義にてひさご也。又駿州にては祭禮の笛にして吹在所有。又胡椒壺とし、或に瓢箪にかゆるゆへに「ひよん」とよぶとなり

橡實　どんぐり○信州にて。ぢだんぐりと云。又どんぐりの蔕を江戸にて。よめのごきといふ。伊勢にて。こめのごきといふ。越後にて。ならがまと云。上野にて。よめのごうしと云。　今按に、「はゝそ」と云と「つるばみ」といふは古名なり。今。くぬき又。こなら又。いしならなどいふ。西國にては。ならこうといふ。東國にて。こならと云。越前にて。ほうさといふ。どんぐりは則くぬきの實なり。池田炭は此木をもつてやく。攝州一倉といふ所にてやくといへとも池田炭と稱す

小梅　こむめ○江戸にて。こむめといふ。關西及近江にて。庭むめと云（これ梅の品類なり）

八朔梅　はつさくばい○關東の稱号なり。西國にて。かんかうばいといふ

寒紅梅　かんかうばい○關東にて稱し呼。西國にては。淺香山といふ

水楊　かはやなぎ○京都にて。ねのころやなぎと云。江戸にて。さるやなぎといふ

白楊　はこやなぎ○京師の稱之。筑紫にて。いぬやなきといふ。牙枝にけづり、又扇の箱となす木也

接骨木　にはとこ○上總にて。くさじきといふ。上野にて。はなの木と云。南部にて。こぶの木といふ

楊櫨木　ぬるでのき○尾張及上總にて。のでの木と云。上野及信濃にて。をつかどのきと云。陸奥及越前相模にて。かつの木と云（是は勝軍木といふによるの名なるへし。なを說有）奥ノ津輕にて。ごまぎと云（天台。眞言宗等の僧徒護广を修行するに此木を用ゆ、故に名つく）

楠　たふのき　和名たものき○山城にて。たつの木といふ。長門にて。こがいのきと云。西國にて。つゞの木と云。伊豫にて。はながと云。土佐にて。あぶらぬすびとのきといふ。又。あさだの木とも云。上總にて。しほだまといふ。伊豆にて。くろだまと云

案に、木立葉の形略肉桂に似たり。たゝ肉桂には葉に筋有。此木には筋なし。故にやぶ肉桂とも云

山椒　さんせう○薫もなく、味も辛くなき物を、丹波にて。ひんせうと云

枸橘　からたち○西國にて。げずといふ

樟　あづさ○山城にて。あかめがしはと云。播州にて。ごさいばといふ

「ごさいば」といふは、朝廷の御祭禮に用らるゝ和名なり。中華にはこの木に書を刻み、又弓をつくる、故に

梓弓ノ名有、一名木王

**檀** はりのき○東國にて。はんのきと云。奥ノ南部にて。やぢはといふ○はんの木の實を、尾張にて。山だんごと云（染色につかふものなり）

**枸骨** ひゝらぎ○上總にて。ねづみさしと云

**釣樟** くろもじ○越前にて。ねそと云。信濃にて。ぢしやといふ

今按に、釣樟、花は黄色にして。實は黒し、香氣有。花はつぼみたる儘にて散る。故に信州にて童謠に「つぼやぢしやどの咲かで散る」といふ。「つぼや」とは「可愛や」といふ事なり。再案に、越前國にて「くろもじ」の事を「ねそ」と名づくる説非也。「ねそ」とは一木をさしていふにはあらず。くろもじの條にても、又外の木のずはへにても山人伐てとり、たとへば、樏の輪、或は薪炭俵或は垣など結ぶにも、繩の如く用ゆる物を、惣名「ねそ」と云、これは「ねりそ」の略語之。古歌にも

〽秋の野に萩かるおのこなはをなみねるやねりそのくだけてそおもふ

とよめり。なはをなみとは、繩なきといへる心也。山邊赤人か、わかの浦にしほみちくれはかたをなみと詠せしも、潟なきと云事にして。片男浪にはあらずと之

**李** すもゝ○美作にて。すむめといふ

**柚** ゆ○畿內にて。ゆと云。東國にて。ゆずと云。中國にて。香橙といふ

**筍** たけのこ○上總及房州にて○たんこと云

**柴** しば○關西及中國陸奥邊にて○しばといふ（柴は惣名なり）東國にて○そたといふ（美濃尾張にてはくぬ木にかぎりて「そだ」といふ）加賀にて○ほゑと云。越前にて○ほせと云。上野にて○ぼやといふ。丹波但馬邊にて○おどろと云。紀州にて○よどろと云（荊蕀の轉語か）伊勢にては、葉の付たるを柴といひ、葉なきを○こがらけと云○又木の小枝なる物を關西にて○ほせきれと云。伊勢にて○つまをりと云。坂東にて○かなぎと云【中臣祓】ニ天津金木【文選】以レ筵撞レ鐘。註ニ小木ノ枝也云云○畿内ニて○わりきと云を、東國にて○まきといふ。能登及加賀陸奥にて○ばいぎと云又ながし木といふ。越中にて○もへしま五郎といふ

**榾** ほた○關西にて○ほたと云。尾張及出雲邊にて○きりかぶと云。伊勢にて○根ごじと云。安房にて○ねつかと云。上下總にて○木下といふ。土佐にて○かくいといふ（かぶぐゐ又はかれぐゐの畧か）武藏にて○ねつこと云。　按にねつことは根木也。根骨にはあらざる歟。へ川中の根木によころぶすゝみ哉　とありし根木も伐株の事にや。又「よころふ」は横轉なるべし

**菌茸** たけ きのこ○中國及九州にて○なばといふ。北國又は美濃尾張にて○こけと云。上野下野にて○もたせと云。佐渡にて○みゝといふ○初茸を美濃三河尾張にて○あをはちと云。北國にて○松みゝと云。奥の南部及近江邊にて○あいずりと云。因幡にて○あいたけと云。中國九州ともに○松なばといふ○紅茸を九州にて○じこうばうと云○檜茸を相州塔の澤にて○定源坊と云○鼠茸を江東にて○なめすゝきと云。筑紫にて○水たゝき

といふ

松毬　まつかさまつふぐり○畿內近邊にて。ちゝりといふ

〽紫のふどしに似たり藤のはな松のふぐりを咲てつゝめば　貞德

物類稱呼卷之三終

諸國方言

# 物類稱呼

衣食
器財

四

# 物類稱呼巻之四

## 器用

注連　しめ○肥前の長崎にて。かんじやうと云。中國にもかく稱する所多し

屋臺　やたい○東國にて。やたいと云。大坂及西國にて。だんじりと云。土佐にて。はなだいと云。江戸の祭礼には、一万度大麻の形を制て万度と云、又はなをかざる故花だしとも云。又だしと云物有。祇園祭の鉾のたぐひなり

今按に、かんじやうとは勸請といふことにや。神をいはひまつる心だてなるべし

紙手　かうで○江戸にて。をしがみと云。大坂及泉州堺にて。かうでと云。中國及土佐にて。こうじやうと云。今按に、をしかみは、上に口有と云意にて、口上と名付るにや。又土佐にては「幸定」と書よしえ

稻扱　いなこき○京江戸共に。いねこきと云。畿內にて。ごけたをしと異名ス。越後にて。ごけなかせと云。上野信濃にて。せんだこきと云。下野佐野にて。からはしと云。奥の津輕にて。せんこきと云。遠江にて。かなこばし。江戸田舍にて。かなごきと云。西國にて。せんばごきと云。　今按に、畿內にて後家たをしと異名せしは、昔は篠竹を三寸斗に切て、鳥の觜の如く制て、掌の中にをさめて、いねをこきしえ。近世鉄をもて制たる便利なる物有て孀婆の業を失ひしに似たり。よつて名とす。此説【和漢三才圖會】に見えたり

連枷 からざほ（穀をうつの具之）○京にて○まひぎねと云。東國にて○くるりと云。越後にて○ふりばいと云。中國及四國にて○からざほと云。肥後にて○ぶりこと云

碓 からうす○江戸にて云○からうすは、是畿內にて云○ふみうす之。江戸の田舍にて云○ぢがらうす之。今略して「ぢがら」と云。又穀する臼に農家にて云「からうす」「すりうす」の二品有。爰に略す

楞 あふこ○（物をになふ木なり。兩はしとがりたるをいふ）○中國及西國にて○あふこと云。長崎にて○らこといふ。四國にて○さすといふ ○江戸にて○てんびんぼう（物をになふ木にて兩の端丸く、あふこと形少しかはれり）京にて○たごのぼうと云。越後にて○かたげぼうと云。奥の仙臺にて○かつぎぼうと云。遠州にて○になひぼうと云。大坂及堺或は四國にて○あふこと云。九州にて○ろくしやくぼうと云。肥後にて○もつこぼうと云。古今俳諧哥に

へ人こふることをおもににになひもてあふこなきこそわびしかりけれ

是は「あふこ」を「逢期」とよみし歌之

篩 ふるひ○常陸にて○ほうろぎと云

案山子 かゝし（わら人形なり）○西國にて○鳥をどし。加賀にて○がんをどし。肥前にて○そふづと云（關西より北越邊「かゞし」といふ。關東にて「かゝし」とすみていふ）又添水を、肥前にて○うさぎつゞみ。河内にてそふづがらうす。上野にて○みづなるこ。信濃にて○しかつゞみ。加賀にて○はじきといふ。貞德翁の云、そぶつ

は田へ水を添る具にて、板にて拵たる物之。「そふ」は添之、「づ」は水之。季吟翁の云、「そふづ」は水邊にしかけて、水の力を添て音を出す鹿をどしなり。續古今

〽山田もる僧都の身こそかなしけれ秋果ぬれは問ふ人もなし　玄賓

今按に、加賀にて○はじきと云は『藝文類聚』にいはゆる彈弓之。其制異なるやうにおもはるゝ之。又備中國湯川寺の玄賓僧都の故事、又僧都、添水の論は哥書の注解『雑事筆海』『和字正濫』等の諸説、考合せて分辨有。又國〳〵にて其形異なる品數多しといへとも、事繁けれはこゝに略す

**榺**　ちきり（機の具なり）○關西にて○ちきり。關東にて○をまきと云

きぬまき（きぬをまく物之）○關西にて○きぬまき。紀刕にて○ちまき。東國にて○まへがらまき。下總にて○まへからみと云

**機躡**　まねき○京江戸ともに○まねき。遠江にて○いのとゝ云

かざり（綜みちをわくる糸之）○關西にて○かざり。武刕にて○かけいと。紀刕にて○あそび。下總にて○あやいと。西國にて○あぜいとゝ云

あぜ竹（升をわくる竹なり）○關西にて○あぜたけと云を、東國にて○あやたけと云

くさ（經をまく隔に用ゆる物之）○關西にて○くさと云物を、關東にて○はたくさ。西國にて○しとりといふ

**杼**　ひ梭同、筬○今按に、二品ともに諸國の通稱か。哥には梭をなぐるまなどゝ、光陰のうつりやすきを詠格と

す。又李白之烏夜啼ノ詩ニ機ー中織ル錦ヲ秦ー川女碧ー紗如ク烟ノ隔テハ窗語ル停メ梭ヲ悵ー然トシテ憶フ遠人ヲなども作れり。又世俗互に面を和して內心の和せざる人を「ひをする」と云諺有。是に杼と筬とすれあふてひとつ所に寄らぬにたとへたるなるべし

尺　ものさしたかばかり〇武州河越にて。しやく共云。常陸にて。しやくごと云

綿筒　わたあめ〇京大坂にて。ぢんき。西國にて。けいまき又。しのまき。土佐にて。へちま又。しのまき。尾張にて。あめ。越後にて。しの。武藏にて。しのまき。遠江及安房上總常陸にて。よりこ又ねぢこ。豐前豐後にて。まるわたと云

柊楑　さいづち〇畿內にて。ばんじやうつち。西國及四國にて。さいこづち。東國にて。さいづちと云。又鉄楑を奥州にて。かなさいづちと云

釿　てをの〇關東にて。てうな。大坂にて。ちよんのと云

鋸　のこぎり〇畿內及山陽道にて。のこと云。上州にて。のこずり。上總安房にて。のふぎりと云。これはいにしへ。のほぎりといひし名の轉したるゝ

算盤　そろばん〇薩摩にて。ろくろと云

杠秤　ちぎ〇關西にて。ちきと云。越後にて。きんれうといふ。關東にて。ちぎりといふ

錢　ぜに〇畿內にて裏の方を。もじと云。東國にて。かたと云。同く裏のかたを畿內にて。ぬめと云。東國にて

ᵒなめと云。又錢緡(ざし)の事を日向にてᵒつらぬきと云。東國にてつらぬきと云は、出錢の事なり。尾張にて各(かく)出(しゆつ)と云も此たぐひならん。伊勢にて集錢(しうせん)と云

**筲**

いかき○畿内及奥刕にてᵒいかき。江戸にてᵒざる。西國及出雲石見加賀越前越後にてᵒせうけと云。武刕岩附邊にてᵒせうぎ。安藝にてᵒしたみ。丹波丹後にてᵒいどこ。遠江にてᵒゆかけ。越後信濃上野にてᵒぼてといふ。又江戸にてᵒかめのこざるを、畿内にてᵒどんがめいかき。藝刕にてᵒどうがめしたみ。下野にてᵒひらざると云。又江戸にてᵒ御前籠(ごぜんかご)といふ物を、備前にてᵒしまふぐ。又小き物をᵒこしをりと云。又關西にてᵒめかごと云を、東國にてᵒめかいと云。或ᵒふごᵒびく又ᵒこめあげざる。又其大ィなるをᵒかたまきと云。其外品類盡しかたし。今爰に略す

**椀**

わん（飯椀(いひわん)・汁椀(しる)・菜椀(さい)等の品類あり）○西國及北國にてᵒごきと云。東國中國四國にて日用の飯器(はんき)をᵒじやうぎと云。相摸安房上總下總武藏邊に至るまで ᵒかうだいと云（江戸は勿論其國〳〵の驛舍にてはかうだいとは稱せず。わんとのみよぶ之）

今按に、「ごき」と云事卑賤(ひせん)の詞にはあらさるべし。【續日本紀】に御器ノ膳と有。又「ちやうぎ」と云へるは則常器之。西國にては「ちやうぎ膳」「ちやうぎ椀」「ちやうき箸」などゝ云。又「かうだい」といふは、今の椀の制とは少たがへり。今の世に椀といふ物は、いにしへ引入合子(がうし)などいひし之。【壒嚢抄】に見えたり【平家物語】に木曾義仲精進がうしの詞あり。【職人盡哥合】に「いなばがうし」などの詞あれば 因幡の

蓮を上品とせしにや。今も年の初に、門松につくる「鞭合子」といふ物有。古き詞なり（大峰の圖司のわたりにて人々俳諧連哥せしに、いとせばき家なりければ、ゆふけもる器物こしらへる音、席に聞えければ

〽大峰の圖司のあたりのちかきにやなりわたるらんごきもぜんきも　季吟

○平（ひらざら）○下総及奥州にて。ひらきといふ

○皿○常陸及下野にて。かにといふ

○坪○肥前佐賀にて。のぞきと云　○箸○奥州にて。をてもとゝ云。又食牀を俗に膳といふ。然とも膳は飯食を兼備ふるの惣名之。又俗に折敷は食机にていにしへ食を「をし」といひし之

**猪口**　ちよく○薩州にて。のぞきと云。江戸にても底深きを。のぞきちよくと云。又福建及朝鮮の方言に鐘を呼て「ちよく」と云

**盆**　ぼん○中國にて。ぼにといふ（哥に蘭を「らに」紫苑を「しをに」といふごとく「に」はねえ）

**俎板**　まないた○駿河及上総にて。きりばんと云。下総或は奥の津輕にて。さいばんと云。信濃にて。まなべいたと云。まなは即魚なり。いにしへ魚菜を「な」と云けり。後「菜」を「な」といひて「魚」を「まな」といひかへたり

**擂鉢**　すりばち○江戸にて。すりばち。大坂にて。すりこばち。山陽道及四國にて。かゞつ。西國にて。すりこのばち共いふ。東國の女言に。しらぢと云。上総及出羽にて。いせばち。奥州にて。らいばん（擂盆か）同三ノ戸にて。かはらけばちといふ

**摺粉木**　すりこぎ〇江戸にて◦すりこぎ。五畿內及西國中國四國にて◦れんぎと云。出雲にて◦めぐり。越後にて◦めぐり又まはしぎとも云。出羽にて◦めぐりこぎ。津輕にて◦ますぎと云

**塘戸**　じうのう〇京にて◦をきかき。江戸大坂共に◦じふのう。北陸道及因幡伯耆或は土佐にて◦せんばと云。奥刕南部にて◦ひかきと云。今按、遞火「ひかき」と訓す。江戸にて藁じふのうと云物也。炭鉤、是江戸にて云じうのう之

【合類節用】に十王は冥官の像の
手の形に似たるゆへ十王と云々

**鉄灸**　てつきう〇上総及信濃越後にて◦てつきと云。仙臺にて◦ごとくといふ

**飯櫃**　めしびつ（めしつぎ）〇京にて◦いご。上総下総常陸これにをなじ。安房にて◦あまご。伊勢にて◦さうないといふ

**煙筒**　きせる〇江戸にて◦きせる。京にて◦きせろ。伊勢にて◦きせりと云。是皆五音相通にて如此の類餘多あり。たとはゞ江戸にて哥骨牌といふ物を、京にて「うたがりた」と云、たらべたる形刈田に似て、殊に秋の田のかりほの御製哥卷頭に置侍れは、刈田ははなはだ雅名とやいはん〇火皿　京にていふ。江戸にて◦がんくび。伊勢にては◦ふくといふ〇斑竹は羅宇國より出す故にその名あり。羅宇國は南天竺の內、暹羅の西隣國之。又きせるの脂を大坂にては◦ずと云

**烟盒** たばこいれ○薩摩國の農夫。のんこつと云 かくの如の形に桐をもて制たる物之。提銅卵又は提たはこ入なといふ物に形は殊之といへともをなし類之。又提たばこ入を、越後にては。やらうと云
今按に、「やらう」とは藥籠の略語なるべし。世に印籠と稱する物は、むかし印石。印肉を入たる器にて、竹をもて小く籠を制、腰にたれたるものなりしが、今藥を貯へる具となれり、「やらう」と云も此たぐひにてやあらん

**釜** かま○江戸にて稱するかま如此を、畿内及西國四國倶に。はがまといふ（關西にては、はがまの小なるものにて茶を煎して「茶がま」といふ）又江戸にて云ちやがま如此を、畿内及西國にて。くわんすと云。東國にて「くはんす」とよぶものは、はのなき物につるをかけたるをいふ。四國にて「あられくわんす」とよぶたぐひ之
今按に、上世かなへといひし。あし鼎。まろ鼎などいひし物を、後かまといひ、はがまなどゝよぶ。安房の國の浦里に「かなへむら」といふ所あり。大いなる釜のふた、荒波に打あげられて、今たを有とかや、往古かなへむらとなづけたる成べし。又、古へ竈と稱せしは今竈といふ。然とも塩竈。炭かまなどの名遺れり

**鍋** なべ○江戸にて。くちなべといふを、遠江及上総下総にて。せんばと云（四國にては鋼にて制たるを「せんば」といふ）泉州にて。てとりなべと云
和泉國堺の南に一路菴といふ有。一路上人住給ひし舊跡とて今なを存す。上人は一休禪師同時の僧之。

世に在せし頃、一休此菴室に來りて、いかなるか是一路と問ひ玉ひしかば、一路言下に、萬事皆休すへしいかんぞ一休、と答へられしとぞ。草菴もとより余財なし、手取鍋ひとつ有けるを、窓前に掛置て食を乞ふ。道ゆく人其德をしたひて、米穀菜瓜のたぐひを施をとりて其日〳〵の糧とす。一首の哥あり

〽てとりめよをのれが口のさしでたぞざふすいたくと人にかたるな

○なべのふたを房州にて。かざしといふ

**杓**　ひしやく○關西にて。しやくといふ。關東にて。ひしやくと云。もとひさごにてつくりたり。よつていにしへは「ひさご」といひしぞ。瓠をば生ひさごと。いひしぞ。「ひさご」轉して「ひしやく」となれりとぞ

**茶碗**　ちやわん○北國及中國西國四國或は常陸にて。てんもくと云。肥前ノ鍋嶋與州二本松にて。いしごきといふ。信州筑摩邊にて。けんぐりと云。此邊の山民は隣家へ行かふに、茶碗を袂に入行て其うつわにて湯茶を飮とぞ。其ゆへをしらず

**鏊**　いりなべ○京にて。いりごら。大和及東國にて。ほうろく。下総にて。いりがら、常陸にて。ちやほうじといふ

今按に、いりなべ俗に「いりがはら」と云。いりごら。いりがら又こうらなといふは共に。いりがはらの轉語なるべし。又ほうろくは「ほいろ」の器といふ意、是鏊の屬ぞ。【東雅】【下學集】を引て焙爐の字、訓て「ほいろ」と云。ほいろは火色なり。其火を得て。色の變するをいふと見えたり。又「いりがはら」は、

土のやきなべといひて。今の制とは形かはりたる物之

湯罐　やくはん〇大坂及中國四國にて。ちやびんと云。遠江にて。とうびんと云。信濃にて。てどりと云。土州の客予に語ていはく。我故郷にやつくわんと云有。ちやびんと云物よりは少大きくして口短を云。ちやびんと云は、形丸らかにして口長きを云とぞ。江戸にて其かたちいろ〳〵有といへともすべてやくはんと云。又茶びんは其制別物なり

土瓶　どびん〇薩摩にて。ちよかと云。同國ちよか村にてこれをやく。ちよかはもと琉球國の地名なり。其所の人薩州に來りてはしめて制るゆへにちよかと名づく。又常陸及出雲或は四國にて「どひん」と「ひ」の字を清(すみ)て唱ふ。出雲常陸などにては「どびん」となづくるは牛馬の睾丸(きんたま)之。四國にては人の睾丸の大(イ)なるをいふとぞ。武藏の國にて春のたはふれにすなる瞽兒の親縋(なれ)といふ物のしるしにつくる物を「腝(どつ)ぷぐり」又「どつぴん」などゝいふも、此意(こゝろ)なるべし

提燈　てうちん〇仙臺にて。ひぶくろ。常陸にて。をつぺしあんどんともいふ。日向にて。へこといふ

行灯　あんどん〇加賀にて。しほんばりといふ〇江戸にていふ。丸あんどんを、加賀にて。まはしあんどんと云。津國にて。ゑんちやんどんと云。是は「ゑんしうあんどん」の誤之。小堀遠州侯の物數寄にて制りはしめ給ひしと之

江戸にて。はちけんと云もの有、竹をもて丸く輪(わ)を作り、菅笠の如くたてに骨を組て紙にて張。灯(ひ)を點(てん)じて。

うつばりなどにかくる物之。加賀にて。かさあんどん。越前にて。つりあんどん又につほう又につほんといふ。津國にても。につほう。武藏にて。さんとく共云　○灯心を。とうしみと云時は和訓和名と成。譬ば芭蕉を。はせを。文を。ふみ。紫苑を。しをにと云類也。是等和語に用ル例之

灯檠　かきたてき（とうしんをさえ）○備後福山にて。へげぐと云。筑後國久留目にて。さんとくといふ。越前にて。かきたてぐゐ。越後にて。かんだしといふ

發燭　つけぎゆわうぎ○東國にて。つけぎといふ。關西にて。ゆわうと云。越後にて。つけだけと云。土佐にて。つけぎと云、又。つけだきと云

今按に。關西にて「ゆわう」といふは「ゆわうぎ」の下略成へし。又外より重の物にもあれ、何にもあれ贈り來る器の內へうつりに紙或はつけ木を入て返す事有。硫黃又いわう共いひ侍れは、祝ふといえる心にて、つけぎを入る事ならん。又東國にて「うつり」といへる物を。土佐の國なとにては其器に入て返ス物の名をは。とめといふ。又越後にて「つけ竹」といふはむかしは竹を薄くへぎて、今のつけぎの如く用ひたるとぞ。土佐のつけだき。つけだけ成へし

衣架　かけさほ（俗稱）○上野にて。みせざほ。下總猿嶋郡にて。みぞゞと云。筑紫にて。ならしと云。　今按に。みぞゞは御衣なり。「そ」は「さほ」の反「そ」なれば。「みぞゞ」と稱するは古き詞なるべし。疑らくは。平ノ將門の時代の遺風にてやあらんか。又世に衣桁を「みそかけ」といふも同し心之。【杜甫ヵ詩】弱ㇾ

翠鳴ㇾ衣ｰ桁ニと有は是衣を曝す竿なり

歩障　ついたて〇豐劦にて。ざちうと云（肥前にて「つきたて」といふは「ついたて」といふに同し）

剃刀　かみそり〇西國にて。そりと云。奧劦白河にて。すりといふ（婦女の用ゆる剃刀の小なるものを。けたれと云は、幾内東武ともに同し）

笄　かうがい〇參河及遠劦にて。ほせと云

櫛　くし〇京大坂にて。たいまいのくしといふを。江戸にて「べつかうのくし」と云

蟬髩揷　つとさし〇幾内にて。つとさし。東國にて。たぼさしといふ（關西にて云髮のつとを東國にて「たぼ」といふ）中國西國共に。つとはね。土劦にて。つとさし又つとばりと云。加賀にてつとかうがいと云

罟　てんのあみ（小鳥を捕あみ之）〇關西西國にて。てんのあみと云。京にては。かすみといふ。東國にて。ひるてんと云

竹筌　たつべ（魚をとる具之）近江にて。たつめといふ。河内にて。ぢんどうといふ。四國にて。うゑと云。武劦にて。どうと云。　江戸の北いなかにて「どう」と云物に似て、少し別なる物を「ごしうけ」と云。其形榻をふせたるに似たり。　いにしへ榻を「がうし」といひければ盒子魚器とやいひつらん。今は詞ちゞみて「ごしうけ」とよぶ之

人偶　にんぎやうてくゞつ〇京江戸共に。にんぎやうと云。豐後にて。でこんぼうと云。中國にて。できのぼうと

云。西國にて。でこ又でく共云。豐前及武藏相摸安房上總下總にても。でくのぼうと云（これいにしへ「でくるぼう」と云し詞の變したるゝ。京大坂のいなかにても「でこ」といふ）又京大坂にていふ。そろまと云人形に、東國にて。のろまといふ物ゝ。又京にて。つくね人形といふ物を、江戸にて。ねりにんぎやうと云。又起上小法師といふ物を、勢州久居にて。うてかへりこぼしといふ（この所にてはかたなの鞘のかへり角といふものを「うてかへりづの」と云。其外もこの類にてをして知るべし）

**紙鳶** いかのぼり〇畿内にて。いかと云。關東にて。たこといふ。西國にて。たつ又ふうりうと云。唐津にては。たこと云。長崎にて。はたと云。上野及信州にて。たかといふ。越路にて。いか又いかことといふ。伊勢にて。はたと云。奧州にて。てんぐばたと云。土州にて。たこと云（上かたにてはいかをのぼすといふ。江戸にてたこをあくるといふ。東海道にてたこをのぼすといふ。相州にてたこをながすと云）

**糓匣** こめびつ〇東國にて。こめびつ。京にて。からとと云。大坂及堺にて。げぶつ。奧ノ仙臺にて。らうまいびつ粮米。津輕にて。けしねびつと云（東國西國ともに雜糓を「けしね」と云。余國はしらす）

**桶** をけ〇上下總州及武藏にて。こがといふ（江戸にて四斗樽、京にて四斗をけと云を、總州にて四斗こがといふ。すえふろをけを、すえふろこがなとゝいふ）常陸にて。とうご。豐州及肥前佐賀にて。かいといふ。長崎にて。そうと云（大いなるを「ふといそう」といひ、小なる物を「ほそいそう」と云）畿内にて。たご擔桶といふを、江戸にて。になひといふ（これになひをけの畧ゝ。又になふとは。人ふたりにてもつを云。かつく

と云ゞかたぐると云は意通へり。又「たご」とはをけの惣稱之。上かたにては、なにたこかたごといふ。たごとばかりいふ時は、畿内西國共に水桶之。東國また豐後にては「たご」と云は糞器をいふ之。〔多識〕尿桶と有この事にや）京にて。かたてをけと云を、江戸にては。かたてをけ又。さるぼう又 。くみだしとも云。越前にて。かいみづをけと云。加賀にて。かいげ。上野にて。ひづみと云（造酒屋にて用ゆるかたてをけの大なるものを、肥前にて。たみをけといふ）

盥　たらい○奥州南部にて。たいへと云。陸奥にて。せんそくばちと云。因幡にて。はんざうと云。江戸にては匜盥（みゝだらい）を匜（はんざう）と云。又角（つの）だらいといふものは、耳たらいに角（つの）の有物之

箍　たが（京にて。かづらと云（工匠を「かづらかけ」と云）畿内近國及九州四國にて。わと云（同桶のわ入といふ）江戸にて。たがといふ（同たがかけと云。田舎にてたがやといふ）

叺　かます　かまけ○西國にて。かまきと云。肥前島原にて。ゑなまきと云。唐津にては米穀を入るを「かまき」といひ、錢を入るを「かます」といふ

苞　つと○西國及四國ともに。すぼといふ

木鉢　きばち（江戸にて。きばち、京にて。ひきばち、越後にて。ふくばち。土佐にて。きぢばちといふ

杵　きね○出羽にて。うちぎといふ。下總にて。をといふ○腰の細き杵を關西にて。かちぎねと云（かちは搗之。搗栗（かちぐり）と云もをなしこゝろ之）東國にて。てぎねといふ。上總にて。きゞといふ（婚礼に用る手杵に、鶴龜や

うのもやうを粉ッを以て画くことあり）

**梯**　はしご〇伊勢の長嶋にて。ほうじうといふ又。ごすけといふ
今按に、東海道五十三次の内に、桑名の渉より言語音聲格別に改りかはるよし也。將五十三驛とは【山谷ヵ詩】鬼門関外莫レ道コトレ遠シト、五十三驛是レ皇州と有詩によつて定られしと云説あり

**甄**　とくり〇下總にて。ぼちといふ。この國にて。酢ぼち。酒ぼちなとゝ云〇江戸にて。ゑだる（とくりの家之）といふを、京及北越にて。たじといふ〇江戸にて云ぬりだるを、遠江にて。やなと云。又此國にて酒を嗜む人の、女子を生む時は其名を「やな」とつくる人多し（柳樽の略語なるへし）

**漏斗**　じやうご（酒を器にうつす具なり）〇上野にて。すひかん又。すひはくなどゝいふ（別に米穀を俵にいるゝ竹器に同名あり）

**屐**　あしだ〇関西及西國にて。ぼくり又。ぶくりといふ。中國にて。ぼくり又。ぶくりと云物は、江戸にて云げたの事之

**草履**　ざうり〇江戸にて。こんがう又。のりものざうり（うらおもて共に藺の莞をもつて織たる物之）畿内西國にて。こんかうと云（乗物ざうりの名はなし）〇江戸にていふ。かはざうり（竹の皮にてつくりたる物）を九州にて。うらなしと云。東國にて。がづざうりと云〇江戸て。なかぬきざうりを、京にて。すべざうりと云（江戸にてわらのしべといふ物を、京大坂にてわらすべといふ）因幡にて。わらみござうりと云〇江戸にて

いふ。わらざうりを、奥刕仙臺にて。ちりざうりと云〇江戸ニて云。ごんずわらぢを、關西にて。あとづけざうりといふ。九刕にて。むしやわらぢ又。むしやざうりといふ（小兒のはく物之）　今按に、履釘（こんぱう）和名たちはめといふ物なり。地下にて用るは制（せいことなり）異といへとも、こんがうとよぶ。昔比叡山安然僧正貧窮（ひんきう）にして書を求る力なし、よつて金剛法器之を手に持給ひて草履（さうり）を制しより「こんがうざうり」と世にいひならはしたるとなり

## 樏

かんじき　かじき〇畿内にて。なんばといふ。　今按に、「かしき」はくろもじの木をたはめて輪となし、繩にてあみ、革（かは）の紐をつけ、大サ壹尺ばかりあるもの之。北越及奥羽などにて雪沓（ゆきぐつ）をはき、かじきを結ひ付て、道路を踏かたむるに用ゆ。畿内にて「なんば」といふは、深田の泥の上を行ものにて、是則かじき之。

西行家集に

へあらち山さかしく下る谷もなくかじきの道をつくるしら雪

【太平記】ニ曰、かじきを踏ざる故、雪中に四五尺落入たりと云々【史夏記】山行ニハ乘ル樏（かんじき）と有。是山上を行の具之。樏（かんじき）は又深き泥を行もの之。又越前にて山の雪崩れて落る時は、山人蹕（ひつ）を發して「跡くろもじに端ナはぜの木、あめうしの革（かは）で八尋延（やひろばへ）」といひ／＼其處を遁去（にげさ）るとなり。かく呼ぶ時は、其難を遁（のが）るゝと云つたへたりとかや。「跡くろもじ」とはかじきの輪をいひ「はなはぜの木」とは櫨（はぜ）の木なるべし。鼻緒（はなを）といふ物を、はぢの木にてつくりたらんか「黄牛（あめうし）の革（かは）」とは紐（ひぼ）の事「八ひろばゑ」は繩八ひろをもつてあみた

りといふ事にてやあらん。尙可レ尋　○雪車といふ物を越前にて。こいすき又こすきともいふ。かじきとは別物なり。そりたる木にて制り、雪の上をすべらかし行ものと見へたり。【堀川治郎百首】

へ初深雪降にけらしなあらち山こしの旅人そりにのるまで

【會津風土記】ニ雪車又作二雪舟一共ニ訓二素履一云々

供饗　くぎやう○江戸及び四國にて。けそくといふ。東國にて。ろくがうと云。西國にて。ろくごう又ごうと云。近江にて。くげと云。越前にて。くぎやうと云。加賀にて。をけそくだいと云（供したる品ををけそくといふ）今按に、ろくごうと云はおくぎやうの訛歟

財布　さいふ○甲州及上野上總邊にて。ぢんきちといふ。これ武田信玄陣中にて陳吉と名づけ給ひしといひつたふ

巾着　きんちやく○豐前にて。ふうづうと云。長崎にて。だらと云。津輕にて。だらこと云

## 衣食

羽織　はをり○安房國にて。はごりと云。阿波にて。どうぶくと云。今按に、姓氏に錦織とよめり。羽織を「はごり」といへるもおなじ心歟。又道服といふ物は、もとより道子の服にして、其制法有。はをりは又旅道

中に便よき服なれは　道服共いふなるべし。同字別物之と古人もいえり

袴　はかま○信濃國木曾路にて。じんぎぶくろ又いんぎんぶくろともいふ

頭巾　づきん○奥州南部の俗。てつぺんぶくろといふ。江戸にて。枲づきん又。がんだうづきんと云を（強盗東國にて「がんだう」と云）北國にて。ぼうしと云又。をくそづきん。をくづづきんと云。武州秩父にて。ちよつぺいと云（品類多しこゝに略す）

腰帶　こしをび○東國にて。こしをびといふ物を、畿内にて。かゝえをびと云。又東國にて。しごきと云物を、畿内にて。かゝえぼうしと云。肥後にて。てぼそといふ（江戸にて「てぼそ」といふは「わたぼうし」之。泉州堺にて「こきんわた」といふにをなじ）

繻半　じゆばん○諸國ともにじばんと唱ふ。東國及西國にて。はだぎともいふ。關西にて。はだつけともいふ。越中にて。はだこと云。北國及東奥の所々にて。てゝらといふ。　今按に、「てゝら」夏の日農民の業をつとむるに着る物之。單にて丈ヶみぢかく袖はありなしにてひら〳〵としたる物之。又「どてら」といふも「てゝら」といふ詞の轉したるなりといへる人も侍れと、今「どてら」と呼物を見るにひとへなる服にはあらず。わたを入たる布子となづくる物之。てゝらといひ、どでら又つゞれなど云、是皆通音之。其制はかはり有て、名は同し心ならんか。又小兒の繻伴を、肥前及土佐にて。ちんことといふ。「萬葉集」の哥に

〽たのしみは夕顔たなの下すゞみおとこはてゝらめはふたのして

犢鼻褌　ふどし○東國にて。ふんどしといふ。西國および中國にて。へこといふ。奥羽にて。へこしといふ。常陸にて。てこと云（てこをかうなどいふ「てこ」は「へこ」の轉したるか）畿内及美濃近江にて。まはしといふ。上總にて。たふさぎといふ。【日本紀】ニ犢鼻褌【萬葉集】ニ

〽わかせこかたふさきにするつふれいしよしのゝ川にひをそかゝれる

【和字正濫】ニ　ふみもだし、昌郁翁ノ説にふみとほしなどゝ有。たふさぎは陰塞の上略之。禮家にははだまきといふ。又相撲を業となすものは「まはし」といふ。其外下をび。はだの帶などゝいふ所有　○二布（女の身に近く腰をふさぐ具之）京にて。きやふといふ。畿内及美濃近江にて。ゆぐといふ。西國にて。ゆのものと云。上總にて。みゝねと云。江戸にて。下をび又ゆもじと云。陸奥にて。こしまきと云。津輕にては。よまきといふ

寢衣　よぎ○奥州にて。よかぶりといふ

雨衣　あまぎぬ　和名○江戸にて。もめんがつぱと云。中國四國ともに。あまばをりといふ。肥後にて。じうりんと云。大和にて。じうりがつぱと云。伊勢にて。じうりと云

今按に、じうりといひ、じうりんなど云。是は時雨凌成へし

淸水谷實業卿の狂詠に

〽霜月に霜のふるのはことはりやなど十月に十は降らぬそ

中院通茂卿かへし

へ十月にじうはふらぬと誰かいふ時雨はじうとよまぬ物かは

飯

いゝめし○加賀及越中又は武藏の國南の海邊にて。おだいといふ。薩广にて。だいばんと云。出羽にて。やはらといふ（羽黒山の行者のことば其國にひろまりたるなるべし）○小兒の詞に關西關東共に。まゝといふ。又東國にて。ごゞ共いふ（これは供御なるべし。いせ流の女詞にも「ぐご」といふ）上總下總の小兒。ばつばといふ（余國にては「たばこ」の事を「ばつば」といふ。總州及常州にて「まゝ」といふは水のことなり）今按に、飯を「おだい」といふは古き詞也。故に飯を炊く所を諸國通じて「おだい所」といふ。又土佐國幡多郡は西の境也。此所にては女の陰門を「まゝ」と云。專ら少女のをいふとぞ。又往古には飯を「をし」といひし也【古事紀】【日本紀】等に袁須・袁勢など見え侍るは是則食の叓なり。今の世に婦人產の時產棚にをし桶といふ物を飾る。「をし桶」は「飯器」をいへり。【徒然草】に御產の時甑おとす叓は定れることにはあらず。御胞衣とゞこほる時のまじなひ也。（下略）　甑【和名】古之岐。飯を炊く器也と有。又鷹に餌をするを「をしする」といふも同じ意にやあらん○晝食○幾內にて。おこゞといふ。南都にて。けんずいといふ。　今按に、東國の農家にて午未の尅の間に食事爲を。こぢうはんと云。或村老の云、晝食を「こぢうはん」となづくるは、午時半と云意なりとぞ。予おもふに農民は形を勞する事はなはたしければ、日の長きころはふたゝびも食すべし。再びめの晝食なるか故に小晝飯なるへしや。駿河國にて。やうびるい

と云は「夕晝飯」の轉語にや。土佐の國にて○こびるまといふ。是におなじ。土州にては晝食を○ひるまといひ（ひるまゝなり）夜食を○よいと云（夜飯なり）上總下總にてこうだいごろと云は、是は晝飯をいふ（「こうだい」とは汁椀をいふなり）

**小豆粥** あづきがゆ○加賀にて○さくらがゆと云。但馬國にて○ざふすいといふ。

世俗わたましに赤豆粥を煮て祝ふこと有。一說に是はもと伊豆の國風にて、三嶋明神の氏子伊豆の豆と三嶋の三を象りて豆三粒入るより、今通して世上の流例となるといへり。（未詳）又正月十五日小豆がゆを煮て都鄙家毎に是を食す。【淸少納言枕草子】に十五日はもちがゆのせくまいる、とかきしも此こと也。をなじ草子に、かゆの木にて女をうつ事を書るも此日なり【狹衣】にも見えたり。今も北國及西國には松の枝、柴などにて男根の形をつくりて女の腰をうては子をうむまじなひとて今もする事也。東國にも聟嫁などをうつ事有。又今日河內國平岡の神社に卜田祭と云有。御粥殿に大ィなる釜をすへ小豆粥を煮て神供とし、五穀成就の祈念終りて、竹を五寸ばかりに伐て管となしたるを五十四本、それに五穀及色々の種もの五十四品に書分て、釜の中へ投じ。さて一々其管をわりて、粥管の中に入たる多少、或は質の加減を見てそれ〳〵に、何の種は十分、何の種は八分など、神主高聲に吉凶をよみ上る事也。近國の農民群參して其卜の善悪を書付置て、神卜に任せて、農事をつとむる事也。これを平岡の御粥といひ卜田祭とも云。又或人曰、粥を目出度とに用るは、粥祝通音ゆへ、なりとぞ。又諸國にて此日の粥の初穗をとり置て、十八

日の朝これを食す。その糜(かやわらなるかゆ)粥(かたきかゆ)によりて一年の風雨を卜事有。是を則十八日粥といふ。千金月令【荊楚歳時記】の説爰に略す

**奈良茶** ならちや○大和奈良にて。やじふと云。畿内にて。ならちやがゆと云(諸國にてならちやと稱するは、ならちやめしと)【宇陀法師】に へたしかなる夢を掃込む椽の下、といふ句に
へ若粥たく火の夜は明にけり。と李由か附たり。李由は近江の產、亮隅律師也

**雜炊** ざふすい○河内及播刕邊にて。びやうたれと云。加賀越中或、但馬にて。みそづといふ。越前にて。にまぜと云。伊勢にて。いれめしと云。東國にて。ざふすい又。いれめしといふ。婦人の詞に。おぢやといふ。又京都にて正月七日の朝若菜の塩餘を祝ひて食す。これを。ふくわかしと云。大坂及堺邊にては神棚に備たる雜煮、あるは飯のはつほ等を集置て糝に調へ食す。これを福わかしと云。こながきとは俗にいふ雜水之。土佐の國にては正月七日雜水に餠を入たるを福わかしと云。武江にては正月三日上野谷中口護國院に福わかし有。大黒の湯と稱す。男女群參することゝ

**餠** もち和名もちひ○關西にて。あもと云。江戸にては小兒に對して。あもといふ。○雜煮(餠にいろ〱の菜蔬を加へ煮てあつものとし年のはじめに祝ひ食ふ。俗にこれを雜煮といふ)畿内にて。雜煮と云 又かんとも云。江戸にては新吉原にて。かんと云(おかんを祝ふ。又をかんばしなど云)案に新吉原市中をはなれて一トヶ廓を構へ住居す。ゆへに古く遺りたる事多し。又淺草の市にて商人の雜煮箸おかんばしとよびて賣

侍るも、古く云傳たるなるへし。「かん」とは羹なり。あつものと訓ず　○ぜんざいもち。京江戸共に云。上總にて。じさいもち。出雲にて。じんざいもちと云（神在餅と書よしそ）土佐にて。じんざい煮といふ。土刕にては小豆に餅を入て、醤油にて煮、砂糖をかけて喰ふ。神在煮又善哉煮などゝ稱すとなり　○かゞみ餅。諸國の通稱之。圓なる形によるの名なりとかや。東國にて。そなえと呼又。ふくでん共云。越後及信濃にて。ふくでと云　○搔餅（鏡餅に刀劔をいるゝを嫌て手を以てかく故にかき餅といふ。今又物を以てへぎたるを、へぎもちといふ）越後にて。けづり餅と云。同國にて「かき餅」を氷らせて名づけて。しみ餅といふ。ある人のもとにて搔餅を炙りて出せり。余りにかたかりければ、老の齒には得及ばしといふ。あるじのいふ、さらば搔餅によする述懐と云題にて狂哥よめといひ侍れば

〽老の身の今さら耻をかき餅のむかふ鏡の昔戀しき　吾山

○しるこ餅（）江戸にて。しるこもち。京にて。ぜんび。西國にて。ゆるいこ。出雲にて。にごみ。越後にて。ざふに。上野及駿河にて。ゆるこ。總刕及常陸下野邊にて。ぜんびんと云（染餅と書よしそ）加賀にて　。あづきがゆ。薩摩にて。おとしれとよぶ

**牡丹餅**

ぼたもち（又はぎのはな、又「おはぎ」といふは女の詞なり）○關西および加賀にて。かいもちと云。豐刕にて。はぎ餅と云。羽刕秋田にて。なべしり餅と云。下野及越前越後にて。餅のめしと云。下總にて。がうはんと云。　今按に「ぼた餅」とは牡丹に似たるの名にして中略なりとぞ。萩のはなは其製煮たる小豆を粒

のまゝ散しかけたるもの なれば、萩のはなの咲みだれたるが如しとぞ。よつて名とす。かいもちとは、上かたにて「かい」といふ詞は關東にて「つゐ」といふにをなじ。つゐ餅になる故にかいもちと云。又粥餅ともいふ。いかゞ。奥の仙臺には鮑を日にほし粉になしてもちに制す。名づけて「貝もち」といふ。出羽の最上にては蕎麥ねりと云物をかい餅と云。又下總の國にては糯米を焼て煮たるに、小豆の粉を上下ッに置て椀に盛たる物を「令飯」と云。或は「夜舟」といふはいつの間につくともしれぬと云意なり。又「隣しらず」といふも同し意なるべし。「奉加帳」とはつく所も有、つかぬ所も有といふ心也。【發心集】ニやせおとろへたる老尼、淸水寺に奉加すゝむる所に行、硯をこひて

〽かのきしにこぎはなれたるあまなれはをしてつくへきうらもなきかな

此哥の心も同しことはり也。又京都にて土藏の壁を塗るいわゐとてかい餅を饗す。されば「かいもち」は焼ても火の通らぬ物故にいはふての事なるべし

團子　だんご○伊勢にて○をまりといふ。女詞に「いし〳〵」と云（尾州にてはひらめに丸きを「いし〳〵」といふ（又筑紫にて○けいらんと云有。江戸にて云○米まんぢうの丸き物にて、今江戸にては○いまさか餅といふに似たり（雞卵と書り團子にはあらず）○をとごの餅又川びたり餅とも云。十二月朔日につく餅をいふ。中國及九州にて○かはわたり餅と云

煎餅　せんべい○出羽ノ秋田にて○をへらまきと云

白雪糕　はくせつかう○仙臺にて○さんぎくはしと云

滑飴　しるあめ○畿內にて○しるあめといふ。西國にて○ぎやうせんと云。關東にて○水あめ又ぎやうせんと云。
「水あめ」は「ぎやうせん」よりもゆるし。又「ぎやうせん」は濃煎(じようせん)なるべしや。又地黃煎とも書。江戶にては
「下り」ともいふ

糄米　やきごめ○奧ノ津輕又豐州薩州にて○ひらごめと云。越州にて○いりごめと云。加賀にて春は○いりごめ、秋
は○とりの口といふ

炒　こがし○東國にて○こがし又みづのこといふ。畿內及西國にて○はつたいと云（麥粉と書てはつたいと訓ず
上野或は越前にて○こぐはしと云（粉のくはし成といふ意とそ）加賀にて○むぎいりこといふ（加州の諺に
「いろまぬさきの麥いりこ」なといふ事あり）近江にて○いりこといふ。奧州及總州肥州にて○かうせんと云
今按に、香煎(かうせん)は是和品なり。洛陽祇園町、江戶にては下谷の池の端にて制し賣を名產とす。こがしとは其
制少し異なり。然とも此國〳〵にてはこがしを香煎と呼之

菜菔漬　だいこんづけ○京にて○からづけといふ。九州にて○ひやくぽんづけと云。關東にて○たくあんづけといふ
今按に 武州品川東海寺開山澤庵禪師制し初給ふ。依て澤庵漬と稱すといひつたふ。貯漬(たくはづけ)といふ說有。
是をとらず。又彼寺にて澤庵漬と唱へず。百本漬と呼と云。又澤庵和尚百首の中に
〽老らくの耳にはうときほと〻きすおもひ出るや初音なるらん

烏丸光廣卿御点添書に、初音の僧正同日の論にあらずと云々。又初音僧正と聞えしは、興福寺花林院別當
永縁
　へきくたひにめつらしけれはほとゝきすいつも初音の心地こそすれ

酒　さけ○出羽にて。いさみと云。和州大峰にて。ごまのはいと云。　今按に、いさみといふは羽州羽黒山などの行者の隱語なるべしを、俗人もそれに倣ひて專ら「いさみ」といふ事にや成けん。「ごまのはい」といへるも是にをなじかるべし。又畿内の番匠の詞に間水といふ。今は「けづり」ともいふ。江戸にても番匠は「けづり」と云。かゝるたぐひの隱し詞を、東國にて「せんぼう」と云、士農の上にはなくして巧商或は遊女野郎の類ひ馬士竹輿舁に至まて符帳詞あり。今爰に略す。又西國にて「けんずい」と云は、灸治する節、酒食を饗するをいふ○江戸にて參州酒などの味辛くつよき酒を「鬼ころし」と云。如此の類を美作にて。やれいた酒と云。野州日光にて「鬼ごのみ」といふ。又駿河邊にては。てつぺんといふなり

物類稱呼卷四

諸國方言

# 物類稱呼

言語

五終

# 物類稱呼卷之五

## 言語

○大いなゑ事を五畿內近國共に。ゑらいといひ又。いかいと云
今按に、東國にても「ゑらひ」と云。物の多き事をいひて、大いなるかたには用ひず。上かたにては高大なる事に聞えたり。又いかいは、いかいものといふ時は大い成事、いかい事と唱ふる時は多き事也。諸國の通稱にや。西國にて「いかい」と云は、いかいお世話。いかい御苦勞など、云事にのみつかふ。是も大いなる義なり。古には大なるを「いか」といひしと見えたり。貝原篤信は「いかい」といふは「いかめしい」の略語ともいへり
伊豆駿河邊には、いかいとも又。かんからともいふ。上野に。野風と云、陸奥にて。でつかいと云（いかいの轉語か）佃嶴にて。をかると云又。がいとも云（關東すべていふか）又。づないと云。安房上總及遠江信濃越後にて。でことといふ。越後にては大きし。小さしといふを。でこし。のこしといふ。西國及四國にて。ふといと云

○多いと云事を。たんと。ぜう。だいぶん。たくさんなどいふ時は關西關東共に通稱なり。又尾張にて。ふんだくといふは、東武にていふ。ふんだんと云に。ひとしき歟。又たんとゝは足ぬといふ事、膽斗と書く時は「蒙求」ニ姜維膽斗といへるより出て大いなゑ事ゑ。をゝしにはあたらず。又饒は「をゝし」と訓す、古哥に
〽大和なるうちのこほりの戸たて山ぜうにをりたるかぎわらひかな

京にて「せんど」ゝ云。相模にて。だらどゝいふ。常陸にて。だらくと云。信刕上州共に。もうにと云。上總にて。どんどゝ云。遠江にて。しごくだまと云。東國にて。しこたまといふ。仙臺にて。よんこと云。肥刕にて。よんにやうと云。是は餘饒之

○わざとゝいふ事を、參刕奥刕にて。やくとうと云

今案に、わざといひ。わざ〳〵などいふ。をなじ詞之。尾張にて。えりわざといふ。東武にて。えりわりといふ。是もおなし意之。わざ〳〵といふにもかなふ歟。又東武にて。やくと云詞は尾張邊にて。やわといふにあたる。たとへば、かゝる碁にやくと負んや又やはと負んやなどいふこゝろ也。【枕草子】やくとしてといふ詞の注に、役としてと有は、わざといふにかよふなるべし

○所の仕來といふ詞のかはりに京都及丹刕邊にて。所法則と云。豐刕邊にては。恒規と云。大隅薩摩にて。いかたと云又掟といふ（をきてとは諸國の通語之）

○見よといふ事を、奥刕南部にて。みどうらいと云。南部の方言にてよめる歌に

〽見どうらい山にちとべこ雪もありこの春がいにさぶうかるべい

此哥の見どうらいは見よやいの轉語にて、よびかけたる詞なるべし。ちとべこは。ちとばかり之。がいと云は尾張邊より東奥までの通稱にて古代よりの詞とこそ聞ゆ。又べいとは可にて、哥には「べら」とも詠り。徂來翁の「あんべいやうもない」といふは田舎詞なりとて今は人の笑ふなれど、源氏物語にも有之といへり。予考

るに、見よといふことを、東國にて「見ろ」と云。又聞ヶよ。置ヶよといふを、きけろ。をけろと云類ひ、古く云ならはしたる詞にや。津輕にては。ちてべこといふも是にをなじ。此所の童謡に。あまりさむさにつらひばた。山にちてべこのこる雪、なんせばぢうかいどん。こゝに云所の「つらゝ」は頰にて【枕草子】頰杖など云事ならん。俗にほう杖なと云にひとし。「なんせばぢうかいどん」とは。なんとしやうかいなと云事ならんか。又

【萬葉集】

〽草まくら旅のまろ寐のひもたえばあがてとつけろこれのはるもし

○勞して苦しむことを「せつない」といひ又じゆつないといふを、加賀にて。てきないと云。　按に、せつなるとは自語にて今いふ轉語に「せつない」「じゆつない」「てきない」などゝいふ語に當れり。自語なれば文字なし。「せつな」と云べきを「せつない」と云は、せはしい。せはしないの詞にて考合すべし。哥書物語等にも「せちに」思ふなと書り

○いかにしてもと云事を、長崎にて。いかなちうつろばつてんからと云

○女色の事を、丹波丹後にて。知音と云。父母のゆるさゞる妻を「ちいん女房」と云（知音の二字は伯牙鍾子期の故事ニ出）長崎にて。しやんすといふ（想思を唐音に唱るか）同所丸山にて。がつと云。九州及中國にて。ちかづきと云。長門にて人に始て對面するを近づきに成とは敢いはずして。べつしてになると云。薩摩にては女色を「ちかづか」と云。男色を念者と云。土佐にても「ちかづき」と云詞を耻らふと。奥州にては。ならび

といふ。南部にては。けいやくといふ。出羽ノ秋田にて。はなぐりと云。江戸にて。いろと云、しやうねと云。又念頃・念者などいふは諸國の通言也。色と云は【釋文】ニ通シテ女ヲ曰ト色ト有、是による歟。又しやうねと云詞は五六十年來の流言歟。又しやうねとは執念の轉語なるべし。又男女交合することを、信濃にては。わつれると云。上總にては。めぐすといふ

○呵らるゝといふ事を、長崎にて。がらるゝと云。薩摩にて。がらりうばあと云（是はしかられんなり）肥後にて。をぐると云。房總邊にて。をださるゝと云。尾張より遠江邊。をめると云。是を汗面と書時は音語のやうに聞ゆれ共「をめる」は和語なり。又【江家次第】ニをめるといふは、劣たる事にあたる歟。又幾内にて「ひかる」と云は「しかる」なり。如此の類かぞへかたし。尾張知多郡にては「ひとつ。ふたつ」と云を「ふとつ」「ひたつ」とかぞへて「ひ」と。「ふ」との相違あり。下野にても。「ひ」と。「ふ」と。あちらこちらに云在所有。尾張北在所にて馬を「イマ」と云。又今を「ムマ」と云、是もおなし詞也。但【日本紀】ニ今ヲ「ムマ」馬を「イマ」とよませたる所見え侍れは笑ふべき詞にはあらざるか。又安房の國にてはカキクケコの牙音をアイウエヲにつかふ。たとへば「百」「二百」など云如き也。上總の東房總境邊是に同し。すべて東國にて「見えぬ」「しらぬ」なと云「ぬ」の字を延て「見えない」「しらない」といふ『ナ』『イの反』『ヌなれば是も則『ぬの字の拗音と見るべし。哥にも、松も昔の友ならなくにとは「友ならぬに」と云『ぬの字をのべたる物歟。その外此例をゝし

○よひとよといふ事を、關東又は四國にて。よがよつぴといと云。幾内にて。よがよさらと云。【大和物語】ニ

よひとよ立わづらひてと有

○方外なる物を、關東にて。だうらくと云。大坂にて。どろばうと云。薩摩にて。沒落と云。東國にていふ「どうらく」は墮落の轉語にや。又「どろばう」とは東國には盜賊を云。おもふに「だらく」變して「だうらく」といひ、又「だうらく」と云詞ちゞみて「どら」となりたる歟。但葬礼の時、僧の鉦をうつもの故に、どらをうつは人の終りなりといふ意にや

○かはいらしいと云詞のかはりに、下總又信濃にて。つぼいと云。(「大江山の謠」にうち見にはをそろしげなれど、なれてつぼいは山ぶしとあり) 越後及奧羽にて。めごいと云。津輕にて。いずいと云。武州片田舍にて。むぢこいと云也。上總房州又四國にて。むごいと云。上野にて。いげちないと云。肥前及薩摩にて。むぞうと云。是等は皆かはゆひといふ事之

今案に、かはい　又かはゆしなど云自語(上古よりの自然の詞を云)ありて漢字渡し後、可愛の字を假借したるもの歟。正字とは見えず。土御門内府通親記云、すげにちかくゆはんまてぞかはゆく覺ゆると有。又正親町一位公通卿の狂哥に

さみせんの、いとしかはゆし、などゝも詠し給へば、かはゆしと云かたよろしからんや

○あぢなし(食物の味ひうすき也)京江戸共に。無味と云(但江戸にてうまくなひともいふ之)東國にて。まづいと云。大和及攝河泉又は九州のうちにて。もみないといひ又もむないといふ。いにしへ吉野の國栖の邑

人蝦蟆を煮て上味とし食ふ。名付けて毛爛といへるよし【日本紀】ニ出ツ。今云『もみないとは【もみな】物と云心成べし。「い」は助字之。又武藏國楠川の驛近邊にて目摺鱠と名つけて蛙を食ふよし聞り。山東の人目摺鱠を食ふと云事【俗説辨】ニ委し。よつてこゝに略す

○情なきといふ詞のかはりに、大坂及播广邊にて。いげちないと云。東國にて。むげちなきといひ　又きせちないと云。江戸にて。むごらしいと云。【涅槃經】ニ佛性ノ者名ク曰フ無慙愧トとあれは、佛性のなきといふ事なるべし。又あぢきなしといふも情なき心なり

○しぐむといふ事を、江戸にて。はにかむと云。　又びゞるともいふ。東國にて。しごむと云。又はがむと云。房總海邊にて。がなづうと云。がなづうとは寄居虫の事を云、己が家より外へ出る事あたはず、内に斗居るにたとへたり。遠江にて。やにると云。關西にて。わにるといふ。越後にて。けすむと云。【萬葉集】ニ　つのゝふくれにしぐひあひけん、とよめり。しぐひは、しぐむといふにをなしと有

○久しきといふ事を、出羽にて。よつばるかといふ（世遙といふ心か）　關西關東共に。やつとといひ　又ゑつとゝ云（但シ多い又よほどなと云詞にも當るか）　京に住む人太刀魚に食傷せし友に狂哥よみておくる

〽太刀の魚さして毒とはしらねどもやつと參つたものでかなあろ

○あるましき事をするといふ詞のかはりに、東國にて。てんこちもないと云　又つがもないと云詞も是にひとし。【宇治拾遺】ニ無シ大骨と有。或人曰、東風は則谷風にて、きはめて地を吹て空を吹ず。されば天に東風

なしと云心ゝとぞ。未詳

○他(ひと)をさしていふ詞に、畿內にて。吾身(あがみ)といふ。東國にて、おのし又おぬし又そなたなと云。參河にて。おのさと云（是おのさまの略語なり）豐前豐後邊にて。わごりよといふ。畿內及出雲若狹邊にて。わごれと云。【太平記】ニ和殿(わとの)と有。これらの轉語歟。上總にて。にし、下總にて。いしと云。奥劦津輕にて。うがといふ。又畿內にて。おどれといひ、對馬にて。あやつ。こやつ又そやつなどゝ云詞は。人を罵る心成べし。

今按に【萬葉】には。わぬとも。わけとも有、我身の事ゝ。又あれとも、吾(あ)とばかりも見えたり。あれといふは彼(かれ)と云にひとし。【狹衣】に、あはれあれが身にてだにあらばやと有。又【源氏】に。すやつ【枕草子】に。かやつ【宇治拾遺】に。くやつなと有は今いふ「きやつ」と云に似たり。又そいつと云は其奴(そやつ)なり。或は「そなた」は「こなた」に對していえる詞ゝ。【神代口决】に汝(ただに)不ㇾ忘ㇾ之ヲと有、和歌には汝(なれ)と詠ぜり。これらのことばのたくひ、かぞふるにいとまあらす。又中品已上の言語は萬國かはる事なきか、こゝに略す

○自(みづから)をさしていふ詞に、豐前豐後にて。わがどうと云。又身が等といふもおなじ。又身ども。身とばかりもいふ。【正徹物語】ニ身が家は二条東ノ洞院に有し也と云々。又「おれ」と云「おら」といふは己(おのれ)の轉語にて、諸國の通稱か。東國にては。おいらとも云。中國にて。うらと云。

寄田百姓ノ言葉　飛鳥井雅章卿

へ　田をかるにあつうも寒うもあらなくにうらゝかいねは色になる稲

○穴(ちな)のあいたといふ事を、九劦にて。ほげたと云

○おそろしこはし　畿内近國或は加賀及西國なとにて○をとろしいと云。西國にて○ゑずいと云（薩广にては人に超て智の有を「ゑずい」と云）伊勢にて○をかれいと云。遠江にて○をそおたいといふ。駿河邊より武藏近國にて○をつかないといふ。飛驒及尾州近國又は上總にて○をそがいと云。　按に「をそがい」と云詞は、恐れ怖いの略語也。こはいのこはを反しつゞむれば『かの直音となる。しかれは「をそがい」とは、恐れこはいの略也。

○こゝろなくと云を、甲斐國にて○けゝれなくと云。又遠江にて九ッを。「けゝねつ」と云、是にひとし。【萬葉】に心を「古古里」とも有。又【古今集】に

〽かいがねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山

○あそこ・こゝといふを、西國にて○あんなけ・こんなけと云。肥前にて○そこねい・こゝねいと云。尾州にて○あそこなて。こゝなてと云。京にて○あこと云

按に。そこねい。こゝねいと云は『そこに』『こゝにといふ心歟。江都にて、見へぬの『ぬをのべて「見えない」と云にひとしかるへし

○あのやうに・このやうにといふを、勢州長嶋及出雲邊、又は播磨なとにて○あがい・こがいと云。九州にて○あんがい・こんがいと云。總州にて○あげへに・こげへにといふ。又あんな・こんなといふは、あのやうな・このやうな也。そんなといふは、そのやうな也。肥前ノ佐賀にて○そがいと云是なり

○出るといふを、出羽の秋田、或は肥ノ長崎又四國にて。づると云。づるはいつるを上略していふ。「能」の狂言に「身ともが國もとをづる時に」と云、是出(いづる)なり。又でるとは出(いで)るの上略にてをなし心也。長崎にて。づらんばいとは出(いで)んかと云事なり。又肥前及薩摩にて「さるく」と云は「あるく」なり。尾張遠江にて「ゆかず」といふは「行んずる」也。馬をやらず、駕籠をやらず、など道中にていふ事也。馬をやらんずる、かごをやらんずるなれとも、譯しらさる人は笑ふこそをかしけれ。又行(ゆく)を「いく」といふは【萬葉】に多く見えたり

○よいと云事を、筑紫にて。よかと云。若狹にて。ぶすといふ。遠江にて。よかんなと云。西行上人の「撰集抄」に、いとよかなりと有。但シよかん也と讀む口傳なり

○わるいといふ事を、備前及筑紫にて。おろよいと云。若狹にて。ぶさいと云。豐前にては。をろしいと云。尾張邊又は奥ノ仙臺にて。をぞいと云。上總下總にて。いしいと云。　筑紫の方言にてよめる哥に

〽櫻ばなさへてなじかい散ていろおろよか風のふいたけいこつ

「さへて」は咲て也。「なじかい」はなせになり。いかなればの。「いろ」はいる也。あしき風の吹し故に櫻の散りしと也。又「おろ」とは「おろふる雪」などゝ哥にもよみて、少シの事をいふ。然ともこゝに云「おろよい」は少しの義にてあらさるべし。西國に「おろの島」といふ一島有。此地の詞は皆さかしまにて、よいと云事をわるいと云。大いなるをちいさいといふたぐひの方語也。さればおろの嶋にて「よい」といふは、西國にて「わるい」といふ事なれは、おろよいとはわるしと云事也。又「をぞい」とは尾州奥ノ邊にて、物のあしき事也。

然るに駿河わたりより武藏上野邊迄、物事かしこき事に云ならはせり。もとより自語にして、相當の文字なけれは猶更はかりがたし。【和字正濫】には「からすてふ大をそどり」の哥を「おほをそどり」と濁音によみて「あしき鳥」の事とし「我心からをぞや此君」と云るも「をぞや此君」とあしきに解したり。其清濁は予しらず。東國にては賢き事をも「をぞい」と云侍るえ。又南總にてあしき事を「いしい」と云。畿内又東武にても味の美なる物を「いしい」と云。女の詞に「をいしい」と云。これ又「をぞい」の詞とひとしく、表裏の違とやいはん

○すてると云事を、東國にて。うつちやると云。關西にて。ほかすといふ（東國にて。ほうるといひ、越前にて。ほぎなげると云は投やる事なり）【伊勢物語】に「ぬきすを打やりて」と有。此ぬきすは女の手洗ふ所の竹にてあみたる簀のことを云。打やりてを東國に「うちやる」とつめて云也。又ほかすは渤海拾といふ三字の頭字を一字づゝ取ていふとぞ。又放下すにて、禪家の語之ともいふ

○負ふと云事を、東國にて。せうと云（背負ふのちぢみたることば也）長崎又四國にて。かるふと云。東武にては荷を負ふて賃銀を取ものを「かるこ」と云。又物を荷ふ畚といふ物を、泉刕堺にては。かなることいふ。又淺草御藏前にて。小揚といふ物は、大坂にて。中仕と云にひとし

○東へ西へといふ事を、肥前にて。東さなへ。西さなへと云

案に、邊といふ事を、薩广にて。さまといふ。東さなへは東さまへの轉したる詞にて、東の邊と云事なるべし。又江戸にて日のくれかたを「日くれさま」と云は、日の暮る有樣の略言なり。賑かさ。寂しさなど「さ」

ゝ有様ならんか。但し助語なるにや

○右へ・左へといふ事を、武之秩父にて。ゆふじ、きうじと云。奥刕にて。竪方槌方と云。　案に山路にて石工の云出せし詞にや

○つかはせといふ詞を、大坂にて。おこせと云（おこせは送り越せといふ詞の略なり）京にて。くせと云。江戸にて。よこせと云。羽刕秋田にて。のべろと云。尾張にて。いこせと云。【萬葉】八塩尓染而於己勢多流、又菅公の御哥に

東風吹はにほひおこせよ梅の花と詠しさせ給ふ。又源ノ信綱、俗間に物をかりて返さぬを「横にねる」といふは「おこす」といふの裏なるへしとの給へり

○くるゝといふ事を（【神代卷】ニ饋ト有、人に物をあたふる之）出羽にて。けろと云（くれろ之、「くれ」の反シ「け」なれはなり）又。けとうらいともいふ。　案に、くるゝとは自語か。但有レ下を略して「クタサレ」又略して「クダレ」又略して「クレ」となりたる詞か（他より我にあたふる之）【徒然草】に、よき友三ッ有、一ッには物くるゝ友と有。又【十訓抄】に云、むかし無縁なる法師、人の許にて物こひけるに、東おもてに居たる人はあたへず、西おもてにあるひとは時〳〵物をとらせけれは

〽をこなひをつとめて物のほしけれは西をぞたのむくるゝ方には

とよめりけるとぞ。又芭蕉翁あるとしの十五夜に

〽米くるゝ友をこよひの月の客

○なに事じやといふ事を、上總にて。あんだちふと云。曾津にて。あんちふだびつちふだと云。あんだは何ッぢや也。「ちふ」は何〳〵と云言をつゞめて、何〳〵「ちふ」とも、何〳〵「とふ」とも、何〳〵「てふ」とも、上代よりいひし言なり。戀すてふなど哥によめるも、戀すといふ詞なり。長門又は土州の山家にて、何ちふと云、又事ぢやと云を、京近邊西國にては「何ッの事ぢや」とつめて云。尾州邊にて「何の事でや」と直にいひ、東國にては「何ッの事だ」とはねて云。是等のはねるとつめるの相違は風土のならはし也

○たのみなきといふ詞のかはりに、上總にて。ろかいのないと云。　案に櫓櫂は倶に舟の具也。曾禰好忠の「ゆらの戸をわたる舟人かぢをたえ行衛もしらぬ」と詠せし哥考合すべし

○ある時にと云事を、長崎にて。あるぼつせんと云

○くたびれといふ事を（草臥とは山伏の入峰修行より起れる詞也と貝原の説也）畿内にて。しんどゝ云（「しんろ」の轉語にや。「しんろ」は辛勞なり）伊勢にて。ざんならうきけた又ひどうきけたと云。薩广にて。だつたと云。東國にて。かつたるいと云又ごちたとも云。徂來翁のごうしたりとは困の字なり。田舍人は「ごちたり」といふといへり。又肥前の佐賀にて。ぬたのごとしといふ

○打擲すといふ事を、肥前の平戸にて。とらすといふ。同國佐賀にては。つくにうにやせと云。「つくにう」とは天窓の事をいふ也。豐前にて。くれつけると云。肥後にて。きいつくといふ。　良基公【神樂日記】ニ云、

神人をはらひうちはりしかば、と有。しからば人を打を、はるともいふ。但シ杖棒などにて打をたゝく。ふつといふは諸國通していふか。○はるといふは拳などにて打事成へし

○ゆるやかに坐する事を、京大坂にて。じやうらくむといふ。關東にて　○あぐらかくと云。　又ろくに居る共いふ。大和及伊賀伊勢遠江にて。あづくみと云。南都にて。をたびらかくと云。加賀にて。あいぐちかくと云。越前にて。あぐしと云。肥前及薩摩にて。いたぐらみといふ。肥後にて。いたぐらめといふ

案に。じやうらくとは藏六也、龜の首尾手足の六を藏に似たれはかく云。然らはじやうらは轉語か。【和漢三才圖會】ニ常ー樂とも見えたり。又あぐらと云「ア」は脚也「クラ」は坐也。【日本紀】ニ趺坐謂で「うちあぐみゐる」と云か如し。又胡床俗にいふ床几也。これより起たる名なりや。又ろくといふは直の字に當ルか。物を直に置事を「ろくに置」といひ、直ならぬ人を「ろくでなし」と云。琉球人の「アンジキ」と云も、ろくに居る事をいふとぞ

○かりそめと云詞のかはりに、畿内にて。あじやらと云。東國にては大抵の事ならぬを云。考るに其意をなじ

○あとかたもなしといふ事を、關西關東共に　○とてつもないと云。下野にて。とつぺいもないと云。遠州にて　○じやうくもないと云。【性理大全】ニ涂轍とある是歟。又江戸にて。とつけもないといふは轉語なるべし

○やをら（そつといふ心、又少しのこゝろも有ことばゝ）西國および常陸にて　○やうらと云（そろ〳〵といふ事に用ひていふ）【源氏橋姫卷】に云「ひめ君御硯をやをら引よせて」と有。尾州近國にて　○こそ〳〵と云。

伊豫にて。ほし〳〵と云

○急にといふ事を、豫刕にて。あたゞにと云。【古文】ニ遽又あはて又あはつなど云は「あはたゝし」也。あたゞにもあはたゝしの轉したる詞にや

○目さむるといふ事を、薩广及肥前にて。をぞむと云（尾刕にては、をそるゝと云事を「おぞむ」と云）

○明日。明後日といふ事を、播刕赤穂にて。あすてり。あさつて照といふ（この所塩濱なれは日和よかれと祝していふなるへし。土佐にて、きのふり。ゆふべりと云も是に同しきか）

○雨降らんとして日和になりたるを、幾内近國にても。日なをるといふ。東國にて。俄ひよりと云

○日和の定らぬを、尾張にて。一兩日和と云。筑紫にて。一石日和と云

今按に、尾刕にて鈍〳〵したる日和と云を、金子の貳歩〳〵にとりなして、一兩の天氣と云。又一こく日和といふは、雨ふらんや、ふるまいやといふを、筑紫にて降らごと、ふるまいごとゝ云。【十六夜ノ日記】阿佛の短歌に

〽今はたゞくがにあがれる魚のごとかぢをたえたる船の如、なとよめるにて「ごと」は如し也。如々を米穀などの五斗五斗になぞらへて、一石日和と云。又天正文祿の頃曾呂里新左衛門と云者有、泉刕堺の住にて鞘師也、細工の名譽を得たり、刀の鞘口にそろりと納るをもつて異名とす。太閤秀吉公朝鮮征伐のをりから、一首の落首をぞたてける

〽太閤が一石米を買ひかねてけふもごとかいあすも御渡海

又江戸に一石橋と云有、【江戸砂子】に後藤氏の兩家かの橋の前後に有、故に一石橋と名くと有。これ皆同日の談なり

○赤明といふ事を、中國にて。まぼそしと云、江戸にて。まぼしいと云。東奥にて。まじぽひと云。美濃尾張邊にて。かゝはゆひと云。土佐にて兒童など。ばゞいひといふ（ばの濁音は「ま」の淸音にかよふ之）

○あたらしいといふ事を、相摸にて。にひしいと云。たとへは新宅を「にひ家」といふ。總房野州をなじ。上野にて。にひ家と云も是又同し詞之（古代の言なり）

○うつぶくと云事を、肥後にて。くるぼくといふ

○律義なる人を、中國にて。まてな人と云。幾內及東國にて。またうどと云。　案に「まてな人」又「またうど」共に全人と云事之。【萬葉】ニ全手と有は左右の手の事にて諸手とも書よし、同キ抄に見えたり。これは別なり

○太義なといふ事を、薩广にて。だりがていと云。常陸にて。ほりないと云。上總下總にて。こわいと云。仙臺にて。うざねはくと云

○なぜと云事を、薩广にて。なじかいと云。古き哥に

〽大和かい西はあじかを關東べい都こざんすいせをりやります

西土にて「あじかを」と云も「なじかい」といふにひとし。總刕及東奥にて○あぜといふ。江戸にて○なぜといふ。京にて○なせにと淸ていふ。　案に、なぜとは胡之。とがめたる言葉之。【萬葉】に「あぜそもこよひよしろきまさぬ」なと詠り。古き詞なり

○脇へ退といふ事を、上總邊下野にて○ちやがれといふ

へちやがれはあかしやしや庭のきり／＼すなをなし所にねまりてぞなく

下野の方言を詠たる哥之とて古くいひつたへたり。はあとは「はや」之。すべて東國にていふ詞之。かしやしやは「かしましや」也。ねまるは居ると云ことにて奥羽又は加賀なとにて云。尤古代の詞之。出羽の尾花にてはせを翁の發句にもきこえたり。又【擧白集】云、小田原と云所の宿にとまる。明れば玉たれの小瓶に酒少し入て粽めくもの御前にとてさしいづ。あるしのおとこにやあらん、けふはめてたきせちにゆ、一盃けしめされゆへかし。とあいたちなくいふも顔まほられぬへし。しどけなき事打語て、今しばしねまり申べいを、それがしが旦那のえらまからんとて立ぬる、彼かふるまひにつけて（下略）此文章を見る時は、相刕邊にても「ねまる」といふ詞を遺ひたるとおもはる。むかしはすべて通語にや

○しらぬといふ事を、上總にて○いちやしらねと云。上總の國人の云々、いちやは一社之。其故は上古常國に鎭坐の神靈のうちに一社其祠る所の地を今時知るものなし。よつて國俗、物のしらざる事を一社しらなひといふとそ。予が云、是妄說なり。いちやはいさ不知なり。邊土は其國かぎりの地音にして、却古代の詞遺れ

り。然るに方言郷談にも漢字を主とするの誤より、あらぬ竄説も出來る之。徂來翁の云く、いにしへの詞は多く田舎に殘れり。都會の地には時代の流言詞といふものひたもの出來て、古きは皆かはり行に、田舎の人はかたくなにて、むかしをあらためぬ也。此頃は田舎人も都に來りて時の詞を習つゝ行て、田舎詞もよきにかはりたりといふは、あしきにかはりたるなるべし

○互に人を雇ひつゝやとはれつする事を、武蔵及上總にて○えいにすると云。下總邊にて○いひにするといふ。

今案に、これはいにしへ「ゆひする」といへる詞の轉したる成べし。俊頼朝臣の哥に

　此里にゆいするひとのなきやらんみふしたつまで早苗とらねは

○たづぬるといふ事を、播磨及出雲邊、又土佐にて○とめると云。京加茂の南堤の下に西念寺といふ有。西行法師此寺に暫く住す。庭に梅あり愛翫ひて

　へとめこかし梅さかりなる我宿をうときも人の折にこそよれ

此哥の「とめこかし」は、求めこよかし之。尋る同意之【万葉】三尋とあり

○めてたきと云詞のかはりに、長崎にて○けいくわんと云。　今按に、けいくわんとは慶歡と書にや。又めてたきといふに品有、「散ればこそいとゝ櫻はめてたけれ」といふ哥の「めてたき」は愛の字之。花を愛したるの心之と、脊柏老人の説之。めでる○めづるなとよむ同し心之。又珍の字「めづらし」とよむは、めてらしの轉語にや

○嫁といふ事を、出羽及信濃にて。むかされと云。藤广にて。御前むかひと云。　案に「むかされ」は迎え
らるゝのちゞみたる詞なるべし
○夕を、東國の詞に「よんべ」と云。　今案に、【倭名鈔】ニ宿「ヨベ」「ヨンベ」と訓ず。又【萬葉】ニ大伴ノ郎女
が歌に
へあまさはりつねする君は久かたのよんべの雨にこりにけんかも
【土佐日記】ニ舟子のうたふうたに、よんべのうなひらかなひも〔○上四字衍カ〕がなと有。又今夕を「ゆふべ」と
いふは勿論の事にて、昨夜の事をよんべと云。萬葉の哥并土佐日記に云よんべも昨夜の事とぞ聞ゆる。又一
昨夜の事を、きのふの晩といふは是か非歟。又人の寐る事を「をよる」といふは御夜にて、「をひんなる」は御寝
なるにや。黄昏は誰彼之。暁東は彼誰之。其さだかならぬ所をいふ之
○他人を馳走する事を、上總にて。ほとめくといふ
○醜き女を譏る詞に、西國にて。ぶつそうづらと云。東國にて腹立顔を。ぶつてうつらと云。【袖中鈔】ニ云、胡
國の婦人黄色の物を以て面に塗る、これを佛粧といふと有。又佛頂面とは面ふくらして鬢髪を見るがことし
と云たとへともいふ。又東國の俗、人に對するに和せざるを「ぶにんさう」といふは【金剛經】に二無人相」
とあり。此事なりとぞ
○おめきさけぶと云詞のかはりに、九州及四國にて。おらぶと云【神代巻】ニ哭臨と有。いたくころをはかりに

泣をおらぶと云と聞えたり。【平家物語】にをめかせ給へと有は「うめく」といふにひとしき事にや。東國にておめきさめくといふは、おめきさけぶの轉語か。雨々(めめ)と泣(なく)なといふ心ならん

○欬(せき)をせくと關東にていふを、關西にて「せきをせたぐる」といふ。播磨邊にて「欬をたぐる」といふ。阿波には「せきをこづく」と云。中國にて「欬をこつる」といふ。【神代卷】にいざなぎの尊たぐりす。金山彦の神となると云云。又東國にて「欬ばらひ」又しやぶきするなといふは「欬嗽(しはぶき)」のちゞみたる詞にて通稱也

○めいわくといふ事を、上野にて。さぶけさんがいといふ

○道路のぬかりを、關西にて。しるいと云。東國にて。ぬかりといふ

續千載へ　あぜおこす苗代水のほと見えて道のぬかりのかはくまもなし

又道のすべるを、常陸にて。なめり道といふ。　案に、是に似たるヿ有。俗に「猿すべり」と云木有。哥に猿(まし)滑(なめり)とよめり

夫木へ　あし曳の山のかけちのさるなめりすへらかにても世をわたらめや

深山に猿すべりといふ木有。百日紅に同して葉粗(ほそ)厚く、四時不ㇾ凋(しぼます)花さかず。此木を酒家にて榨(しめぎ)木とす。又寺院にて撞鐘(つきがね)の撞木に用ゆ。又百日紅は夏秋に花さき多に到て葉凋む木也。同名にして少異也

○跨(またぐ)といふ事を、東國にて。あごむと云。　跨を「あとこゆる」といふは足跡(あと)のまたがりこゆると云意なりとぞ。又「あごむ」は「あとこゆる」の轉語也

○水にものを浸(ひた)す事を、關西にて。ほとばかすと云。東國にて。ひやかすと云。【伊勢物語】ニかれいひの上に泪(なみだ)をとしてほとびにけりと有

○なぶる（手にてなれふるゝなり）關西にて。いらふと云。東國にて。いぢる又いびるといふ。西國にて。あつかふといふ

○ざれたはふるゝ事を、上方にて。ほたえると云。關東にて。をどけると云。又でうけるといふ　又そばへるといふ。陸奥にて。ふだけるといふ。【源氏】おどけたる人こそたゞ世のもてなしに隨ひと有【春曙抄】ニ　そばへとはざれほこりたる事と有

○さうじや。かうじやと云を、安藝にて。さあつくや。もうつくといふ

○物に驚くことを、東國にて。たまげると云。下總にて。ちめうしたと云。津輕にて。動轉(どうてん)したと云。出雲にて。をびへると云又肝をつぶすと云、びつくりしたなどいふ詞は、諸國の通語也。土佐の西境にては。たまげるといふ。上土佐中土佐には此稱なし。薩广にては。たまがると云。　案に、東國にていふ「たまげる」は【源氏】に魂消(たまぎゆ)ると有。「ける」は消也。「けぬかうへなるふじの初雪」とよめるは、消ぬかうへなる也

○養生といふを、但馬にて。やうすけるといふ

○正面といふを、播磨にて。うちぬきといふ

○いつはりうそといふを、房總にて。うそをかたると云。常陸下野邊にて。ちくとも又ちくらくとも云。尾張

にては謀計なる事すべて深きたくみを「ちくらく」と云。江戸尾張邊及上野にて。万八ともいふ（近年のはやりことばなり）九州にて。すうごと云、又彌助といふ（はやり詞か）又。千三ともいふとぞ。按に、千の僞の内に實ニッもあらんかといふ意にや。万八といへる流言も是に似たる事なるべし。又いすかなどゝいふ、是はうそ鳥の觜なればかく云にや。いすかといふ鳥はくちばしの合ぬ故、口の合ざるにたとへたるか。「萬葉」ニ乎曾と有は今云宇曾也

○やくたいもなしといふを、奥の南部にて。ぎがないといふ

○いかやうにもといふを、伊豫にて。どうばりと云。土佐にては。どうまれかうまれたといふ。　案に、土佐にて「どうまれ。かうまれ」と云は「どうもあれ。かうもあれ」なり。豫州にていふ「どうばり」は、是も「どうまれ」の轉語也。東國にて。なでう又あでうなどいふは「いかやうな」といふ意也。「紫日記」ニなでう女のまなぶみ、とあり

○是はどゝいふ詞のかはりに、西國にて。是しこ。彼しこと云。伊勢にて。これほどき。あれほどきと云。肥ノ久留米にて。是しころ。あれしころと云。東國にて。是しき。あれしきと云

○はなはだしきといふ詞のかはりに、尾張にて。りうとと云。又。きうとゝも云。「りうと」ゝいふ語は、物を振廻し、或は物を打時、或は走る時など、猶豫なくけはしき事を「りう〱」と云語有。其如くはげしくゆるかせにせさる事に用ゆる詞なり。上古よりの自語と見えたり。たとへば「フハ〱」の語を「浮和ゝゝ」と書て正

字の様に用ゆる事妄説なり。強て文字を施時は、和語も漢語のやうになり行やせん

○物を借るといふ事を、甲斐國にて。いらうと云。　案に、東國には物を借ると云時。かりいらひと云詞有。同し心ばへなるべし。たゞ。いらうとばかりは唱へず。又京都にて。借つてこいといふは、江戸にていふ借てこい也。京にて買ふてこいといふは、江戸にて買つてこいヿ。西國にていろはぬといふは、かまはぬと云意ヿ。土州などにていろはぬといふも、物に手をふれずかまはぬと云にをなし意なるべし。東國にても「いろふ」・「いらはぬ」などの詞あれ共「いぢる」・「いぢらぬ」と云方多し。尾州にていぢるの語は物を頼みて催促する心に用るヿ

○ぎしむ　畿内の語ヿ。關東にて。りきむといふに當る言ヿ。上總にて。ぎしやばると云。仙臺に。ぎづむと云。これ皆をなじ心歟。ぎしやばるは義者振の轉にや。又義ー者ー張といふ事なりや

○直にといふ事を、大坂及尾州邊又は土佐にて。いつきにといふ。其意は休まずして一息に物をする事ヿ。關東にて。すぐさまといふも是にひとし

○他と連立行を、東國にて。同志に行といふ(一所にいかふともいふ)播州にて。つんのふて行と云。又誘て行を、尾州にて。をこづらると云。又いざかつせと云も人を誘詞ヿ。【日本紀】ニ誘と有。又いざかつせは「いざ」は發語ヿ。さそふヿ、東國にて「さ。御出」「さ。いかう」と云詞にあたる。「いざ」とも又「さ」とばかりも唱ふるヿ。「いぬる」はかへるなり。「いなふ」は歸らんヿ。「いんで」は歸りてヿ。如此の詞は諸國かそ

へ盡しかたし

○際（そばと云に同し心か）畿內また尾張邊播刕邊にても。ねきといふ。根際の畧なるべし。土刕にて。いつきに。ねきにといふは、すぐに近所をいふ之

○外の事を、西國にて。あだと云。常陸及奥刕にて。とはと云。上總房州にて。とでといふ。「日本紀」ニ外と在（上世の語にや）「とは」とは外端にて、そとのはしといふ意歟。「はし」は「はな」ともいふ之

○物に黴の生したるを、上總にて。かもじれると云。　案に、氊の和名「かも」と云は羚羊の皮を敷物にする故に名づく。關東にて「かもしか」と云是なり。冬瓜といふ物も、冬に到れは白毛を生ず。故にかもうりといふ。物の黴も白毛を生ず、よつて「かもじれる」といふ

○焦臭を、京にて。かんこくさしと云（紙臭なり）東武にて。きなくさいと云（木にてはない、ににひと云こゝろ）尾張遠江邊にて。かこくさいと云（京にをなし）近江にて。やぐさいと云。和泉にて。かこびくさいといふ。奥刕にて。ひなくさひと云。津輕にて。ふなくさいと云。薩广にて。かなくさいと云。土佐にて。けふらくさいと云

○おろかにあさましきを、京大坂にて。あんだ又あんだら共云。伊勢にて。あんがう又せいふと云。越中にて。だらけと云。因幡にて。だらずと云。信濃にて。だぼうと云。奥刕にて。ぐだまと云。豐州にて。をうかましいと云。尾刕にて。をごさと云。俗に馬鹿と云は「史記」秦趙高カ故事ニもとづけり

拾遺へ蹈をさして馬と云人有ければかもをもおしとおもふえけり。又。あほうは秦ノ阿房ノ宮号に出たる詞之とぞ。又。たわけとは田分也といふ。未詳【日本紀】ニ結婚と有。たはふれけの略語之。又淫と書【萬葉】をなじ。婬乱者をいふと見えたり

○月水を、畿内の方言に。手桶番と云（水に付キといふ秀句）美濃及尾張伊勢邊に。たやと云（待室の略之といふ）江戸にて。さしあひ又さはりと云。仙臺にて八左衛門といふ（はやり詞なるべし）

○物事輕卒に騷しき事を、東國にて。じやうきんと云。西國にては、をどけたる事を「ひやうきん」といふ

○殘りなくと云詞のかはりに、尾州にて。こつぺりと云。東武にて。さつぱり又すつぺりなどの語と同じ意也。四如の末訓より出たる詞と聞及たり。東國にて。すきとなし又すつきりないなどゝいふもをなしこゝろ之

○たび／＼といふ事を、伊勢及駿河相摸にて。さんたいと云。東武にて再／＼といふに似たり

○ねんごろなる事を、下總にて。おふな／＼といふ。信州にて。おなごらといふ。他のもとへわざ／＼行なといふ事之。懇なる心之。【源氏】ニおふな／＼おぼしいたづく、とあり。【伊勢物語】にあふな／＼思ひはすべしなそへなく。なとゝもよめり

○いろ／＼といふ事を、肥前佐賀にて。ぐせことゝいふ

○跼るといふ事を、日向及北陸道又下野邊にて。ねまるといふ。畿内にて。いじかるといふ。關東又は奥州境邊にて。へたばると云。伊豆にて。ぎがると云。但馬にて。へこたれると云。長崎にて。をらすと云。土州に

て。いざると云

○八道（わらべの地上に大路小路の形を畫て、錢を投てあらそひをなすたはふれ之）京の小兒。むさしと云。大坂にて。ろくと云。泉刕及尾張上野陸奥にて。六道と云。相摸又は上總にて。江戸と云。江戸の町々にたとへて云。信濃にて。八小路といふ。越後にて。六道路といふ。奥の津輕に。をえどゝ云。江戸にて。きずと云。江戸田舍にて。十六といふ

○十六むさし。京江戸共に。十六むさしと云。中國にて。むさしと云。上野下野邊にて。十六さすがりと云。陸奥にて。弁慶むさしと云。信濃にて。さすがりと云

○石投。江戸にて。手玉といふ。東國にて。石なんご又なつこともいふ。信刕輕井澤邊にて。はんねいばなと云。出羽にて。だまと云。越前にて。なゝつごと云。伊勢にて。をのせと云。中國及薩摩にて。石なごといふ

〽石なごの玉の落くるほどなさにすぐる月日のかはりやすさよ　西上人

○かくれんぼ（小兒のたはふれ之）出雲にて。かくれんごと云。相摸にて。かくれかんじやうと云。鎌倉にては。かくれんぼと云。仙臺にて。かくれかじかといふ

○鬼わたし。江戸にて。鬼わたしと云。京にて。つかまえぼと云。大坂にて。むかへぼといふ。東國及出雲邊又肥ノ長崎にて。鬼ごとゝ云。奥ノ仙臺にて。鬼〳〵と云。津輕にて。おくりごと云。常陸にて。鬼のさらと云

○他の呼に答る語　關東にて。あいと云。畿內にて。はいと云。近江にて。ねいと云。長門邊にて。あつと

云。薩广にて。をゝと云。肥前にて。ないといふ。土佐にて。ゑいといふ（又ゑつともいふ。奴僕のたぐひは。をゝとも。やつともこたふ）越後にて。やいと云。越前にて。やつといふ。陸奥にて。ないと云

案に。國々のこたふる詞大いに同しくして少く異なとといへとも、各轉語なるべし。有が中に「をゝ」といへるは諸國にて、下踐にこたふる語なるに、九州にては上ざまの人に對してかくの如く答る所も有也。俗間に應の字を書もあれど「をゝ」は和訓なれば、唯と書べきよし、先哲も沙汰し侍る。【漢書】ニ唯唯注恭應之詞トハ有。【枕草子】に。をゝと引うち引てと有

へをゝ〳〵といへとたゝくや雪の門　丈艸

○助語（ことはのをはりにつくことなり）京師にて「ナ」。八瀬大原邊にて「ニャ」。橋本邊にて「ノヨ」。大和にて「ナヨ」。攝津にて「ノヤ」。播磨にて「ノ」。石見にて「ケニ」。因幡にて「ケン」。但馬にて「ガア」。紀伊及豐後にて「ニ」。豐前にて「メセ」。西國及中國にて「ドモ」「テヤ」。土佐にて「ナア」「ノヲ」「ネヤ」。尾參遠駿甲信にて「ズ」。武藏にて「ケ」。上總にて「サ」。下總にて「ナサイ」。安房にて「サア」。上下野州にて「ムシ」。越後にて「ナ」。加賀にて「ナ」。陸奥にて「サア」。出羽最上にて「ベ」。同國庄內にて「チャ」。同國秋田にて「サイ」。關東にて「ペイ」。美濃にて「ヂャ」。○幾內近國の助語に。さかひと云詞有。關東にて。からといふ詞にあたる也（「から」と云詞「故」といふに同し。吹からに秋の草木のと詠るも吹ゆへにと云）

二篇　近刻
三篇

安永四乙未正月

江都書林　大坂屋平三郎
　　　　　伊南甚助

物類稱呼卷之五 終

# 浪花聞書

【い】○隱元豆(インゲンマメ)江戸て藤豆といふ○いこじこうろぎむし也○いり肴に肴をかくいふ○いこ小女之娘といふかとし○いんできます江戸て云行て参ると云事之是遊里の言葉と云かへると云を忌たる言葉のよし○一向(イッカウ)いつかうよろし一向よふでけた抔と云てあしき方へはつかはす能方へ斗遣ふ之いつそ之○いらういぢる之○いおん付木のヿを如此云いをうなるべし○いりがら鯨肉の油とりたるをいふ○いしこらしい自慢らしいなり○いにます○いなう○いなんか何れも歸なり往之○いかき竹のざるを如此いふ之○伊勢鰕鰡の事之○いかいかのぼり之江戸でたこといふ又云あげると不言のぼすといふ○いきんか行んか之○今(インマ)のさきもちつと先之○いがめる曲也江戸でいふねぢり上るなど之○一挺酒醤油など一樽の事をかくいふ目録などにも認る○いつしくひたと之○入花茶の煮ばな之○いつきじき之すぐ之○いきし戻り行て歸之○いぢらしいむごらしい之○いきれる暑き之○一疊布團抔も一でうといふ○いのく江戸で云いごく之○入(イル)ひゑがいるあつけが入といふ○いら虫暑氣の時分屋根へ生する毛虫之刺れると腫れる之此まじないに板倉周防守宿と書張をけは去るといふ是所謂じこうほう之此名町方にて不唱御家中斗之○生淵(イケス)如此看板行燈出し有料理茶屋萬川魚と看板出しある料理屋と出し物等都て同様之よの部出○いつかい大之多之京言葉之大坂ては不唱關東の田舍言葉でいかいかいつかいの轉したるか又江戸でいふいかい事いかいの世話などもいつかいなるべしいかいは大坂でもいふ之○いきしな行がけなり○いやみ唄下かかりにていたこぶしの類之尤節は違ふ之此類になごやぶしと云もあり○いちげん一見之遊里の言葉町にてもいふ○いくせ下賤の言葉おこせ之○いひなへ勿言之○い

せゑひ かまくら海老之

【ろ】○露路(ロウヂ) ろぢ之 ○六匁(ロクケン) 何匁何分何匣と付たる時六匁にかぎりケンと唱

【は】はめ 反鼻(マムシ)之 ○はしり競(コクラ) かけくらなりかける事を走(ハシル)といふて決てかけるといはず ○はしりもこ 江戸て云なかしもと之流しと云をはしりと云 ○濱(ハマ) 江戸で云河岸之川端邊を都て濱といふ ○はつたい 麥こがし之 ○判官(ハングワン) 遊里の大じん之 ○ぱつのみ ぱつは鮪(シビ)之江戸でまぐろといふ ○はづむ 開帳など江戸てはやるさかる抔といふ事をはづむと云當る事之 ○場(バ) 芝居の土間をかくいふ ○はらいた 虫のかむると云事之 ○ぱじかみ 葉生姜之しやうがといへは葉の付ざる古しやうがなり ○母じや人 母の事之ははじやと略してもいふかゝさんとも云 ○ばゝさん 祖母之ばあさんと不云 ○ぱくらん 霍亂(クワクラン)之 ○はれます 江戸で云罰が中りますなと云ところへかくいふ之 ○ぱます 犬或は鳥抔へ物を食はする事をかくいふ ○八方(ハッポウ) 江戸で云八間行燈之 ○腹(ハラ)が太(ス)ッけい 満腹したるなり ○ぱり込(コム) 衣類などりきみたる之又はづむともいふ ○ぱらんか ○ぱれ 助辭之江戸で云さらんかされと同し行なはれ來なはらんか抔云 ○花火線香 江戸でせんかうはな火之 ○ぱりぼて 張子(ハリコ)のこと之

○ばけ 歌舞所作事七變化九變化を七化九化と唱ふ　○ばばい 爲哥話に云きたねへ之　○はゑ はや魚之

【に】煮ぬき玉子 ゆで玉子之　○にくてらしい にくらしい之　○にしる 八ツがにじつた抔いふ八ツ時過之　○俄 江戸吉原抔のにわかとは更に事變り酒宴抔の席にてのにわか之類にて夏季の比はんか通の素人又はひまなる太鼓持抔のよーし色々思々のなりをいたしかつら抔をかむり落咄口あい抔の仕方物まねをいたし市中を徘徊する之茶はん狂言の類之　○貳朱 銀貳朱のことを貳朱と斗は不言貳朱一ツあるひは貳朱一本などゝいふ　○庭 藁所の土間をにはと云

【ほ】○ほうらく 物を煎江戸のほうろく之　○坊 男兒之ぼんちともいふ　○ぼやく こゞとをいふ之　○ほつたらかす　○ほつてなけ 何れも放之ほうる共云　○ほうたろ 螢之ぼうちとも云　○ほね正月 正月廿日之　○ぼんつく 江戸にていざこざをいふと云とそ之　○ほつこり さつま芋の蒸たる之　○ほん 本之ほん宜ほんくく本　○ほんま 不虚也いや抔云不虚之　○ほたへる 江戸でいふくるうえじやうだん之　○ぼれる 酒に醉也　○ほうけ 耄也

○ほごらい ほどよくゝ之　○ほしい 何して貰たひと云を何してほしいと云　○ぽへん 硝子にて拵しとくりの底鳴る物江戸で云ぽかんちやらんなり　○鉾 祭禮の節車付

の雛に人形などかさりたる之○奉公人出替三月四日と九月十日○ほで手のと之あくたいに云言葉○ほつこほつところほつとするなどいふ○ほかすうつちやる之

【へ】へきる隔之江戸で仕切と云と之○ヘッすいさん鄙之如斯さまを付いふ之○弁慶(ヘンケイ)色里の太鼓持をいふ大じんをほうぐわんと云ゆへ判官ニ付志のべんけい之

○べんずり千ずりなり

【こ】○こないとないにはどんなに之江戸でどの様抔いふと之○こしよりごい鵁之○こうふ道風をとうふと云○毒性(ドクシヤウ)意地悪るき之○ごうなこ江戸で云どふとも之○こう〴〵江戸で云とうく之○こみない見とふもないを見ッとみない行ともないを行とみないといふ江戸でいふともないなり○ごろぼふどうらく之不身持のものをかくいふ一にごくどふともいふ○飛あがり者ひやうきんものなり○こさん盃臺之さかつきだいとはいわず男女ともとさんと唱ふ○ごたま悪たへにいふ言葉之江戸で云あたま之○道修町どふしゆう町之然るをどしやう町と唱ふ○問屋(トイヤ)江戸でとんやといふはなまり之○こうし燈心(トウシン)み之○こうに潮とうに

やくなり杯いふ朝は　〇土瓶のいかけ　夫婦して歩行する㕝を云唯いかけともいふ是丙子の年の頃ちゝばゝ夫婦して土瓶の破を繕て渡世とするもの町々を歩行せり此者共に中村歌右衛門より衣裝をくれ對のなりにて渡世いたし歩行しか其後歌右衛門早替り狂言の節右いかけ夫婦の早替り所作いたす夫よりの通言にて夫婦連にて歩行するをいかけといふ　〇土瓶(ドビン)　どびんと唱ふどびんとは不唱　〇取ッてかし〇取ッてをこしィ〇取ッてんか　何れも取ておくれ或は取てよこせなり　〇問(トフ)　關東にては問㕝をもきくといへど問㕝は必問と云之　〇ごうらく　どうらくな形身をどうらくに持なといふ何れもじだらくなり　〇ごつく　どうづく之たゝく㕝　〇ごぴやうもない　哥話に云くたいへん之　〇ごんがめいかき　かめの子ざるなり

【ち】〇ちぼ　すり小盜人之智謀與但まんかいとも云よし　〇ちんこ　江戸で云ちやんと之　〇ちやうぶくされる　江戸でちやうされるといふ㕝又ちやうろうされる㕝之又哥話云たきつけるなり　〇ぢゝさん　ぢいさん之　〇ちよつこり　ちいさき之　〇ちつさ　小兒之　〇ちつぽい　ちいさき之　〇ちやり　滑稽(コツケイ)　〇ぢゝり　松かさ之ちぢりとも云　ちよちん　桃灯之　〇ちやく〳〵入る　じやまするなり　〇ちべたい　つめたい之　〇ちよつこも　江戸でちつともといふ處ちよつともといふ之　〇茶屋(チヤヤ)　新町天神女郎の呼屋也　〇ちやのこ物　佛事返禮にくばる物之茶昆布紙ろうそく其外かん物類何にても都てくばり物をかくい

ふ○又ちやうけを茶の子といふ○ちんこ芝居江戸抔の宮芝居よふ成小芝居座摩博労稲荷御霊抔の小芝居を此通り唱ふ又小供芝居をは京ちんこ抔と唱ふ○ちや／＼茶之唯ちやとまいふ○ちんばびつこゑびつことといわず○ちやッこちよッとなり○ちよつぽりちよんぼりなり○ちよこイ、ナちよこさいいふたゑ○ちい乳母を小児より呼なり○ちぬ鯛くろだいゑ

【頭注】道具屋抔の常ニまんかいの用と木札或ハ紙札抔の書き張り置是れはすりの来らぬまじなひのよし此方にてすりは心付居るとのしらせのよしなり

【り】○りこう物の直段下直にてかつこう成を利口ニ付たといふ○料理味噌白味噌也○旅宿リヨシヨクりよしゆくと不言りよしよくといふ

【ぬ】○ぬくいあつたかいなり○ぬくめるあたゝめるなり○ぬめた歌語云内またこふやくゑ

【る】○おるすさん職屋敷抔の御留守居の事をかく云ゑ

【を】○奥様中以下にても極崇ふ時は此通いふ ○お家さんまつ大体通例此通唱ふ江戸にてかみさまといふに同じ ○御内義如斯も唱ふ京の言葉之 ○をうこ物荷ふ棒江戸で天秤棒と唱ふ ○おねはな大このかいわりの大きくなりたる之葉斗にて根は不ㇾ用之 ○おごり込強盗之江戸でいふ押込のこと之 ○をこつい一昨日之江戸でおとゝいとなまる ○をこがる江戸で云うぬぼれゑんしよく抔いふとなり ○をそわれるうなされるなり ○をこがい江戸であごといふ ○おへん女の言葉弁當之 ○おなぎうたぎなり ○應對(ヲウタイ)對談することをすへてかく云 ○おぼこきり禿なり ○おッけいおッきいなり ○おちよぼからげおん〳〵はしをり之 ○お下(モ)に御座れおすわりなされなり ○おます御座りますといふと女の言葉之若き男抔はいふ言葉之もと遊里抔の言葉のよし今は一統通用す又ごわますともいふこれは男の言葉之 ○御の字御城などへ御ノ字を不付唱ふ城の番場又城内或は中屋敷抔いふ中屋敷御役人中様など書面にも認る之 ○御家(ヲイエ)に上る座敷え上(アカ)る之 ○ヲヽいや爲哥話云をや〳〵 ○おきなされ哥話云よしな之 ○おつかき爲哥話云ぢうの之

【わ】○わし私之わたしとは不言わづち之 ○わろ(タヘ)あのわろ抔いふ惡(アツ)言鰻わろは者なり ○わげ江戸でまげとなまる ○わげくゝりまけゆひ之 ○わるごさしなはんな惡いとしなさんな之又しなはんなと斗もいふ ○わや江戸で云やにつこいなり ○わり木(キ)薪いこわりにしたるなり

【か】かたじけない忝之按に浪花の言葉に目上のものへむかいても忝といふてありがたいと云言葉もんくはつかわず　○かいなそうかいなのつまり言葉之　○かしこい江戸でいふ利口なり發明之ぼんはかしこいものなどいふなり　○かくすべ敕遣木之宗木ともいふ○がき悪言之大人同士のあくたいにかくいふ　○かう〱澤庵漬にかきりてかう〱といふ澤庵漬とはいわず　○かぶら蕪之かぶと斗は不レ言　○かいしょないはたらきのなき之　○かり子新町置屋小遣ひの小女郎のこと之　○かつてくる物をかりてくるなり　○かうてくる買て來也○かみさん後家をかく云おかみさんといふは上々樣之　○片手桶江戸でいふさるぼう之○かもうり冬瓜之とうぐわとはいはず○かつをかつをぶしをかつをと斗いふ　○かんてき者氣早者之かんてきは銅鍋を云に火が早いと云心か○がんか登るかり多くなると之

○かしい何々してかしいはしてくれ之　○かたむいた八ツがかたむいた抔云八時過のこと之　○勘當朋友抔仲間をはずしたると抔もかく云　○合羽たばこ入紙たばこ入のこと之　○かき餅茶涼の頃夜分涼の場所并所々の橋づめ等え腰掛茶屋出る有茶屋にて出す其外餅茶豆茶麥茶醴酒抔あり備豆茶の處に委し　○春日野如此看板の出居る處にては飯あうるえ茶飯に豆抔を入又白めしに豆を入るもあり一膳の上萱子椀くさき漬又は煎豆抔付飯は飯櫃に入出す一膳價三十八文或四十文抔色々あれ其余茶并汁抔は好ニ依て出す新町ひの安座の前相撲抔往代によし○顔役おさ江戸の通た者之　○歸て參じます町家の言葉之　○かたをぬくはだぬぐ之　○かいなうでとは不言　○かづく頭巾をかづくといふ　○からげるはしをりえ尻はしをりを尻からげといふ其外都て裾をはしをるをからげるといふ　○河茸江戸でかわたけといふ應茸なる歟猶可尋　○鏡袋名女の懷中鏡入のことなり　○

かし座敷 新町堀の側坂町表同所法善寺裏通抔其外茶屋町には何方にも如斯行燈かけある至て狭小なるみせ軒を並べ有男女出會の節一寸かす座敷のよし尤呼屋をもかねて居よし　○かさ留 大夫女郎のおしよくをかさ留といふ○かやく そばなどのやくみをかやくといふにふめんへ椎茸かんぴやう其外色々入たるをかやくにうめんといふ都て何によらず外のものを入をかやくと唱ふ　○かづき 女のかつきなり ○かやす 返すへかいすといわず ○かたかよい かたかよい或はわるいと云運のよひ悪いと云と ○がはたろ 哥話云かつばへ

【よ】○よんべ 昨夜之夜前ともいふ ○ようしにやる 能しに遣なり ○よなか 子刻を九ッと不言上下男女とも夜中(ヨナカ)と唱 ○陽氣(ヨウキ) 賑やかなることをかくいふ○夜(ヨ)さり 夜之 ○よばれ 人より何によらずもらい食事をよばれるといふ ○夜なき 夜そば賣の類都て夜商ひするものを斯云 ○よな 胞(エナ)をかく唱ふ ○呼屋(ヨビヤ) 新町六字かこいのちや屋なり其外都てちや屋をも斯云 ○より物 夏の頃堺より夕方來る魚賣人なり小魚種々持來る百銅五十銅の外は不賣白地かすりのじゆばんを着し來る江戸の夕かしへ ○萬川魚 如斯看板行燈出しある料理屋にては鮒のつくりみ鯰汁鯛の汁鯉の汁鯛ひらめのつくりみうなぎすつぽん貝燒茶碗蒸玉子やきかしはなへ燒飯酒などありて定直段極り壁に直段付張有之手輕の料理茶屋にて給仕は皆女子之膳といへは惣輪の膳椀にて生酢付菓子椀汁香の物付出す壹匁三分位の價へ○横づち 如斯つちへ ○よろしいよつて よひからへ ○よたんぼ なまゑひ(イ)によつぱらいといふに同し○よしはらすゞめ よしきり鳥へ

【た】○たく煮(ニル)之○たてるたて引となり ○たんほちろゝ之 ○玉(タマ)都て第一といふことを玉といふ○たすけ手助(タスケ)之○たゝき塩辛之○だいざもとより之○たご荷桶之 ○臺張(ダイハリ)臺挑灯のこと之 ○だんない大事(ダイジ)ないと之改て云ば大事おませんともいふ 御座りませぬ ○あけるたばこの吹からはたくとをあけるといふ ○だなさん旦那樣之 ○だんじり祭禮のせつ出る江戸のだしの類にて車付屋臺なりかされものはなくて大鼓計之 ○他所行(タショユキ)藝子おやま抔他へ出るをかく云○たる水がたる乳がたるなどいふ江戸でたれるといふ之○だめを押しかと言葉をつがひをく之○たよりないたのみなき之○たけこれだけ夫だけなといふこれぎり夫ぎりなり○たも哥話くだつしなり○たらとやら之何たらは何とやら之 ○たうきびもろこし之

【れ】○れこ江戸で云ゑて抔と云名をいわず人をさし云處へ用○れきまれそに同じ○れてん木金(ギ)はかりのこと之

【そ】○そうか江戸の夜鷹おゝさかにて又濱立(ハマタチ)ともいふ大坂にて多く河岸通へ出る故なり ○そげ江戸で云とげ之 ○そこねるわるくなるといふこと ○そ物主人より下女下男等へ呉れる物をいふ四季施をなそて物と云賜物躰 ○ぞめき江戸でいふぞゝり之 ○そふはちや言葉の手尓葉之 ○ぞんじん也不存 ○雑費(ゾウヒ)

餅を入みそ汁にてたき正月用ゆ醤油にてなを入たきたるはくさだちといふねぶかを入たるはなんばかちん抔と云○そしる男女共おしなへて蔭(カゲ)にて悪しくいふをかくいふ

【つ】○つこ江戸ていふ女の髪のたぼ之○つまゝれる狐にばかされる事を狐につまゝれるといふ○づつない術ないか江戸でいふせつない之氣がづつないはきのどく之○列(ツラ)ッて行一所に行と云を之○つけ書出し之○つくり身魚ノさしみの事之又さしみともいふ又鳥貝抔をすみそにて食是は限る「○而ヵ」さしみと云之○ついご江戸云ついぞ之○づッきにけり夫きりといふ事なり○つば江戸でつわといふつばきの事なり○つぶむくろじ之皮の有はやはりむくろじといふ○燕(ツラクラメ)つばめと不言

○つゆ都て味噌汁醤油煮汁共にをつけといふわけて云は味噌汁はむしのおつけといふ蕎麥うどんの汁はだしといふ○月見十五夜江戸と同しく團子を備ふ十三夜は團子なしさや豆を備ふるなり○

つむぎつぐみ鳥之○つなし鰶(コノシロ)魚の小なるなり

【ね】○傍(ネギ)門のねき橋のねき人のねきなといふそば之○葱(ネブカ)ねきとはいわず○ねぶたねむたいなり○ねだる一理窟いはふと云處をねだッてこまそふといふ○

ねんじん胡蘿蔔之○ねり物祭のせつねり子といふもの三人五人山姥金太郎又塩くみ乙姫抔にいで立列行跡より底なし屋臺に囃子方太皷大つゝみ小つつみ笛三絃等にて囃子行縮て唄はなしね

り子手躍等もなし所望すれば蜥子はするゝ夜分は市中にてもろうそくむき出しの長手燭にてねるなり　○ねから ねつからゝ　○ねほれる 寝ぼけるゝ　○猫あし ぬきあしゝ

○ねぶる なめるゝ

「な」○何なこ○何じやあろこ 何であろうとなり ○なます 居なますきなますといふ新町言葉之 ○茄子の田楽 しき燒といふでは通ぜず ○南蠻煮 魚類其他何なとねぎを入てたいたるものを云 ○名護屋汁 ぶく汁之なごやぶくとはしほさいぶくのことをいふ ○なめくさり 江戸でいふきいたふう之唯なめと斗りもいふ ○何たら角たら なんとやらかんとやらゝ ○何じやしらん 何だかしらんゝ ○納屋 物置之 ○南京瓜 江戸でいふとうなすゝ小たうを江戸なんきんと云て賞翫す ○何でおます○何でい 両様ともに問尋ル言葉なり ○なんのいな ○なんのまア 両条共そうでないといふこと之 ○なまぶし なまりぶしゝ ○中 江戸でいふ仲間を中といふ番匠なか手傳なかなと云 ○南蠻きび とうもろこしゝ ○なさけない むごいとゝ ○何ぼじや 物の價を問尋時の言葉江戸で幾等だといふとゝ ○なんぼじや いくらだゝ ○なんじやかじや 何やかやゝ

【ら】○らくさく あてもなく出行之

【む】○むしくる 蒸暑也 ○馬かけ 馬稽古を見るを馬駈を見ると云 ○むさんこ 江戸て云むかふみず之やみくと〔○もヵ〕なり ○むく 盆中に酒を呑のこしこぼすをかく云 ○むつき 小兒のしめし之 ○むかへ 江戸でいふむかふ之 ○むちやくちや わけ不分なりむちやくちやとも云

【う】○うつくしい 奇麗なる之江戸でうつくしといわぬよごれぬ事をもいふ ○打遣 江戸てはうつちやるといふ ○うき 浮腫の病をいふ ○うかめる 江戸てすますといふ事 ○うんてれがん おろか成ものゝ事を云 ○うめくる うなる之 ○うゝ うなきを略し云之 ○うくろもち 土龍之江戸でもくらもちといふ ○うら屋 裏店(タナ)也 ○内かた 江戸ていふ此なた之 ○内(ラ) うち之 ○魚屋(ウオヤ) さかなや之 ○うけていゝる 得心之とくしんしているともいふ ○うきん 哥話云めただか也

【の】○のッけ 初之 ○のぼする のぼせる之 ○のく どく之臨之のく抔といふ又男女の中きれたるをのくと云きれ文をのき状といふ ○のきづけ 義太夫長唄なとうたふて町々の門トへ立をいふけたとも云よし

【ね】○ねくし 哥話云くんな之 ○ねきせん 男女私ニ通するをいふ ○ねさか 大坂之 ○ねそゝ ○おめこ 女陰之 ○おこしィ又おこせ 何れも江戸ていふよこせ之おこしは又江戸て云御出之 ○ただてる そゝのかすなり ○たなご 下女のことをかくいふおなご家と云は下女之 ○おんごく 江戸の子供のぼん／＼のこと之仕方も少し違ひ一行に連り行歌も違ふ之 ○おやじ 中以下にては夫のことをかく云者あり ○おすさん 伯父さん之 ○御出まし 御出座之 ○おやま 遊女なり女郎とは先ついわずけいせいとも云又云其場所にては女中ひめ抔と唱ふ眉毛なきは眉引又前帯なと唱ふ眉毛あるは後帯と唱ふ新造出之時茶屋々々より配る名前書付をさしがみと唱ふ本むく素人髪元出後帯若な（女郎ノ名之罷）何屋抔と認あるよし（屋ノ名之） ○れいでたへ 江戸できたゝ／＼之

【く】耦合 不都合のこと又は病氣のことを工合が悪ィと云 ○くき 大根之葉ともに塩漬にしたるを云又はくもしとも云男女ともに斯云之 ○組肴 江戸いすずり蒸ものゝ類之 ○

菓子くわしんと唱ふ ○くいふたてる踏損すること之 ○くいんか食んか之 ○くゝる江戸で物をゆわゆるしばるといふといふをくゝると云人をしはるをもかく之 ○くちなわ蛇のをへびといわず ○くねんぼきうねんと斗も云九年母之 ぐわんじ丸薬のををかく云 ○會所江戸の自身番所なり ○鑵子江戸のやくわんなり ○工面ぐとにごり唱ふ ○ぐち菓物抔皮共食ふをかわぐちくふと云 ○首すじ江戸でゑりと唱へ「ゑりといふは衣る處をかくいふ「物ニ限りて云 ○くたぶれ草臥くたびれ之 ○くご為哥話云へッついなり

【や】○やいこ灸之 ○夜前男女ともにいふ常言之 ○やつこ多之餘爾之 ○やんがてやがて之 ○和イ江戸ていふやわらか之 ○やくたい悪しきを之埒もなき之 ○山のいもつくいもといわず ○やごがへ店がへ之 ○やつす貞かたちなとつくり又女の化粧するををかくいふ哥舞妓役者の色男をやつし方といふやつし方より出る言葉か ○やぶ入主人よりひまもらい我家え一日二日歸り又は我家ならてもひまもらい物見遊山に行をいふ江戸の宿下りなり ○山祭禮の飾車なしの屋臺上に人形などかざり中にてはやし行を山といふ之 ○柳かけ夏の銘酒本直しの類之本直酒ハ別ニ有 ○柳こうりこりとは不言こうりと云之 ○やまめ寡やもめ之

【ま】○まる泥鼈のこと生淵なとの看板に　○飯ハ男女大人小児の差別なく　○ませた江戸でいふこしやくヽ
じ○と有地のすつぽんのこと　まゝと云まんまと不言　こませそハ抔と云
○豆の粉きなこきな　○まひこいき江戸ていふま少しと　○舞子江戸のおど　○まったけ松茸　○舞屋舞の
ことはいわず　いふ處へかくいふ　子なり　なり　稽古
師匠の　○豆茶夏涼の頃夜分涼の場所其外橋々抔へ腰掛茶屋を出し此豆茶ハかきもちお茶餅ちや麥茶抔を商ふて
家之　豆茶ハいり豆あられに塩を入かき餅ちや甘酒もしほを入もちちやハやきたるもちに塩を入なり
麥ちやハちやと煎たる　○舞江戸でいふ踊なり盆に大勢　○まびきうろぬき大根菜之なのうろぬきをもいふ
大麥をせんじたる之　列なり踊をばおどりといふ　まみたな之京で中ぬきといふもみだいこ之

【け】○けつね狐之○藝者男藝者太　○妓子女藝者　○下さく江戸ていふ　○けいそうけいくるけいなと
鼓持を云　をいふ　げびたたり　いふ江戸のそうなるく
るかゑ　○げんげ花げんげ草とも云毛せんのとゝ一面し　○けんたい表向あたり前　○けったい江戸で云け
なり　きみちさく花江戸て云蓮花草なり　と云こと之　（奇體）なり忌
べし　あのげんさい又ハゑらいげんさいたど云女をさし云言葉之或人云美　○けいごこ江戸てい
き也○げんさい女をさして云と女ハ髪の黒きを貴ぶ依て玄妻之と云是一説之尚可考　ふ音舞妓
の所作ことを　うら山　○現銀現金とは決而不言看板抔ニ都て現銀　○けいも江戸のか
かくいふ　○けなるい　しいこ　無掛直と認ある銀通用の土地ゆへ之　しゆう之
【頭注】物類稱呼に云奥州にてやほちちを幻妻と云大坂及（畿内）にて人の妻をげんさいといふ是は賤る言に用
ゆとみへたりと云云　【春秋左氏傳】昭八年有仍氏ノ女黄黒シテ而光リ可ニ以テ鑑ニ名曰ニ玄妻ト

【ふ】○ふすま からかみと云つては不通 ○風呂屋(フロヤ) 銭湯之ふろ又ゆともいふしかし關東なまりにて湯ハ何處にある抔尋れば柚の有所八百屋をおしゆるなりなまればゆずのことになる之

○ぶさいく みめかたち見惡きもののこと抔をいふ ○ふな〳〵 ふら〳〵之ふらつくをふなつくと云 ○ふみつぎ 踏臺也 ○袋物 巾着鼻紙入胴乱烟草入なと都て袋物と唱又右を商ふ家を袋物やといふ ○伏見豆 江戸で云いんげんさゝげ之此物たへて大坂になしまゝあるハ伏見より出るよしよつてしかいふとなり尙可尋 ○船 茶船こふばい屋形など有り何れも家根舟なり造りかた少々づゝ違ふ江戸の家根舟屋形などゝは更に違ふ之こふはい屋形には二階有り茶舟には障子雨戸仕付なし物を入る戸棚あり ○綻(フクロビ) ほころびとはいわず ○ふまい床几(シヨウギ) ふみ臺なり ○ぶんごう 緑豆(ヤヘナリ)也

【こ】○ごころ うつろ之木のうろになりたるを云 ○こまそ ○こます 何々してこます何してこませなと云江戸でいふ何してやるなり ○こち 己(オレ)之たいら之 ○こそはいたい くすぐつたいなり ○こつちや 江戸で云こつちなり ○こける ころぶなり ○こない 此様之 ○心わるい 江戸でいふ心持かわるい之又きみのわるいことをもいふ ○ころりこちがふ さつぱりちがふたるなり ○こまんじやこ 目高魚之 ○高らん 橋のらんかん神社佛閣高殿などの高らんを都て高らんといふ ○御前(ゴゼ) 父(テヽ)ごぜ母ごぜなど賤びいふなり ○ことづて 言傳之江戸でことづけと云 ○聲揚(コヱアゲル) さしつまりこまりたる處にてかくいふ江戸ていふげつくりした抔之○

こつてある こつているゝ何によらず凝ているゝ執着したるなり ○こんへら 金毘羅なり ○後宴(ゴエン)の日 節句或ハ月見抔其外惣て物日の翌日を云 ○こたへます 淨瑠理などうれい場などにて感にたへたる處の譽め言葉なり ○こゝわけいふ いゝわけをいふ之 ○こう 子之 ○ごて〳〵 ごた〳〵なり ○これな これさなり ○ごれうにん むすめなり

【ね】○江鮒(エブナ) いなとも云江戸でいふいなおぼこなとなり鯔の小さきなり

【て】で 「で御座ります「でおますかなといふハ何々のヿハ何々なりと人の語し時何々を上畧して「でござりますかと答ふあいさつの言葉なり ○でん〳〵虫 蝸牛之 ○ていす 亭主之 ○鐵炮 魚のぬたのあいヿをいふ ○的(テキ) 江戸でいふあれ又彼なりてきとも云 ○手傳(テツタイ) 江戸の仕事師のヿを大工の手傳之 ○天窓(テンマド) 引窓のヿ之 ○てかけ 妾なりめかけとハ不言 ○てんごう 江戸ていふじやうだん之 ○でぼちん 出ひたいのヿ之 ○寺屋(テラヤ) 手習師匠也 ○てつ ぶく魚之鉄炮を畧したる之 ○てんばした 麁相したるなり ○手形(テガタ)を焼(ヤク) 内らの首尾の悪きヿをかくいふ ○てんぐ風 江戸ていふつむじ風之 ○てうさやようさや〳〵 大坂

にてだんじり（江戸のだしの類之）を引あるく時囃子の言葉之てうとは堂島米相場市にててうあい米といふハ正米のことにて筑前の帳合肥後の帳合抔唱ふるよしさや米とハ空米のことをいふよし何れも堂島待てう言葉といふ然るに今年文政二年の春天王寺聖德太子千二百年忌開帳の節堂島より奉納ものせし砌てう／＼と斗り囃子立出しより道頓堀哥舞妓役者など奉納ものゝ節も同樣に囃子夫より大坂町中一統奉納ものてう／＼とはやし出るさやとハ更にいわずなりけり是近年米相場下直にて正米の直段よりも空米の直段いきほひつよく毎度空米相場にまけ正米直段引あがらざる故相場師工夫いたしさや米のかたを潰正米直段引上る工面の祝辞のよし倘其道の人に可尋　○てうらかす　猫などじやらすを猫をてうらかすといふ

【頭注】でんぼハ腫物のことこぶの如く腫る之

【あ】○あなづる　あなどるる之　○アノいふておくれる　為哥話云何ゾおめへ之　○アノわろ　哥話云あいつ之　○あぢ　哥話云おつ之　○味アン能ジヨワあんじよいたすなどいふあぢよくする之　○あない　あの樣之　○あつちや　江戸て云あつち之　○あろい　あかるい之あかるくなるをあかうなると云　○あさ漬ツケ　江戸て云ドブ漬之都て當座漬を云　○あほ　べらぼう之あほう之をろか之江戸で馬鹿とも云處に遣ふ　「あほらしいなどいふはあほうらしきにてばからしきと同し又異名に十のしまといふ　○揚屋アゲヤ町　新町太夫の呼屋之　○あちやら　江戸の三盃漬なり　○青（虫喰）芝居抔え無錢にて見るものを云江戸て云油虫のことなり　○あしこ　あそこと云こと之　○あんた　江戸で云あなたなりあがめいふ言葉之又云我より目上の者をも通して己のあんたなどゝいふ　○あかん　つまらぬ之江戸て云いかん之埒あかんなり　○あこ　播州赤穂アコウをあこと唱へる　○あじない　無味

之まづいゝ ○あも餅なり江戸てあんなといふ○按平(アンペイ)江戸ていふ牛へんの類一種江戸の流ししんちよなどいふ類一種二色あり但生割烹の料理や按平と看板出ス製方ハうなぎ其外種々加やくを入はものすり身をかけ茶碗蒸にいたし葛のたまりなどをかけ出すなり ○合(アイ)交合ヿをあふといふ ○あやせんそうでハないをそうでハありやせんといふ ○あまさけ夏斗あきのふ多ハなし ○あたあためんどうあた邪广たどいふ助辞之 ○あじやら實たらさるなり ○あぶら云辭退也 ○あせぼあせもと江戸でハ云之 ○あわて者ひやうきん者なり

【さ】○さかい夫じやさかいハ或ハいふたさかい抔といふ江戸で聞といふに同じ○さいな○さァ或ハさァもし○さよじや何れも答の言葉之○寝前(ネイセン)男女ともに常言なりさつき之 ○さらあたらしき之○さらす何さらすなといふ之江戸て云何しやァがるなと之○さぶさむ之寒なり ○在所(ザイショ)田舎とは不言 ○様(ヨウ)男女とも常言ニまといわず観音さん薬師さん抔といふ○さいらさんま魚のこと之○さんざい金銀を遣ひたるをさんざいしたと云散財なるべし ○猿(サ)江戸の目明し之 ○作(サク)事(ジ)普請(フシン)といわずさくじと云 ○さもしいきたなびれたる之○さんじん不レ参之 ○左平二いふいゝおせわいふなり

【き】○きびすかゝどゝ○きりもの衣類のこと江戸ていふきものゝ○きらいやのふ江戸にいふゑゝすかぬなり○きんにやう昨日ゝ○きやうこい氣躁之大にゝといふ心か又きつくとかいふ様の心か尙可尋○ぎつこ屹とゝ○きつしりごうてきゝ爲哥話に云江戸て云しつくりゝ○きりわら江戸のたわしゝ○きゝつこ江戸にて酒などぐつとのむぐつとつぐなといふ處をきゝつと呑といふその外都てぐつとと云處をきうつとと唱ふ○ぎやうさんゲウノ假名はやり唄に云ゆんべの夜ばへはぎやうさんな味そ桶へけつまづいておはぐろつぼに飛こんだ引「爲哥話に云すさまじく　○ぎおんぼう枝柿のとなり　○木屋材木や薪やなと凡て木屋といふ○きる笠をかむるといわす笠をきると云　○ぎすきりぐヽす虫なり勿論きりぐヽすとも唱ふ　○きもをだす江戸ていふきかぬきになりたるなり　○きだる進物なと何にても品なし代銀にて遣すをいふ樽斗にて酒か代銀にて遣すより出た言葉素樽のことなるべし　○ぎつはりつばゝ　○きり合たとへは一兩人乃至大勢にても出し合てくひもの何なりと趣向するをいふ　○きゝなきくなゝ江戸にてきゝゝなといへハきけなり　○久三京にて一季奉公人をかくいふ江戸にてはわたりものといふ○きすごきす魚ゝ○きくなしゆんぎくなり

【ゆ】ゆする惣て衣類其外花やかにりきみたるをゆすると云　○柚ゆずを柚子といふてハ不通ゆと斗いふゝ○ゆがみ曲ゝ　○ゆでさやさやまめ共いふゆで豆ゝ大坂にハ枝豆なし皆もぎつて賣なり「そら豆の若きをさやなから賣是もさや豆といふ　○遊所「新町中と云西ともいふ「南　嶋の内をいふ道頓堀坂町抔をも南といふ坂町にばん丁共いふ「北　北之新地ゝ

しんちと斗も云新をすみて唱ふ因に云難波新地ハなんばじんちとにいり唱ふ一両脇 堀江をいふ又新町にて堀江をむかへと唱ふ「又云道頓堀は南に遊女置屋なし茶屋ハ島の内茶や坂町ちや屋交りなり

【め】○めんないちごり見戯の目かくし之 ○めい目なり ○目黒（メグロ）小まぐろ魚なり ○面倒（メンドイ）めんどうなり ○めつそう分に過たる之為哥話云とんだ之 ○面々（メンメン）男女共に常言之江戸て云でん〳〵之 ○めき〳〵みし〳〵なり ○めィ荒布なり ○麺類所そばうどんやの看板如此行燈出す二八そばうんどんと八不書丙寅の冬頃より道頓堀戎橋脇へ江戸そばや福山の看板のみ江戸の通二八そばのあんどう出す ○めかんち（めッかち）片目之 ○めろ哥話云あまえ之

【み】○みいみてみいともいふ夫れみいあれみいたといふ ○みしるむしる之もぎり茄子抔を木みしりなどと唱ふ ○みつちや江戸て云あばたのこと之痘顔之 ○みづ辛昆布をむすび山椒を入たる之茶菓子に食ふ ○みだれ乞食と之 ○水くさい塩あまきとをもいふ江戸でいふ水ぽいなり心切ならざるをもいふ ○みだける髪などのみだれるを髪か——といふ ○みぞどぶなり ○見な見るな之江戸て見なといへば見よなり

【し】○じやう煎水飴之 ○しんけん不僞之 ○じやうぢ常住之 ○しかへに行江戸て云遊女のくらがいニ行之 ○しッかり
しつかりせいたと云之 ○しるい江戸ていふぬかるみなり ○じやうらくむあぐらかくとを云丈六居の轉したる歟 ○辛度くたびれたるとヽ爲哥話云せつねへ之草臥め藥の
看板にしんどしらず豆しらず藥とあり ○何しいじやいな何をしなさるヽ之 ○心底心切といふ處へかくいふ ○じやがなそうじやがな抔いふ江戸で云だわな之
○しィな江戸て云するなるなり ○しゆみけん江戸ていふしみつたれといふと ○じや人通人といふ之 ○じゆんさいちよくくら云とをじゆんさい云とい
ふ哥話云内またかふやく之 ○しばらく大坂の言葉にて暫ハ文字の通少しの間のとをいふ之江戸てしばらくといへハ永き處へも遣ふ大坂にてハ不誤していふ ○初夜戌の刻之五ッとは決して
いわず上下男女共都てしよやと唱ふ ○狀女のふみをもじやうと唱「又ふみともいふ之 ○下を付る袴を着るとヽ袴をきる共いへとも先ハ下を付るといふ ○しやつた又
しやる出やしやつた來やしやるたと蔭にてもあがめ云言葉之江戸の出さしつた來さしやるなり ○しりんか知らんかえ ○しゞめ蜆之江戸てしじみといふ ○しよや
庄屋也 ○しゆんでいるじみなとヽ不陽氣之 ○宿老町々の名主年寄のとをおしゆくろうといふ尤町奉行所等にてハ不唱私の唱なり ○しよるしをる之來をるをきよると
いふ ○しきふすま敷紙と也 ○十八さゝげ江戸の十六さゝげ之 ○しきしあてる色紙之 如斯關東にて衣類へつぎあてる或ハしきせあてるなどと
云と之 ○上かんやにない酒うり之江戸のおでんかん酒やなり ○庄屋けん江戸の鉄炮けんきつねけん之 ○心配男女共に常の言葉之 ○新町曲輪西筋あり一通り筋

瓢箪町といふ新町橋筋にて中筋之「越後町筋佐渡島町といふすなばへでる筋なり「吉原町筋此二筋ハ通り筋より南なり「阿波座と唱る一筋是は中筋より北なり阿波座より西の方九軒町といふ吉田屋堺屋井筒屋中作と云揚屋あり九軒は片側町なり横町は道者横町つちや横町たぬき横町抔之曲輪東西ぇ長し東に門（大門口新町橋筋越後町すじ）二つ西に二つ南に一つ北に二つあり（西方サトヤ町ト九ケン丁ノ間ア八橋スジ）（東ノ方新京橋丁土橋すじ）東の方揚通片側町（大門口越後町すじ砂場へ出る）を堺の側と唱ふ（吉原町字和島橋すじ）遊女は一大夫花實なし晝夜六十三匁雑用六匁酒代二匁之揚屋へ呼新造引舟充付く「天神茶屋ぇ呼晝夜三十三匁花實四匁雑用五匁充付く大夫を松の位天神を梅の位といふ何れも打掛前帯之太夫の置屋ハ東西中三軒の扇屋槌屋新屋五軒斗なり揚屋ハ九吉田屋九井筒屋也高嶋屋也茨城屋堺屋九中作也住宣也住宇也播磨與抔之大夫を茶屋ハ呼ことならず天神ハ揚屋へ呼なり「茶屋ハ大坂屋よし屋紀の新くらはしや其外數十軒あり當時二十九軒之「鹿子花三匁揚廿七匁之大夫の方天神の方とも同し鹿子之天神の置やは天神斗なり太夫の置屋に八天神もあり鹿子ハ兩擲やにあり一鹿古伊逸れ込と唱ふ花賣一匁六分晝揚十二匁夜揚十七匁八分之置屋天神とは別之茶屋を呼屋といふ雑用定めなし鹿子ハ花揚ともに直段女郎に同じ天神鹿子とは別なれとも兩方へ出るもあり尤天神の置屋より直ちに八出す鹿古伊の置屋ハおか店いたし出る是を兩掛といふ「見世付女郎是ハ置やに見せを張り居るぇ尤置やは天神鹿古伊と更に別なり新町女郎の極下品之新町に江戸の切見せ女郎なり是を大坂にて八鵜高屋と云女郎他所行等にて門を出に八門代と号大夫 天神両匁 鹿古伊二匁門番ぇ渡す鹿子ハ天神鹿古伊夫々の女郎に準、門番ハ夫婦者之 ○しくさる 中より下の悪言之何しくさるなといふ江戸の何しやかるに近くしてもそつと聴き言葉なり ○しゆらい 諸用之諸色入用之 ○じやらくいふ ぎよくくいふ之多言之 ○しよまい 関東のすまいなり

「ありやすきいを しよのまいと云 ○じまん 江戸て云くせ之おはこ之 ○じんき しの巻京わたのとなり ○しめる 戸障子をしめるとをたてると云て八不通 ○しや

うらいになる〇しんき哥話に云じれつてへなり　〇じゆみ哥話云ふさぎ之　〇じやさかい哥話云だから之

【頭注】通り筋瓢箪町ト云　〇京橋町砂場町アハザト云　〇九軒町佐渡屋町　〇坂町筋　佐渡島町ト云　〇吉原町　〇天神當屋二十軒　〇鹿古伊賀屋出店八軒　〇鹿古伊ハ六字とも唱ふともみじとも云よし　〇揚屋當時出店百七十軒餘ある由　〇女郎通筋十八軒越後町六軒あわざ十七軒

【ゐ】〇ゐらう〇ゐらい中より以下の言葉なり江戸ていふ江戸て云大そふ又ハめつぼふかい或とほうもない抔いふかとし善悪ともに用ゆる言葉なり　〇ゐりかけ牛ゐりのとをいふ女子供のゐりに如斯ものさけたるもゐりかけ之　〇ゐうまいらず不得參也　〇ゐうでけませぬ不得出來也　〇ゐぼし貝たいらき貝之

【ひ】〇七しちとハいわず松づくしの唱哥にひち本目にはひめこ松といふ〇ひしごき女のしごき帶のこと之　〇叱しか　ひかる之　〇ひる晝九つ時をひると唱ふ初夜夜なかと同じ　〇失禮しつれい之男女　〇ひく布團抔敷をひくといふ〇ひィ火之　〇ひ江戸で云五臟のひいを損したるをひを損じたといふ　〇日なぐれ入相頃也　〇ひねる江戸て云つめる之　〇飛脚町小使なとをも都て飛脚と唱ふ　〇びりん味淋酒之　〇ひ。ら。う。拾ふ之ひ｜ら｜うとつゞけいわずひ。ら。う。と假名のとをりにはなして唱ふ　〇

雛祭三月と九月節句にも○ひこいきひと比○一かへりん一〳〵○ひこはちうまめぞ
祭る九月ハかげ祭之　なり　之　之

【も】もみない又もおないとも云うまくな　○もつてんか持てくれ　○門(モン)町々抔の木戸をも門　○物眞(モノマ)
いと之無味ないならんか　と云こと之　といふ木戸とハ不言
似*江戸のこ　○もみち傘(カサ)蛇ノ目傘をいふと又内のかざ　○もふろく渡り中間のこと之　○もみじ袋もみじの粉
お色之　りある傘を云とも尚可尋　六とばかりも云　は小麦のか
ら江戸て云ふすま之故に○もんめん木綿之もんめ　○もやう衣類の摸様縫摸様ハ縫斗染摸様ハ染斗にて江
ぬか袋をももみじ袋と云　んやばしあり　戸のごく染と縫交りたるはなしたま〳〵ある
ハ江戸解きととな　○もこるかへる之歸ぬを
ふ上方にハなし　もどりぬと云

【せ】せゝなぎなかし尻○千度(センド)度々　○せうかつせうか　○せうぢ小路こうぢ之こう○せんち雪隠　○
の溝之　之　ちち之　おうとは決して不言　之
匁(セン)一匁(イツセン)七八匁ニかぎり下に分厘○せんだく洗濯　○ぜんざい江戸のしるこ　○せび〳〵蟬　大坂に日くらし、
の付たる時何せん何ふんと唱　之　こ餅なり　之　みん〳〵、おゝし
んづく、更になしみん〳〵おゝしんづく○せいらく穿鑿すると○せいがない病氣等にて力の落たる之又
ハたまさかにありといへとも誠ニ稀なり　云所へ用ゆ　物事はりあいのなきことを

いふ○せがれ中以下にて男女の子共惣領末女の差別なくせがれと云○せたらをふ背負事之○節分大坂にて町家問屋にて豆囃子に太荷ハ内福ハ内とはやすよし之○上氣(ゼウキ)するのぼせる之○せりふする一理窟いふとなり○床几(シヤウキ)腰掛臺なり涼臺抔を凡て床几といふ○せうもない訣もないゝ之○せうがあわぬ身分に應せぬと云處に用ゆ○節分此夜町々を子供太鼓銅たらい太鼓なとたゝき立うくろもちは宿にかなまこどのゝ御見舞じやと囃子あるく之○節季三月節句前五月節句前盆前九月節句前十月晦日暮と是を節季と唱ふ十月晦日ハ中拂と唱ふ何れも諸勘定取引あり節季より節季の間を一間と唱ふあいと斗も云○せゝるほぢる之○せつせう哥話云かわいそう之○ぜゝ貝きさご之

【す】○すいこうかんてんにて製たるところてん之○すぼつこないあい相なき之○すもじ鮓のヿ之又一ヿ棒はねとしやれていふ○すい江戸て云通(ツウ)之氣のきいたる之すいかるハ自らすいをゆるすなり○すつはりさつはり之○すげない愛相なき之もぎとうなとゝ同し○すか都て物事間違たる江戸て云はなあいたなと云處をかく云○す江戸て何せると云手に葉をつるすと云譬ハのぼす、さす、なかすなといふ○筋町々の通り江戸にて本町通り日本橋通り抔云處を堺筋心齊橋筋順慶橋筋御秡筋全安筋天神橋筋などいふ○すめ江戸て云素面之酒不呑之○すき哥話云まよつたなり○すこをなぐる哥話云あたまをはる之○すこい哥話云こすい之○すまふこ

りぐさ　江戸て云すみれ之物類稱呼云 菫の一名こまひき草と云漢名剪刀草花紫白二色あり共に蒂のかたはら
に鉤の形あり兩花まじへ相ひきて小兒のたはふれとす故にすもうとりぐさの名有 又東武にてすまう
とり草と稱する別種有江戸いなかにては
づきと呼ぶ草の穗に出たるを云漢名不知

## 附錄

## 【雜】

爲寄話云抑大江戸にて下々の用ふる俚語を訂るに五音を竪に上の一字の國字ハ京四字目の國字は江戸にて又
其四字目の國字より產み出す引聲をもて萬事通用する之譬へば

京きみむめも△參　京まいる　江戸めへる△甘　京うまい　江戸うめへ

京かきくけこ△歸　かへる　江戸げへる△深　ふかい　ふけへ

なにぬねの△京アノな　江戸アノね　アノの相通

（めの字よりへの字をうみ出す引きこへにてめへといふ）　（けの字よりへの字をうみいだす引きこゑにてけへといふ）

依帝國圖書館所藏本寫之　印　〔○東條氏の寫〕

# 丹波通辭

或時草木の枝。聊か用ある事有て。召つかひの僕に。かれ是取て来れと云しに。其名を知らずといふ。用足れば。自身山野に携りて。彼僕に。柏は是なりといへば。いや是は。こゞせなりといふ。これを犬つけよといへば。これは。けつろなりと云。予も此国の産なれど。聞なれぬ名也。これかれと。指ざして聞ば。皆異なる名也。物の名も。所によりて。かはりけりといへるに似たり誠に。国郷談なるへし。通辞なくて辨へがたし。それにつき。もろ〳〵の詞を聞て。書付侍る。又是に心づきて。我がいへる。言葉もさあるべし。と人に尋れば。誤れる事のみなり。問正して。次而に書つけて。丹波通辞と名づけて。家僕に投與へき。余人の見給ふへき物にあらず。つたなき事の。甚しきものなり

# 丹波郷談

- 柏を　ここぜと云
- 白膠木　ゆるだ
- 槐　にがき
- 齒朶　うらじろ
- 柃　つんたう
- 木耳　ねこのみゝ
- 蒲英　ごやぢ
- 車前草　つちばこ
- 鼠尾草　ほんぐの花但此はなは盆に佛に供する花なればさもあらんか
- 白葛　しやなかづら
- 山衛菊　くんだ
- 犬黄楊　けつろと云
- 白楊　びろく
- 常山　あまぎ
- 楊櫨　あなうと
- 犬榧　へべ
- 延齡　やまぢしや
- 胡黄連　せんふり
- 蒼耳　なまなすび
- 烏芋　てんず
- 茯苓　ほど　利名ほどゝあればよきか
- 馬醉木　おんなざかもり
- 合歡木　かうか
- 弓弦葉　わかば
- 薜荔　玉つばき
- 桒椛　ふなめ
- 金鳳花　たからし
- 蘩　ひんずり
- 曼珠沙花　しびとばな
- 蓑草　にのじ
- 通藥　とくため
- 木槿　からくね

○楮　しやな　髮すくニ用ゆ

○延命草　うつろはぎ

○鷺　ほけしろ

○白鷗　はなくさり

●鼬　とます

●蟾蜍　ひきごと

●竈　とろげう

●鯎　いだ

○九万匹　つのじ

○鑵子　てんどり
地ニサス

○軒下　すゝな

○狗尾草　はぐさ

○柿蔕　かきのひしや

○郭公　こゝぢよ

●鳥鳳　ひくにとり　此鳥の本名は山鵲

○鼠　よもの　よめごぜ

●蛄蟖　いろし

●蠐螬　がと

○鯤　からかぎ

●つけ木　めいた

●箱　そうけ

○綱引　だいもち引と云

○大戸の入口ヲ　ゆらみと云

○燕麦　しねんこ

○蕨縄　すゝろなわ

●水鶏　くろとり

●蠶　おさなもの

●虵　なぶそ　朱書注 茶色成を云黒きをカラスクチナワト云

●泥亀　鼈也たんがめまんどう

●鱓魚　なとめ

●餅　ばあ

●撗　ほるゝ　朱書注 小鳥ヲ取ル道具竹ヲ細くケヅリトリモチヲ付ケ

●喞筒　水でつぽう

●山の峡道　ゆり

○壜なる　のとろ
●鈍事　しぶとい
○蹴　せぐる
○胸の痛　やわかいたい
●手足の寒たるヲ　こじけた
●私と云ヲ　うら
○不忍成者を　ほこたいもの
てはない
●漾敷ヲ　いかめいいかめや
いかめいと云
○咲費事　ほそかこねろ
○償ヲ追ヲ　しらむ
●辞な事ヲ　おとましや
疎ましき事也
○七夕　七日ぼん

●破を　めぐと云
●蹶　すゝけた
○内向　くるぶく
○足くびの痛　ほろせがいたひ
○癈足ヲ　だや
●其方　あれん　あんに
おんにや　おんの
●進疾者ヲ　おぞいものと云
●痛敷　いげちない
●折角　せんど
●物の脇ヲ　わち
●退と云ヲ　どけ
○四月八日　一日ヲ卯月と云卯月とは
四月一ケ月の事也

●打　てぐ
○咳　たごく
●眇目　やぶにらみ
●足をくじきたるを　へらかへり
●娘　ひんだ
○不仁なるものヲ　なりかね
●黠と云ヲ　こましやくれた
○全偏敷ヲ　ふわたや
○細々　さんぜに
○ぞと云ヲ　どゝ云
○重事　しとべい
○自然　てんし

●物の起　ほよこる
○大分なと云ヲ　たいそんな
●餘慶のなき事ヲ　そきも ない
○當惑したるヲ　まゝたゆる
●惡さすると云ヲ　がやかくといふ
○寄集　よりたかる
○下に居よと云ヲ　とゞせいとも へこれとも
●慰かてら　なくさみたいら
●頭と打合せたるヲ　ごちやつぶり　と云
○分もなひ事と云ヲ　とそんどな事と云
事と云
○惣而と云ヲ　さうけきと云

○時節ヲ　草木と云
●多き事　ほうつもなひ
●惘然事　はたいた
●零落　ぴろくした
●人を扣ヲ　とやす
○名物　めいさつ
○所作ヲ　しよか
●行かけ歸りかけと云ヲ　いきしな もとりしな
●一昨晩　きのふの晩と云　きのふのはんは　昨晩なり きのふぼん
○忩劇と云ハ　いそがはしき事也

●無味　飷同𪜈云　もむない
●少　ちつたて
●驚事　はいやはかしや
●手遊　手てんごう
●取落たるヲ　うちあたいた
●能するヲ　よんのする
○爛たるヲ　みしやれた
●十方もないと云ヲ　とつけもなひと云
●與風したる事ト云ヲ　ひよつとしたる
○如何樣參りて申さうと云ヲ　どこぞで參つて申

ぢやう と云

●其儘おけと云ヲ　やつはしをけと云

●自慢らしきと云ヲ　しまんくさい

云

●何年成と云ヲ　なんねんほだいになるやらと云

○癪病ヲ　かつちやいと云

○操作なとの實ヲ　じんざいと云

●それ／＼といふを　そりや／＼

○麹ヲ　べいこうじ

○積てと云ヲ　はなゑて

○兎角を云なといへるヲ　をつとしてをれ
をつともかいてをれ

○やつはり
○やはり
○やほき

○しやらくさい
○しさいらし

○其方次第と云ヲ　そなたほうだいと云

○拍毬ヲ　はりこと云

○赤面させると云ヲ　じめんかく

○うりよ／＼
○うりやう共

●塀ヲ　たかへい

●覺悟ヲ　かくまひ

●混雜したる事ヲ　ごつちやになると云

●何にても一ツヲ一錢買事ヲとりがへと

○吃ヲ　せゝくると云

○張子は外のものなり

しめんかくもか
といふ

●とれ／＼を　とりや／＼

○外科ヲ　けきやう

## 是より猶誤り言葉を書集む

一はねへきをはねざる

●大根　だいこ
●散錢　さいせん　佛前にまく錢　神前
○短册　たいじやく
○拔群　ばつく
○誕生日　たいしやうにち
○癲癇　てんかうかく
○慳貪　けんどう
○綿繖　めいせん
●善右衛門　せよもん　せよも

○山椒　さいしよ
○飽滿　ぼうまい
○印籠　いぬろう
●滿篇　まんへう
○助言　しやうご
○返事　へいじ
○玄關　げんくは
●源右衛門　げよもん　けよも

●南天　なるてん
●裁判　さいはい　しかしさいはいハ哉配か
●栴檀　せんだ
○簡板　かんば
○看經　かんき
○三里の灸　さじと云
○團扇　だいせん
●傳右衛門　てよもん　てゑも　てよも

一はねましきをはぬる

○正月を　しよんかち
●鳶　とんびとうび
○菓子　くはしん
牛房　こんはう
○薬研　やんけん
●名誉　めんよ
○退屈　たいくん
○以前　いんせん
●綺麗　きれん
○誓文　せんもん
○燈籠　とうろん

○彼岸　ひんくはん
○鶺鴒　せきれん
○陳皮　ちんひん
●餓死　がしん
●遺言　ゐんけん
○成人　せいしん（〇ママ）
●窮屈　きんくつ
●所望　しよもん
●夕ア　ゆふべよんべ　よふべ
○長老　ちやうろん
○香炉　かうろん

●虹　にんし
●木綿　もんめん
○茨薔薇　いはらしやうへん
○秘密　ひんみつ
○名人　めんしん
○撰絲　絹也　せんしん
○施行　せんきやう
○懇望　こんぼん
○因果　いんくはん
●比丘尼　びくにん
●喪禮　さうれん

○不斷　ふんたん
○錬磨　れんまん
●坊主　ぼん
●分銅　ふんとん
○奉加帳　ほうくはんちやう
○旦那　だんなん
○淵底　ゑんてん存知たと云
炎天は夏の天也
●餘り　あんまり
○目出度　めんたう存る
○延齢丹　ゑんれんたん
んな事ト云
●簇　しんし　し丶

○仇　あたん
●小便　しよんべん
○皆濟　かいせん
●筈刺　はんさし
○土瓶　とんびん
●大事ない　○だんない
●同し事　をんなじ事
●傾而　やんかて
●出來次第　てきしんたい
平四郎　へんしろ
○騎馬一騎二騎ヲ　一きん　○二きんと云
○荷物一駄二駄ノ　一だん
二だん

○魂　たましん
●龍宮　りうくん
●五合　こんがう
●西瓜　すいくはん
●皆樣　みんなさま
○腫物　しんもつ
●擔而　かんまへて
●異名　いんめうな
○凡卑　ほんひんした
●其樣な事　此樣な事ト云　そんな事こ
○贔屓偏頗ヲ　ひいき　○へんばんと云

●尋て　たんねて
一引へきをひかさる
○口上　こしやう
●香の物　このもの
●夕立　よだちよふだち
○得道したるョ　とくとした
一引ましきを引
○箕　みい
●螢　ほうたろ
○先度　せんどう

○[illegible]等　れいてんく
●重宝　てうほ
○挑燈　ちよちん
○枴　おこ
○不調法　ぶちよほう
藺　ゐゝ
鳥居　とうりう
途中　とうちう

●雲泥万里　うんでんばんり
○豆腐　とふ
●唐辛子　とがらし
○集銭　しゆせん
○鵜　うゝ　うふ
○官途　くはんどう
○梅干　むめほうし

○徒然　とうぜん
古米　こうまい　こんまい
●法度　はつとう
●紫蘇　しそう
○櫛骨柳　くしこうり
つみいと云
●露路　ろうぢ
一引所ちかひ
○小僧　こうそ
○鰌　どうじよ

土圭　とうけい
古酒　こうしゆ
○卑下　ひけいする
○頭巾　とうきん
○遅々するヲ　ちゝうする
○米一斗二斗ヲ　一とう、二とう
○和尚　おうしよ

○臥籠　ふせがう
○古銭　こうせん
○祝部祝子　はうりう
○百舌鳥　もうす
●子丑寅卯辰巳　○ねいうしとらうさた
○後家　ごけい
○土用　どうよ

一濁て悪敷

○蟹　がに

○蝸　だいる

●誰　だれ

●堰　川ヲ　せぐ

●蜻蛉　どんぼ

○蛭　びる

●手足の游ヲ　たるい

●見付ヲ　みつげたと云

●木虱　たにご

●寒　さぶい

●睡眠　ねぶる

一清て悪敷

○油　あむら

○鴨　まかも

○禿　かむろ

●鼻紙　はなかみ

●頰而　やんがて

一つめて悪敷

○瓢箪　ひよつたん

○頭巾　づつきん

●得利　とつくり

●髪會　もつとひ

○行器　ほつかい

●是非　ぜつぴ

異見　いつけん
與風　ふつと
是斗　これはつかし
●老（とつしより／としより）
鉢ひらき　はつちひらき
虚空もないと云を　こつくもないと云
●木强　きつしく

一餘り字付字

●蝶ヲ　てふこ
●崇　あがまゆる
○冬至　とうしとうや

●纘飯　そつくい　そくいとは云べし
毎　いつつも
●透　すつきりと
無左とゝ云ヲ　むつさと　むつたと
●座等坊　さつとのぼ
溝　みぞこ
覗　ねらがふ
○若干　そこくり。ばくり　そつくりばくり

眉間　みつけん
○朝毎　あさごつと
先程　さつきに
●与的と云ヲ　てつきりと
沽却したヲ　こつきやくした
與得と云ヲ　とつくりとゝ云
●縮　ちゞかむ
●捕（とらまゆる／つかまゆる）

○闘鶏　とりけあはせ
●生類の尾ヲ　しりをと云
○稀　まんがまれ
●長　なかちよろけな
●平（ひらたい
　　ひらたくたい
　いもない
○推量　あてずいりやう
一言不足事
●膠節　ふしと斗云
●柄杓　（ママ）

○蠼螋　しりはさみむし
●土筆　つく〱ほうし
○不慮　ふりやう　ふてん
○少（ちうさい　ちとけい
　　ちつほけな
○無躰　むたいこくたい
●重と云ヲ　おもたいと云
●下手　へたのかわ
●臺所　だいとこ

○鹿狩　しゝがいり
●裸一　まつはたか
　　　丸はたか
●一把二把ヲ　一わい二わい
○種々（しゆぢうさつた
　　しちうさつた
○無性成と云べきヲ　むしやう。こくた
○袴肩衣　はかま上下
○嫉妬　そねくむ
●粽　まき

一上下ちがひ

●串柿　かきぐし　●熬豆　まめいり　○續松　まつたい

一濁所違ひ

被　かづき
　　かつぐ

一重言

●見物物　●干物物　○立願立　●佛事事

○雍子ノ子　○大布布　○返報返　○後　後悔

○萬事事　○飯米米　○入府入　●蓮花花

○御還御　●御御意　○御御料人　●東風風

○木木像　○陳皮皮　○黄黄疸　○推推量

○深山深山　○肝要要　○忌中ノ中　○年内中
●病者者　●親者者　●假粧假粧　●不祥無祥
●末世末代　●風聞聞　●間間小間　●寺内内
●御御影　●御御明

一言て分の不立事

●難去と云ヲ　無難去ト云　○難成ヲ　無難成　●下戸ヲ　無下戸ト云
●嫌い　無嫌（むハ此字）　○不分明事と云ヲ　分明な事じやと云
○無と云ヲ　ないもせぬと云又は無きそむないと云

一纔かな一字のちかひにて拙く聞ゆ

○[illegible]　い[illegible]（○ママ）　●狸　たのき　○兎　おさぎ

○鰻（うなぎ） おなき
○雲雀（ひばり） ひはり（ママ）
○蜈蚣（むかで） むかせ
●桵（たらのき） たろのき
○圓栢（いぶき） （ママ）
○櫟（ぬくぎ（ママ）） くのき
●株（くいせ） くいざ
○零餘子（ぬかご） （むかこ いかこ）
○磁石（じしやく） ぎしやく
○屛風（びやうぶ） りやうぶ
手拭（てのごひ） （ママ）
○菅笠（すげがさ） しゆけがさ

○鮭（さけ） しやけ
○蜘蛛（くも） くぼ
●蚯蚓（みゝず） めゝず
●根笹（ねざゝ） いさゝ
○卷栢（いはひば） ゆわひば
●松脂（まつやに） まつやね
○葩（はなひら） はなへら
○藁蘂（わらすべ） わらずへ すほ
○膠（にかわ） みかわ
○食籠（じきろう） しきりやう
○立付（たちつけ） たちかけ
○木履（ぼくり） ふくり

○田螺（たにし） たのし
●土龍（うくろもち） むくろもち
●虱（しらみ） しらめ
○深山樒（みやましきみ） （ママ）
○枇杷（びわ） びや
●熟柹（じゆくし） （ママ）
○連理枝（れんりのえだ） れんじのゑた
○水牛（すいぎう） すいぎやう
○外郎（ういらう） ういりやう
●金具（かなぐ） かなご
○簑笠（みのかさ） にのかさ
○草鞋（わらじ） わうじ わらぢはよし

○草履　ちやうり
○裝束　しゆうじよく
●手裏劍　しりけん
●髮髻　まけは
○時雨　しゆくれ
○飛礫　つぶて
○金輪　かなを
○昨日　きによう
○晦日　つもごり
○順禮　づんでい
●存外　どんざい
●出來　でけた
　　　てかいた

○桛杖　かしつえ
○烏帽子　よぼし
●剃刀　かみすり
○物屑　くと
●清水　しうづ
○井筒　ゆづゝ
○圍爐裏　ゆるり
●一昨日　おとつい
●濕氣　しゆつけ
●石垣　いしかけ
●定而　（さゞだめし
　　　（さゞだめし（ママ）
●位牌　ゆはい

○提子　（ママ）
○小サ刀　ちしやがたな
○月額剃　さかやきする
●紙燭　ひそく
●薄縁　おそへり
○蕭到　ちやくちやう
●屋禰　やによ
○即時　ちやくじ
●癨亂　（はくらん
　　　かくらん
○自由　じよう
○大畧　たいらく
●鐃鉢　めうはち

○綺子（ママ）
●拾物　ひらいもの
○本來　ほんたい
○目安　みやす
●地躰　だゝい
●私言　そゝかふ
○石見　ゆわみ
○靭負　ゆきいゑ
○往還　いきゝ
○膩黒　きちやな
○鍛錬　たんでん
○福祿壽　ほくろくし

●青柒　せいひつ
○濁酒　にごれざけ
○人外　にんがい
○幼少　ゆうせう
○其爲　そのたべ
●僞引　そびく
○美作　いまさか
●主殿　とのむ
○失念　しちねん
●飽迄　あくぶく
●毒絕　とくだて
●蹴踏　さし足

●綠青　ろくしゆ
●大きな　おほけな
○万燈　まんとい
○養育　やうかく
○荷作　にしくる
○御湯　おい
○民部　にんふ
●賴母　たのむ
●煩悶　いきとをし
いきどし
すたかし
●恐怖　おとろし
○耆婆　けばが藥
といふ
○口上　こうせき

●言傳　とつけ
●痃癖　けんびき
○潔白　きつはり
●變改　へんかへ
偏執　へんねしい
相違　さをい
商人　あきゆんと　あきんどに不苦
○和物　あいもの　よこし
○夷　ゑべす
○本居　おふすな　產生ト云
●擔桶　たが
泥　とべ　でろ

○手傳　てちたい
●紛失　ふんじゆつ
○首尾　しひ
●尿瓶　しゆひん
●惣樣　そう〳〵　そうよ　そうこく（ママ）
●頭垢　ふけ
○胸中　きうちう
○大木　たいほこ
●睇視　しりめつかひ
○名殘　たぐり
○仰向　あをのく
○苫　とこむ

○凡夫　ぶんぶ
●雨の漏　ほろと云
○淸盲　あきしり
○胞衣　よな
●扠々　はて〳〵
●鳥襷袴　むくけ
○聖靈　しやうらい　しやうろん
○結句　けくに　けくして
●術なき　づゝなひ
○牸牛　おなめ
●沼　のま
○指　（ゆべ　いべ

○閏（うるふ） うるい
○懷（ふところ） ほところ
○動（うごく） いごく
○扉（とびら） とべら 闥（タツ トヒラ）
○侮（あなどる） あなづる
○同（おなじく） うなじく
○爽（あざやか） さつはり
○哺（くゝむ） くまめる
○過（あやまち） あいまち
○終（ついに） ついと ついしか
○灸（やいと） やいひ
○脫（ぬぐ） のぐ

暦（こよみ） こゆみ
○敎（おしゆる） おすへる をすゆる
○償（つくのい） つくらひ
○諍（あらそふ） あらがふ
遊（あそぶ） あすぶ
○漱（すゝぐ） ゆすぐ
○和（やわらかな） （やわらこい やわらかい
○撓（たわむ） しはむ ちはむ
忌（いむ） ゆみ
○守（まもり） まぶり
○人（ひと） しと
○蒸（むして） むいて

○靨（ゑくぼ） ゑくぞ
轉（ころぶ） ころぐ
○塞（ふさぐ） ふたぐ
○跼（くゞむ） くごむ
○後（うしろ） おしろ
○古（ふるい） ふるな
○闇（くらがり） くらとめ
○集（あつめる） まつべる
○送（おくる） うくる
○拳（こぶし） こぼし
○布（ぬの） のの
○唇（くちびる） くちびろ くちひら

○狂(くるふ)　くるつ

○流鏑馬(やぶさめ)　やくさめ

○獨參湯(とくじんとう)　ろくしんたう

○厄神祭(やくしんまつり)　やくせんまつり

○足(あし)にて跨(またがる)ヲ　はたかる

○唯授一人(ゆいじゆいちにん)　ゆいぢよいつにん

○日向北向(ひなたほつかう)　ひなたぶくり

○四壁(しへき)ノ栗柿(くりかき)ト云ヲ　しゆせきの栗柿と云

○傍尓(ぼうし)もないと云へきを　ほうずもないと云　同云ほうず　法圖もないとは書べき

○借し下されといふべきヲ　かいて下されよと云

○馬轡(むまのくつわ)ッ　ぶちと云

○所務分(しよむわけ)ヲ　しやうぶわけ

○膀(ちきと)　あこた

○寺社奉行(じしやぶぎやう)　しゆしや　ぶきやう

○丸藥一粒(ぐわんやくひとつぶ)　いとつほ　いちりやう

○四國遍路(しこくへんろ)　しこくへんど

○雪隱(せつゐん)　せんち　せつち

○臈次(らつし)もないヲ　らつしよもない

○一腹一種(いつぷくいつしゆ)　一ふく一しやう　或曰一腹一生と云はくるしかるましくや

○鷹(たか)に猿(さる)トヲハ　ぶちと云がよしとぞ

○咍(ふけらかす)　ひけらかす

○放生會(はうじやうゑ)　はうじよい　はうせい

○流灌頂(ながれくわんぢやう)　なかれがんぢやう

○顯佛者(けんぶつしや)　けんふくしや

○出來坊廻(でくろばうまはし)　てこのほまはし

○蘇生(よみがへる)　ゆみかへり　よみちがへり　ゆみづかへり

○笑(ゑみ)ヲ含(ふくむ)ヲ　ゑびをふくむと云

○太鼓(たいこ)の拘(さち)　ぶちと云

○綻滑(まつれる)　まふれる

○手天鼠　てぐすみ　　○斗掻　ますかけ　　○百葉竹　しのびたけ

一假初の物語にも賤しき喩は聞苦し殊に女性小人などは心得あるへき事なりたとへは錢ほとの丸さといはんよりは碁石ほどと云たらばよかるべきか　團子ほとに腫たといはんよりは梅ほとと成とも云たし餅ほとにふくれたといひ剰へ一文餅ほどなどいふけ猶つたなし

暫時の間の事ヲあつい茶二三服飲程の間と云阿弥陀は錢ほとひかる犬の蚤て交あてた座等の小便たこてしあてた熬豆のゑりくひ三文もせぬ物しや豆腐の菜たも知らいで秤目せゝるやうな事いやる

岩瀨文庫所藏本ニ依リ之ヲ寫す

昭和三年十月下旬　印　〔○東條氏ノ寫〕

# 日本古典全集既刊書目總覽

（洋數字ハ全集册數。無記入ハ他卷所綴。＊ハ古典文庫編入ノ印。(狩)ハ棭齋全集。(西)ハ西鶴全集ノ略符。）

【第一期刊行書目】

＊出雲風土記 1
＊常陸風土記 1
＊播磨風土記
＊豐後風土記
＊肥前風土記
萬葉集＊略解 8
懷風藻 1
凌雲集
文華秀麗集
＊校本日本靈異記(狩) 1
經國集
本草和名 2
＊御堂關白記・附歌集 2
本朝麗藻
源氏物語 5
榮華物語 3
平家物語 2
＊吾妻鏡 8
＊曾我物語 1
法然上人集 1
易林本節用集 1
＊好色一代男(西) 1
好色二代男(西) 1
＊西鶴諸國咄(西) 1
近代艶隱者(西)
好色一代女(西) 1
日本永代藏(西)
新可笑記(西)
本朝櫻陰比事(西) 1
世間胸算用(西)
俗つれづれ(西)
芭蕉全集 2
＊玉かつま 2
日本靈異記攷證(狩) 1
京游筆記(狩)
轉注說(狩) 1
扶桑略記校譌(狩)
毎條千金(狩)
大隈言道全集 2

【第二期刊行書目】

＊古事記 1
＊採輯諸國風土記 1
＊竹取物語 1
古今和歌集・附教長注 1
土佐日記 1
＊大和物語
＊住吉物語
後撰和歌集 1
＊片假名本後撰集
＊延喜式 7
＊拾遺和歌集・附公任集 1
蜻蛉日記
更級日記
＊清少納言(枕草紙)家集 1
＊紫式部日記・附家集
和泉式部全集 1
＊唐物語
＊舞圖(信西古樂圖) 1
教訓抄 2
＊保元物語 1
＊平治物語
＊宇治拾遺物語 1

昭和六年十月三日印刷
昭和六年十月十日發行
日本古典全集
【非賣品】
片言
物類稱呼
浪花聞書
丹波通辭

編纂者　正宗敦夫
發行者　東京府北豐島郡長崎町一六二　合資會社日本古典全集刊行會　代表社員　長島東一
印刷所　東京府北豐島郡長崎町一六二　不二製版印刷所　印刷者　高瀨清吉
裝幀者　廣川松五郎
發行所　東京府北豐島郡長崎町一六二　合資會社日本古典全集刊行會　振替東京七三〇二三

長秋詠藻 1
山家集
＊承久記
＊義經記 1
徒然艸 1
謠曲百番 4
＊諸勘分物 1
＊塵劫記 1
＊[illegible]亥錄
＊因歸算歌
＊ぎやどぺかどる 1
＊妙貞問答 1
＊破提宇子
＊顯偽錄
好色五人女(西) 1
本朝廿不孝(西)
男色大鑑(西) 1
懷硯(西)
武道傳來記(西) 1
武家義理物語(西) 1
好色盛衰記(西) 1
一目玉鉾(西)
西鶴置土產(西) 1
西鶴織留(西)
萬の文反古(西)
名殘の友(西)
參考讀史餘論 1
賀茂眞淵集 1
與謝蕪村集 1
江漢西游日記 1
本朝度量權衡攷(狩) 2
錢幣考遺(狩)
錢幣考遺圖錄(狩) 1
日本現在書目證注(狩) 1
說文檢字篇(狩) 1
文教溫故批考(狩)
上宮聖德法王帝說(狩)
古京遺文(狩) 1
萬葉集品物圖繪 2

【第三期刊行書目】

日本書紀 4
伊勢物語 1
うつほ物語 5
後拾遺和歌集 1
金葉和歌集 1
詞花和歌集
千載和歌集 1
新古今和歌集 1
古今著聞集 2
伊呂波字類抄 8
人倫訓蒙圖彙 1
花押譜 2
五畿內志 3
物類品隲 1
雲根志 2
近世畸人傳(正續) 2
重訂本草綱目啓蒙 4
假字遣奧山路 2
歌舞妓年代記 3
歌舞品目 2
[illegible]廚發香 1
觀古雜帖・附忠友歌集
[illegible]英日誌集 3